一般国道11号坂出丸亀バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第1冊

稲木北遺跡
永井北遺跡
小塚遺跡

２００８．２

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局

一般国道 11 号坂出丸亀バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊

稲木北遺跡
永井北遺跡
小塚遺跡

２００８．２

香 川 県 教 育 委 員 会
国土交通省四国地方整備局

稲木北遺跡遠景（南から）

Ⅱ・Ⅲ区全景（南から）

巻頭図版２　稲木北遺跡

Ⅱ区東部全景（南から）

Ⅳ区全景（南から）

（１）小塚遺跡遠景（東より）

（２）SD01 遺物出土状況（南より）

序　文

稲木北遺跡、永井北遺跡はそれぞれ善通寺市稲木町、中村町に所在する遺跡で一般国道11号坂出丸亀バイパス建設工事に伴い国土交通省四国地方整備局からの依頼によって香川県埋蔵文化財センターが平成17年度に発掘調査を実施しました。その結果、稲木北遺跡では弥生時代、古代、中世～近世の遺構・遺物を確認しました。注目されるものとしては古代の官衙跡を思わせるような大型の掘立柱建物跡や柵列跡があります。これらは左右対称に整然と配置され、柵列跡による区画範囲も一辺約60ｍを測り、郡衙の政庁と同程度の規模があります。このことから古代の地域支配と深く関わる遺跡と考えられ、香川の古代史を考える上で貴重な資料となりました。

また永井北遺跡では弥生時代終末期と古代末～中世の集落跡が見つかりました。中でも弥生時代終末期の周溝を伴う竪穴住居跡は県下でも事例が少なく、当該期の住居構造などを考える上で重要な資料となりました。

小塚遺跡は、一般国道11号坂出丸亀バイパス建設に伴い発掘調査を行った、香川県仲多度郡多度津町小塚に所在する遺跡です。調査は、香川県教育委員会からの委託を受けた財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成11年度に実施し、弥生時代終末から古墳時代初頭および古代の溝状遺構を中心とした遺構・遺物を検出しました。弥生時代終末～古墳時代初頭の溝状遺構からは甕や鉢を中心とした多量の土器が出土しており、付近に規模の大きな集落の存在を予感させます。古代の溝状遺構は道路状遺構の側溝の可能性もあり、条里制の区画と方向を一にするもので、当該地の土地開発史を考えるうえで貴重な資料となりました。

いずれの遺跡も整理作業は、香川県埋蔵文化財センターが平成19年度に実施し、ここに「一般国道11号坂出丸亀バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第1冊　稲木北遺跡　永井北遺跡　小塚遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年2月

香川県埋蔵文化財センター

所長　渡部　明夫

例　言

1．本報告書は、一般国道11号坂出丸亀バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県善通寺市に所在する稲木北遺跡（いなぎきたいせき）、永井北遺跡（ながいきたいせき）と香川県仲多度郡多度津町小塚に所在する小塚遺跡（こつかいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、稲木北遺跡、永井北遺跡は香川県埋蔵文化財センターが、小塚遺跡は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、下記の期間で実施している。

稲木北遺跡、永井北遺跡：本調査　　期間：平成17年7月1日～平成18年1月31日
担当：文化財専門員福家正人、主任技師長井博志、調査技術員森　麻子

小塚遺跡：本調査　　期間：平成11年4月1日～平成11年5月31日
担当：主任技師野崎隆亨、技師松本和彦、調査技術員豊岡多恵

（役職名は当時）

4．調査に当たって、下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

稲木北遺跡、永井北遺跡：国土交通省四国地方整備局、地元自治会、地元水利組合

小塚遺跡：国土交通省四国地方整備局、地元自治会、地元水利組合

5．報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆は稲木北遺跡、永井北遺跡を長井博志が、小塚遺跡を宮﨑哲治が行った。

6．本報告書で用いる方位の北は、日本測地系第Ⅳ系の北である。標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。また、遺構は下記の略号により表示している。

SA　柵列跡　　SB　掘立柱建物跡　　SD　溝状遺構　　SH　竪穴住居跡　　SK　土坑
SR　自然河川跡　　ST　墓　　SX　性格不明遺構

7．遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示している。

8．石器実測図中、平面図中の濃いトーン部分および輪郭線の周りの実線は摩滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れを表す。なお、調査時の折損は黒く塗りつぶしている。

9．遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1993年版』による。

目 次

稲木北遺跡、永井北遺跡

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1
第３節　整理作業の経過 …… 2
第４節　発掘調査及び整理作業の体制 …… 2

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境〈善通寺市について〉 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　稲木北遺跡の調査成果

第１節　遺跡の立地と地形 …… 14
第２節　土層序 …… 17
第３節　遺構と遺物 …… 25

第４章　永井北遺跡の調査成果

第１節　遺跡の立地と地形 …… 49
第２節　土層序 …… 50
第３節　遺構と遺物 …… 54

第５章　自然科学的分析

第１節　稲木北遺跡の放射性炭素年代測定 …… 84
第２節　放射性炭素年代測定（AMS 法）に対するコメント（長井） …… 87
第３節　稲木北遺跡より出土した柱材の樹種 …… 88

第６章　まとめ

第１節　稲木北遺跡の遺構の変遷と古代遺構の特性 …… 91
第２節　永井北遺跡の遺構の変遷 …… 100

小塚遺跡

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯 …… 115
第２節　調査・整理の経過 …… 116
第３節　調査・整理の体制 …… 117

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境 …… 118
第２節　歴史的環境 …… 118

第３章　調査の成果

第１節　調査区の概要と土層序 …… 123
第２節　遺構・遺物 …… 123

第４章　まとめ …… 145

報告書抄録

付図　稲木北遺跡 遺構配置図（1/200）

挿図目次

稲木北遺跡、永井北遺跡

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　周辺遺跡位置図（1/40,000）…… 4
第３図　調査地周辺の条里型地割 …… 9 ～ 10
第４図　稲木北遺跡 調査区配置図 …… 14
第５図　等高線及び調査区位置図（1/4,000）…… 15
第６図　下層確認トレンチ土層柱状図（1/50）・作成位置模式図（1/600）…… 18
第７図　Ⅰ～Ⅲ区土層図（縦 1/40・横 1/100）…… 19 ～ 20
第８図　Ⅳ区土層図（縦 1/40・横 1/100）…… 21
第９図　遺構配置図（1/300）…… 23 ～ 24
第 10 図　SB1001 平・断面図（1/80）…… 26
第 11 図　SD1001・1002 断面図（1/40）…… 26
第 12 図　SD2001 断面図（1/80）…… 27
第 13 図　SD2001 出土遺物（中層）（1/4・1/2）…… 28
第 14 図　SD2001 出土遺物（中・下層）（1/4・1/2）…… 29
第 15 図　SA2001 平・断面図（1/80）・出土遺物（1/4）…… 31
第 16 図　SA2002 平・断面図（1/80）…… 32
第 17 図　SB2001 平・断面図（1/80）…… 33
第 18 図　SB2002 平・断面図（1/80）…… 34
第 19 図　SB2003 平・断面図（1/80）・出土遺物・SP2049 出土遺物（1/4）…… 35
第 20 図　SD2002 断面図（1/40）…… 36
第 21 図　SD3003 断面図（1/40）…… 36
第 22 図　SA3001・3002 平・断面図（1/80）…… 37
第 23 図　SB3001 平・断面図（1/80）・SP3011 柱材検出状況（1/40）…… 38
第 24 図　SB3001-SP3011 出土遺物（1/6）…… 39
第 25 図　SD3004・3007 断面図（1/40）…… 40
第 26 図　SK3001 平・断面図（1/40）…… 40
第 27 図　SD3006 断面図（1/40）…… 40
第 28 図　SD3002 断面図（1/40）…… 41
第 29 図　SA4001 平・断面図（1/80）…… 41
第 30 図　SA4002 平・断面図（1/80）…… 42
第 31 図　SB4001 平・断面図（1/80）…… 43
第 32 図　SB4002 平・断面図（1/80）…… 44
第 33 図　SB4002 出土遺物（1/4）…… 45
第 34 図　SB4003 平・断面図（1/80）・出土遺物（1/6）…… 46
第 35 図　Ⅳ区 旧河道・撹乱出土遺物（1/4・1/2）…… 46
第 36 図　SX4001 平・断面図（1/60）…… 47
第 37 図　永井北遺跡 調査区配置図 …… 49
第 38 図　Ａ～Ｄ区土層図（縦 1/40・横 1/160）…… 51 ～ 52
第 39 図　Ｅ～Ｇ区土層図（縦 1/40・横 1/160）…… 53
第 40 図　Ａ区 遺構配置図（1/200）…… 55
第 41 図　SR1001 断面図（1/40）・出土遺物（1/4）…… 56
第 42 図　SD1001 ～ 1003 断面図（1/40）…… 56
第 43 図　Ａ区 出土遺物（1/4・1/2）…… 57
第 44 図　Ｂ区 遺構配置図（1/200）…… 58
第 45 図　SD2001 断面図（1/60）・出土遺物（1/4）・SD2002 断面図（1/40）…… 59
第 46 図　SK2001 平・断面図（1/40）…… 59
第 47 図　Ｃ区 遺構配置図（1/150）…… 60
第 48 図　SD3001 断面図・遺物出土状況（1/40）・出土遺物（1/4）…… 61
第 49 図　SK3001 平・断面図・SD3004 断面図（1/40）…… 62
第 50 図　Ｄ区 遺構配置図（1/100）…… 63 ～ 64
第 51 図　SD3005・3006 断面図（1/40）…… 65
第 52 図　SK4003 平・断面図（1/40）…… 65
第 53 図　SA4001 平・断面図（1/80）…… 66
第 54 図　SD4001 ～ 4012・4014・4015・4017 ～ 4019 断面図（1/40）・SD4001・4002・4005・4006・4008 出土遺物（1/4・1/2）…… 67
第 55 図　SK4002・4004 平・断面図（1/40）…… 69
第 56 図　ST4001 平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）…… 69
第 57 図　Ｄ区 SP 出土遺物（1/4）…… 70
第 58 図　Ｅ区 遺構配置図（1/200）…… 70
第 59 図　SK5002 平・断面図（1/40）…… 70
第 60 図　SD5001・5002 断面図（1/40）・出土遺物（1/4）…… 71
第 61 図　SF5001 平・断面図（1/40）…… 71
第 62 図　Ｆ区 遺構配置図（1/200）…… 72
第 63 図　SB6001 平・断面図（1/40）…… 72
第 64 図　SD6001・6002 断面図・遺物出土状況（1/40）・出土遺物（1/4）…… 73
第 65 図　SD6002 出土遺物（下層）（1/4）…… 74
第 66 図　SD6003 断面図・遺物出土状況（1/60）…… 75
第 67 図　SD6003 出土遺物（1/4・1/2）…… 76
第 68 図　SH6001 平・断面図（1/60）・出土遺物（1/4）…… 78
第 69 図　SB6002 平・断面図（1/80）…… 79
第 70 図　Ｆ区 SP 出土遺物（1/40）…… 79
第 71 図　Ｇ区 遺構配置図（1/200）…… 80
第 72 図　SD7001 ～ 7003 断面図（1/40）…… 80
第 73 図　SD7001 出土遺物（1/4・1/2）…… 81
第 74 図　SK7001・7002 平・断面図（1/40）…… 83
第 75 図　Ｇ区 出土遺物（1/2・1/4）…… 83
第 76 図　稲木北遺跡出土柱材の顕微鏡写真 …… 88
第 77 図　稲木北遺跡　遺構変遷図（1/400）…… 89 ～ 90
第 78 図　稲木北遺跡遺構配置図（1/500　10 尺メッシュ）…… 92
第 79 図　稲木北遺跡の主要遺構推定復元 …… 93
第 80 図　稲木北遺跡の位置（条里地割の東西２坪の中央にある）…… 93
第 81 図　生野原本町遺跡　遺構配置図（7 世紀後葉～８世紀前葉）…… 95
第 82 図　生野本町遺跡の検出遺構と出土遺物（S=1/4）…… 96
第 83 図　他県における官衙遺跡の事例 …… 97
第 84 図　生野原本町遺跡の推定遺構分布（1/1250）…… 98
第 85 図　条里型地割における稲木北遺跡と生野本町遺跡の位置（S ≒ 1/60,000）…… 99
第 86 図　永井北遺跡　遺構変遷図１（1/400）…… 101 ～ 102
第 87 図　永井北遺跡　遺構変遷図２（1/400）…… 103 ～ 104

小塚遺跡

第１図　遺跡位置図 …… 115
第２図　調査区位置図（1/2,500）…… 116
第３図　遺跡位置及び周辺の遺跡（1/25,000）…… 119
第４図　遺構配置図（1/200）…… 121
第５図　調査区土層断面図（1/80）…… 122
第６図　SD01 出土遺物①（1/4）…… 124
第７図　SD01 遺物出土状況図、断面図（1/30）…… 125・126
第８図　SD01 出土遺物②（1/4）…… 128
第９図　SD01 出土遺物③（1/4）…… 129

第10図　SD01出土遺物④（1/4）…… 130
第11図　SD01出土遺物⑤（1/4）…… 131
第12図　SD01出土遺物⑥（1/4）…… 132
第13図　SD01出土遺物⑦（1/4）…… 133
第14図　SD01出土遺物⑧（1/4）…… 134
第15図　SD01出土遺物⑨（1/4）…… 135
第16図　SD02断面図（1/40）…… 138
第17図　SD02出土遺物①（1/4）…… 139
第18図　SD02出土遺物②（1/4）…… 140
第19図　SD03断面図（1/40）・出土遺物（1/4）…… 141
第20図　SD04断面図（1/40）…… 142
第21図　SR01断面図（1/40）・出土遺物（1/4）…… 143
第22図　SB01平・断面図（1/60）…… 144
第23図　近世出土遺物（1/4・1/2）…… 144
第24図　遺構変遷図①（1/400）…… 145
第25図　遺構変遷図②（1/400）…… 146

表　目　次

稲木北遺跡、永井北遺跡

第1表　稲木北遺跡付近の条里坪界溝検出遺跡一覧…… 8
第2表　稲木北遺跡付近の古代遺跡一覧（第1表で取り上げた遺跡は除く）…… 8

小塚遺跡

第1表　小塚遺跡周辺の遺跡…… 119

写真図版目次

巻頭図版1　稲木北遺跡
稲木北遺跡遠景（南から）
Ⅱ・Ⅲ区全景（南から）
巻頭図版2　稲木北遺跡
Ⅱ区東部全景（南から）
Ⅳ区全景（南から）
巻頭図版3　小塚遺跡
(1) 小塚遺跡遠景（東より）
(2) SD01遺物出土状況（南より）

稲木北遺跡

図版1
Ⅰ～Ⅳ区遠景（東から。奥に見えるのは鳥坂峠）
Ⅱ・Ⅳ区全景（南上空から）
図版2
Ⅱ区SA2001、SB2001・2002全景（真上から）
Ⅱ区東部全景（南から）
図版3
Ⅰ区全景（南から）
Ⅰ区SB1001-SP1003柱痕検出状況（西から）
Ⅰ区SB1001-SP1003土層断面（西から）
Ⅰ区SB1001柱痕検出状況（南から）
図版4
Ⅱ区SB2001全景（東から）
Ⅱ区SA2001-SP2044土層断面（西から）
Ⅱ区SA2001-SP2044柱痕検出状況（西から）
Ⅱ区SA2001-SP2044柱痕検出状況（西から）
Ⅱ区SB2001-SP2005土層断面（北から）
図版5
Ⅱ区西部・Ⅲ区全景（東から）
Ⅱ区SB2001・2002柱痕検出状況（東から）
図版6
Ⅱ区SB2003柱痕検出状況（南から）
Ⅱ区SB2003-SP2066土層断面（南から）
Ⅲ区SB3001柱痕検出状況（西から）
Ⅱ区SB2003完掘状況（南から）
Ⅱ区SB2003-SP2067根石出土状況（西から）
図版7
Ⅲ区SB3001完掘状況（西から）
Ⅲ区SB3001-SP3004土層断面（北から）
Ⅲ区SB3001調査風景（東から）
Ⅲ区SB3001-SP3004土層断面（北から）
Ⅲ区SB3001-SP3003土層断面（南から）
図版8
Ⅲ区SD3004土層断面（南から）
Ⅳ区SB4001柱痕検出状況（南から）
Ⅳ区遺構検出状況（東から）
図版9
Ⅳ区SA4001-SP4003土層断面（西から）
Ⅳ区SA4001-SP4004土層断面（西から）
Ⅳ区SB4002柱痕検出状況（東から）
Ⅳ区SA4001-SP4003柱痕土層断面（西から）
Ⅳ区SA4001-SP4004柱痕土層断面（西から）
図版10
Ⅳ区SB4002-SP4036土層断面（南から）
Ⅳ区SB4003柱痕検出状況（北から）
Ⅳ区SB4003-SP4037柱痕検出状況（東から）
Ⅳ区SB4003完掘状況（北から）
Ⅳ区SB4003-SP4037土層断面（北から）
図版11
Ⅱ区SD2001　検出状況（北から）
Ⅱ区SD2001南部　遺物出土状況（西から）
Ⅳ区調査区南壁土層断面（SR4001）（北から）
Ⅱ区SD2001遺物出土状況（南から）
Ⅱ区調査区南壁土層断面（北から）
図版12
Ⅳ区SX4001完掘状況（東から）
Ⅱ区東部　遺構検出状況（西から）
Ⅰ区下層確認トレンチ土層断面（東から）
Ⅳ区SX4001土層断面（東から）
Ⅱ区西部下層確認トレンチ土層断面（北東から）

図版 13
Ⅲ、Ⅳ区下層確認トレンチ土層断面（北東から）
図版 14
Ⅱ区 SD2001 出土遺物（1）
図版 15
Ⅱ区 SD2001 出土遺物（2）
図版 16
Ⅱ区　出土遺物
図版 17
Ⅳ区　出土遺物（1）
図版 18
Ⅳ区　出土遺物（2）

永井北遺跡

図版 1
(1)　A 区南部全景（東から）
(2)　A 区南部全景（西から）
(3)　A 区 SR1001　A-A’土層断面（東から）
(4)　A 区調査区北壁土層断面（東から）
(5)　B 区南部全景（西から）
(6)　B3 区トレンチ（北）
図版 2
(7)　B3 区トレンチ土層断面（南東）
(8)　C 区南部全景（東）
(9)　C 区北壁土層断面（南）
(10)　C 区 SD3001　完掘状況（北）
(11)　C 区 SD3001　完掘状況（東）
(12)　C 区 SD3001　C-C’土層断面（南）
図版 3
(13)　D 区南部全景（東から）
(14)　D 区南部全景（西から）
(15)　D 区調査区東壁土層断面（北西から）
(16)　D 区 SD4002 調査区東壁土層断面（西から）
(17)　D 区 SD4005 礫出土状況（西から）
(18)　D 区 SD4005 銭出土状況（北から）
図版 4
(19)　D 区 ST4001 白磁碗出土状況（西から）
(20)　D 区 ST4001 白磁碗出土状況（西から）
(21)　D 区 SK4001 土層断面（南西から）
(22)　D 区北部全景（西）
(23)　D 区北部全景（東）
図版 5
(24)　D 区北部全景（東）
(25)　D 区北部全景（東）
(26)　D 区調査区北壁土層断面（南から）
(27)　E 区南部全景（東から）
(28)　F 区西部全景（南から）
図版 6
(29)　F 区 SH6001、SD6003 検出状況（北東から）
(30)　F 区 SH6001、SD6003 完掘状況（東から）
(31)　F 区調査区南壁土層断面（北から）
(32)　F 区 SD6002 土器出土状況（西から）
図版 7
(33)　F 区 SB6001 完掘状況（北から）
(34)　G 区北部全景（東）
(35)　G 区 SD7001　完掘状況（北から）
(36)　G 区 SD7001　B-B’土層断面（南から）
図版 8
出土遺物（1）
図版 9
出土遺物（2）
図版 10
出土遺物（3）
図版 11
出土遺物（4）
図版 12
出土遺物（5）

小塚遺跡

図版 1
(1)　小塚遺跡遠景（北西より）
(2)　調査地から善通寺の山並みを望む
図版 2
(3)　調査区下層確認トレンチ土層断面（南東より）
(4)　SD01 断面（北より）
(5)　SD01 完掘状況（北より）
(6)　SD01 遺物出土状況①（南より）
図版 3
(7)　SD01 遺物出土状況②
(8)　SD01 遺物出土状況③
(9)　SD01 遺物出土状況④
(10)　SD01 遺物出土状況⑤
(11)　SD01 完掘状況（南より）
図版 4
(12)　SD03（左）・02（中央）・04（右）完掘状況（北より）
(13)　SD02 断面①（南より）
(14)　SD04 断面②（南より）
(15)　SD03 完掘状況（北より）
(16)　SD03 断面（北より）
図版 5
(17)　SB01 周辺完掘状況（北より）
(18)　SR01 断面（北より）
図版 6
出土遺物（1）
図版 7
出土遺物（2）
図版 8
出土遺物（3）
図版 9
出土遺物（4）
図版 10
出土遺物（5）
図版 11
出土遺物（6）
図版 12
出土遺物（7）
図版 13
出土遺物（8）
図版 14
出土遺物（9）

稲木北遺跡
永井北遺跡

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査の経緯

一般国道 11 号（坂出丸亀バイパス）は交通量の増加により車の渋滞が著しい。この現状を改善するために、国土交通省四国地方整備局により拡幅工事が計画された。これを受けて香川県教育委員会では、同路線の周辺に多数の埋蔵文化財包蔵地が所在しており、今回の調査地の付近にも弥生時代、古代、中世の集落跡などが周知されていることや当該地の地形なども考慮して、埋蔵文化財の有無を確認するために平成 16 年 7 月に試掘調査を実施した。その結果、古代の集落遺跡として稲木北遺跡を、弥生時代と中世を中心とする時期の集落遺跡として永井北遺跡を新たに確認した。ただ、香川県埋蔵文化財センターが本調査を開始した平成 17 年 7 月の時点では、永井北遺跡の遺跡範囲は、不確定なところがあった。このため埋蔵文化財センターが 7 月に予備調査を実施した。その結果、2 遺跡の調査面積は稲木北遺跡が 1,600 ㎡、永井北遺跡が 3,278 ㎡と確定した。

第２節　調査の経過

発掘調査は香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。調査期間は稲木北遺跡が平成 17 年 7 月 1 日～同年 11 月 30 日、永井北遺跡が平成 17 年 9 月 1 日～平成 18 年 1 月 31 日である。

第１図　遺跡位置図

調査地は調査工程に基づき、稲木北遺跡ではⅠ～Ⅳ区（第4図）、永井北遺跡ではA～G区（第37図）と調査区を設定した。また各調査区名にはさらに1、2という小区画名を併用して調査を実施したが、本報告ではこの小調査区名は使用していない。

なお、本調査の終了後に坂出丸亀バイパスの建設に伴う道路側溝が現国道11号の北側に建設されることとなった。香川県教育委員会では稲木北遺跡に近接しており、関連する遺構・遺物の確認が予測される地点であるため、埋蔵文化財の有無確認を目的として平成19年8月20日に工事立会を行った。その結果、稲木北遺跡と同時期の大型建物跡などを確認したため工事を一時停止し、調査を行った。その成果は本報告書で、掲載することにした。

第3節　整理作業の経過

出土品の整理作業は発掘調査の終了直後である平成18年2月1日～3月31日及び平成19年4月1日～5月31日までの4ヶ月間で実施した。

まず、平成18年に平成17年度の発掘調査時の体制で、基礎的な整理作業を行った。主な内容は遺構の図面整理・図版の版組みや遺物の復元などである。次いで、平成19年に当該年度の整理作業体制で、引き続いて作業を行った。主な内容は遺物の実測・トレース・写真撮影や遺構図版のトレース、原稿執筆などである。そして、最後に台帳整理や収納を行い、終了した。

第4節　発掘調査及び整理作業の体制

平成17年度の発掘調査及び平成19年度の整理作業の体制は以下のとおりである。

平成17年度（調査）

文化行政課

総括	課　長	吉田　光成
	課長補佐	中村　禎信
総務	副主幹	河内　一裕
	主任主事	八木　秀憲
埋蔵文化財	課長補佐	藤好　史郎
	主　任	山下　平重
	文化財専門員	信里　芳紀

香川県埋蔵文化財センター

総括	所　長	渡部　明夫
	次　長	榊原　正人
総務	副主幹	松崎日出穂
	主　査	塩崎かおり
	主　査	田中　千晶
調査課	課　長	廣瀬　常雄
	文化財専門員	福家　正人
	主任技師	長井　博志
	調査技術員	森　麻子

平成19年度（整理）

生涯学習・文化財課

総括	課　長	鈴木　健司
	課長補佐	武井　壽紀
総務	副主幹	古田　泉
	主　任	林　照代
	主　任	植松　隆
	主任主事	高橋　未央
	主任主事	西本　優子

香川県埋蔵文化財センター

総括	所　長	渡部　明夫
	次　長	廣瀬　常雄
総務課	課　長	野口　孝一
	主　任	宮田久美子
	主　任	嶋田　和司
	主　任	古市　和子
資料普及課	課　長	廣瀬　常雄（兼務）

文化財	課長補佐	藤好　史郎		文化財専門員	長井　博志
	副主幹	林　文夫		嘱　託	葛西　薫
	主　任	白井　洋二		嘱　託	加藤　恵子
	文化財専門員	森　格也		嘱　託	川井　佐織
	文化財専門員	信里　芳紀		嘱　託	北濱　敦子
				嘱　託	工藤　勇太

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境〈善通寺市について〉

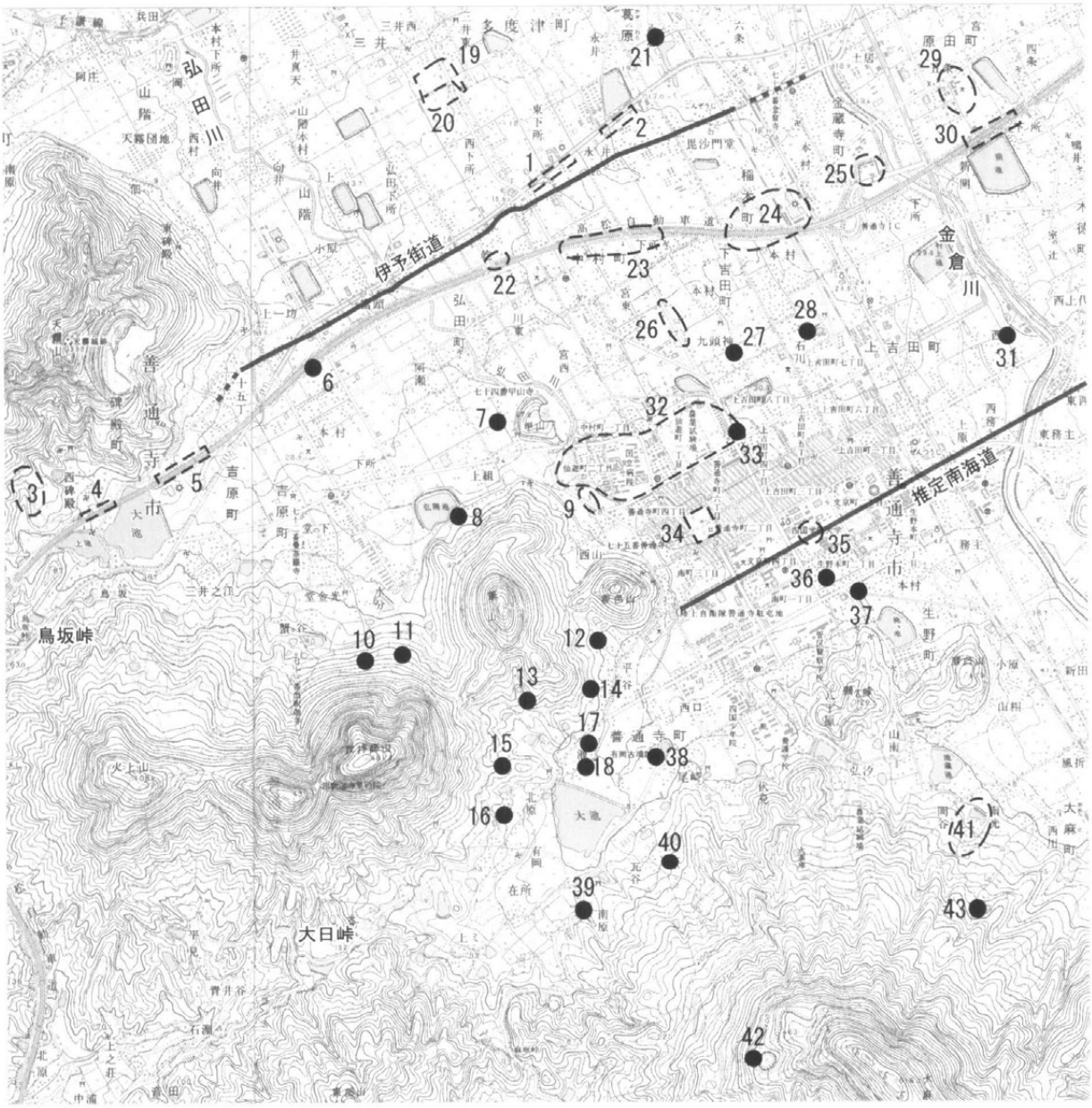
稲木北遺跡、永井北遺跡はそれぞれ善通寺市稲木町、中村町に所在する。2遺跡が位置する善通寺市は香川県の西部に位置するが、地形的には、山塊や独立丘陵が連なる西部から南部にかけての地域と、平野が広がるそれ以外の地域に大別できる。まず山塊、丘陵群であるが、これらは善通寺市とその西側から南側にかけて接する三豊市三野町、高瀬町を地形的に遮断している。その具体名を挙げると西側に位置する丘陵群が北から天霧山、火上山、我拝師山であり、南側にある山塊が大麻山である。なお、我拝師山の北東には筆ノ山、香色山の２つの丘陵も並ぶ。

次いで平野であるが、これは県下で最大規模をもつ丸亀平野の南西部に当たる。この平野は弘田川、金倉川、土器川の沖積作用によって形成されており、3河川はいずれも北流し瀬戸内海へ注ぐ。このうち、善通寺市域を流下するのは西側の弘田川と東側の金倉川である。弘田川は南方にある大麻山と南西方に位置する我拝師山、筆ノ山、香色山の間の谷地形（通称、有岡の谷）を北東方向へ流下した後、平野に面した香色山の麓で流路を北西へ変える。また金倉川はほぼ直線的な流路をとるが、近接した位置に網目状をなす大きな旧河道の痕跡が見られる。金蔵寺下所遺跡ではこの旧河道群の一部と見られる弥生時代や奈良時代の旧河道を検出しており、年代の一端が窺える。(1) 一方、これは頻繁に流路が移動したことを示すため、この付近の土地は不安定な堆積環境にあったと考えられる。

なお丸亀平野では稲木北遺跡、永井北遺跡付近を始めとして広域に渡り条里型地割を確認できる。この施工開始期については、発掘調査の成果により７世紀末～８世紀初頭に求められることが指摘されている。(2)

(1) 木下晴一　「第２章　遺跡の立地と環境」『旧練兵場遺跡Ⅴ―平成９年度国立善通寺病院内発掘調査報告―』 香川県教育委員会（1998）

(2) 森下英治　「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『（財）香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅴ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター（1997）



1 永井北遺跡
2 稲木北遺跡
3 月信遺跡
4 西碑殿遺跡
5 矢ノ塚遺跡
6 上一坊遺跡
7 甲山北遺跡
8 筆山古墓
9 弘田川西岸遺跡
10 我拝師山遺跡C
11 我拝師山遺跡A
12 平谷古墓
13 兼谷古墓
14 カンチンバエ遺跡
15 シンネバエ遺跡
16 北原古墳
17 鴨坂古墓
18 菊塚古墳
19 三井遺跡
20 西下所散布地(三井遺跡)
21 小塚遺跡
22 乾遺跡
23 永井遺跡
24 稲木遺跡
25 金蔵寺下所遺跡
26 九頭神遺跡
27 吉田八幡古墳
28 石川遺跡1号
29 五条遺跡
30 龍川五条遺跡
31 西原遺跡
32 旧練兵場遺跡
33 伝導寺跡(仲村廃寺)
34 善通寺境内
35 四国学院大学構内遺跡
36 生野本町遺跡
37 生野南口遺跡
38 王墓山古墳
39 宮ヶ尾古墳
40 瓦谷遺跡
41 南光古墳群(岡・岡谷古墳群)
42 野田院古墳
43 椀貸塚古墳

第２図　周辺遺跡位置図 (1/40,000)

第２節　歴史的環境

ここでは稲木北遺跡、永井北遺跡が位置する丸亀平野西部のうち、主に金倉川以西の状況について述べる。

〈旧石器時代〉

金蔵寺下所遺跡[1]ではナイフ形石器、翼状剥片、石核などが、矢ノ塚遺跡[2]ではでナイフ形石器がそれぞれ後世の堆積土に混在して出土した。

〈縄文時代〉

永井遺跡[3]では縄文時代後期中葉から晩期前半の旧河道を検出し、多量の土器、石器、植物遺体が出土した。このうち石器では多量の打製石斧と一定量の磨り石・石皿が、植物遺体では多量のイチイガシが見られる。

なお、弘田川西岸遺跡[4]では包含層より多量の後期前半の土器と石器が、乾遺跡[5]、稲木遺跡[6]でも旧河道より晩期土器が出土している。

〈弥生時代〉

時期を追って説明すると、前期から中期初頭では金倉川以西の地域で山南遺跡[7]、三井遺跡、甲山北遺跡などを確認している。山南遺跡では土坑や遺物包含層が、後の２遺跡では前期中頃から後半の土器が見られる。

一方、金倉川以東の地域では中の池遺跡[8]、龍川五条遺跡[9]、五条遺跡[10]において環濠集落が確認されている。中の池遺跡では環濠により区画された３つの居住域と小規模で不定形の水田が検出されている。また居住域と水田域の間には２基の木棺墓も確認されている。龍川五条遺跡では２条の環濠内で竪穴住居、掘立柱建物が復元される柱穴群と土坑が、環濠外ではさらに旧河道を挟んで周溝墓３基と木棺墓２基が見られる。また東側は水田として利用が推定されている。五条遺跡は龍川五条遺跡の北方300ｍに位置する。やはり環濠の可能性を持つ２条の大溝跡が検出され、前期後葉の土器が出土した。出土遺物の時間的な関係から龍川五条遺跡が規模を縮小し、本遺跡へ集落本体が移動したものと推定されている。

こうした県内の前期集落の実態については信里氏による研究[11]がある。氏は時期的、地理的に近接する遺跡を遺跡群という１単位として検討している。その中で中の池遺跡と龍川五条遺跡、五条遺跡を取り上げ、当該期の集落は一定地域の中に複数の居住域が固まって構成されていること、こうした状況の背景には水稲耕作に関わる協業の活発化が考えられることを指摘している。

中期中葉から後葉にかけては西碑殿遺跡[12]、矢ノ塚遺跡、月信遺跡、吉原火上山遺跡など丘陵の裾部や斜面に立地する遺跡が数多く見られ、前期以来の河川流域沿いに立地した集落は多くが廃絶するようである。続く後期には稲木遺跡、九頭神遺跡[13]、彼ノ宗遺跡[14]、弘田川西岸遺跡、山南遺跡などで集落跡が確認されており、特に後半以降は多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土器棺墓などが検出されている。

以上のように弥生時代の集落跡は比較的短期間で廃絶する遺跡が多い。こうした中で異質なのが、旧練兵場遺跡である。本遺跡は弥生時代前期から少数の遺構、遺物が確認され、その後中期中葉からは安定的に集落が営まれている。遺跡内容については森下氏による詳細な考察[15]があるのでこれを紹介すると、地形的には３、４本の埋没小河川に区分された５、６の微高地で構成される。このうち善通寺病院

地区とされる微高地の１つでは南北約 400 m、東西約 150 mの範囲において中期中葉から終末期までの竪穴住居跡 209 棟、掘立柱建物跡 75 棟、櫓状建物跡 3 棟、布掘建物跡 4 棟、貯蔵穴跡、土器棺墓などを検出している。他の微高地も同程度の規模を持つため、本遺跡が県内でも最大級の集落跡であるといえる。そうしてこれらの遺構群は、まとまりごとに見られる属性の違いから機能分化が指摘されている。また出土遺物にも銅鐸、銅鏃、銅鏡などの青銅器、鉄器、他地域からの搬入土器など特殊なものが数多く見られる。「旧練兵場遺跡群」[16]と近接する遺跡（稲木遺跡、九頭神遺跡、今回報告する永井北遺跡など）の関係については「大規模な旧練兵場遺跡を中心として、小規模な集落が周辺に散在する景観を復元できる」とされ、本遺跡の周辺地域で集中して出土する青銅器を継続して入手した中心的な拠点であったことも指摘されている[17]。こうした様相から地域の中核をなす遺跡と位置づけられている。

〈古墳時代〉

集落と古墳に大別し、時期を追って説明する。まず集落については古墳時代前期の様相については不明瞭である。だが、旧練兵場遺跡の南にある善通寺西遺跡[18]ではこの時期の旧河道より多量の土器や木製品が出土している。古墳時代中期には旧練兵場遺跡[19]で竪穴住居跡により構成される集落跡が見られる。竪穴住居跡は一辺５～６ｍを測る方形プランでカマドをもつものが多い。滑石製の勾玉・管玉・臼玉などが出土する住居跡もある。またこの時期には生野原遺跡[20]でも当該期の遺構・遺物が確認できる。中でもＩ区 SX105 は遺構の性格が不明ながら多量の土師器壺、甕、高杯などが一括廃棄された状態で出土し、注目できる。古墳時代後期には旧練兵場遺跡で多数の竪穴住居跡が形成される他、その一角にある仲村廃寺[21]、稲木遺跡、四国学院大学構内遺跡[22]でも集落が形成される。

次に古墳についてであるが、善通寺市内では非常に多数が確認されている。特に有岡地区（北部を香色山・筆ノ山・我拝師山によって、南部を大麻山により挟まれた地区）では前期から後期にかけての前方後円墳が集中する。そしてこれらは直線的に並んで築かれているため同一系譜上の首長墓群であり、地方豪族である佐伯氏の墓と考えられている。こうした古墳の基数や首長墓群の様相からは、弥生時代以来の繁栄が継続された状況が窺える。ただこうした様相は市内南部において見られるものであり、稲木北遺跡からもっとも近接する吉田八幡古墳（東西 16 mの前方後円墳）は、南に約 1.6km 離れている。よって稲木北遺跡付近を基盤として形成された古墳は未確認である。

時期を追ってその内容を見ると、前期には大麻山の中腹に野田院古墳[23]が築造されている。これは前方部が盛土、後円部が積み石により形成されるという特異な構造をもつ。大麻山東麓には同じく積石塚である椀貸塚古墳が位置する。中期には市域西部に大型円墳である青龍古墳[24]や生野鑵子塚古墳などが築かれる。後期の古墳には県内最古の横穴式石室をもつ王墓山古墳[25]がある。全長 46 mの前方後円墳であり横穴式石室内には石屋形が作り出されている。副葬品には金銅製冠帽や馬具類を始めとして多様な副葬品が出土している。また宮ヶ尾古墳では玄室奥壁に線刻画が見られ、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれている。

〈古代〉

律令期の善通寺市域は金倉川付近を境に西側の多度郡、東側の那珂郡に分かれる。稲木北遺跡、永井北遺跡は多度郡に位置するが、多度郡は七郷（生野・良田・葛原・三井・吉原・弘田・仲村）に分かれていたとされる。

当該期の遺跡としては今回報告する稲木北遺跡が注目できる。稲木北遺跡では８世紀初頭～前葉の大型建物跡８基、これらを区画する柵列跡２基が検出された。特筆すべきはこれらの建物、柵列群が条里

坪境線を基準線として左右対称に並び、柵列跡の内部に形成された中核建物群は、官衙的な建物配置である品字形配置の変化形を採ることである。また柵列によって区画された範囲は東西約60ｍを測り、郡衙政庁で見られる区画規模に匹敵する。

県内の集落遺跡ではこうした内容が揃って確認できた事例はない。ただ、稲木北遺跡より南へ約3kmの位置にある生野本町遺跡では、一部に官衙的な建物配置が想定され、多度郡の郡衙の可能性が指摘されている[26]。稲木北遺跡と生野本町遺跡は、存続期間がほぼ一致し、それぞれの所在地の付近は古代豪族である因岐首氏、佐伯直氏の本拠地とされる。[27]以下では稲木北遺跡付近の北部（多度郡北部）、生野本町遺跡付近の南部（多度郡南部）に分けて説明する。

まず多度郡北部であるが集落遺跡として稲木遺跡、金蔵寺下所遺跡、西碑殿遺跡、矢ノ塚遺跡がある。稲木遺跡は稲木北遺跡から南東へ約1.1kmの位置にある。古墳時代後期の集落跡(6世紀代～7世紀中葉)は廃絶し、近接した位置に7世紀後葉～8世紀前葉の掘立柱建物跡28棟、溝状遺構、土坑などが形成される。8世紀前葉には区画溝により分割された3つの建物群がある。ただこれらに伴う区画溝は連接、共有されており、建物群は相互に接する。このうち中央の建物群は6棟で構成し、「ロ」の字を意識した建物配置を採り、中央部は空白地となる。こうした内容から郷家の一類型とする見解もある。[28]

金蔵寺下所遺跡は稲木北遺跡から東へ約1.5kmの位置にある。検出遺構には7世紀末～8世紀中葉の掘立柱建物跡20棟、溝状遺構、金倉川旧河道などがあり、建物群は旧河道に接して形成されている。また旧河道では7世紀末～8世紀前葉の堆積土から人形、馬形、船形、刀形、弓形、笛形、斎串など公的な河川管理を示唆する木製祭祀具が数多く出土した。

西碑殿遺跡は稲木北遺跡からは西へ約4km、三豊平野との境である鳥坂峠に近い見晴らしのよい丘陵上に位置する。検出遺構は7世紀後半～8世紀前半の掘立柱建物跡13棟、溝状遺構、土坑などがある。今もなお交通の要衝である峠を見下ろす選地は、物資の輸送管理の意図が窺える。

西碑殿遺跡より北東へ約500ｍの位置には矢ノ塚遺跡がある。検出遺構は7世紀末～10世紀ごろの掘立柱建物跡15棟などがある。掘立柱建物跡の詳細な所属時期決定は柱穴跡からの出土遺物が弥生土器しかないため困難であるが、7世紀末～8世紀前半の土器が遺跡内より一定量出土しているため当該期にも集落が形成されていたと見られる。また包含層より平安期とされる緑釉陶器、石帯が出土している点も注目できる。

以上の多度郡北部の集落遺跡の存続期間には、少なからずばらつきがあるが、その中心となる時期は7世紀末～8世紀前葉である。これは稲木北遺跡の存続期間と重なる。このうち稲木遺跡、金蔵寺下所遺跡では7世紀末～8世紀初頭において、それまでの建物や溝状遺構が一度廃絶され、条里型地割の主軸方向に揃えるように改変される[29]など、この時期に、各遺跡が互いに密接な関係を有していた可能性が考えられる。加えて、これらの遺跡は東の讃岐国府と西の伊予方面をつなぐ中世の幹線ルート（南海道）とされる伊予街道[30]に近接する点でも共通する。

次いで稲木北遺跡付近を本拠地としたと見られる因岐首氏に関してであるが、同氏族については松原氏による研究があるのでこれに基づき紹介する。まず本拠地についてであるが、『日本三大実録』において「多度郡人因支首純雄」らが貞観8年（866年）に改姓要求の申請を行った結果、和気公が賜姓されたことが記載されている。よって9世紀中葉の多度郡に因岐首氏という豪族が存在したことは確実である。そして1423年の良田郷田数支配帳事では多度郡良田郷内に「稲毛」という地名がある。松原氏はこれを因岐首氏の「因岐」からの転化と考え、良田郷を因岐首氏の本拠地に比定している。これに従

遺跡番号	遺跡名	遺構内容	条里坪界溝名	時期	坪界溝の方向	備考	文献註
B	永井北	掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など	B区 SD2001	10～11世紀代	南北		本報告書
			D区 SD4002	10世紀前半	東西		
		柱穴跡、鋤溝跡、溝状遺構など	D区 SD4001、SD4005	12世紀代	東西		
2	乾	溝状遺構、旧河道　など	SD8502	近世	南北		5
3	中村	溝状遺構	SD01、SD02	9～10世紀代	南北	石帯1点、銅印1点出土	
4	永井	溝状遺構、土坑	SD045	8世紀前半	南北		3
5	稲木（市教委）	掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など	第3調査区 SD01	8～9世紀代	南北		37
6	稲木（県教委）	掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など	B1・B2区 SD02	7世紀末～9世紀代	南北	市教委のⅡ、Ⅲ区SD12に接続	6
			B3区 SD44～SD46	7世紀末～9世紀代	南北		
7	金蔵寺下所	掘立柱建物跡、溝状遺構、旧河道	SD06	7世紀末～8世紀代	南北		1
8	龍川五条	掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など	SD44、SD45	10世紀ごろ	南北		9
		掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など	SD21	13世紀以降	南北		
9	龍川四条	溝状遺構、井戸跡、土壙墓など	A地区 SD07、SD08	12世紀後半	南北		38
			B地区 SD21、SD40	13世紀ごろ	南北		
			B地区 SD25	13世紀ごろ	東西		
10	小塚	溝状遺構、旧河道	SD03	9～10世紀代	南北		本報告書
11	旧練兵場	溝状遺構	SD17	8世紀以後	東西		
			SD01～03	8世紀以後	南北		
12	仲村廃寺	溝状遺構	SD04、SD05	8世紀前半	東西		21
14	四国学院大学構内	溝状遺構	SD01	8世紀前半	東西	南海道　側溝か？	22
15	生野本町	掘立柱建物跡、溝状遺構、土壙墓	SD51	8世紀前葉	南北	多度郡衙か？	26
			SD71	7世紀末～8世紀前葉	東西		
17	西原	溝状遺構	Ⅰ区 SD05など	(9～) 13世紀代	南北	複数回に渡る再掘削	39
			Ⅱ区 SD07、08など	(9～) 13世紀代	東西		
			Ⅱ区 SD10	13世紀代	東西		

第1表　稲木北遺跡付近の条里坪界溝検出遺跡一覧

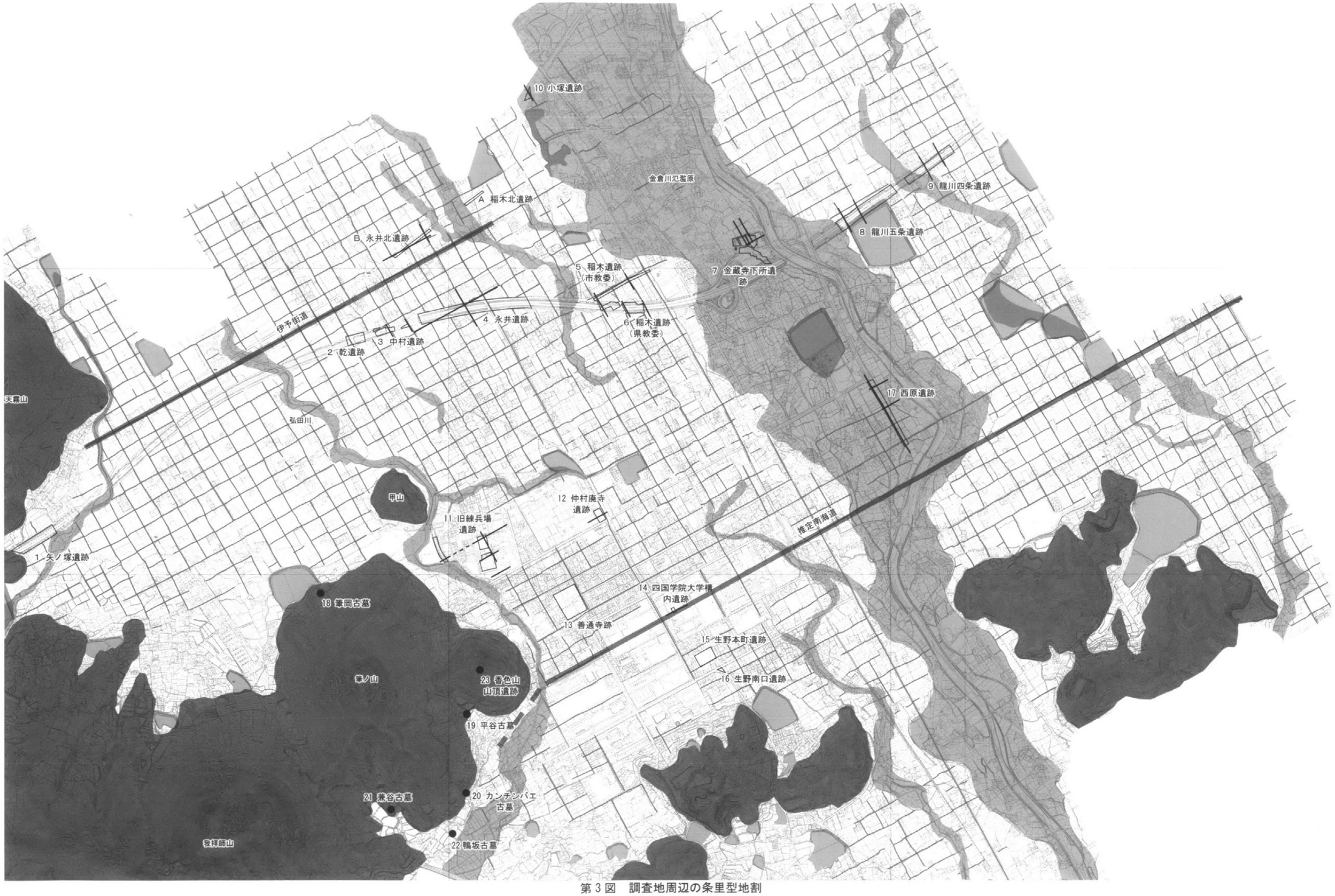
えば、稲木北遺跡は良田郷に位置することから、稲木北遺跡の形成された8世紀初頭～前葉の段階には因岐首氏がこの地域を本拠地としていた可能性が高い。次いで因岐首氏の形成過程であるが、『和気系図』には始祖である忍尾別君から因支首純雄（「支」は『実録』の記載のまま）らの世代までが記載されている。また同系図では忍尾別君が伊予国から移住し、因岐首氏と婚姻し、因岐首氏の姓を負うようになった旨が記されている。松原氏は系図に記された世代数を一世代20年と計上することによりこの移住時期を7世紀中頃としている。

次いで多度郡南部である。先述の生野本町遺跡は、調査範囲がごく小規模であるため不明瞭な点も多いが、溝状遺構により区画された一辺約55 mの範囲内に、大型建物群が規格性、計画性をもって配置、構築されている。遺跡の存続期間は7世紀後葉～8世紀前葉であり、稲木北遺跡より須恵器1型式分先行する。官衙的な様相が強い遺跡である。

生野本町遺跡の南100 mには生野南口遺跡[31]が位置する。ここでは8世紀前葉～中葉に属する床面

遺跡番号	遺跡名	遺構内容	時期	備考	文献註
A	稲木北	掘立柱建物跡、柵列跡、溝状遺構など	8世紀初頭～前葉	官衙か？	本報告書
1	矢ノ塚	掘立柱建物跡、溝状遺構など	7世紀末～10世紀代	石帯1点出土	2
13	善通寺	寺院	8世紀代以降		
16	生野南口	掘立柱建物跡	8世紀前葉～中葉		31
18	筆岡古墓	火葬墓	9世紀前半		34
19	平谷古墓	火葬墓	8～9世紀代？		34
20	カンチンバエ古墓	火葬墓	8世紀後半		34
21	兼谷古墓	火葬墓	8世紀後半		34
22	鴨坂古墓	火葬墓	8世紀中葉		34

第2表　稲木北遺跡付近の古代遺跡一覧（第1表で取り上げた遺跡は除く）



第３図　調査地周辺の条里型地割

積40㎡を越える庇付大型建物跡1棟、杯蓋を利用した転用硯1点などが出土している。生野本町遺跡に近接し、公的な様相が窺えることから、両遺跡の有機的な関係が推測できる。

同じく公的性格をもつ遺跡として推定南海道がある。金田章裕氏によると、推定多度郡条里地割における6里、7里の里界線沿いが有力な推定ライン[32]となる。多度郡の東側に隣接する那珂郡では、この推定ラインに沿って余剰帯（条里型地割において南北幅が東西幅に比べて10mほど広い坪の連続する箇所）が観察され、これを西側へ延長した位置に相当することを根拠としている。また13世紀代の善通寺文書において五嶽山南麓に延びるこの道が「大道」と記載されていることもこれを裏付ける傍証とされる。この問題について言及できる考古学的な発掘調査は四国学院大学構内遺跡において行われている。同遺跡では金田氏の推定する南海道の位置と合致する箇所で、併行して延びる2条の溝状遺構を検出した。時期的には7世紀末～8世紀初頭が上限と考えられる。またその主軸方向は条里型地割と一致し、溝状遺構の心々幅は約8.5mを測る。こうした内容から2条の溝状遺構は南海道の道路側溝である可能性が高いが、溝状遺構間で硬化面や波板状痕跡などは確認されていない。

次に多度郡南部を本拠地とした佐伯直氏に関してである。『類聚国史』により9世紀前半に佐伯鈴伎麻呂が大領（郡司）となっているが、それ以前において佐伯直氏との関係を直接的に示す遺跡は未確認である。ただし、この地域には他地域を凌ぐ寺院や古墓が存在する。寺院については仲村廃寺、善通寺がある。仲村廃寺[33]では、原型に近い川原寺式軒丸瓦や法隆寺式の軒平瓦などが出土し、奈良時代まで多種類の軒瓦が使用されている。善通寺跡でも白鳳期から平安期にわたる多種類の軒瓦が出土しており、両寺とも盛んに造寺活動が行われていたことを示している。一方、古墓[34]については8世紀中葉～9世紀代の火葬墓群が筆の山の南麓、東麓で確認されている。このうち8世紀後半のカンチンバエ古墓では銅製骨蔵器が使用され、畿内でも稀な材質であることが注目される。

最後に集落遺跡であるが、近接する時期の遺跡として仲村廃寺（旧練兵場遺跡内）（6世紀後半～7世紀前半）、四国学院大学遺跡（7世紀前半～中葉）が所在する。ただ、どちらも7世紀後半には廃絶しており、生野本町遺跡と併行する時期の集落跡は未確認である。

以上の状況に基づき稲木北遺跡付近の状況をまとめると、当該期の集落遺跡はいずれも盛行期が稲木北遺跡と重複し、稲木遺跡では「ロ」の字形の官衙的な建物配置、金蔵寺下所遺跡では河川管理祭祀、西碑殿遺跡と矢ノ塚遺跡は鳥坂峠の麓という交通の要衝に立地する等といった、それぞれに固有の機能的側面が見出せる。この様相は、官衙や豪族による地域支配のため新たに遺跡や施設が形成されたり、既存集落に官衙の補完的な業務が割り振られたりするなどの、律令体制の下で在地支配層が地域の基盤整備に強い規制力を行使した痕跡とみると整合的である。

〈中世〉

永井北遺跡では条里型地割の坪内に配置された集落跡を検出したが、他の多くの遺跡でも当該期の集落が見られる。具体的には以下のような遺跡がある。金蔵寺下所遺跡（12世紀～13世紀代）、永井遺跡（12世紀～14世紀代）、山南遺跡（12世紀～14世紀代）、西碑殿遺跡（14世紀～16世紀代）、上一坊遺跡[35]（14世紀～16世紀代）、中村遺跡[36]（15世紀～16世紀代）など。これらは条里型地割に規制された主軸方向をとる掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑などで構成される。

(1) 廣瀬常雄『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊　金蔵寺下所遺跡　西碑

殿遺跡』 香川県教育委員会（1994）

(2) 渡部明夫・薦田耕作『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊　矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会（1987）

(3) 渡部明夫『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第9冊　永井遺跡』 香川県教育委員会（1990）

(4) 片桐孝浩『広域基幹河川弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　弘田川西岸遺跡』香川県教育委員会（2007）

(5) 真鍋昌宏他『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊　中村遺跡　乾遺跡　上一坊遺跡』 香川県教育委員会（1987）

(6) 西岡達哉『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊　稲木遺跡』 香川県教育委員会（1989）

(7) 真鍋昌宏『県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　山南遺跡』 香川県教育委員会（2003）

(8) 佐藤亜聖他『総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　中の池遺跡―第12次調査―』 丸亀市教育委員会・（財）元興寺文化財研究所（1989）

(9) 宮﨑哲治『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第23冊　龍川五条遺跡Ⅰ』 香川県教育委員会（1996）

森下英治『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第29冊　龍川五条遺跡Ⅱ　飯野東分山崎南遺跡』 香川県教育委員会（1998）

(10) 森下英治「五条遺跡」『香川県埋蔵文化財発掘調査報告―香川県土木部道路改良事業に伴う発掘調査報告集―』 香川県教育委員会（1994）

(11) 信里芳紀「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」『第16回古代学協会四国支部研究大会―研究発表要旨集―』古代学協会四国支部（2002）

(12) 註1文献に同じ

(13) 笹川龍一『九頭神遺跡発掘調査報告書』 九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会（1986）

(14) 笹川龍一『弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　彼ノ宗遺跡』 善通寺市教育委員会（1985）

(15) 森下英治 「瀬戸内の大規模密集型集落―香川県旧練兵場遺跡と周辺遺跡」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会（2006）

(16) 森下氏は弘田川西岸遺跡、彼ノ宗遺跡を地理的な近接と遺跡の存続期間の類似などから旧練兵場遺跡の一部としている。

(17) 善通寺市内では与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・中細形銅剣5口・中細形銅矛1口の計8口、我拝師山遺跡では3地点から平形銅剣5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、多数の青銅器が出土している。

松本敏三・岩橋孝『讃岐青銅器図録』 瀬戸内海歴史民俗資料館（1983）

(18)『新編香川叢書考古編』 香川県教育委員会（1983）

(19) 信里芳紀他 「旧練兵場遺跡」『香川県埋蔵文化財センター年報　平成16年度』 香川県埋蔵文化財センター（2005）

(20) 長井博志「生野原遺跡」『一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊

室塚遺跡及び一般国道319号善通寺バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊　生野原遺跡』 香川県教育委員会（2008）
(21) 笹川龍一『仲村廃寺～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～』 善通寺市教育委員会（1989）
(22) 海邉博史『四国学院大学構内遺跡発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会（2003）
(23) 笹川龍一他『史跡有岡古墳群（野田院古墳）保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会（2003）
(24) 笹川龍一『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2　青龍古墳発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会（1994）
(25) 笹川龍一『史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会（1992）
(26) 國木健司『生野本町遺跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会（1993）
(27) 松原弘宣「第二章　讃岐国西部地域における地方豪族―空海と円珍の一族を中心にして―」『古代の地方豪族』 吉川弘文館（1988）
(28) 井上尚明「郷家に関する一試論」『埼玉考古学論集』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団（1991）
(29) 森下英治「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『（財）香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅴ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター（1997）
(30) 唐木裕志「第2章　街道の歴史的概要」『香川県歴史の道調査報告書 第十集 讃岐国往還調査報告書』香川県教育委員会（1993）
(31) 佐藤竜馬『生野南口遺跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会（2003）
(32) 金田章裕「条里と村落生活」『香川県史1』 香川県（1987）
(33) 笹川龍一『仲村廃寺発掘調査報告（旧練兵場遺跡内）』 善通寺市教育委員会（1984）
(34) 佐藤竜馬「讃岐における古代の火葬墓」『（財）香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター（1993）
(35) 註5文献に同じ
(36) 註5文献に同じ
(37) 笹川龍一『稲木遺跡　県道西白方善通寺線樫藪踏切除却工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』稲木遺跡発掘調査団（1989）
(38) 木下晴一『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊　龍川四条遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター（1995）
(39) 山元素子『一般国道319号善通寺バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　西原遺跡』香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局（2007）

第３章　稲木北遺跡の調査成果

第１節　遺跡の立地と地形（第４～５図）

ここでは稲木北遺跡の旧地形について現地形と旧河道の分布、遺構面レベルと遺構面下位の土層堆積状況、旧河道の分布から検討する。そしてこの成果に奈良時代初期の遺構分布状況や周辺部での試掘調査の成果、条里型地割と遺跡の位置関係などを合わせて考えることにより当該期の遺構群が形成された範囲について考察する。

遺跡の立地、現地形と旧河道

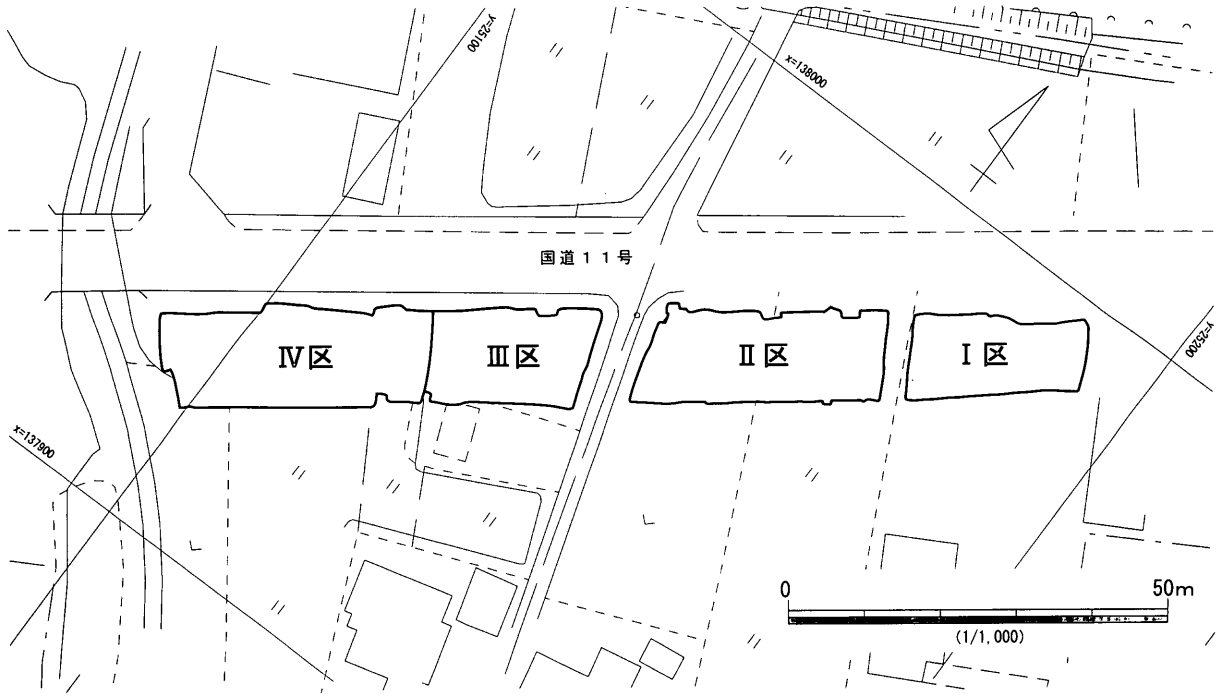
稲木北遺跡は善通寺市稲木町に所在する。遺跡の東約 1.3km の位置に金倉川があり、立地的にはこれにより形成された沖積低地面に位置する。

遺跡周辺の等高線図（第５図）を見ると遺跡の東西で旧河道の存在を見て取れる。まず西側の旧河道であるが、現在の用水路沿いに、南北方向に延びる段丘崖として確認できる（この段丘崖は調査対象地ではⅣ区 SR4001 として検出）。また国道 11 号建設工事に伴い、用水路の底を掘りぬいていた際の土層観察では、用水路の底面より約１ｍ下位まで黒灰褐色粘土、青灰色粘土などの堆積が見られた。

次いで東側の旧河道についてはこの部分の水田面のレベルは現在も周囲よりやや下がっている。そして国道 11 号建設に伴う平成 15 年度の試掘調査では実際にこの位置で旧河道が検出された。流下方向は地形に沿って北流すると推定される。よってどちらも流下時期は不明であるが、２条の旧河道が北流していたこと、これらにはさまれた調査対象地は微高地であり、遺跡はこの微高地上に広がることがわかる。

遺構面レベルと遺構面下位の土層堆積状況

〈東西方向〉



第４図　稲木北遺跡 調査区配置図

第５図　等高線及び調査区位置図 (1/4,000)

大局的には調査地の中央（Ⅱ区西側、Ⅲ区東側）が最も高位でそこから東西へ向かって緩やかに下る。だが東側にあるⅠ・Ⅱ区と西側にあるⅢ・Ⅳ区では土層の堆積状況が異なるため区分して述べる。まずⅠ・Ⅱ区（第6図柱状図1～6、第7図）であるが、Ⅰ区の中世以降の耕作土（第6図7層）、SD1001・1002（第7図8～13層）により削平された部分を除くと遺構面レベルはⅠ区で15.35 m前後、Ⅱ区で15.45～15.50 mを測る。この範囲で包含層は見られないものの8世紀代の遺構の遺存状況から判断すると、遺構面はさほど削平を受けていないと考えられる。なおⅠ区の削平部分についても遺構面ベース土直下に堆積するやや灰味がかる黄褐色粘質土(第6図9層)はⅠ・Ⅱ区ではほぼ水平堆積している。よってⅡ区からⅠ区のある東側へ緩やかに下る地形を想定できる。

次いでⅢ・Ⅳ区（柱状図7～14）であるが、遺構面レベルはⅢ区で約15.4 m、Ⅳ区で15.05～15.3 mを測る。またベース土直下の堆積土（第6図10･11･14～17層）の上面レベルを見てもⅣ区に向かって緩やかに下っている。よって地形はⅢ区から西側のⅣ区へ緩やかに下ることが確認できる。またⅣ区北東部（柱状図10）付近では8世紀代の遺構埋土とよく似た色調、土質を呈する包含層が堆積している。このためこの付近では遺構面がほとんど削平されていないと見られる。

最後に最も高位にある中央部の遺構面レベルについてであるが、Ⅱ区西側（柱状図6）で約15.5 m、Ⅲ区東側（柱状図7）では約15.4 mとⅢ区でやや低い。だが、遺構面下位の土層堆積状況を見ると基盤層である明黄褐色粘土（第6図20層）は柱状図7で最も隆起している。よって本来はⅡ区西側と同程度の遺構面レベルをもつと推定される。

〈南北方向〉

第8図でⅣ区東壁土層を見ると北部を中心に包含層(5層)が見られる。この下位で遺構面は北へ向かってごく緩く下る。そしてⅣ区東壁の南部、Ⅱ区東壁でも遺構面は同様な傾斜で北へ向かってごく緩やかに下っている。よって現地形と同じく北へ緩く傾斜すると考えられる。

8世紀代の遺構・遺物分布と試掘調査の成果

まず遺跡の西側についてであるが、当該期の遺構はⅣ区SB4001以西において極めて希薄になる。また西側旧河道以西の調査対象外地についても国道11号建設工事に伴う平成17年度の試掘調査では遺構・遺物が確認されていない。一方、東側にあるⅠ区ではSB1001が調査区東端で検出されており、これはさらに東側に延びる。だが、先述の平成15年度に旧河道を検出した試掘トレンチではその他の遺構は見られなかった。またⅠ区では遺構密度が極めて低く、当該期の遺物は皆無に近い。(1)このように遺跡の東西の旧河道付近で当該期の遺構・遺物が希薄になる状況から、これらの旧河道が8世紀代の遺構群の東・西限に相当すると考えられる。

条里型地割と遺跡の位置

遺跡周辺には北から約30°西に振れた方向を持つ条里型地割が広がるが、調査地の位置を条里型地割の方格に則って表現すると第3図のとおり南北1坪、東西2坪の範囲にまたがるといえる。そして8世紀代の大型建物・柵列群はⅠ区SB1001を除くと、この東西2坪の中央にある南北方向の推定条里坪界線を基準線として東西方向へ左右対称に並ぶ。また中核的な建物であるⅢ区SB3001はこの南北1坪、東西2坪の範囲における中心に位置する。よって条里地割を非常に強く意識して大型建物群・柵列群が形成されていることを指摘できる。

このことを遺跡の範囲と関連付けて考えれば、東西方向で見られる旧河道のような自然障害が存在しない南北方向では、条里地割が遺跡の範囲を規定すると推測される。よって条里型地割の1坪(約110 m)が遺跡の範囲と考える。

結び

稲木北遺跡の旧地形については以上の現地形、旧河道の分布と遺構面レベルを考慮すると、東西で北流する2条の旧河道に挟まれた微高地上に位置することが分かる。そして遺跡の範囲については8世紀代の遺構・遺物分布状況と周辺部の試掘調査の成果、条里型地割における遺跡の位置を合わせて考えると、東西は微高地の範囲である約150 m、南北は条里地割の1坪に対応する約110 mと考えられる。

(1) Ⅰ区では中世以降の耕作土およびこれを掘り込むSD1001・1002の掘削により遺構面が一部削平されている。だが、至近部にあるSB1001の底面レベルと比べてこれらの底面レベルは高い。よって、Ⅰ区の遺構密度の低さは本来の状況を反映していると考えられる。

第2節　土層序（第6～8図）

調査地は南北方向へ長いため主に調査区南壁土層図（第6～8図）を使って土層序を説明する。基本層序であるが、どの調査区についても概ね上から耕作土、旧耕作土、床土を経て遺構面ベース土である黄褐色粘質土に至る。

〈Ⅰ区〉

調査前は運輸会社の倉庫として使用されており、1 m強の厚さで造成土が盛られていた。また、地下水位も高いため直下の耕作土以下の堆積土はいずれもグライ化が著しい。地形的には微高地の先端付近に位置する。遺構面は西へ傾斜するが、これは遺構面ベース土が中世以降の耕作土（第7図5層）、SD1001・1002（第7図8～13層）により削平を受けているためである。詳細は「第1節　遺跡の立地と地形」で述べているが、本来は東へゆるやかに下ると考えられる。

なお、第6図7層を中世以降の耕作土としたが、この時期比定はグライ化した淡灰色系粘質土と含有される灰色粘質土（ブロック）の色調から判断した。また耕作土と見たのは平面形の主軸が周辺の条里型地割と方向を揃えること、底面に小さな凹凸が密に見られることが永井北遺跡の10世紀前半に属する耕作地（SX3001）と類似することによる。

〈Ⅱ区〉

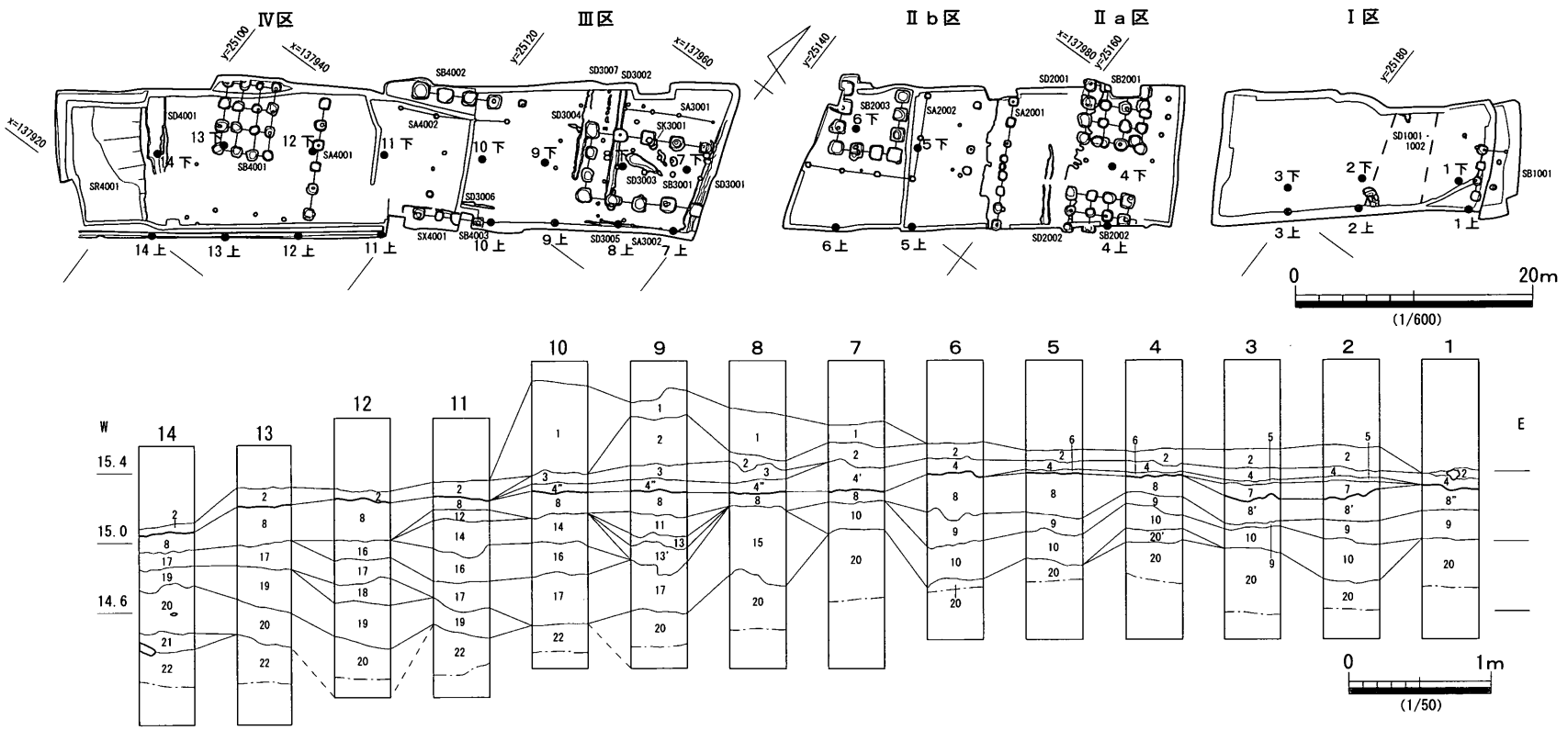
調査前の地目は3枚の水田である。地形的には微高地の頂部付近で遺構面はゆるく東へ下がる。遺構面は地表下約40cmで確認でき、遺構面上位に堆積する旧耕作土（第7図Ⅱ区①2層　灰白色マンガン沈着シルト）からは近世遺物が出土している。

〈Ⅲ区〉

調査前には水田、畑として利用されていた。地形的には微高地の頂部付近であり、遺構面は中央から東西へゆるく下る。だが、東側への傾斜は「第1節　遺跡の立地と地形」で検討した結果、直上に堆積する旧耕作土により削平されたためと見られる。よって全体的に西へ傾斜すると考えられる。

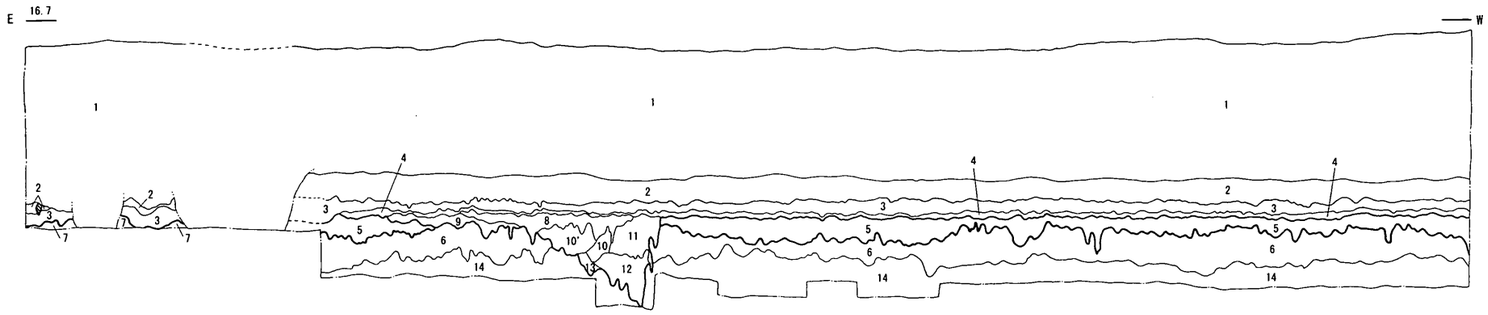
〈Ⅳ区〉

調査前には宅地、水田として利用されており、地形的には微高地の先端部に位置する。遺構面の勾配は西へ下っており、西端では現在の用水路に接する。土層序は東側では耕作土直下で、西側では旧耕作



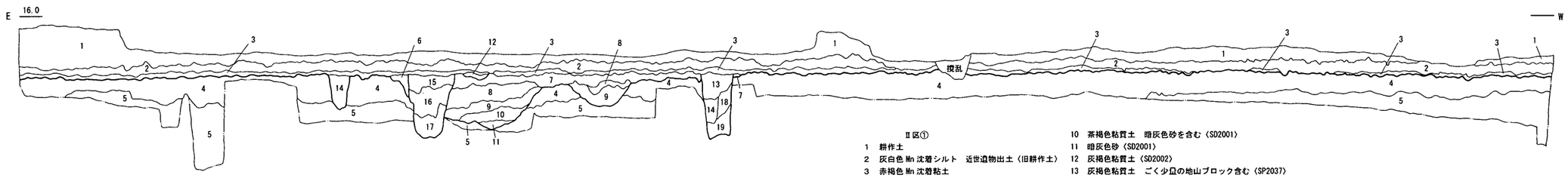
1　造成土
2　耕作土
3　茶灰色 Mn 沈殿粘質土　＜耕作土床土＞
4　灰白色 Mn 沈殿シルト　＜旧耕作土＞
4' 茶灰色シルト　＜旧耕作土＞
4" 黄灰色 Mn 沈殿シルト　＜旧耕作土＞
5　黄茶色 Mn 沈殿粘土
6　赤褐色 Mn 沈殿粘土
7　暗緑灰黄色シルト混粘質土　＜中世以降の耕作土＞
8　黄褐色粘質土（黄味が強く、しまりよい）　＜遺構面ベース土＞
8' 淡緑黄褐色粘質土（8がグライ化）　＜遺構面ベース土＞
8" 背黄褐色粘質土（8がグライ化）　＜遺構面ベース土＞
9　黄褐色粘質土（やや灰味がかり、しまり悪い）
10　淡黄褐色微砂混粘質土
11　黄褐色微砂混粘質土（やや暗灰色がかる）
12　黄褐色粘土（やや茶味がかる）
13　褐灰色粘土　＜遺構面ベース土下位にある落ち込み埋土＞
13' 13よりやや暗い
14　暗黄茶色粘質土　＜遺構面ベース土下位にある落ち込み埋土＞
15　黄褐色粘土（淡灰色微砂がマーブル状に混じる）
16　黄色粘質土
17　黄色微砂混粘質土（やや白味がかる）
18　明黄褐色微砂混粘質土
19　淡灰色粘質土（しまり悪い）
20　明黄褐色粘土（極めて硬くしまる）　＜基盤層＞
21　灰色粘土（茶味がかる）
22　灰褐色砂礫

第６図　下層確認トレンチ土層柱状図 (1/50)・作成位置模式図 (1/600)



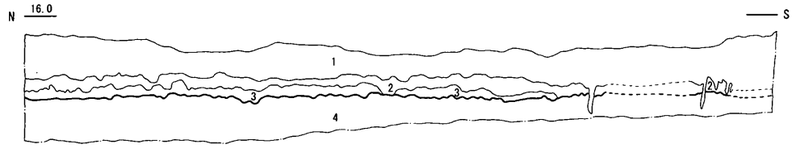
Ⅰ区

1　造成土
2　耕作土
3　暗灰色シルト（グライ化）他の調査区の灰白色 Mn 沈着シルト（旧耕作土）がグライ化
4　黄茶色 Mn 沈着粘土
5　暗緑灰黄色シルト混粘質土（グライ化著しい）灰色粘質土ブロックが混じる（中世以降の迫根面ベース）
6　淡緑黄褐色粘質土（迫根面ベース）
7　青黄褐色粘質土（グライ化）（迫根面ベース）
8　黄灰色シルト混粘質土（やや灰味）ややしまり悪い（SD1001・SD1002）
9　灰オリーブ色シルト混粘質土（SD1001・SD1002）
10　灰黄色粘質土（SD1001・SD1002）
10'　灰黄色粘質土（やや灰味）（SD1001・SD1002）
11　暗黄褐色粘質土（やや灰味）しまり良い（SD1001・SD1002）
12　暗緑灰色シルト混粘質土　ややしまり悪い（SD1001・SD1002）
13　暗赤灰色粘質土（SD1001・SD1002）
14　黄褐色粘質土（やや灰味）



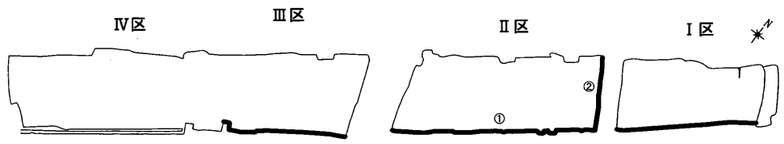
Ⅱ区①

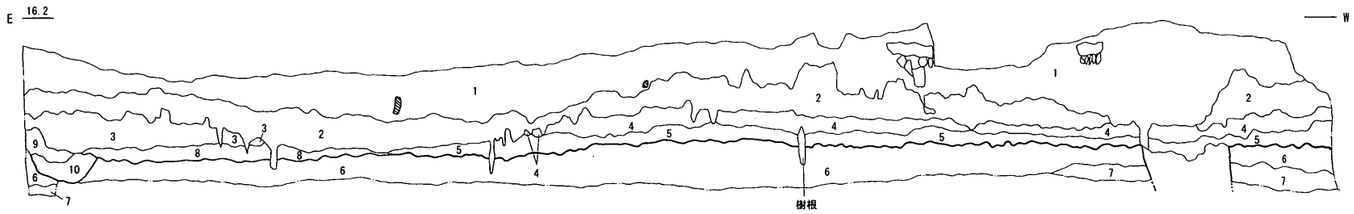
1　耕作土
2　灰白色 Mn 沈着シルト　近世遺物出土（旧耕作土）
3　赤褐色 Mn 沈着粘土
4　黄褐色粘質土（迫根面ベース土）
5　明黄褐色粘土　少量の微砂含む
6　黒色粘質土（灰味強）（SD2001）
7　暗灰褐色粘質土（SD2001）
8　黒褐色粘質土（やや灰味）（SD2001）
9　黒褐色粘土（SD2001）
10　茶褐色粘質土　暗灰色砂を含む（SD2001）
11　暗灰色砂（SD2001）
12　灰褐色粘質土（SD2002）
13　灰褐色粘質土　ごく少量の地山ブロック含む（SP2037）
14　灰褐色粘質土　多量の地山ブロック含む（SP2037・SP2057）
15　灰褐色粘質土　少量の地山ブロック含む（SP2055）
16　灰褐色粘質土　地山ブロック　淡灰色粘質土ブロック含む（SP2055）
17　灰褐色粘質土　淡灰色粘質土ブロック含む（SP2055）
18　黄褐色粘質土　灰褐色粘質土ブロック　淡灰色粘質土ブロック含む（SP2037）
19　黄褐色粘質土　少量の灰褐色粘質土ブロック含む（SP2037）



Ⅱ区②

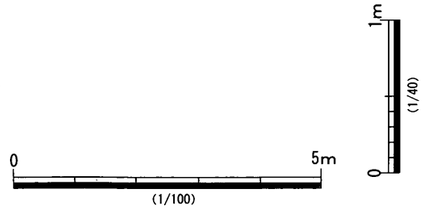
1　耕作土
2　茶灰色 Mn 沈着粘質土（床土）
3　灰白色 Mn 沈着シルト　近世の陶磁片出土（旧耕作土）
4　黄褐色粘質土（迫根面ベース）



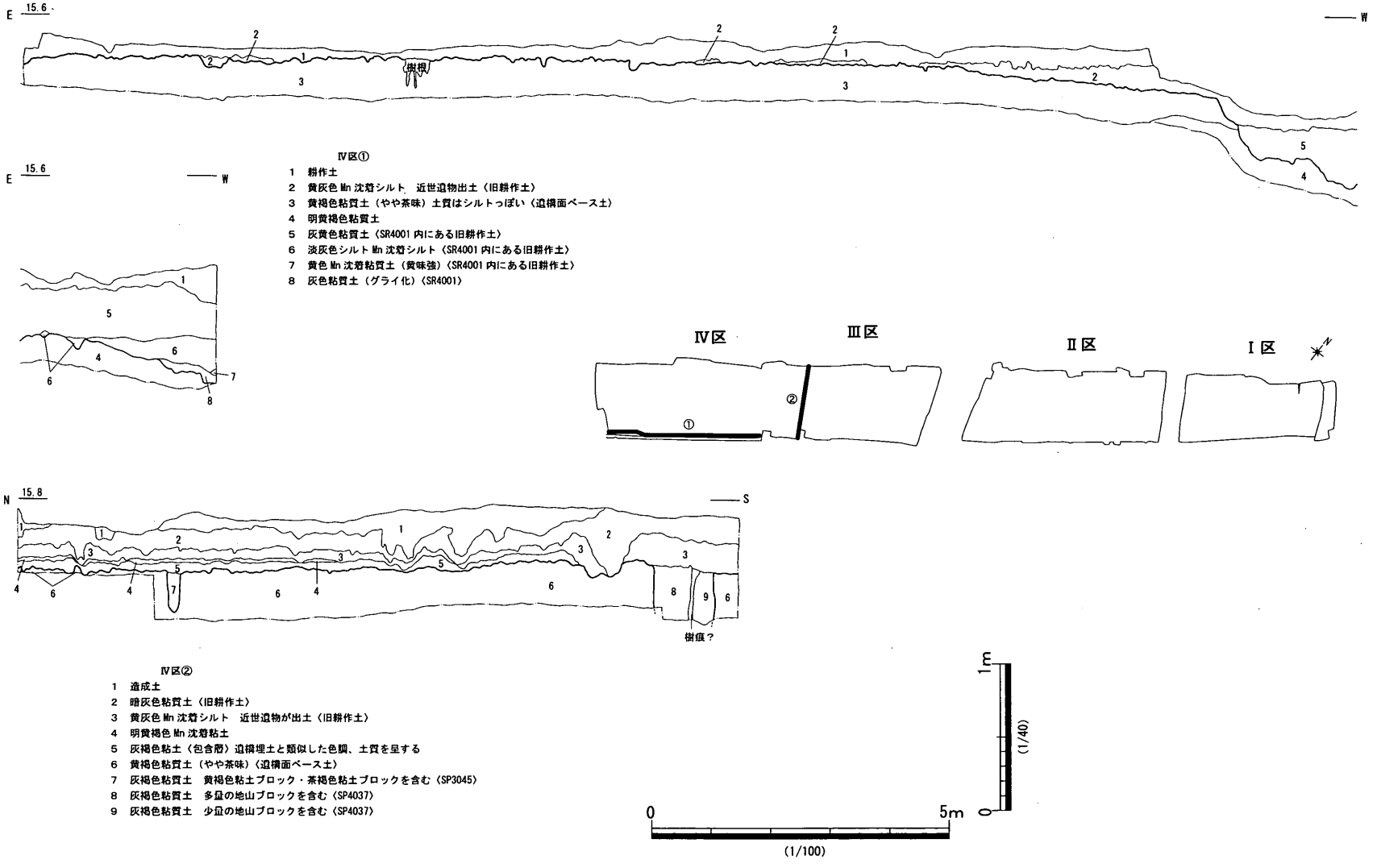


Ⅲ区

1　造成土
2　暗灰色粘質土（旧耕作土）
3　茶灰色シルト（旧耕作土）
4　茶灰色 Mn 沈着粘質土（床土）
5　黄灰色 Mn 沈着シルト　近世遺物出土（旧耕作土）
6　黄褐色粘質土（やや灰味）　土質はシルトっぽい（迫根面ベース土）
7　黄褐色粘質土（やや黒味）
8　暗灰白色シルト（黄味強）（SD3005）
9　灰色 Mn 沈着シルト（黄味強）（SD3001）
10　褐灰色 Mn 沈着シルト（黄味強）（SD3001）



第７図　Ⅰ～Ⅲ区土層図（縦 1/40・横 1/100）



IV区①

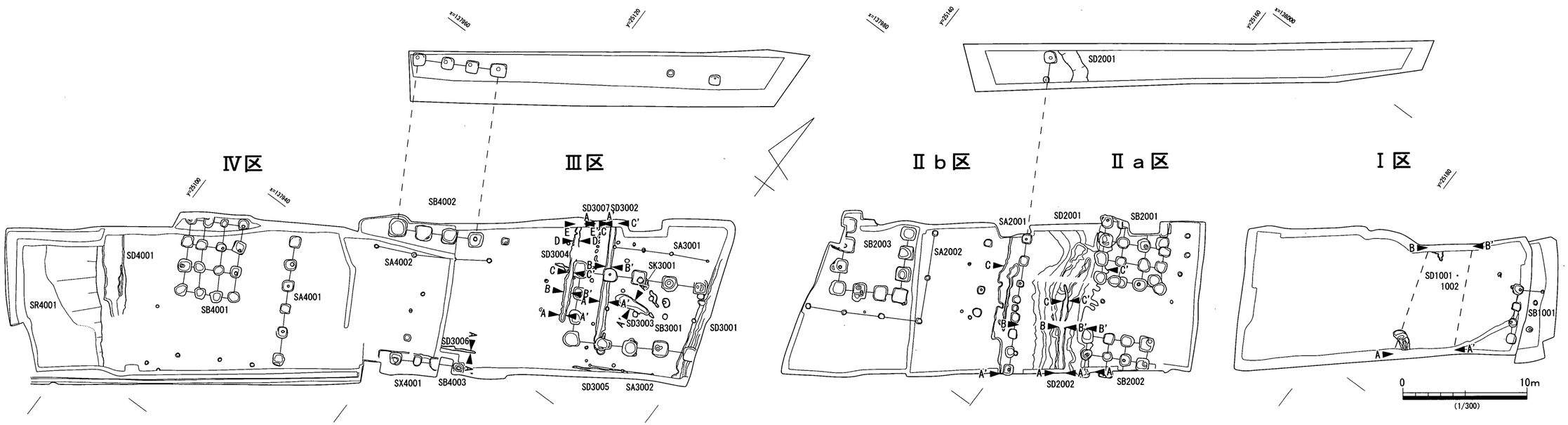
1　耕作土
2　黄灰色 Mn 沈着シルト　近世遺物出土（旧耕作土）
3　黄褐色粘質土（やや茶味）土質はシルトっぽい（遺構面ベース土）
4　明黄褐色粘質土
5　灰黄色粘質土〈SR4001 内にある旧耕作土〉
6　淡灰色シルト Mn 沈着シルト〈SR4001 内にある旧耕作土〉
7　黄色 Mn 沈着粘質土（黄味強）〈SR4001 内にある旧耕作土〉
8　灰色粘質土（グライ化）〈SR4001〉

IV区②

1　造成土
2　暗灰色粘質土〈旧耕作土〉
3　黄灰色 Mn 沈着シルト　近世遺物が出土〈旧耕作土〉
4　明黄褐色 Mn 沈着粘土
5　灰褐色粘土〈包含層〉遺構埋土と類似した色調、土質を呈する
6　黄褐色粘質土（やや茶味）〈遺構面ベース土〉
7　灰褐色粘質土　黄褐色粘土ブロック・茶褐色粘土ブロックを含む〈SP3045〉
8　灰褐色粘質土　多量の地山ブロックを含む〈SP4037〉
9　灰褐色粘質土　少量の地山ブロックを含む〈SP4037〉

第８図　IV区土層図（縦 1/40・横 1/100）

土直下で遺構面ベース土となる。ただ、Ⅳ区東壁では北側を中心に包含層が確認できるため、東端部については遺構面がほとんど削平を被っていないと見られる。



第9図　遺構配置図 (1/300)

第３節　遺構と遺物

〈調査の概要〉

本遺跡においては古代の官衙跡を構成すると見られる大型建物群・柵列群を中心に弥生時代の土坑、溝状遺構や中近世の溝状遺構などを検出した。古代の遺構には大型の掘立柱建物跡８棟やこれらに対する区画施設である大型柵列跡２基などがある。これらは建物跡１棟（Ⅰ区 SB1001）を除き、推定条里坪界線を基準線として東西方向へ左右対称を意識した配置に並ぶ。対称の関係にあるのは基準線から建物跡、柵列跡への距離だけでなく、建物跡の種類や規模についてもほぼ対応する。そして柵列跡の内部では床束建物（Ⅲ区 SB3001）を中心とする中核建物群、外部では総柱建物からなる倉庫群があり、位置によって機能の異なる建物が構築されている。また柵列跡による区画範囲は東西約 60 ｍを測り、郡衙政庁での区画規模と同等以上である。

出土遺物は 28 リットル入りコンテナで４箱あり、多くは弥生土器片、サヌカイトである。古代の遺物は少量であるが、須恵器、土師器の供膳具（杯）、煮沸具（甕）、貯蔵具（壺）、移動式竈が見られる。ただ、官衙に伴う特殊な遺物（硯、墨書土器、木製祭祀具、木簡、帯金具など）の出土はない。

規格的な配置をとる古代の大型建物群・柵列群の時期については SA2001・SB4002・SP2049 より出土した土器から判断すれば８世紀初頭ごろと見られる。だがこれに SR4001 出土遺物を加えて考えると８世紀初頭～前葉に位置づけられる。（時期比定に関する詳細はⅣ区 SR4001 の報告で後述するが、Ⅳ区 SR4001 は近世段階に耕地化され、耕作土内より古代の遺物が出土。）出土土器から見たこの存続期間は遺構の状況（大型建物群・柵列群のきわめて計画的な配置、遺構の切り合いや建物跡を構成する柱穴跡の建て替え痕跡の乏しさ、遺構埋土の高い共通性など）から推定される遺構の短期性と整合的である。

＜Ⅰ区の調査成果＞

(1) ８世紀代の遺構・遺物

掘立柱建物跡

SB1001（第 10 図）

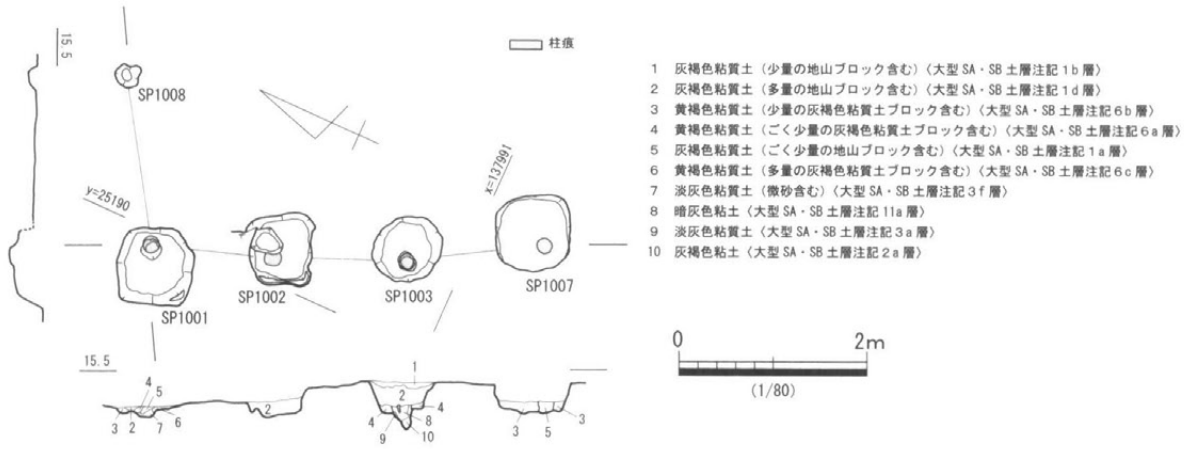
調査区東端部で検出した側柱建物である。SA2001・4001 で構成される区画施設の外部に位置するだけでなく、同時期の建物群からやや外れた位置にあり、南側と東側は調査区外に延びる。東側の柱穴跡（SP1008）は径 24cm、深さ 10cm と他の柱穴跡よりかなり小さいため SB1001 の構成柱穴でない可能性もある。だが、①西側柱穴列の北端にある SP1001 の北側は精査を繰り返して柱穴跡が存在しないことを確認したため、西側柱穴列は柵列跡ではなく建物跡を構成すると見られる。② SP1008 は西側柱穴列と直交する位置にあり、同様に灰褐色粘質土を埋土とする。①、②より同じ建物跡であると考える。SP1008 の規模については西側の柱穴群も掘り方規模の割りに浅く、周囲は後世の削平を受けたと想定されるため、柱痕だけが残存したと考える。

SB1001 の規模は東西１間以上×南北３間以上（1.8 ｍ以上× 4.2 ｍ以上）である。主軸方向はＮ－27°－Ｗである。西側の柱穴群は径 0.68 ～ 0.8 ｍ、深さ 0.2 ～ 0.52 ｍを測る。柱痕径は 0.16 ～ 0.2 ｍを測り、柱間距離は 1.32 ｍ～ 1.44 ｍと揃う。ただ、柱通りはやや不揃いである。埋土はグライ化しているが、他の大型建物群・柵列群のそれと共通する。出土遺物には SP1001 から弥生土器片とサヌカイトチップがごく少量あり、SP1003 からは柱材の小片がある。この柱材については樹種同定によりス

ギまたはヒノキ科との鑑定結果を得た。

建物跡の時期は規格的な配置をとる８世紀代の大型建物群・柵列群から位置的にやや離れるものの、建物跡の規模、主軸方向および柱穴跡の形状、規模、埋土などにおいて類似性が高いため、同じく８世紀初頭～前葉と考える。

(2) 中世以降の遺構・遺物



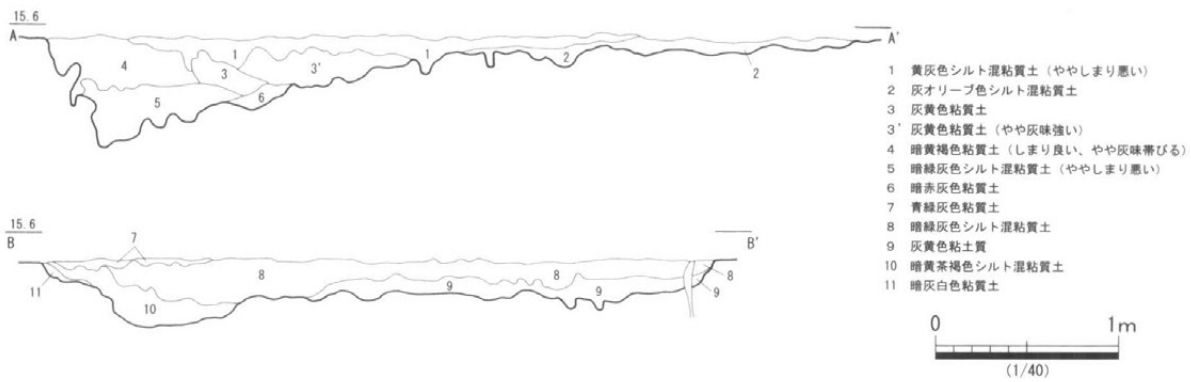
第10図　SB1001 平･断面図 (1/80)

溝状遺構

SD1001・1002（第11図）

調査区東部で検出した溝状遺構である。調査時には異なる名称をつけたが、同一の溝状遺構であると考えられ、南北は調査区外に延びる。規模は最大幅4.4ｍ、深さ0.1～0.6ｍを測る。断面形は浅い皿状を呈し、底部は部分的に窪む。出土遺物にはごく少量のサヌカイトチップがある。

この溝状遺構の掘り込み面ベース土（以下、この溝状遺構の報告中では「ベース土」と記す）はグライ化した灰白色系粘質土である。これは弥生時代～８世紀代の遺構面のベース土（黄褐色粘質土）がくぼんだ箇所に堆積するためその上面レベルは周辺の当該期の遺構面レベルとほぼ同じである。こうした状況から調査時にはベース土が８世紀代の整地土であり、SD1001・1002が大型建物群に伴う区画溝である可能性も考えた。だがベース土の土質はシルト混じりでしまりが悪く、中世以降に堆積したと見られる灰白色粘質土ブロックを含む。またSD1001・1002の埋土は概ね灰色系粘質土であるが、これは８世紀代の遺構埋土より色調が薄い灰色であり、明確に異なる。よってこの可能性は否定される。ベース土の堆積時期および溝状遺構の掘削時期は色調や土質より中世以降と考える。



第11図　SD1001・1002 断面図 (1/40)

＜Ⅱ区の調査成果＞

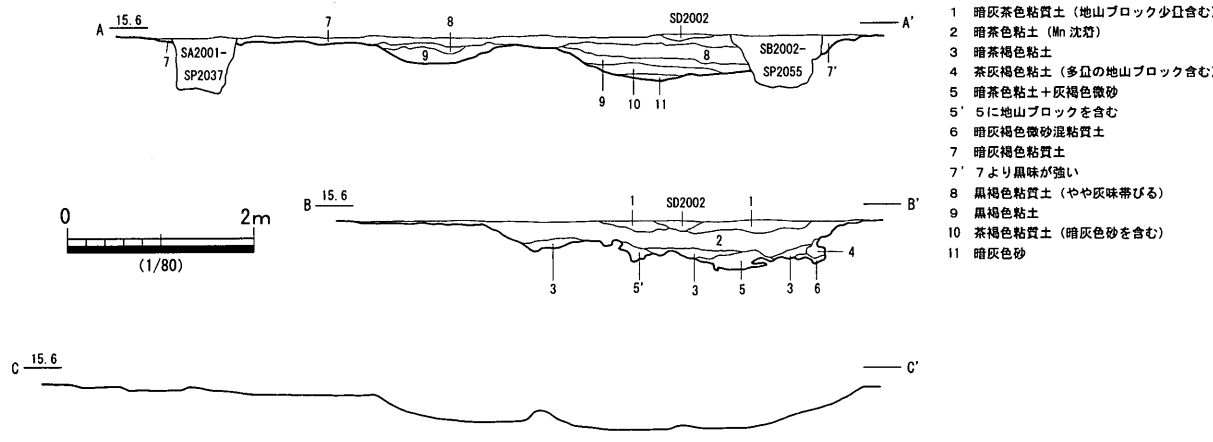
(1) 弥生時代の遺構・遺物

溝状遺構

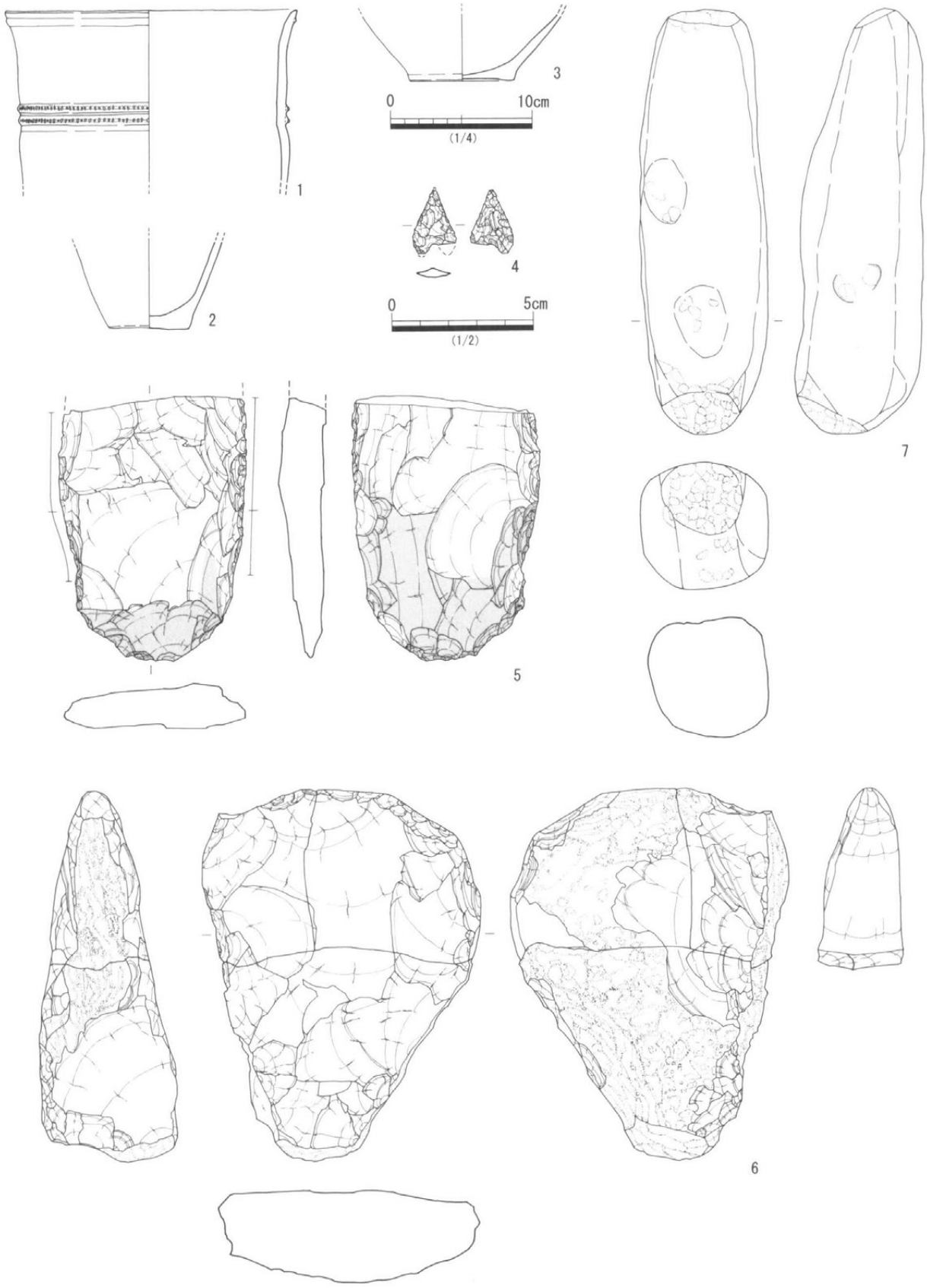
SD2001（第 12 ～ 14 図）

調査区東部で検出した溝状遺構である。遺構の南北両端は調査区外に延びる。底面のレベルは北へ向かってゆるやかに下っており、周辺地形からも北流すると考えられる。規模は幅 7 ～ 8 m、深さは最深部で約 0.5 mを測る。主軸方向はN － 34° － W である。埋土は 3 層に大別できる。上層は暗灰色系粘土であり、1 層が該当する。中層は黒褐色系粘土であり、2・3・7・7'・8・9 層である。下層は微砂をラミナ状に含む茶褐色粘質土ないし暗灰色砂である。5・5'・6・10・11 層が該当する。下層には砂を含むため流水状況にあったこと、中・上層は土質と色調より比較的穏やかな堆積環境にあったことが窺える。断面形は大きくは西側ではごく浅く落ちこみ、東側で大きく下位に抉れる。ただし、後者は細かく見ると中央やや西寄りが隆起している。平面的にもこの隆起は連続しており、下位では平行する 2 本の溝状を呈する。とはいえ、どちらにも中層（3・9 層）が堆積するため一定期間は併存していたことがわかる。

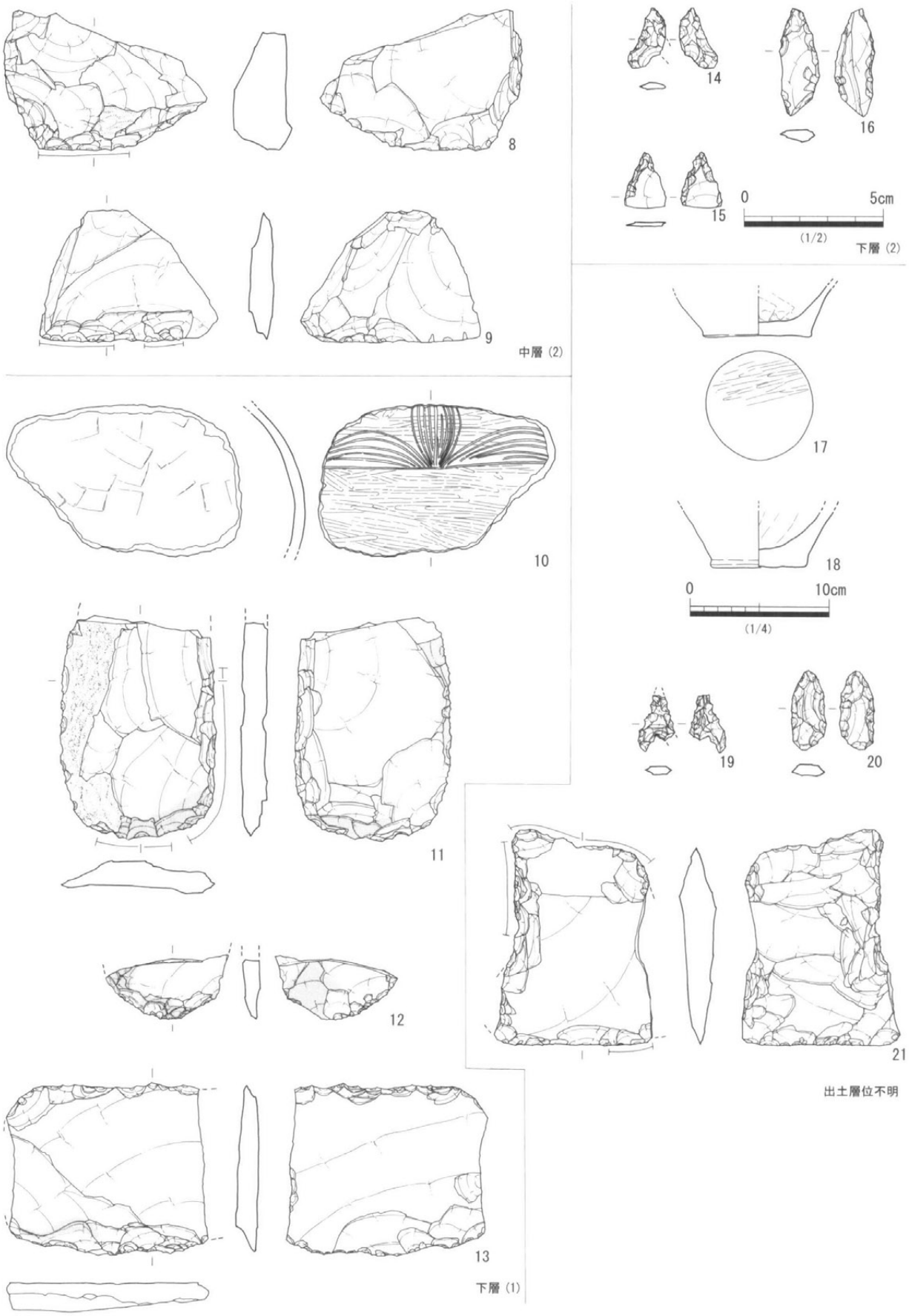
出土遺物には弥生土器、石器があり、ほとんどが中・下層から出土した。1 ～ 9 は中層からの出土遺物である。1 は縄文系の甕である。直立気味の口縁部直下に 1 条の貼り付け突帯、体部に 2 条の刻目貼り付け突帯を加える。2・3 は底部である。摩滅、剥落が著しいが外面にはハケメ調整が見られる。4 は凹基式の石鏃である。両面とも側縁部に比較的丁寧な調整剥離を施す。5 は打製石斧である。使用により両面とも刃部は摩滅しているが、先端付近のほうが摩滅度は高い。6 は石核である。右図側は全体が自然面であるが、左図側では繰り返し剥片剥離が行われている。またこれは 3 点の石器の接合資料であるが、接合した面は剥片の剥離面でなく、折れ面と考えられる。なお、これらの出土位置は近接しており径 30cm の円内に収まる。7 は砂岩製の叩き石である。大きく 4 ヶ所に敲打痕が見られるが、左側図の下端部が最も著しく敲打されている。SD2001 からは後述するとおり多量の石器製作に伴う遺物がまとまって出土しているため石器製作に使用するハンマーと考えられる。8・9 は下側に潰れが見られる剥片であり、楔形石器と考えられる。10 ～ 16 は下層からの出土遺物である。10 は壺の体部である。外面は横方向へ丁寧なヘラ磨きを施した後、木の葉文をヘラ描きする。11・12 は打製石斧である。どちらも刃部の両面が摩滅している。また 11 では右図側の右側縁部も摩滅しているが、左側縁部の対称的



第 12 図　SD2001 断面図 (1/80)



第 13 図　SD2001 出土遺物（中層）(1/4・1/2)



第 14 図　SD2001 出土遺物（中・下層）(1/4・1/2)

な位置にはつぶれが見られる。摩滅を使用痕、つぶれを紐掛けのために施されたと解釈すればこの位置に柄が装着されたと考えられる。13は打製石包丁である。両端部を欠損し、刃部の作りも粗いが左図側の刃部上位では使用に伴う摩滅が見られる。また背つぶしを行っている。14は凹基式の石鏃である。一方の脚部を欠損するが、4と同様にやや幅広い形状である。15・16は石鏃未製品である。15は先端部が完成しているが、特に基部付近は加工度が低い。16は左図側で先端部の形成を意図した調整剥離が観察できるため石鏃としたが、形状が不整形である。あるいは石錐の未製品とすべきかもしれない。17～21は出土層位不明の遺物である。17・18は底部である。どちらも内面を板ナデして仕上げる。19・20は石鏃である。19は全体的に粗い調整を施す。20は先端部を欠損するが、調整剥離の大きさが揃い丁寧に作られている。21は打製石包丁である。左側図の左側にごく浅い抉りがあり、縁辺部がつぶされている。刃部は身の中央部にあり比較的丁寧に形成されている。

SD2001からの遺物の出土量は28リットル入りコンテナ1箱と比較的多い。出土土器より溝状遺構の時期は弥生前期後半である。また石器には石鏃未製品、敲き石、楔形石器、スポール、フレイク、チップなどを含む。このうちチップは南側の下層でやや集中して出土した。こうした石器組成および出土状況より溝状遺構の付近で石器製作が行われたと考えられる。

(2) 8世紀代の遺構・遺物

柵列跡

SA2001（第15図）

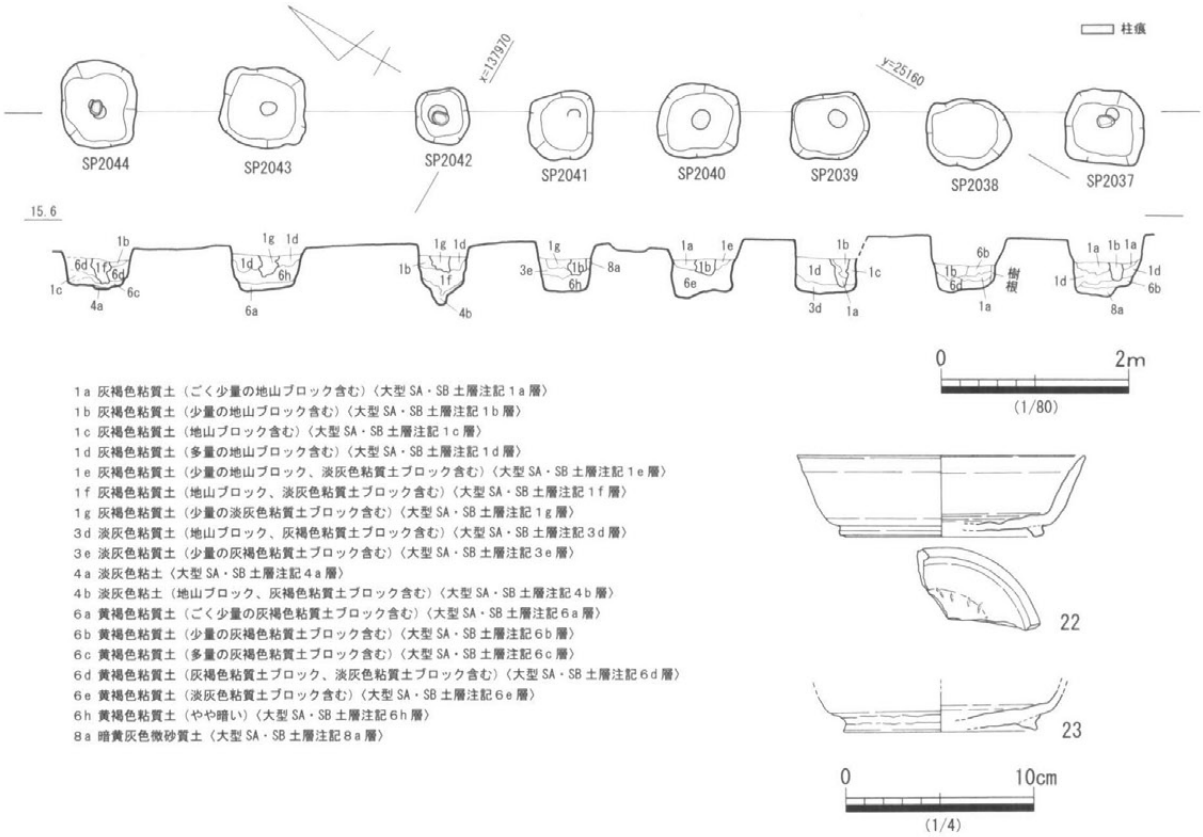
調査区の中央部で検出した柵列跡である。SA4001とセットで大型建物群の区画施設を構成する。規模は7間以上（10.08 m以上）であり、調査区外に延びる。主軸方向はN－28°－Wである。南側と北側では柱穴径および柱間距離に差異がある。具体的には南側6穴では径が0.68 m～0.76 m、柱間距離が1.36 m～1.44 mであるのに対し、北側2穴では径0.84 mと0.92 m、柱間距離が1.8 mと大きい。ただ深さは0.56～0.72と大差ない。また柱痕径は0.16～0.2 mを測り、柱通りはよい。

SP2037は断面図で観察できるとおり、埋土途中と底面で柱痕を検出した。だが、これらの平面的な位置はややずれる。このため底面に達した柱から、上位に柱痕を残す柱へと建て替えが行われたと考えられる。またSP2043・2044では柱痕検出面では円形の柱痕が下位では方形となった（図版4）。これは使用された柱材の下部を角材状に加工していたことを反映すると考える。こうした状況が調査の初期段階で判明したためSA2001のその他の柱穴跡はもとより他の大型建物群・柵列群についても同様な形態を示すものがないか留意していたが、この2基の確認に留まった。

出土遺物には須恵器片、弥生土器小片が少量ある。このうち図化に耐える遺物としてはSP2038より出土した須恵器杯身2点（22・23）がある。22は弱く外傾する直線的な体部をもち、腰部はやや角ばる。底端部には断面方形の小さい高台を張りつけるが、高台端部の接地面は内側である。23は腰部が強く屈曲し、断面三角形の低い高台を雑に貼り付ける。高台の位置はやや内寄りである。どちらも8世紀初頭に位置づけられる。

SA2001の構築、廃絶時期についてはSP2038で柱痕を確認できなかったため出土遺物からは判断できない。だが、大型建物群・柵列群の時期について遺跡全体で見ると本節の冒頭で述べたとおり8世紀初頭～前葉に位置づけられるため、同じくこの時期に属すると考えられる。

なお、平成19年度香川県教育委員会の立会調査区ではSA2001の続きと見られる柱穴跡2基を検出し



第15図　SA2001平・断面図（1/80）・出土遺物（1/4）

た。これらは径が南側の柱穴跡で0.45 m、北側の柱穴跡で0.93 m、柱痕径がどちらも約0.2 mを測る。柱間距離は1.8 mである。埋土はSA2001を含めた大型建物群・柵列群と類似する。出土遺物はない。SA2001構成柱穴跡と比較すると南側柱穴跡がやや小振りであるもののと基本的な属性は類似する。

SA2002（第16図）

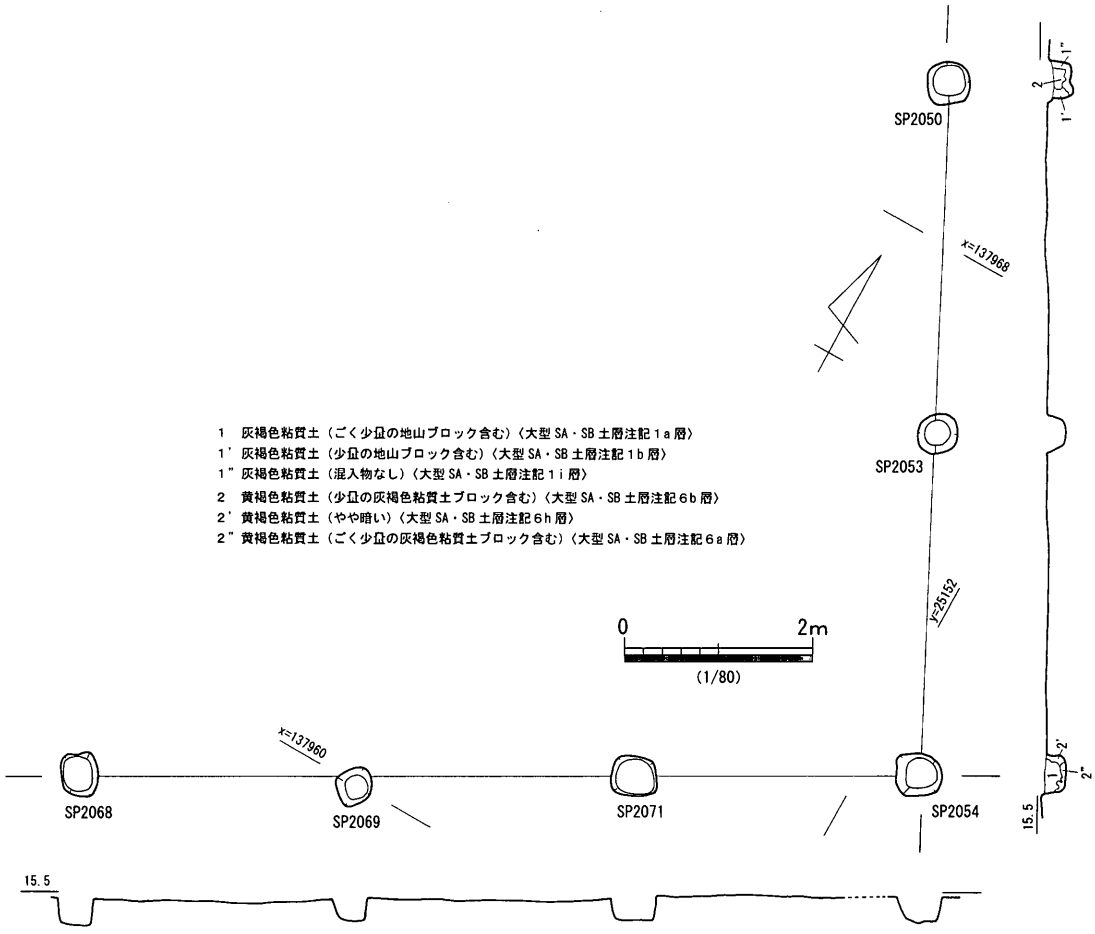
調査区の西側で検出した柵列跡である。SB2003の南、東側を約1.2～1.5 mの間隔を空けてL字形に囲うように位置する。このためSB2003に伴い、調査区外に延びると考えられる。規模は東西3間以上、南北2間以上である。主軸方向はN－30°－Wに直交する。柱穴跡は平面形が隅丸方形を呈し、径は0.4～0.48 m、深さ0.24～0.32 mを測る。埋土は2穴しか土層図を掲載していないが、いずれも灰褐色粘質土、黄褐色粘質土（地山に由来する）が見られる。これはSB2003などの大型建物群・柵列群でも主要な埋土である。出土遺物には弥生土器小片、サヌカイトがごく少量ある。

柵列跡の時期は8世紀初頭～前葉の大型建物群を構成するSB2003に伴うと考えられること、埋土もこれと共通することから8世紀初頭～前葉と考えられる。

掘立柱建物跡

SB2001（第17図）

調査区北東部で検出したSD2001を切る総柱建物であり、規格的な配置をとる大型建物群の1つである。SA2001・4001で構成される区画施設の外部に位置し、北部は調査区外に延びる。SB2002はこの建物跡の南側に位置し、南北方向の柱筋を揃える。規模は梁間3間×桁行3間以上（4.8 m×4.8 m以上。床面積23.04 ㎡以上。）である。主軸方向はN－27°－Wである。柱穴跡の規模は0.8～1.24 m、深



第16図　SA2002平・断面図（1/80）

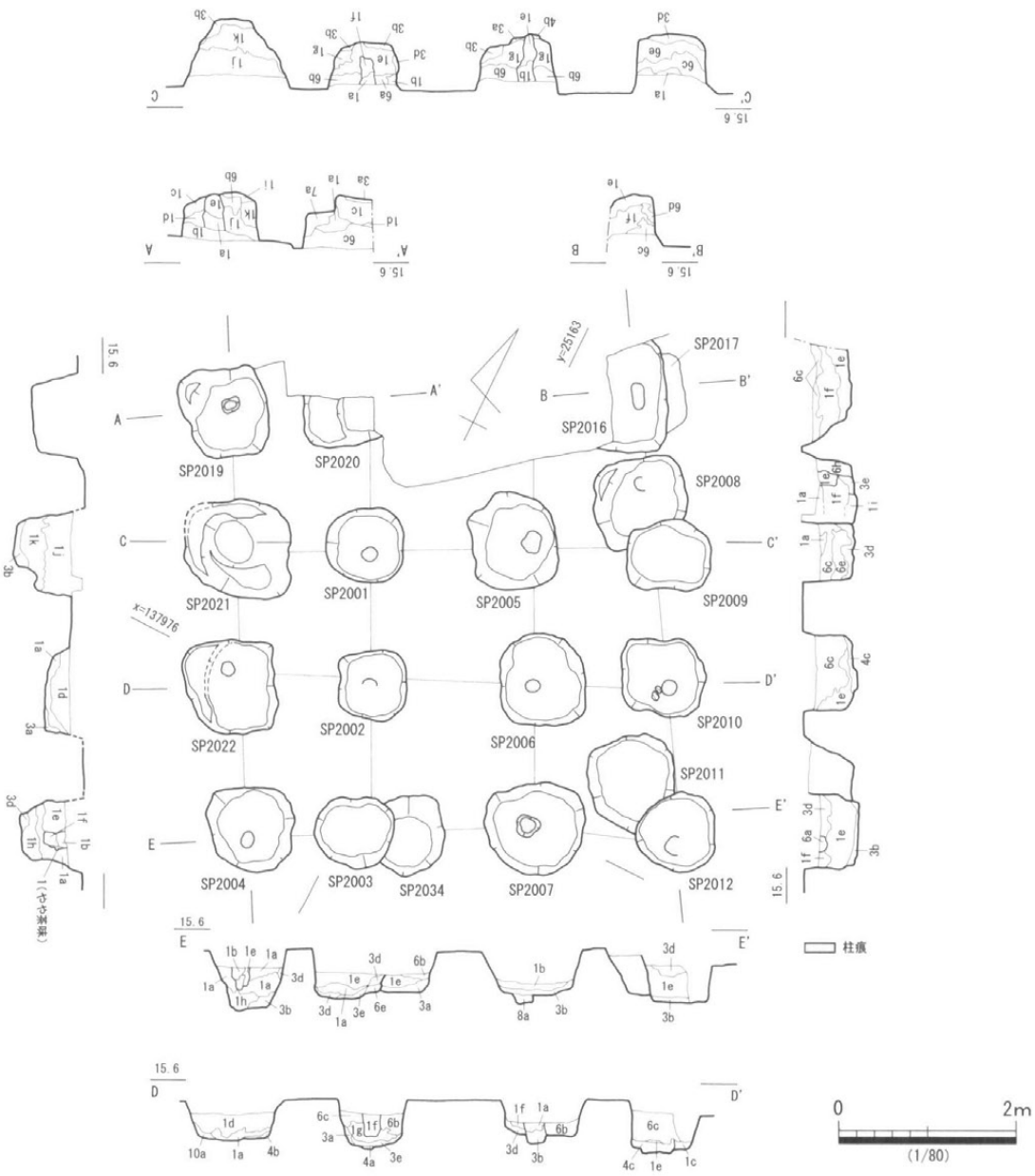
さ0.48～0.8mを測る。柱痕径は0.16～0.2mを測り、柱間距離は梁間が1.56～1.8m、桁行が1.48～1.92mとばらつきがある。また、柱通りもやや不揃いである。なお4基の柱穴跡（SP2034・2011・2008・2017）については隣接する柱穴跡（SP2003・2012・2009・2016）に切られており、建て替えが行われたと考えられる。他の建物跡、柵列跡ではほとんど建て替えが見られないためやや長期に渡って使用された可能性がある。出土遺物には弥生土器小片、サヌカイトがごく少量ある。

建物跡の時期は規格的な配置をとる大型建物群の1つであるため本節の冒頭で述べたとおり、8世紀初頭～前葉に位置づけられる。

SB2002（第18図）

調査区南東部で検出したSD2001を切る総柱建物であり、規格的な配置をとる大型建物群の1つである。SA2001・4001で構成される区画施設の外部に位置し、南部は調査区外に延びる。SB2001はこの建物跡の北側に位置し、南北方向の柱筋を揃える。規模は梁間3間×桁行2間以上(4.64m×3.28m以上。床面積15.2㎡以上。)である。主軸方向はN－28°－Wである。柱穴跡の規模は0.72～1.16m、深さ0.3～0.88mを測る。柱痕径は0.15～0.2mを測る。柱間距離は梁間の中央1間が1.24m、東西両端の1間ずつが1.6～1.72mを測り、長短がある。また桁行は1.56～1.76mである。柱通りはやや悪い。なおSP2023の平・断面の観察から6a・1a・1d層が柱抜き取り痕の埋土である可能性がある。出土遺物には須恵器甕の体部小片、弥生土器小片、サヌカイトがごく少量ある。

建物跡の時期は規格的な配置をとる大型建物群の1つであるため本節の冒頭で述べたとおり、8世紀



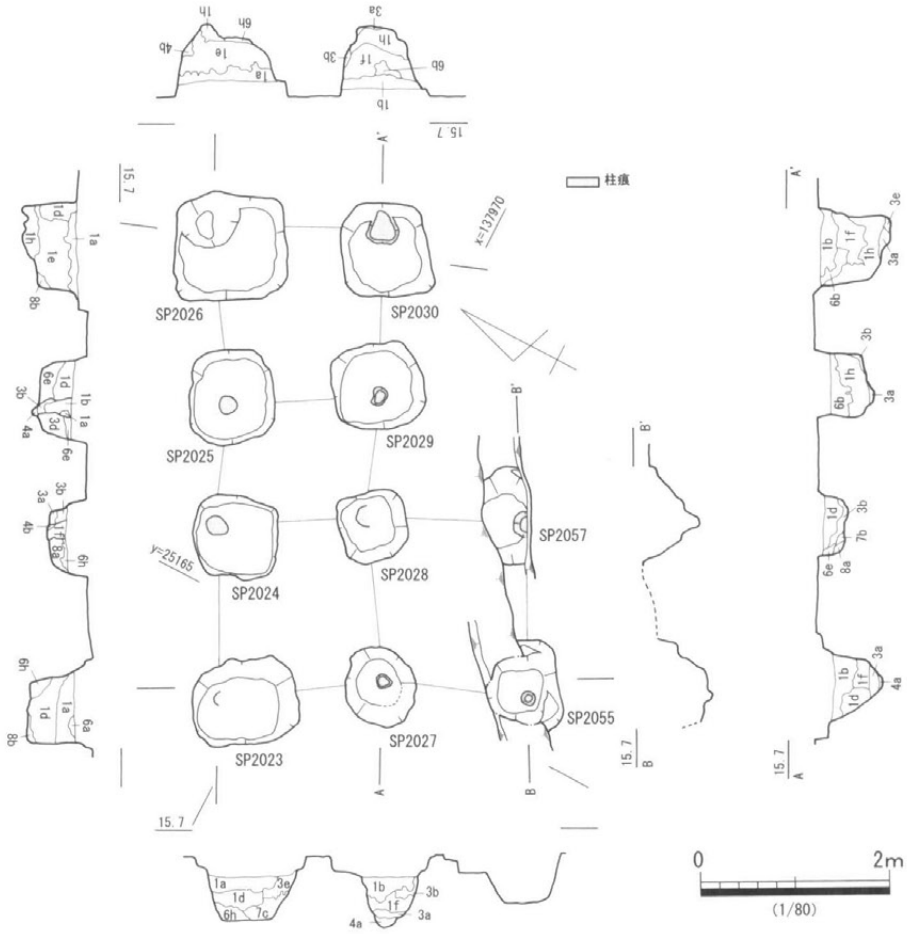
1a　灰褐色粘質土（ごく少量の地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1a層〉
1b　灰褐色粘質土（少量の地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1b層〉
1c　灰褐色粘質土（地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1c層〉
1d　灰褐色粘質土（多量の地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1d層〉
1e　灰褐色粘質土（少量の地山ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1e層〉
1f　灰褐色粘質土（地山ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1f層〉
1g　灰褐色粘質土（少量の淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1g層〉
1h　灰褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1h層〉
1i　灰褐色粘質土（混入物なし）〈大型SA・SB土層注記1i層〉
1j　灰褐色粘質土（地山ブロック、暗褐色粘土ブロック含む）SD2001に由来〈大型SA・SB土層注記1j層〉
1k　灰褐色粘質土（暗褐色粘土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1k層〉
3a　淡灰色粘質土〈大型SA・SB土層注記3a層〉
3b　淡灰色粘質土（地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記3b層〉
3d　淡灰色粘質土（地山ブロック、灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記3d層〉
3e　淡灰色粘質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記3e層〉
4a　淡灰色粘土〈大型SA・SB土層注記4a層〉
4b　淡灰色粘土（地山ブロック、灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記4b層〉
4c　淡灰色粘土（灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記4c層〉
6a　黄褐色粘質土（ごく少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6a層〉
6b　黄褐色粘質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6b層〉
6c　黄褐色粘質土（多量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6c層〉
6d　黄褐色粘質土（灰褐色粘質土ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6d層〉
6e　黄褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6e層〉
6h　黄褐色粘質土（やや暗い）〈大型SA・SB土層注記6h層〉
8a　暗黄灰色微砂質土〈大型SA・SB土層注記8a層〉
10a　淡黄褐色粘土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記10a層〉

第17図　SB2001平・断面図（1/80）

初頭～前葉に位置づけられる。

SB2003（第19図）

調査区西部で検出した側柱建物であり、規格的な配置をとる大型建物群の1つである。総柱建物や床束建物になる可能性も考慮し、建物内部は精査を繰り返したが、柱穴跡は確認されなかった。SA2001・4001で構成される区画施設の内部に位置する。SB4002とは大型建物群・柵列群構築時の推定基準線に

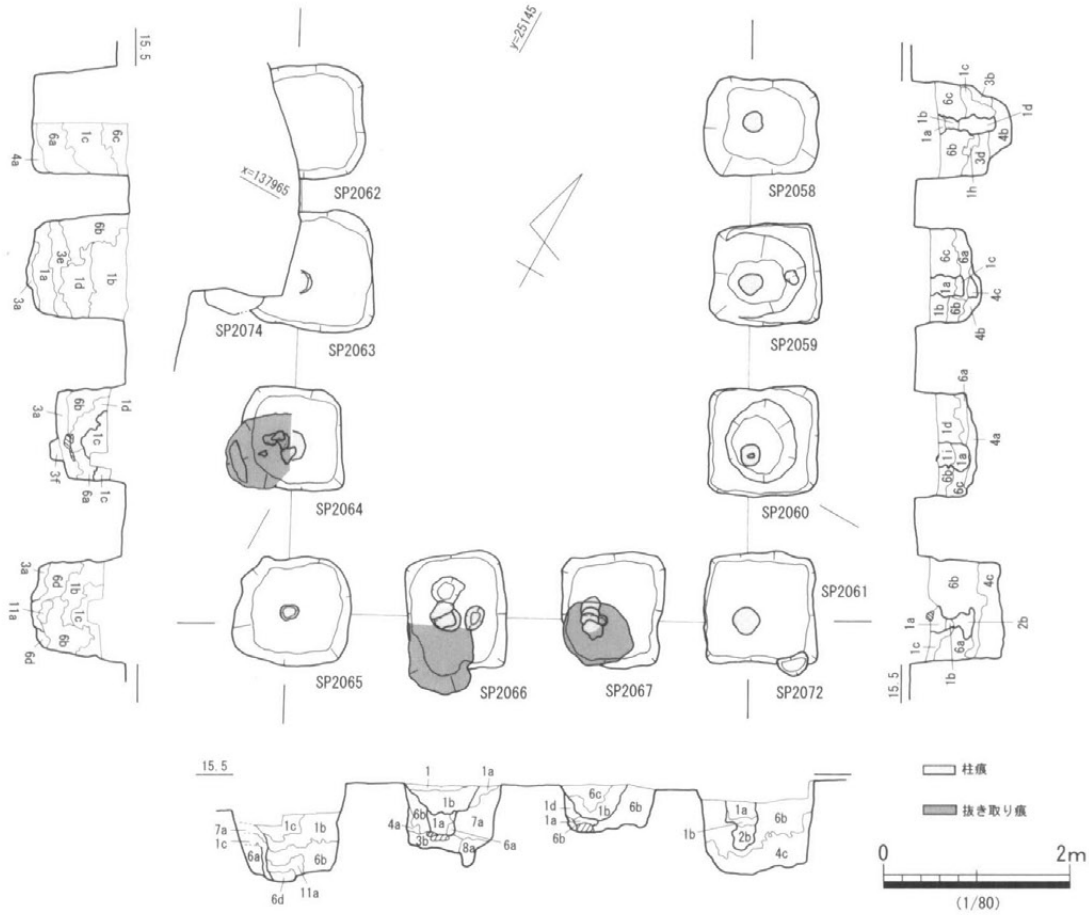


1a 灰褐色粘質土（ごく少量の地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1a 層〉
1b 灰褐色粘質土（少量の地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1b 層〉
1d 灰褐色粘質土（多量の地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1d 層〉
1e 灰褐色粘質土（少量の地山ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1e 層〉
1f 灰褐色粘質土（地山ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1f 層〉
1h 灰褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1h 層〉
3a 淡灰色粘質土〈大型 SA・SB 土層注記 3a 層〉
3b 淡灰色粘質土（地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 3b 層〉
3d 淡灰色粘質土（地山ブロック、灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 3d 層〉
3e 淡灰色粘質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 3e 層〉
4a 淡灰色粘土〈大型 SA・SB 土層注記 4a 層〉
4b 淡灰色粘土（地山ブロック、灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 4b 層〉
6b 黄褐色粘質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 6b 層〉
6e 黄褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 6e 層〉
6h 黄褐色粘質土（やや暗い）〈大型 SA・SB 土層注記 6h 層〉
7b 黄褐色粘土（やや暗い）〈大型 SA・SB 土層注記 7b 層〉
7c 黄褐色粘土（ごく少量の灰褐色粘質土ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 7c 層〉
8a 暗黄灰色微砂質土〈大型 SA・SB 土層注記 8a 層〉
8b 暗黄灰色微砂質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 8b 層〉

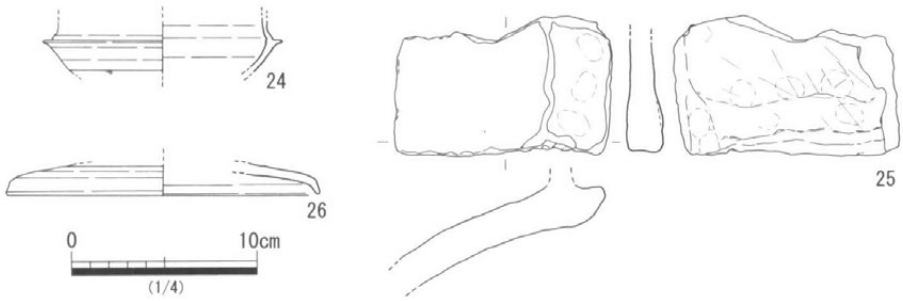
第 18 図　SB2002 平・断面図 (1/80)

対して左右対称の位置にあるが、この建物跡とは相互の南側の梁間柱列において柱筋を揃える。建物跡の北部は調査区外に延び、南西隅にある SP2065 は近世土坑に切られる。規模は梁間 3 間×桁行 3 間以上（4.92 m× 5.28 m以上。床面積 25.97 ㎡以上。）である。主軸方向は N － 28° － W である。柱穴跡の規模は 1.08 ～ 1.24 m、深さ 0.56 ～ 1.08 mを測る。柱痕径は 0.24 ～ 0.32 mを測り、柱間距離は梁間が 1.6 ～ 1.68 m、桁行が 1.72 ～ 1.84 mとほぼ揃う。また、柱通りもよく、整然としている。既述のとおり SA2002 を伴うと考えられる。

柱穴跡のうち 2 基（SP2066・2067）では柱痕を 2 基ずつ確認した。前者の柱の設置状況は土層断面の観察より以下のように復元できる。①下位に設置していた柱の抜き取り痕に置き土（3b 層）を敷く。



1　灰褐色粘質土（やや黄味帯びる、少量の地山ブロック含む）
1a　灰褐色粘質土（ごく少量の地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1a 層〉
1b　灰褐色粘質土（少量の地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1b 層〉
1c　灰褐色粘質土（地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1c 層〉
1d　灰褐色粘質土（多量の地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1d 層〉
1h　灰褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1h 層〉
1i　灰褐色粘質土（混入物なし）〈大型 SA・SB 土層注記 1i 層〉
2b　灰褐色粘土（少量の地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 2b 層〉
3a　淡灰色粘質土〈大型 SA・SB 土層注記 3a 層〉
3b　淡灰色粘質土（地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 3b 層〉
3d　淡灰色粘質土（地山ブロック、灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 3d 層〉
3e　淡灰色粘質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 3e 層〉
3f　淡灰色粘質土（微砂含む）〈大型 SA・SB 土層注記 3f 層〉
4a　淡灰色粘土〈大型 SA・SB 土層注記 4a 層〉
4b　淡灰色粘土（地山ブロック、灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 4b 層〉
4c　淡灰色粘土（灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 4c 層〉
6a　黄褐色粘質土（ごく少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 6a 層〉
6b　黄褐色粘質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 6b 層〉
6c　黄褐色粘質土（多量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 6c 層〉
6d　黄褐色粘質土（灰褐色粘質土ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 6d 層〉
7a　黄褐色粘土（ごく少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 7a 層〉
8a　暗黄灰色微砂質土〈大型 SA・SB 土層注記 8a 層〉
11a　暗灰色粘土〈大型 SA・SB 土層注記 11a 層〉



〈SB2003〉
24…SP2058掘方、SP2059
25…SP2060柱痕

〈ピット〉
26…SP2049

第 19 図　SB2003 平・断面図 (1/80)・出土遺物・SP2049 出土遺物 (1/4)

②置き土の上部に根石（根石は他にSP2067でも見られる。）を据える。③根石の上に新しい柱を設置する。一方、後者では柱痕同士の切り合いが明瞭に確認できた。よってどちらも柱の建て替えを想定できる。またSP2064・2066・2067では柱抜き取り痕を検出した。埋土は柱穴埋土と酷似する。

出土遺物には須恵器杯身（24）、土師質移動式竈（25）などがある。24はSP2058掘り方とSP2059埋土で出土し、遺構間接合した。調整は底部外面で回転ヘラ削りを、それ以外では回転ナデを認める。時期は7世紀前半に位置づけられる。25はSP2060柱痕で出土した。部位は焚き口左側の下端部である。鍔はほとんど剥がれているが、基部がわずかに残存しており本来の位置が推定できる。内面は被熱により赤化しており、使用が窺える。

出土遺物の中には7世紀前半のものも見られるが、今回の発掘調査で当該期の遺物の出土はこの1点に留まり、その他の大型建物群・柵列群からの出土遺物は8世紀初頭ごろに属する。またこれらの構築に当たって基準線として使用されたと推定される条里型地割が丸亀平野において敷衍されるのは7世紀末～8世紀初頭とされる(※)。このためこの須恵器杯身（24）は混入したと考えられる。よって、建物の時期は他の規格的な配置をとる大型建物群と同様に8世紀初頭～前葉と考えられる。

（※）森下英治「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『（財）香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅴ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター（1997）

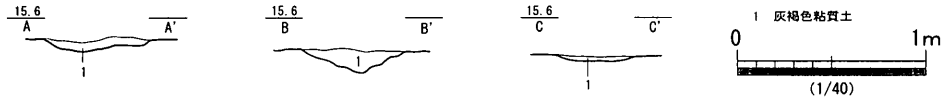
ピット出土遺物（第19図）

26はSP2049から出土した須恵器杯蓋である。器高が低く扁平な器形を呈する。口縁端部は下方に折り曲げ、細長く延びる。時期は8世紀初頭ごろに位置づけられる。

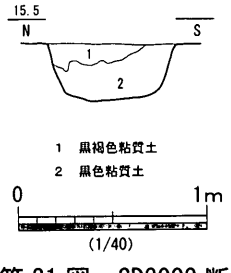
溝状遺構

SD2002（第20図）

調査区中央部で検出したSD2001を切る溝状遺構である。南部は調査区外に延びる。幅は概ね0.5～0.8m、深さ0.05～0.12mを測る。主軸方向はN－32°－Wである。埋土は灰褐色粘質土であり、大型建物群・柵列群でも見られる。また東側に位置するSB2002とは主軸を揃え、SD2002の中心とSB2002の西側柱穴列構成柱穴の柱痕との距離は約2.1mを測る。こうした状況よりSD2002はSB2002に伴う雨落ち溝と考えられる。出土遺物はない。溝状遺構の時期はSB2002に伴うと考えられるため8世紀初頭～前葉と考えられる。



第20図　SD2002断面図（1/40）



第21図　SD3003断面図（1/40）

＜Ⅲ区の調査成果＞

（1）弥生時代の遺構・遺物

溝状遺構

SD3003（第21図）

調査区の東側で検出した溝状遺構である。SB3001の束柱SP3017に切られる。幅は0.4～1m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形で、埋土は黒褐色系粘質土である。出土遺物にはサヌカイト剥片がごく少量ある。溝状遺構の時期は埋土より弥生時代に属すると考えられる。

(2) 8世紀代の遺構・遺物

柵列跡

SA3001（第22図）

調査区の北東部で検出した柵列跡である。主軸方向はN－30°－Wと直交し、SB3001と揃う。また個々の柱穴跡はSB3001の北側桁行構成柱穴の柱痕に対応する配置をとり、約2.5mと等間隔を空けて並ぶ。このためSB3001に伴い、調査区外に延びると考えられる。規模は3間以上である。柱穴跡の平面形は円形を呈し、径は0.2～0.36m、深さ0.15～0.2mを測る。埋土は灰褐色系粘質土である。これはSB3001などの大型建物群でも主要な埋土である。

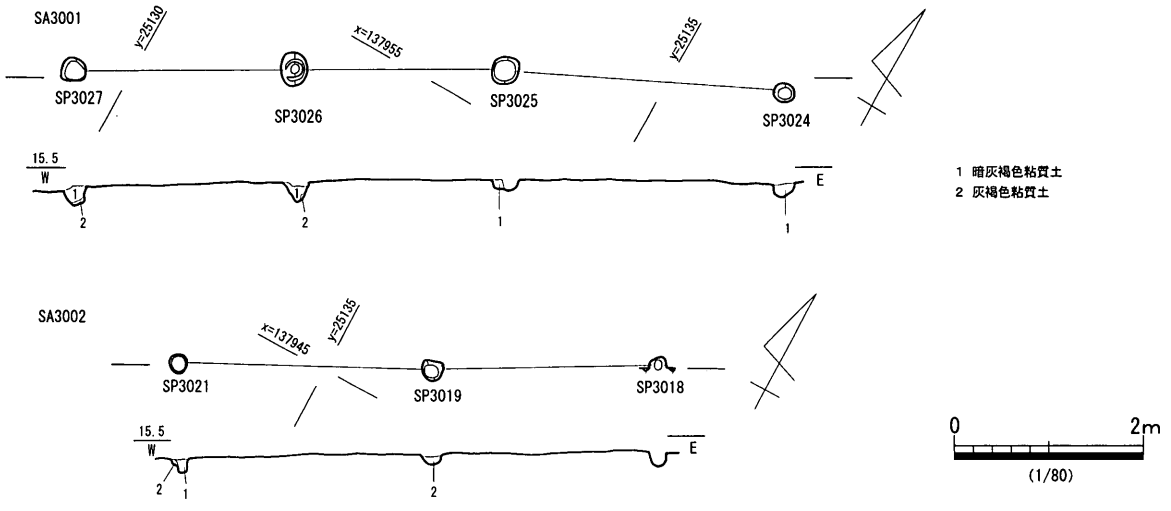
このように配置においてSB3001に対する意識度が他の柵列跡と建物跡の関係より相対的に高く、埋土も共通する。このためSP3007の北側にも柱穴が存在する可能性を考え、精査を繰り返したが、確認できなかった。深度が浅いため削平された可能性もあろう。なお、こうした配置をとるため庇の可能性もあるが、距離が2.5mとやや空くためここでは柵列跡として報告する。

柵列跡の時期は配置や埋土よりSB3001に伴うと考えられることから8世紀初頭～前葉と考えられる。

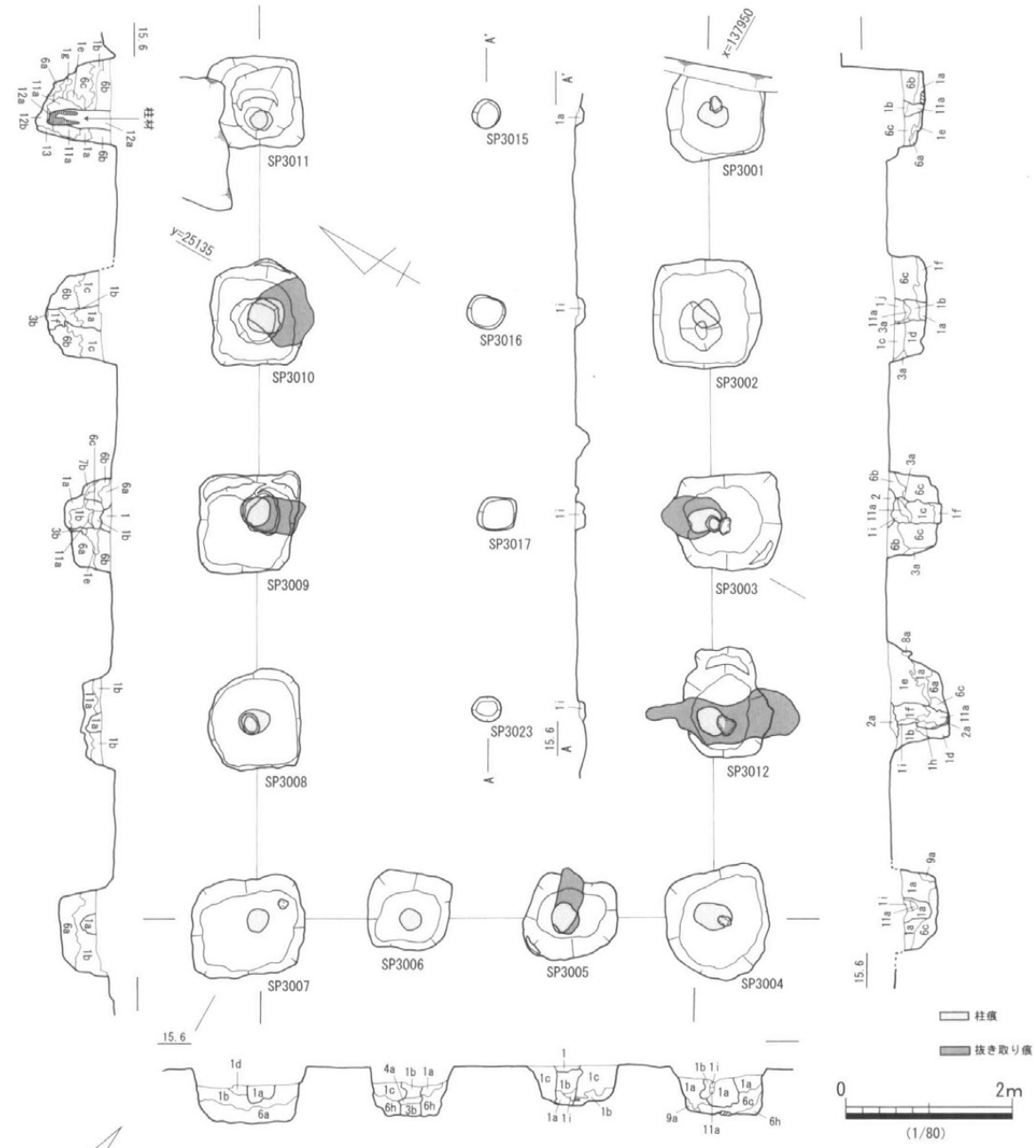
SA3002（第22図）

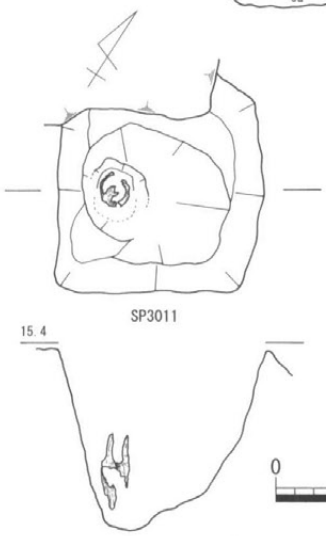
調査区の南東隅で検出した柵列跡である。これを構成する柱穴跡のうちSP3019は近世に属するSD3005に切られる。また東側は調査区外に延び、規模は2間以上である。主軸方向はN－33°－Wと直交し、SB3001と揃う。またSB3001の南側桁行の柱穴列の柱痕から約2mを空けて平行する。柱穴跡の平面形は円形を呈し、径は0.2m、深さ0.14～0.16mを測る。埋土はSA3001と同じく灰褐色系粘質土である。これはSB3001などの大型建物群でも主要な埋土である。以上の配置状況、主軸方向の一致、埋土の共通性からSB3001に伴う柵列跡であると考えられる。出土遺物はない。

柵列跡の時期はSB3001に伴うと考えられることより8世紀初頭～前葉と考えられる。



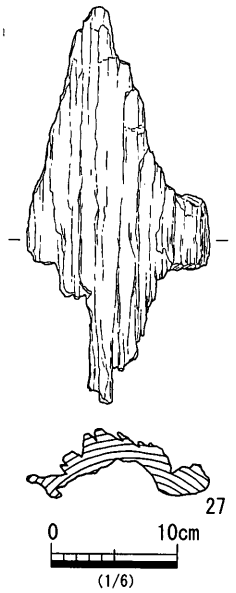
第22図　SA3001・3002平・断面図(1/80)





1　暗灰褐色粘質土
1a　灰褐色粘質土（ごく少量の地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1a層〉
1b　灰褐色粘質土（少量の地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1b層〉
1c　灰褐色粘質土（地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1c層〉
1d　灰褐色粘質土（多量の地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1d層〉
1e　灰褐色粘質土（少量の地山ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1e層〉
1f　灰褐色粘質土（地山ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1f層〉
1g　灰褐色粘質土（少量の淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1g層〉
1h　灰褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1h層〉
1i　灰褐色粘質土（混入物なし）〈大型SA・SB土層注記1i層〉
1j　灰褐色粘質土（地山ブロック、暗褐色粘土ブロック含む）SD2001に由来〈大型SA・SB土層注記1j層〉
2　黄灰褐色粘質土
2a　灰褐色粘土〈大型SA・SB土層注記2a層〉
3a　淡灰色粘質土〈大型SA・SB土層注記3a層〉
3b　淡灰色粘質土（地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記3b層〉
4a　淡灰色粘土〈大型SA・SB土層注記4a層〉
6a　黄褐色粘質土（ごく少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6a層〉
6b　黄褐色粘質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6b層〉
6c　黄褐色粘質土（多量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6c層〉
6h　黄褐色粘質土（やや暗い）〈大型SA・SB土層注記6h層〉
7b　黄褐色粘土（やや暗い）〈大型SA・SB土層注記7b層〉
8a　暗黄灰色微砂質土〈大型SA・SB土層注記8a層〉
9a　暗黄灰色粘質土（灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記9a層〉
11a　暗灰色粘土〈大型SA・SB土層注記11a層〉
12a　青灰色シルト
12b　青灰色微砂混粘質土
13　淡青灰色粘土

第23図　SB3001平・断面図（1/80）・SP3011柱材検出状況（1/40）



第24図　SB3001-SP3011出土遺物 (1/6)

掘立柱建物跡

SB3001（第23・24図）

調査区東部で検出した床束建物であり、規格的な配置をとる大型建物群の1つである。SA2001・4001で構成される区画施設の中央に位置する。建物跡の東側は調査区外に延び、東端にあるSP3001・3015と西側にあるSP3008・3023・3012は近世に属するSD3001（未報告）とSD3002にそれぞれ切られる。また北西隅にあるSP3007の掘り方はSD3004に切られる。これはSB3001でも多く見られる灰褐色粘質土を埋土とする溝状遺構である。また北側桁行中央にあるSP3009はSK3001を、束柱のSP3017は弥生時代に属するSD3003を切る。

規模は梁間3間×桁行4間以上（5.48 m×9.6 m以上。床面積52.6 ㎡以上。）であるが、大型建物群・柵列群形成に当たっての推定基準線から東西方向へ左右対称に復元すると桁行は5間、床面積は65.7 ㎡となる。主軸方向はN－30°－Wである。柱穴跡の規模は1.0～1.32 m、深さ0.42～1.0 mを測る。柱痕径は0.28～0.42 mを測り、柱間距離は梁間が1.8～1.88 m、桁行が2.32～2.48 mとかなり近い数値に揃う。これらはそれぞれ1.8 m、2.4 mを意図した数値であり、1尺＝「約30cm」(※)の唐尺を基準尺としたと見られる。また、床束を含めて柱通りもよく、整然としている。

柱抜き取り痕はSP3003・3005・3010・3009・3012で検出した。埋土はいずれも掘り方、柱痕埋土と類似するが、やや暗い。根石はSP3001・3003・3012・3004で見られた。このうちSP3003は底面に据付けるための掘り方を掘って設置しているが、位置は柱痕の縁辺部に沿うため添え石の可能性を持つ。注目できるのはSP3011で出土した柱材を取り巻く根巻きを確認したことである。これは柱材の根元の周囲を粘土で巻く方法であり、柱の根腐れ防止策とされる。具体的な設置方法についてはまず底に青灰色微砂混粘質土（12b層）、淡青灰色粘土（13層）を敷く。（これらは他の埋め戻し土と異なり、ブロック土を含まず、均質な土である。）その上に柱材を据える。そしてこれに暗灰色粘土（11a層）を巻きつける。その後は他の柱穴と同様にブロック土で埋め戻す、という順序である。

なお、稲木北遺跡ではSB4003を構成するSP4037でも検出した。また県内では東かがわ市引田に所在する川北遺跡の大型掘立柱建物群で多く見られるが、検出遺跡例は非常に乏しい。

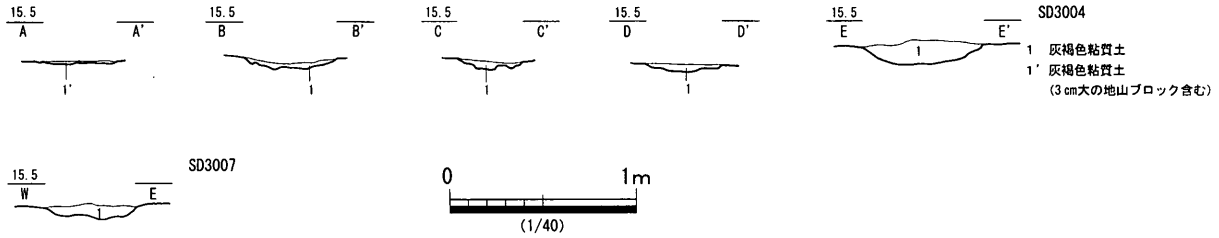
出土遺物には弥生土器片、サヌカイト片がごく少量の他、柱材（27）がある。27はSB3011から出土した柱材の一部である。樹皮に近い部分は腐って消滅しているが、検出された柱痕径から見て直径30cm程度はあったと推測される。この柱材については樹種同定によりスギまたはヒノキ科との鑑定結果を得た。

建物跡の時期は企画的な配置をとる大型建物群の1つであるため本節の冒頭で述べたとおり、8世紀初頭～前葉に位置づけられる。

(※) 29.7～29.8 cmが8世紀代の唐尺の1尺とされるが地域差や個々の遺跡差も指摘されているので厳密には今後の検討が必要。

溝状遺構

SD3004（第25図）



第 25 図　SD3004・3007 断面図 (1/40)

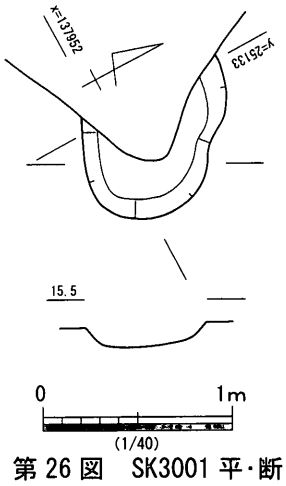
調査区の中央で検出した溝状遺構である。SB3001 を構成する SP3007 の掘り方を切る。幅は 0.4 ～ 0.6 m、検出面からの深さ 0.02 ～ 0.12 mを測る。底面のレベルは南端がやや浅いものの 15.25 mとほぼ一定である。主軸方向はN － 28° － W である。断面形は浅い皿状で、埋土は大型建物群・柵列群で見られる灰褐色粘質土である。東側に位置する SB3001 とは主軸を揃え、SD3004 の中心と SB3001 の柱痕との距離は 0.9 ～ 1 mを測る。典型的な官衙構成建物の通常の軒の出は 1.5 ～ 2 m程度であり、短い例(静岡県御子ヶ谷遺跡 SB04) でも約 1.2 mとされる。(※) このため SD3004 は SB3001 に伴う雨落ち溝とは考えにくいものの主軸方向、配置、埋土から見て SB3001 に伴う可能性が高い。出土遺物にはサヌカイト剥片がごく少量ある。

溝状遺構の時期は SB3001 との関係や埋土から 8 世紀初頭～前葉と考えられる。

(※) 山中敏史「Ⅳ－ 5　雨落ち溝」『古代の官衙遺跡Ⅰ　遺構編』(2003) 奈良文化財研究所

SD3007 (第 25 図)

調査区の北部中央で検出した溝状遺構である。残存状況が悪く途切れがちであるが幅は 0.2 m、深さ 0.07 mを測る。主軸方向はN － 31° － W である。断面形は浅い皿状で、埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土より 8 世紀初頭～前葉と考えられる。



第 26 図　SK3001 平・断面図 (1/40)

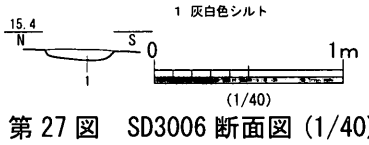
土坑

SK3001 (第 26 図)

調査区の東部で検出した土坑である。SB3001 を構成する SP3009 に切られる。平面形は隅丸方形、断面形は逆台形を呈する。規模は長径 0.82 m以上、短径 0.75 m、深さ 0.12 mを測る。埋土は灰褐色粘質土である。検出時には土坑でなく、建て替えられた SB3001 構成柱穴である可能性も考えたが、主軸方向のずれ、形状、規模や柱痕が見られないことよりこれは考えにくい。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より 8 世紀初頭～前葉と考える。

(3) 中世の遺構・遺物

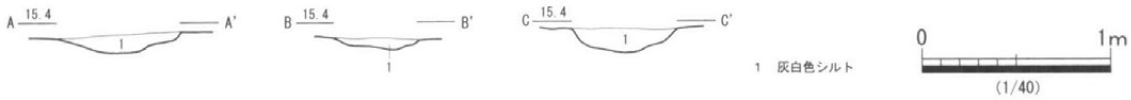
溝状遺構



第 27 図　SD3006 断面図 (1/40)

SD3006 (第 27 図)

調査区の南西隅で検出した溝状遺構である。幅は 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.06 mを測る。主軸方向はN － 63° － E である。断面形は浅い皿状で、埋土は灰白色シルトである。出土遺物はない。溝状遺構の



第 28 図　SD3002 断面図 (1/40)

時期は埋土より中世と考える。

(4) 近世の遺構・遺物

溝状遺構

SD3002（第 28 図）

調査区の中央で検出した溝状遺構である。SB3001 を構成する SP3008・3023・3012 を切る。幅は 0.4 ～ 0.8 m、深さ 0.05 ～ 0.14 m を測る。主軸方向は N － 30° － W である。断面形は浅い皿状で、埋土は黄味が強い灰白色シルトである。出土遺物には須恵器小片、土師器小片がごく少量ある。溝状遺構の時期は埋土より近世と考える。

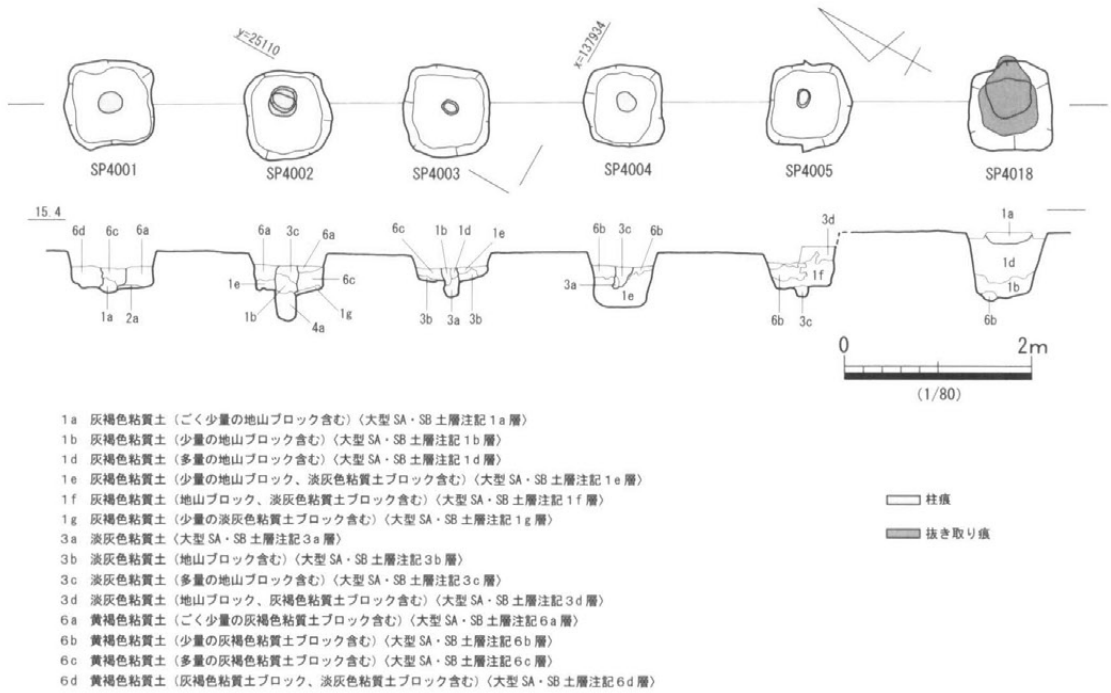
＜Ⅳ区の調査成果＞

(1) 8 世紀代の遺構・遺物

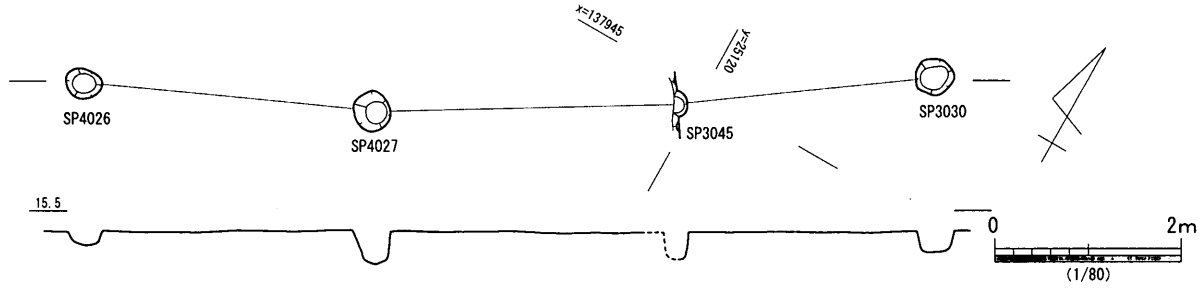
柵列跡

SA4001（第 29 図）

調査区の中央部で検出した柵列跡である。SA2001 とセットで大型建物群の区画施設を構成する。規模は 5 間以上（9.6 m以上）であり、調査区外に延びる。主軸方向は N － 30° － W である。南側から 2 穴め以北は耕地造成により段カットされており、これだけで最大 20cm 強の削平を受けている。柱穴跡の規模は 0.84 ～ 0.96 m、深さ 0.48 ～ 0.76 m を測る。また柱痕径は 0.12 ～ 0.24 m を測る。柱間距離



第 29 図　SA4001 平・断面図 (1/80)



第30図　SA4002 平・断面図 (1/80)

は1.8～1.92 mとほぼ揃い、柱通りもよい。

SP4018では柱抜き取り痕を確認した。埋土は掘り方のそれと類似するが、土質がやや細かく地山ブロックはほとんど含まない。SA4001からの出土遺物は弥生土器片がごく少量ある。

柵列跡の時期は規格的な配置をとる大型建物群・柵列群を構成する1つであるため本節の冒頭で述べたとおり8世紀初頭～前葉に位置づけられる。

SA4002（第30図）

調査区北東部で検出した柵列跡である。SB4002から1.8 mの間隔を空けて南側に位置する。規模は3間、主軸方向はN－30°－Wに直交する。柱穴跡は平面形が円形であり、径は0.4～0.48 m、深さ0.16～0.35 mを測る。埋土は灰褐色粘質土であり、少量の地山ブロックを含む。これはSB4002などの大型建物群でも主要な埋土である。このためSB4002に伴うと考えられる。出土遺物はない。柵列跡の時期はSB4002に伴うと見られるため8世紀初頭～前葉と考えられる。

掘立柱建物跡

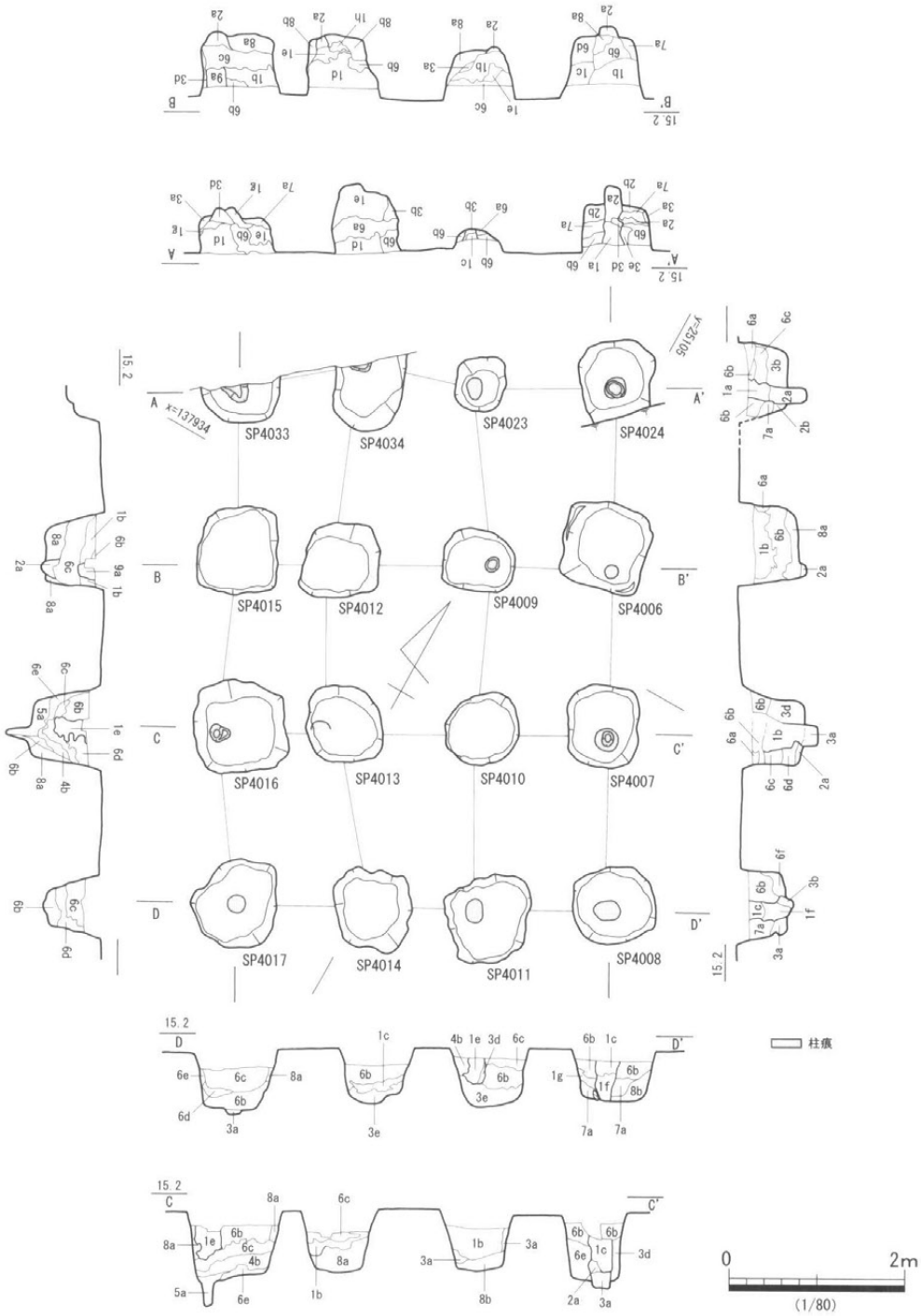
SB4001（第31図）

調査区中央北部で検出した総柱建物であり、規格的な配置をとる大型建物群の1つである。SA2001、4001で構成される区画施設の外部に位置し、北部は調査区外に延びる。SA4001と同じく耕地造成によりある程度削平を受けている。規模は梁間3間×桁行3間以上（4.24 m×5.88 m以上。床面積24.9 ㎡以上。）である。主軸方向はN－29°－Wである。柱穴跡の規模は0.6～1.04 m、深さ0.32～1.08 m、柱痕径は0.16～0.28 mを測る。柱間距離は梁間が1.2～1.56 m、桁行が1.92～2.04 mであり、梁間の柱間距離にばらつきがある。また、柱通りも梁間方向では比較的整うが、桁行方向ではやや不揃いである。

建物跡の時期は規格的な配置をとる大型建物群の1つであるため本節の冒頭で述べたとおり、8世紀初頭～前葉に位置づけられる。

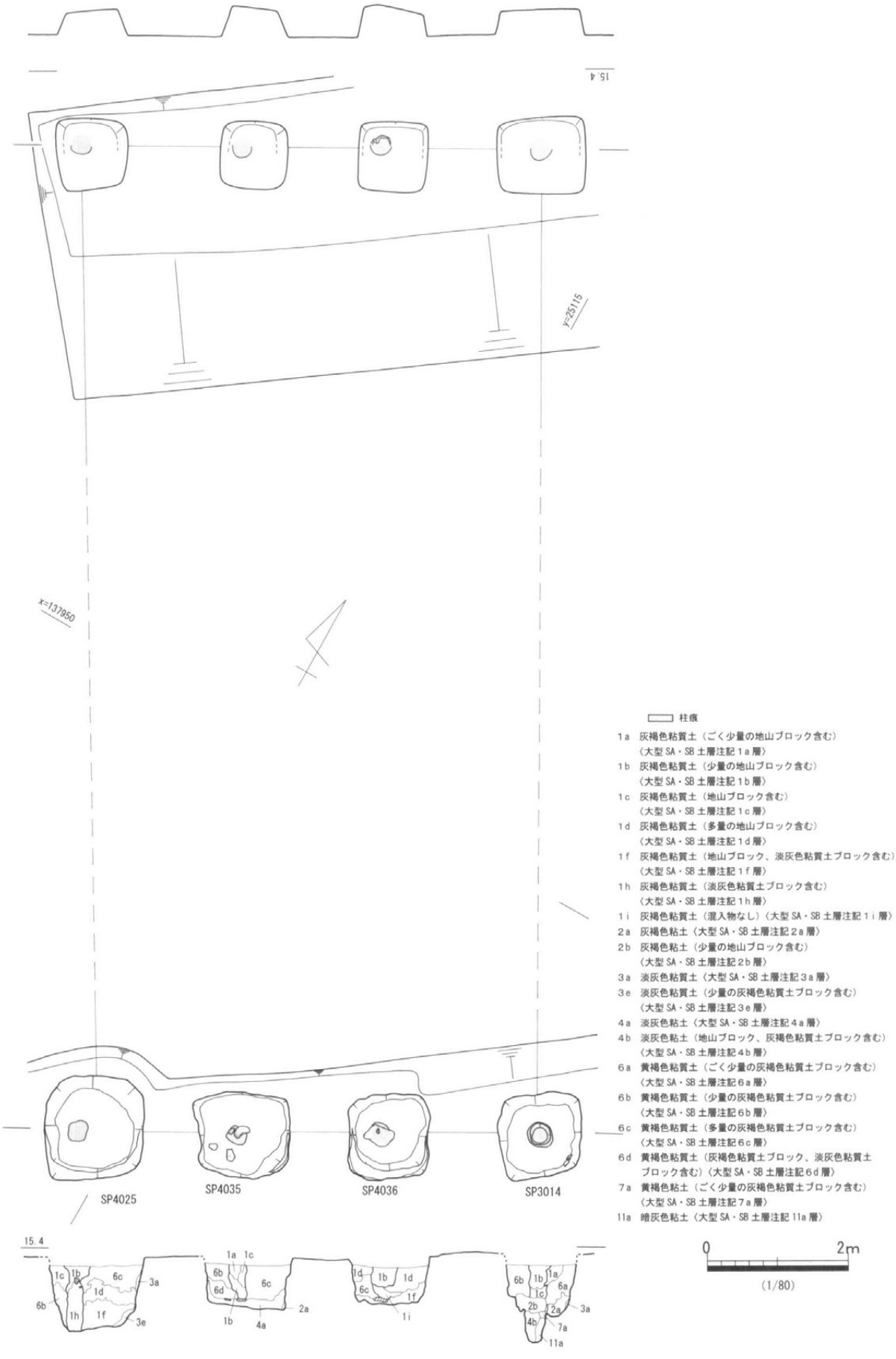
SB4002（第32・33図）

調査区北東隅で検出した掘立柱建物跡であり、規格的な配置をとる大型建物群の1つである。検出した柱穴列の東西には柱穴跡が確認されず、また詳細は後述するが、平成19年度香川県教育委員会の立会調査区でこの柱穴列と対応する柱穴群を検出したため建物跡と考えられる。SA2001・4001で構成される区画施設の内部に位置し、北部は調査区外に延びる。SB2003とは大型建物群・柵列群構築時の推定基準線に対して左右対称の位置にあるが、この建物跡とは相互の南側の梁間柱列において柱筋を揃える。かつSB4002の南側に位置するSB4003とは東側桁行の柱筋を揃える。規模は梁間3間（6.52 m）

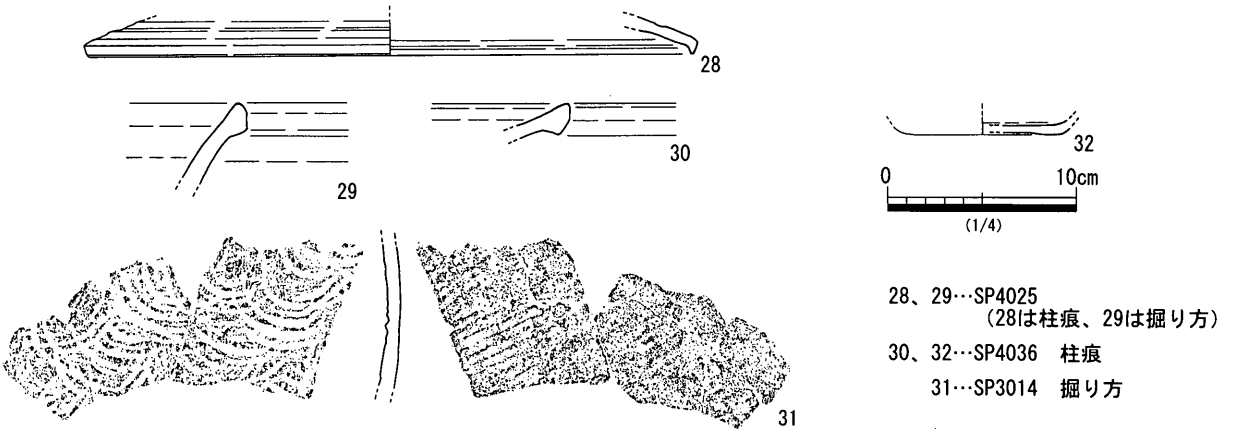


1a　灰褐色粘質土（ごく少量の地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1a層〉
1b　灰褐色粘質土（少量の地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1b層〉
1c　灰褐色粘質土（地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1c層〉
1d　灰褐色粘質土（多量の地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1d層〉
1e　灰褐色粘質土（少量の地山ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1e層〉
1f　灰褐色粘質土（地山ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1f層〉
1g　灰褐色粘質土（少量の淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1g層〉
1h　灰褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記1h層〉
2a　灰褐色粘土〈大型SA・SB土層注記2a層〉
2b　灰褐色粘土（少量の地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記2b層〉
3a　淡灰色粘質土〈大型SA・SB土層注記3a層〉
3b　淡灰色粘質土（地山ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記3b層〉
3d　淡灰色粘質土（地山ブロック、灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記3d層〉
3e　淡灰色粘質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記3e層〉
4b　淡灰色粘土（地山ブロック、灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記4b層〉
5a　灰白色粘質土〈大型SA・SB土層注記5a層〉
6a　黄褐色粘質土（ごく少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6a層〉
6b　黄褐色粘質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6b層〉
6c　黄褐色粘質土（多量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6c層〉
6d　黄褐色粘質土（灰褐色粘質土ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6d層〉
6e　黄褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6e層〉
6f　黄褐色粘質土（多量の淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記6f層〉
7a　黄褐色粘土（ごく少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記7a層〉
8a　暗黄灰色微砂質土〈大型SA・SB土層注記8a層〉
8b　暗黄灰色微砂質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記8b層〉
9a　暗黄灰色粘質土（灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型SA・SB土層注記9a層〉

第31図　SB4001 平・断面図 (1/80)



第32図　SB4002 平・断面図 (1/80)



第33図　SB4002出土遺物(1/4)

×桁行1間以上である。主軸方向はN－27°－Wと直交する。柱穴跡の規模は1.16～1.44m、深さ0.76～1.24m、柱痕径は0.28～0.32mを測る。柱間距離は2.0～2.28mであり、中央の1間がやや狭い。ただ、柱通りはよい。柱穴ではSP4035・4036で根石を確認した。土層断面の観察ではどちらの柱痕の下端も根石に接している。

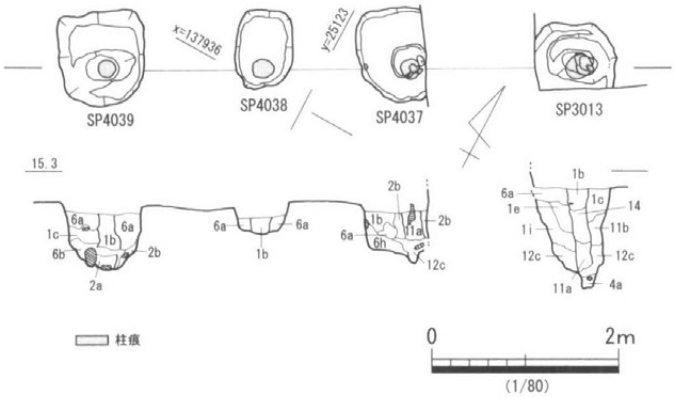
出土遺物には弥生土器片、サヌカイトチップ、須恵器杯蓋(28)、甕(29～31)、土師器杯(32)などが少量ある。28はSP4025柱痕から出土した。傘型を呈する大型品であり、口縁部を下方へ小さく折り曲げる。8世紀初頭ごろと考えられる。29はSP4025掘り方、30はSP4036柱痕から出土した口縁部である。端部の断面形状は良く似るが、外傾度は異なる。31はSP3014掘り方から出土した。外面に格子叩き、内面に青海波文が見られる。32はSP4036柱痕から出土した。焼きがやや甘く摩滅が著しいが、胎土は密である。

建物跡の時期についてはSP4025柱痕から出土した須恵器杯蓋から廃絶時期を8世紀初頭とし、構築から廃絶の期間を8世紀初頭に納める解釈もありうる。だが、この杯蓋はそれほど時期幅を限定できる資料でないこと、柱痕から出土した時期比定可能な土器がこの1点に留まることからこのように捉えることは難しい。また他の大型建物群・柵列群との関係を考えると、やはり本節の冒頭で述べたとおり8世紀初頭～前葉に位置づけるほうが妥当であると考える。

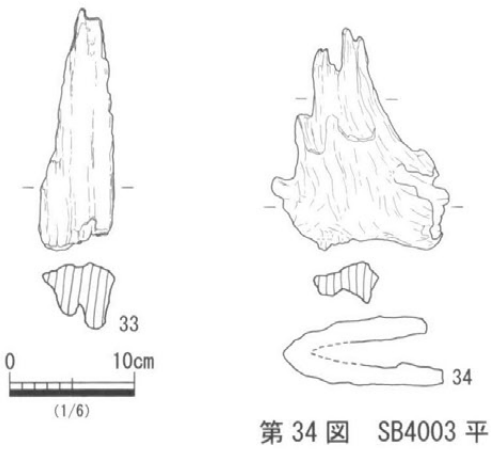
なお、先述した平成19年度香川県教育委員会の立会調査区の成果であるが、ここではSB4002を構成すると見られる柱穴跡4基を検出した。これらの柱穴跡は径が0.96～1.26m、柱痕径が約0.27～0.3mを測る。柱穴列の規模は梁間3間(6.6m)を測り、柱間距離は2.04～2.28mで中央の1間がやや狭い。かつ柱通りも整然としている。埋土はSB4002を含めた大型建物群・柵列群と類似する。SB4002構成柱穴跡と比較すると諸属性は類似し、かつ柱痕の検出位置も南北で対応する。よって同一の建物跡を構成すると考える。この場合、南北の梁間が確認されたことになり、建物跡の規模は6.6m×13.8mで床面積が91.08㎡とかなり大型になる。

SB4003(第34図)

調査区南東隅で検出した掘立柱建物跡であり、規格的な配置をとる大型建物群の1つである。東端の1穴を除きSX4001に切られる。柱穴列の東西には柱穴跡が確認されなかったため柵列跡でなく、建物跡と判断した。SA2001・4001で構成される区画施設の内部に位置し、南部は調査区外に延びる。この建物跡の北側に位置するSB4002とは東側桁行の柱筋を揃える。規模は梁間3間(5.0m)×桁行1間



1b　灰褐色粘質土（少量の地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1b 層〉
1c　灰褐色粘質土（地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1c 層〉
1e　灰褐色粘質土（少量の地山ブロック、淡灰色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 1e 層〉
1i　灰褐色粘質土（混入物なし）〈大型 SA・SB 土層注記 1i 層〉
2a　灰褐色粘土〈大型 SA・SB 土層注記 2a 層〉
2b　灰褐色粘土（少量の地山ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 2b 層〉
4a　淡灰色粘土〈大型 SA・SB 土層注記 4a 層〉
6a　黄褐色粘質土（ごく少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 6a 層〉
6b　黄褐色粘質土（少量の灰褐色粘質土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 6b 層〉
6h　黄褐色粘質土（やや暗い）〈大型 SA・SB 土層注記 6h 層〉
11a　暗灰色粘土〈大型 SA・SB 土層注記 11a 層〉
11b　暗灰色粘土（ごく少量の黄褐色粘土ブロック含む）〈大型 SA・SB 土層注記 11b 層〉
12c　青灰色粘土
14　暗茶灰色粘土

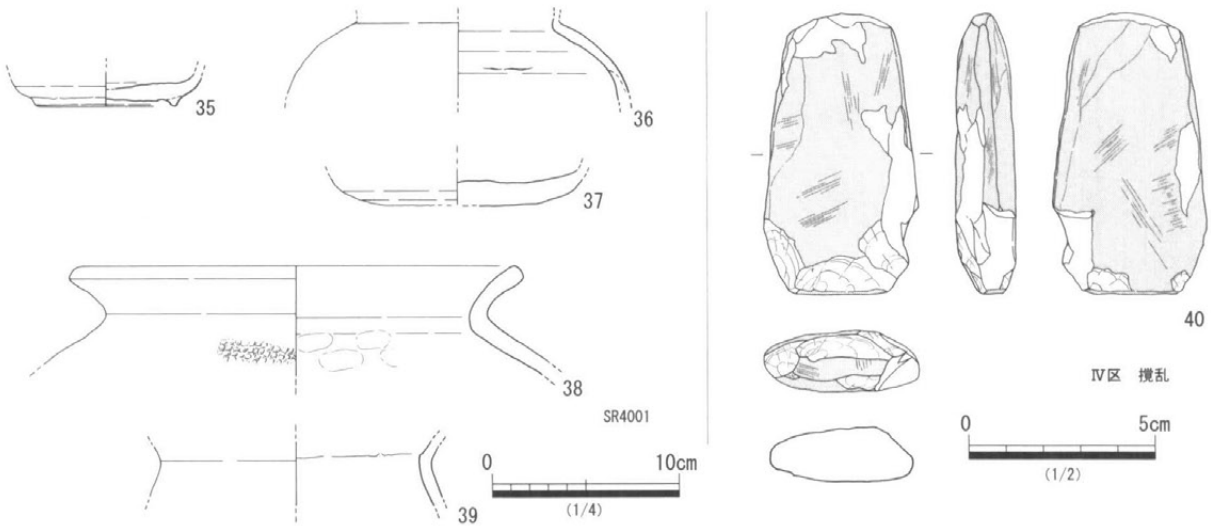


第 34 図　SB4003 平・断面図（1/80）・出土遺物（1/6）

以上である。主軸方向はN－28°－Wと直交する。柱穴跡の規模は0.8～1.0 m、深さ0.32～1.08 m、柱痕径は0.2～0.24 mを測る。柱間距離は1.6～1.76 mであり、柱通りはよい。

SP4037では柱材の小片が出土し、これには根巻きが行われていた。他に根巻きを確認したSB3001－SP3011と同様に暗灰色粘土（2b層）を巻きつけている。また断面観察では柱材とこれに伴う根石の下位でもピット状に窪む。検出位置や断面形状から見て下位の窪みも柱痕であり、柱の建て替えが行われたと考えられる。

出土遺物にはごく少量の弥生土器、SP3011で出土した柱材（33・34）がある。33が上位、34が下位で10cm程度のレベル差をもって出土したが、同一の柱材である。34は下部で大きな節をもつ。この柱



第 35 図　Ⅳ区 旧河道・撹乱出土遺物（1/4・1/2）

材については樹種同定によりスギまたはヒノキ科との鑑定結果を得た。

建物跡の時期は規格的な配置をとる大型建物群の１つであるため本節の冒頭で述べたとおり、８世紀初頭～前葉に位置づけられる。

溝状遺構

SD4001（第９図）

調査区の西部で検出した溝状遺構である。幅は1.5ｍ、深さ0.15ｍ前後を測る。主軸方向はＮ－36°－Ｗである。断面形は浅い皿状で、埋土はやや黄味が強い灰白色シルトである。出土遺物にはサヌカイト、須恵器片、陶器椀がある。溝状遺構の時期は近世の陶器椀が出土していることから近世に位置づけられる。

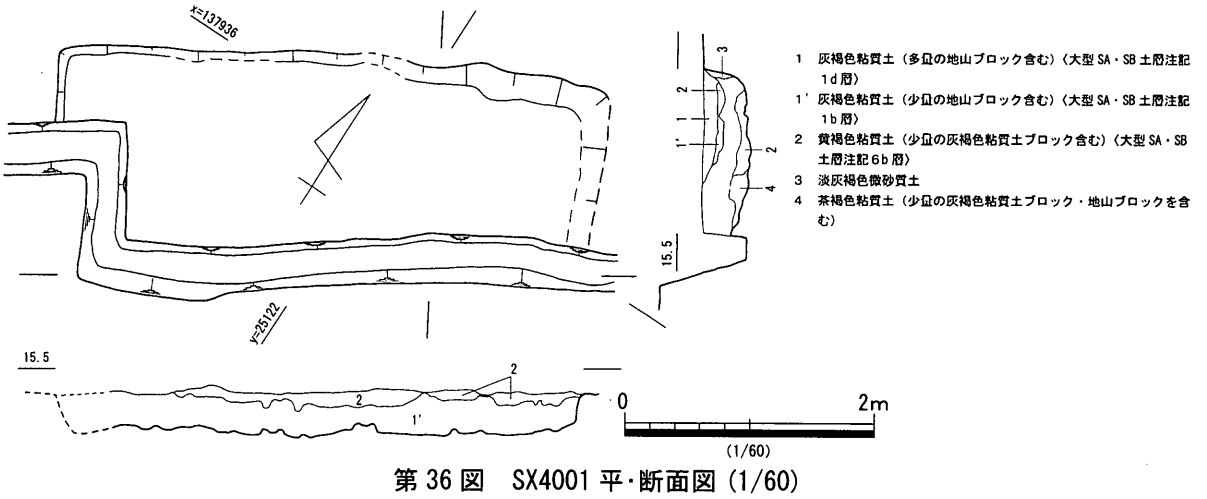
旧河道

SR4001（第８・９・35図）

調査区の西部で検出した旧河道である。幅は5.2ｍ以上を測る。旧河道の内部は近世段階で耕地化されており、耕作土である灰白色系シルトが水平堆積する。このため旧河道本来の埋土は削平されており、底面でごくわずかに確認できたのに留まる。遺物は旧耕作土層のみから出土し、近世の陶磁器に混じって古代の須恵器、土師器も見られる。これらの古代の遺物には８世紀前葉の須恵器杯身を含むが、周辺で検出された当該期の遺構は大型建物群・柵列群（これらからの出土遺物だけで判断すれば８世紀初頭ごろ）のみであることから本来はこれに伴うものであったが、近世の耕地化により２時的に移動したと考えられる。よって大型建物群・柵列群の時期はSR4001出土遺物の時期も加味して判断すべきであり、８世紀初頭～前葉と考えられる。

また旧河道の時期が古代の大型建物群・柵列群の形成時期まで遡るか否かは当時の旧地形や遺跡の範囲を考える上で重要な問題であるが、これについては明確でない。これは先述のとおり旧河道本来の埋土からの出土遺物がないためである。ただ、本章第１節「遺跡の立地と地形」で述べたとおりSR4001付近で当該期の遺構・遺物が極めて希薄になる状況を考慮すればこの時期には存在した可能性が高い。

古代の出土遺物には須恵器杯（35）、壺（36・37）、甕（38）、土師器甕（39）などがある。35は腰部が強く屈曲し、直線的な体部に延びる。底部のやや内寄りには断面方形の小さい高台を張りつけるが、接地面は外側である。８世紀前葉に属する。36は短頸壺である。体部外面に降灰による自然釉が付着す



第36図　SX4001平・断面図（1/60）

る。37 は平坦な形状の底部である。外面にはヘラ削りを加える。38 は不明瞭ながら外面に格子目叩き、内面に青海波文が見られる。39 は口縁部と体部境界の内面に小さい段があり、粗い作りである。

性格不明遺構

SX4001（第 36 図）

調査区の南東部で検出した遺構である。南部は調査区外に延び、SB4003 を構成する柱穴跡 3 基を切る。平面形は方形と推定され、断面形は箱形を呈する。ただ床面には微妙な凹凸が目立つ。規模は東西 4.05 m、南北 1.45 m以上、深さ 0.39 mを測る。埋土は大型建物群・柵列群と同様であるが、地山ブロックを多く含むため人為的に埋め戻されたと考えられる。

検出時には平面形と規模から竪穴住居跡の可能性も考えた。だが主柱穴、壁溝跡、焼成施設が見られず、床面にも凹凸が著しいためこの可能性は否定される。出土遺物には弥生土器片とサヌカイトがごく少量ある。遺構の時期は埋土と遺構の切り合いより 8 世紀前葉と考えられる。

その他の出土遺物（第 35 図）

40 は撹乱から出土した緑泥片岩製の扁平片刃石斧である。刃部を欠損するが、下端面は平坦であり研磨痕を認める。このため石斧の破損後に砥石などに転用されたと見られる。

第４章　永井北遺跡の調査成果

第１節　遺跡の立地と地形（第２・３・５・37 図）

永井北遺跡では弥生時代の集落跡が検出されたため当時の旧地形について現地形、遺構面レベル、旧河道の分布から検討する。

遺跡の立地と現地形

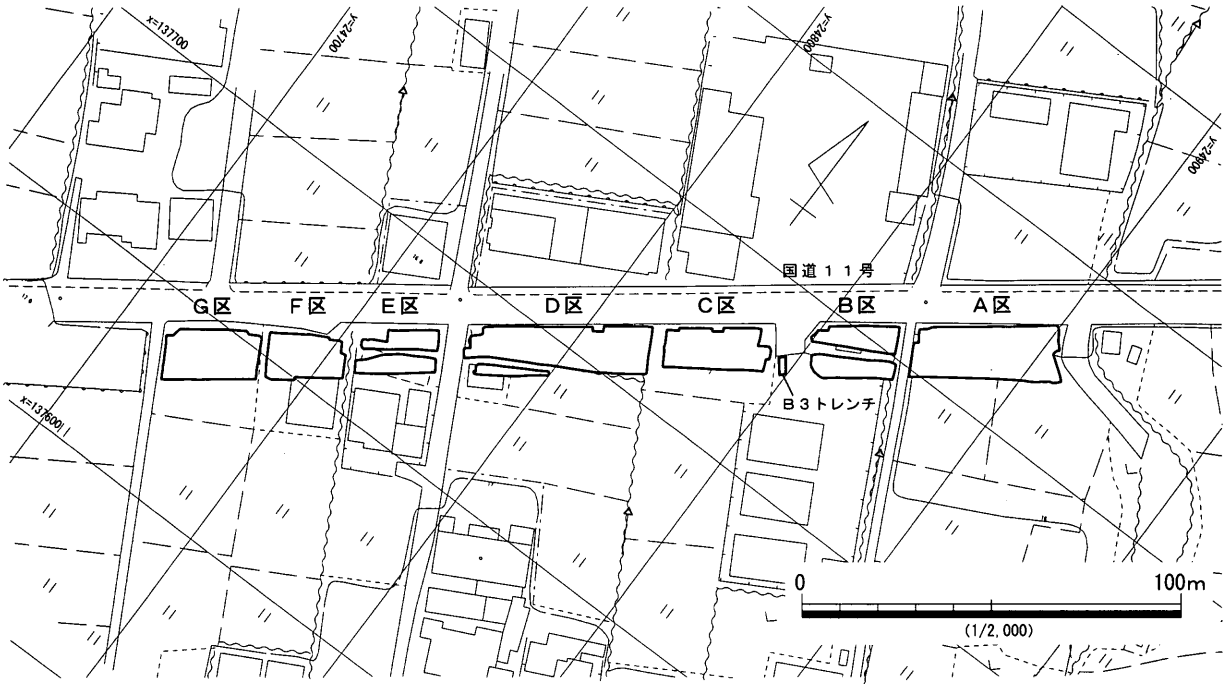
永井北遺跡は善通寺市中村町に所在する。遺跡の東約 1.8km の位置に金倉川があり、立地的にはこれにより形成された沖積低地に位置する。遺跡周辺を含めた現地形については 10cm 等高線図（第５図）を見るとＥ～Ｇ区付近とＢ区付近で等高線が張り出し微高地となっている。ただ後者については最近の宅地造成に伴う盛土による見かけ上のものである。調査対象地の盛土直下にある近年の耕作土レベルは概ね東西方向には東へ、南北方向には北へごく緩く下る。

遺構面レベル

〈東西方向〉

大局的には調査地の西側（Ｆ区付近）が最も高位でそこから東西へ向かって緩やかに下る。以下、調査区北壁土層図を用いてＦ区を基点として東西に分けて説明する。まず東側であるが、Ｆ区の遺構面レベルは約 16.1 ｍなのが東へ行くにつれ、Ｅ区 15.85 ｍ、Ｄ区 15.8 ｍ、Ｃ区 15.7 ｍ、Ｂ区 15.5 ～ 15.6 ｍ、Ａ区 15.4 ｍと下る。このようにＦ区から約 240 ｍ離れたＡ区との比高差は 0.7 ｍを測る。これらの地点では遺構面直上の堆積土は旧耕作土ないし古代末～中世包含層であるため遺構面はある程度削平を受けていると見られる。だが、遺構面が東へ徐々に下ること、最も低位部にあるＡ区では弥生時代後期の旧河道が検出されていることより本来の地形が反映されていると考えられる。

次いで西側であるが、Ｆ区の遺構面レベルが約 16.1 ｍなのがＧ区東側で 16.05 ｍ、西側で 15.9 ｍと下る。Ｇ区西側では弥生時代の包含層が遺構面直上に堆積しているため当時の地形を留めていると考え



第 37 図　永井北遺跡 調査区配置図

られる。よって遺構面レベルから見ると弥生時代終末期の集落跡が検出されたＦ区付近が最も小高い。
〈南北方向〉

Ｇ区東壁土層図を見ると南側で 16.15 m、北側で 16.05 mを測り北へ下る。この部分でも弥生時代の包含層が遺構面直上に堆積するため概ね旧地形が残存していると考えられる。よって現地形と同じく北へ緩く傾斜すると考えられる。

旧河道の分布

Ａ区で弥生時代後期後半の旧河道を１条確認した。その痕跡は地形図において確認できるが、これをたどると南東に約 1km 離れた稲木地区 SR04（昭和 61 年度善通寺市調査。下層、最下層から弥生時代後期後半～終末期にかけての土器が出土。）に至る。よってこれらは同一河川と見られる。このため確実に旧河道であり、弥生時代後期後半ごろにはＡ区のある調査対象地東端部が地形的に低位であったことが窺える。なお、この旧河道は古代末～中世にかけて完全に埋没し、土地は平坦化する。だが、この段階でも調査対象地西側より遺構面レベルが低い状況は変わらない。

結び

以上の現地形、遺構面レベルと旧河道の分布を考慮すると永井北遺跡周辺の弥生時代の旧地形として調査対象地の西側（Ｆ区付近）に微高地があり、地形は東と北へ向かって緩やかに下っていたことが窺える。なお、東端部では弥生時代後期後半には旧河道が北流しており、その後古代末～中世にかけて完全に埋没、平坦化する。ただこの時期に至っても西側に比べて地形的に低位な状況は継続されていたと考えられる。

第２節　土層序（第 38・39 図）

調査地は南北方向へ長いため主に調査区北壁土層図（第 38・39 図）を使って土層序を説明する。基本的な層序はどの調査区についても概ね上から耕作土、旧耕作土、古代末～中世包含層である灰褐色系粘質土を経て遺構面ベース土である黄褐色粘質土に至る。

〈Ａ区〉

調査前には２枚の水田として利用されていた。地形的には低位部にあり、北東部などで旧河道（SR1001）を検出した。この旧河道の最終埋没層は灰褐色粘質土（第 38 図５層）であるが、これは遺跡全体で見られる古代末～中世包含層である。遺構面は地表下約 50cm で確認できるが、Ａ区内ではほぼ平坦である。これは包含層とした灰褐色系粘質土が耕作土であることを示唆する。

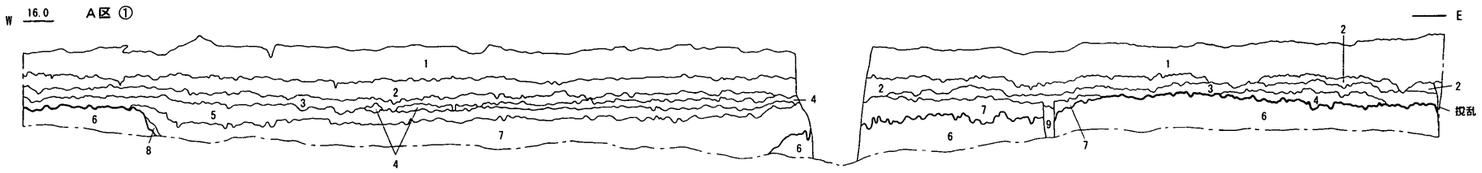
〈Ｂ区〉

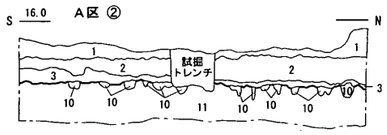
調査前は２枚の水田と南側の建物への進入ルートとして利用されていた。東側で条里坪界溝（SD2001）を検出したが、その埋没後の窪みには暗黄灰色粘質土（５層）、明黄灰色マンガン沈着粘質土（６層）が見られる。その他の堆積土は基本層序と同様である。遺構面は地表より約 50cm 下位にあるが、Ｂ区内ではほぼ平坦である。

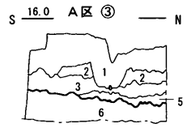
〈Ｃ区〉

調査前には１枚の水田として利用されていた。土層の堆積状況は基本層序のとおりである。遺構面は地表下約 40cm にあり、Ｃ区内ではほぼ平坦である。

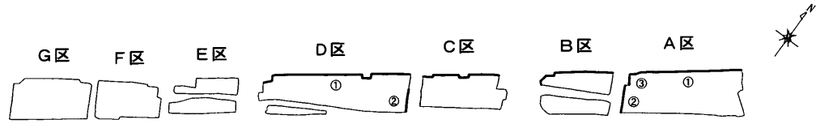
〈Ｄ区〉

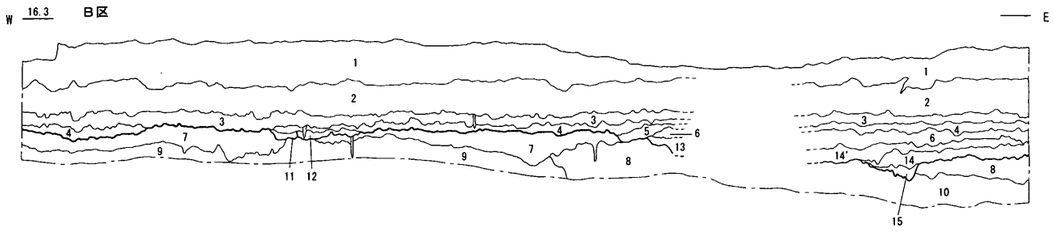




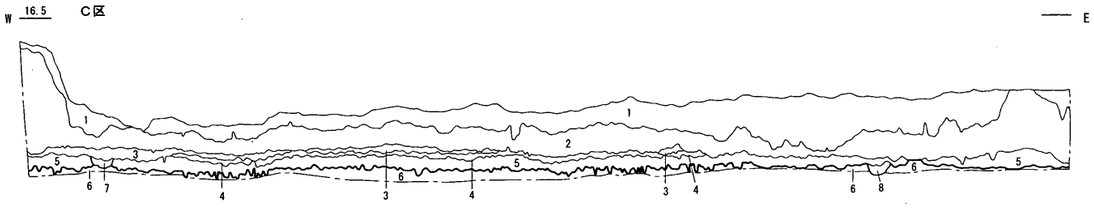


A区
1　耕作土
2　灰褐色 Mn 沈殿粘質土（床土）
3　淡灰褐色 Mn 沈殿粘質土（旧耕作土）
4　灰白色 Mn 沈殿シルト（旧耕作土）
5　灰褐色粘質土（包含層）
6　黄褐色粘質土（遺構面ベース）
7　黒褐色粘質土（SR1001）
8　黒褐色粘質土（茶色粘質土ブロックを含む）（SR1001）
9　灰褐色粘質土（黒褐色粘土ブロックを少量含む）（ピット）
10　淡灰褐色粘質土（撹滑？）
11　淡黄灰色粘質土（遺構面ベース）

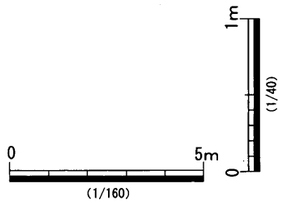


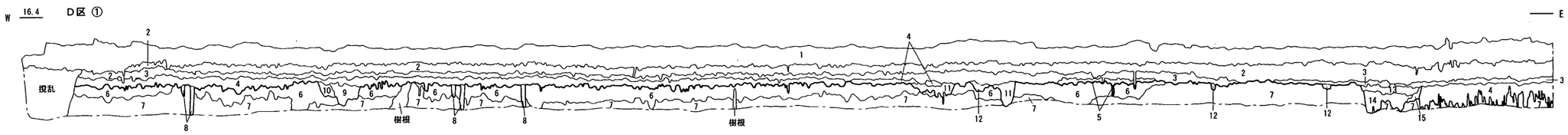


B区
1　花崗土
2　耕作土
3　茶灰色 Mn 沈殿粘質土（床土）
4　灰色粘質土（旧耕作土？）
5　暗黄灰色粘質土
6　明黄灰色 Mn 沈殿粘質土
7　黄灰色粘質土（遺構面ベース）
8　明黄褐色粘質土（遺構面ベース）
9　灰黄色粘土（固くしまる）
10　明黄色粘土
11　暗灰白色粘質土（SK2001）
12　灰白色粘質土（SD2002）
13　褐灰色 Mn 沈殿粘質土（SD2001）
14　暗茶灰色粘質土（やや茶味）（SD2001）
14'　黄味が強い（SD2001）
15　暗茶褐色粘質土（SD2001）

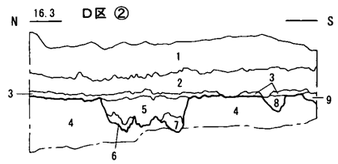


C区
1　花崗土
2　耕作土
3　灰白色 Mn 沈殿粘質土（旧耕作土）
4　赤褐色 Mn 沈殿粘質土（旧耕作土）
5　灰褐色粘質土（包含層？）
6　黄褐色粘質土（遺構面ベース）
7　灰黄色シルト（近世？遺構）
8　灰白色シルト（SD3005）



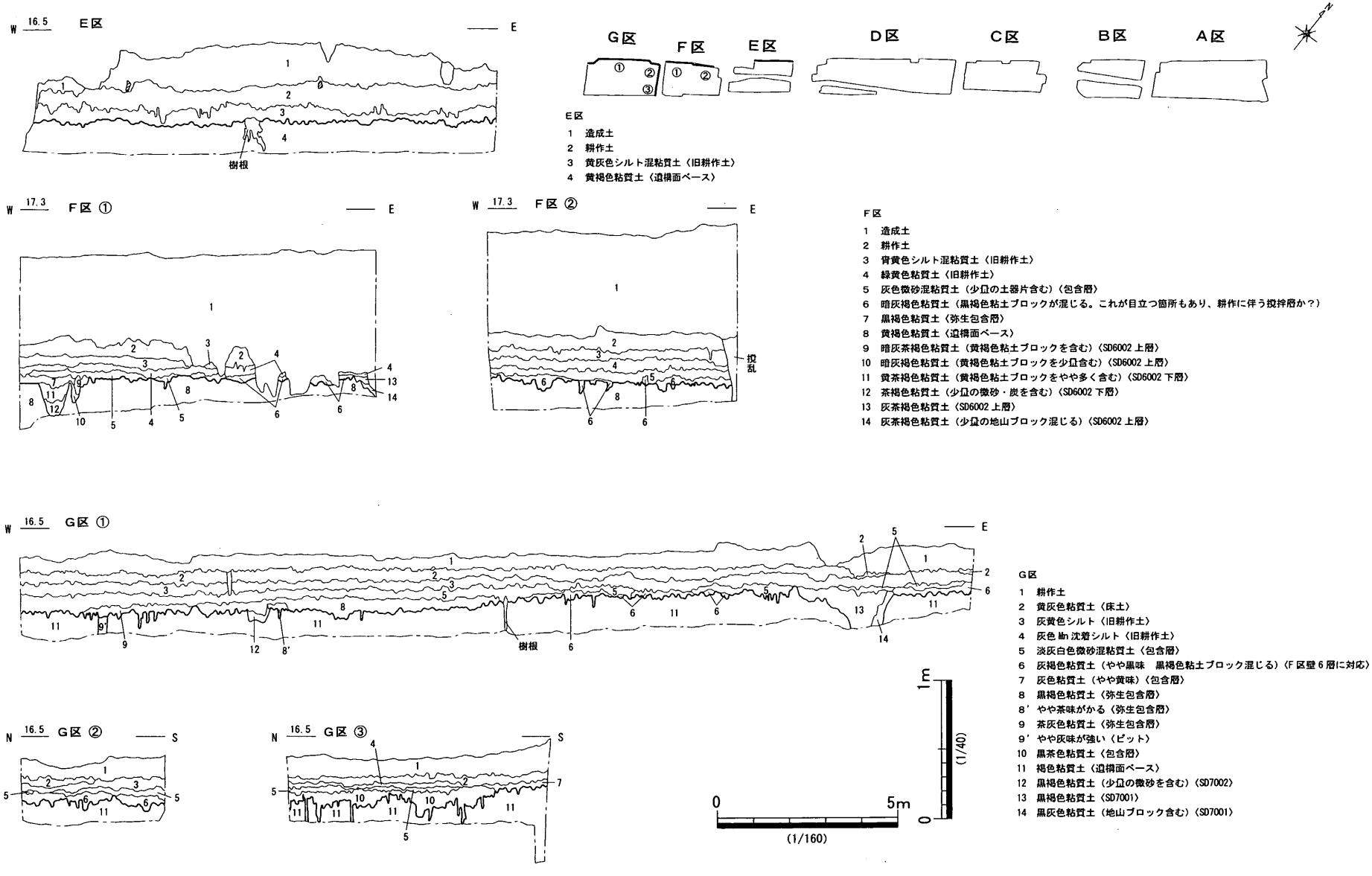


D区①
1　耕作土
2　灰褐色 Mn 沈殿粘質土（床土）
3　黄色シルト混粘質土（旧耕作土）
4　灰褐色粘質土（やや暗い）（SX3001・包含層）
5　灰黄色 Mn 沈殿粘質土（旧耕作土）
6　黄褐色粘質土（遺構面ベース）
7　灰黄色微砂混粘土（遺構面ベース）
8　暗灰褐色粘質土（ピット）
9　暗黄茶褐色粘質土（SK4003）
10　黒褐色粘質土（SK4003）
11　暗灰褐色微砂混粘質土（遺構）
12　灰白色シルト（遺構）
13　灰褐色粘土（しまり悪い）（SD4004）
14　灰褐色微砂混粘質土（SD4004）
15　灰褐色微砂質土（SD4004）



D区②
1　耕作土
2　黄灰色 Mn 沈殿シルト（旧耕作土）
3　黄色 Mn 沈殿微砂混粘質土（旧耕作土）
4　黄褐色粘質土（遺構面ベース土）
5　灰褐色粘質土（やや灰味）（SD4002）
6　灰白色粘土（SD4002）
7　灰白色微砂混粘質土（SD4002）
8　灰褐色粘土（SD4001）
9　褐灰色粘質土（SD4005）

第 38 図　A～D区土層図（縦 1/40・横 1/160）



第 39 図　E～G区土層図（縦 1/40・横 1/160）

調査前には水田、畑として利用されていた。東端部ではSX3001があり、底面で小さい凹凸が著しい。これはSX3001が耕作地として利用されていた際の植物の根の痕跡と考えられる。遺構面は地表下約40cmにあり、D区内ではほぼ平坦である。

〈E区〉

調査前の地目は宅地であった。北壁土層図では見えないが、南側では厚さ10cm強の古代末～中世包含層が見られ当該期の遺物少量、弥生土器少量が出土した。遺構面は地表下約60cmで確認できるが、E区内ではほぼ平坦である。

〈F区〉

調査前の地目は宅地であった。地形的には微高地の頂部にあり、周溝に囲まれた竪穴住居跡を中心とする弥生時代終末期の集落跡を検出した。土層の堆積状況は概ね基本層序の通りであるが、西側で部分的に弥生時代包含層（7層の黒褐色粘質土）が見られる。土質は隣接するG区で見られるそれと類似する。遺構面は分厚い造成土があるため地表より約1m下位で確認できるが、F区内ではほぼ平坦である。

〈G区〉

調査前には水田として利用されていた。土層の堆積状況はほぼ基本層序のとおりであるが、西側の遺構面直上で弥生時代包含層（8～10層の黒褐色系粘質土）が検出できた。これは西側で遺構面レベルが低下するため削平され残ったためと考えられ、G区では当時の遺構面がそれほど削平を受けていないことがわかる。遺構面は地表下約40cmにあり、西側へ緩やかに傾斜する。

第3節　遺構と遺物

〈調査の概要〉

本遺跡においては微高地上で弥生時代終末期の集落跡、古代末～中世にかけての集落跡などを検出した。弥生時代終末期の遺構には竪穴住居跡1基とこれを囲む周溝2条、掘立柱建物跡跡1棟、溝状遺構などがある。竪穴住居跡については周溝を伴う点、壁溝内で壁板を固定するための杭痕跡と見られる小ピット群を検出した点に特徴がある。遺跡全体からの出土遺物は28リットル入りコンテナで9箱あるが、このうち当該期の遺構からは約5箱が出土した。なお、その多くは周溝と溝状遺構からの出土である。

古代末～中世の集落跡は古代末と中世前半に細分でき、掘立柱建物跡跡を含む柱穴群、柵列跡、畑、土壙墓、条里坪界溝を含む溝状遺構などがある。これらの遺構の多くは周辺で見られる条里型地割と主軸方向を揃える。また、このうち中世の柱穴群と畑は柵列跡により区画されており、坪内での土地利用の状況が窺える。

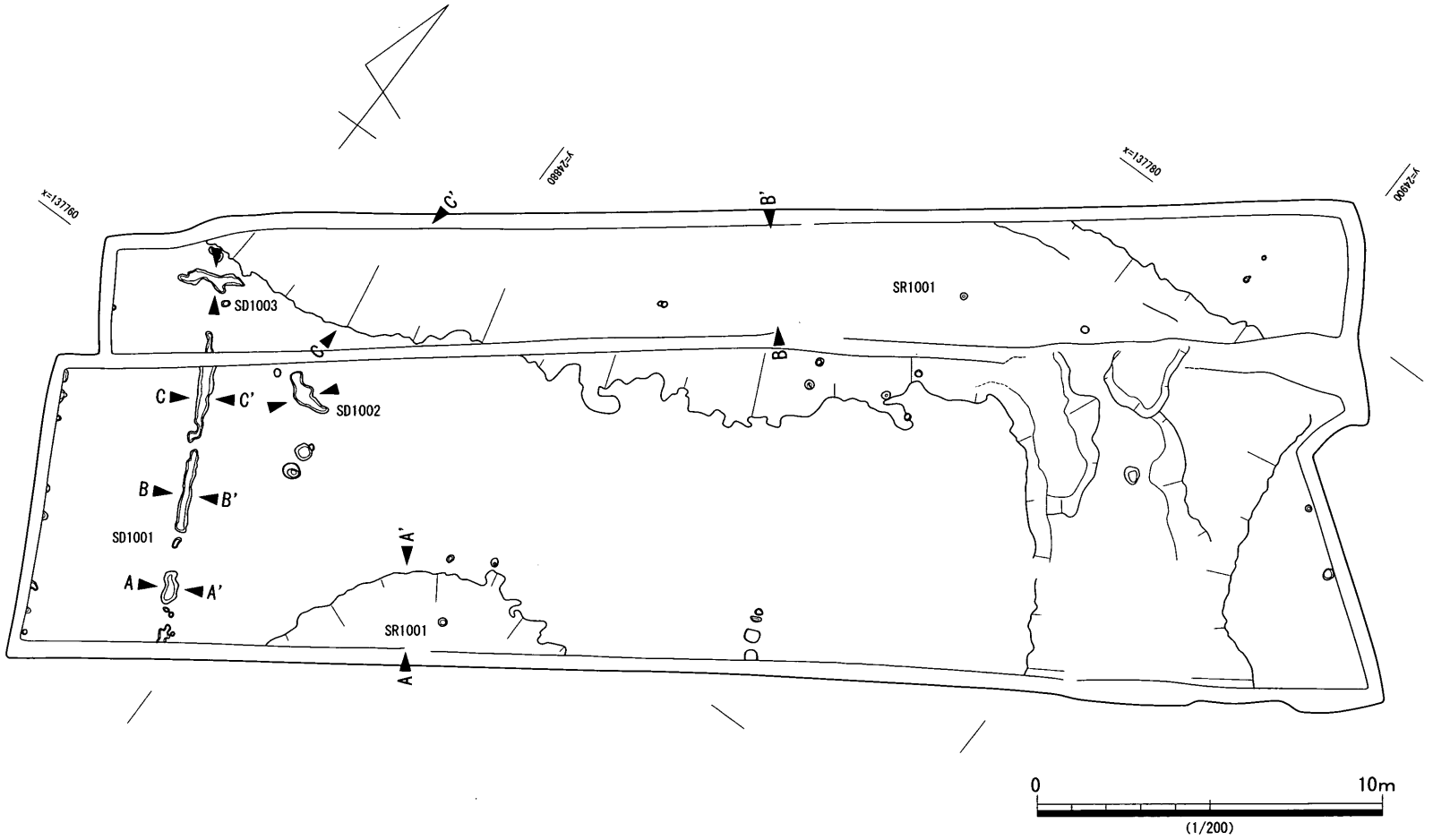
＜A区の調査成果＞

(1) 弥生時代の遺構・遺物

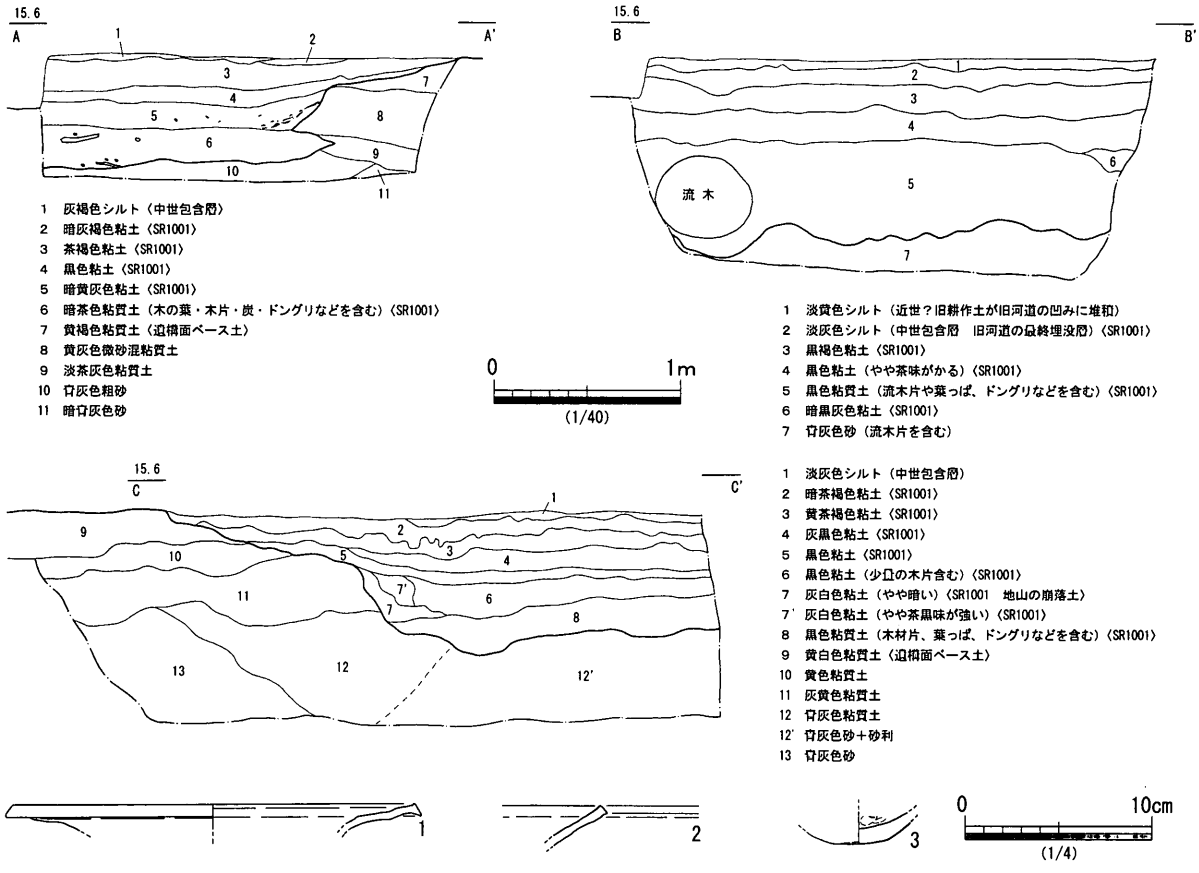
旧河道

SR1001（第41図）

調査区の南西隅と東部から北部にかけて検出した旧河道である。周辺地形から見て北流するが、大きく蛇行する。規模は最大幅7.2m、深さ0.55～0.85mを測る。埋土は上位で茶褐色系、下位で黒褐色系の粘質土が堆積し、砂層は見られない。よって比較的穏やかな堆積環境にあったと考えられる。また埋土最上位では淡灰色～灰褐色シルト（古代末～中世包含層）が堆積しており、この時期に土地が平坦



第 40 図　A 区 遺構配置図 (1/200)



第 41 図　SR1001 断面図 (1/40)・出土遺物 (1/4)

化したことが窺える。

なおこの旧河道の掘り込み面のベース土である黄褐色粘質土の下位では青灰色砂層が堆積しており、SR1001 より古い旧河道の存在が窺える。永井北遺跡より南へ約 300 m離れた永井遺跡では縄文時代後、晩期の土器、石器などが大量に出土した旧河道があり、そこでは同様な土層からこれらの遺物が出土している。このため遺物の存在に留意して掘削を行ったが、確認されなかった。

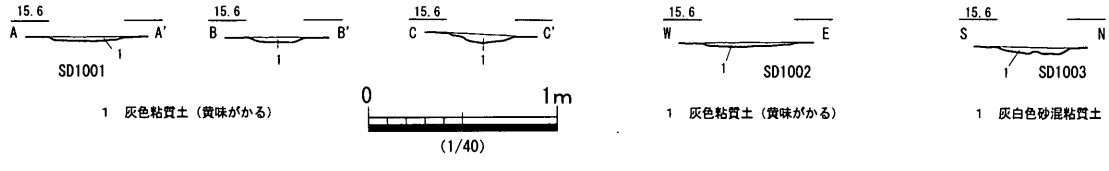
出土遺物には少量の弥生土器（1 ～ 3)、ドングリ、落ち葉などがあるが、土器は①トレンチからのみ出土した。1・2 は壺の口縁部である。1 は口縁端部を下方に、2 は上下に小さく拡張させる。これらより旧河道の時期は弥生時代後期後半に位置づけられる。

(2) 古代末～中世の遺構・遺物

溝状遺構

SD1001（第 42 図）

調査区の西部で検出した溝状遺構である。南部は調査区外に延び、幅 0.4 m前後、深さ 0.02 ～ 0.06 mを測る。主軸方向はＮ－ 28°－Ｗである。埋土は黄味がかる灰色粘質土である。出土遺物には弥生



第 42 図　SD1001 ～ 1003 断面図 (1/40)

土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は埋土より古代末～中世と考えられる。

SD1002（第 42 図）

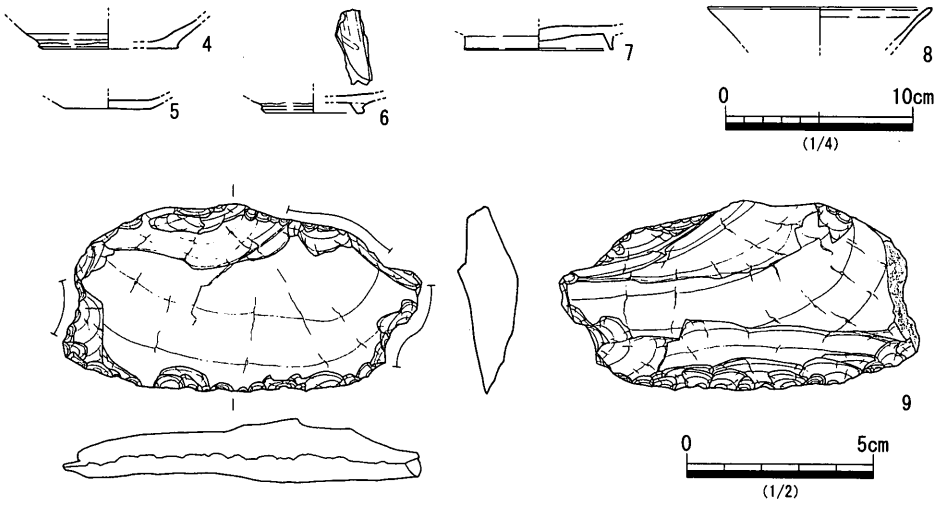
調査区の北西部で検出した溝状遺構である。平面形はＬ字状を呈し、最大幅0.5ｍ、深さ0.03ｍを測る。埋土は黄味がかる灰色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土より古代末～中世と考えられる。

SD1003（第 42 図）

調査区の北西部で検出した溝状遺構である。幅 0.45 ｍ、深さ 0.04 ｍを測る。埋土は灰白色砂混粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土より古代末～中世と考えられる。

その他の出土遺物（第 43 図）

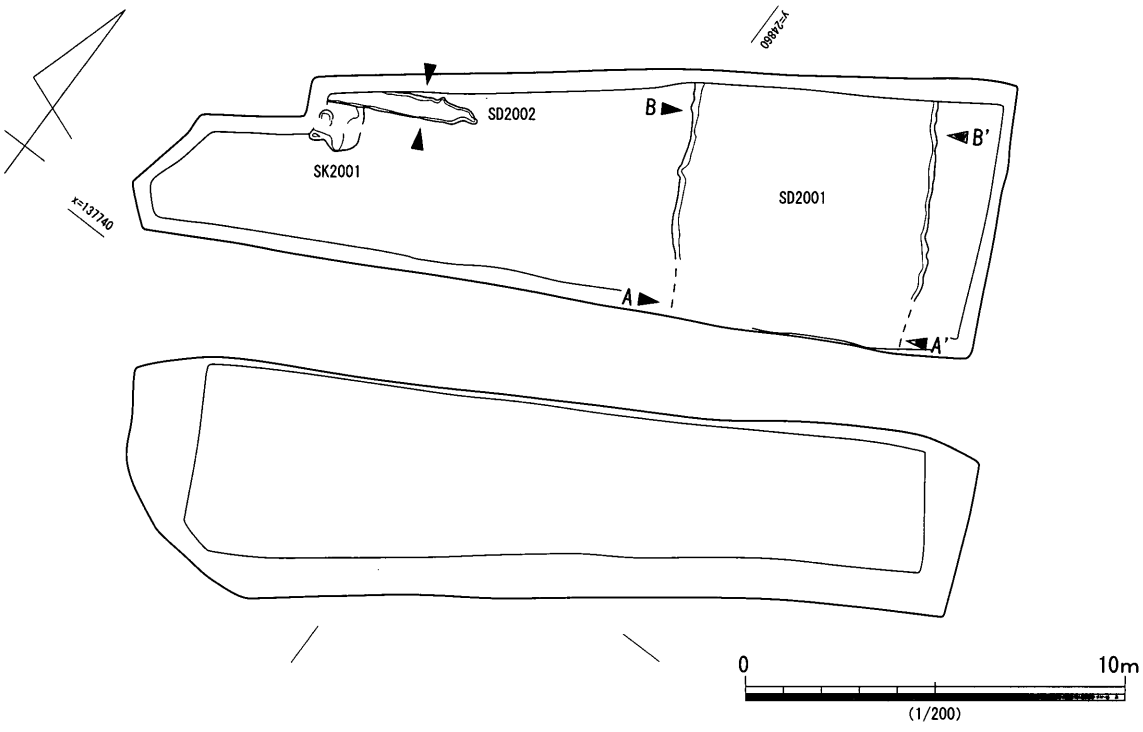
4 ～ 9 はＡ区の遺構外からの出土遺物である。4・5 は土師器杯である。どちらも底部は回転ヘラ切りするが、4 は底・体部の境界が小さく直立し円盤状高台状を呈する。11 世紀代に位置づけられる。6 は土師器椀である。底部は回転ヘラ切りした後、小さい高台を貼りつける。内面にはまばらなヘラミガキが見られる。7 は黒色土器椀である。細長い高台をもつ。8 は須恵器杯である。体部から口縁部にかけて直線的に強く外傾する。10 世紀代に位置づけられる。9 は打製石庖丁である。背部は両面とも大きい剥離を加えた後で背潰しを行っており粗い作りであるが、刃部は細かい調整剥離を加えて丁寧に作っている。Ａ区では検出遺構がきわめて希薄であり、遺物も遺構の内外を問わず乏しい。だが、遺構外出土遺物として報告した土器は概ね 10、11 世紀代に位置づけられる。このことは SR1001 が完全に埋没し、平坦化したこの時期以降に A 区部分が耕作地などに土地利用されていたことを示唆する。



第 43 図　Ａ区 出土遺物 (1/4・1/2)

＜Ｂ区の調査成果＞

調査対象地のうち、西部はＢ３トレンチ（第 37 図）の調査で遺構・遺物が確認されなかったため調査を終了した。



第 44 図　Ｂ区 遺構配置図 (1/200)

古代末～中世の遺構・遺物

溝状遺構

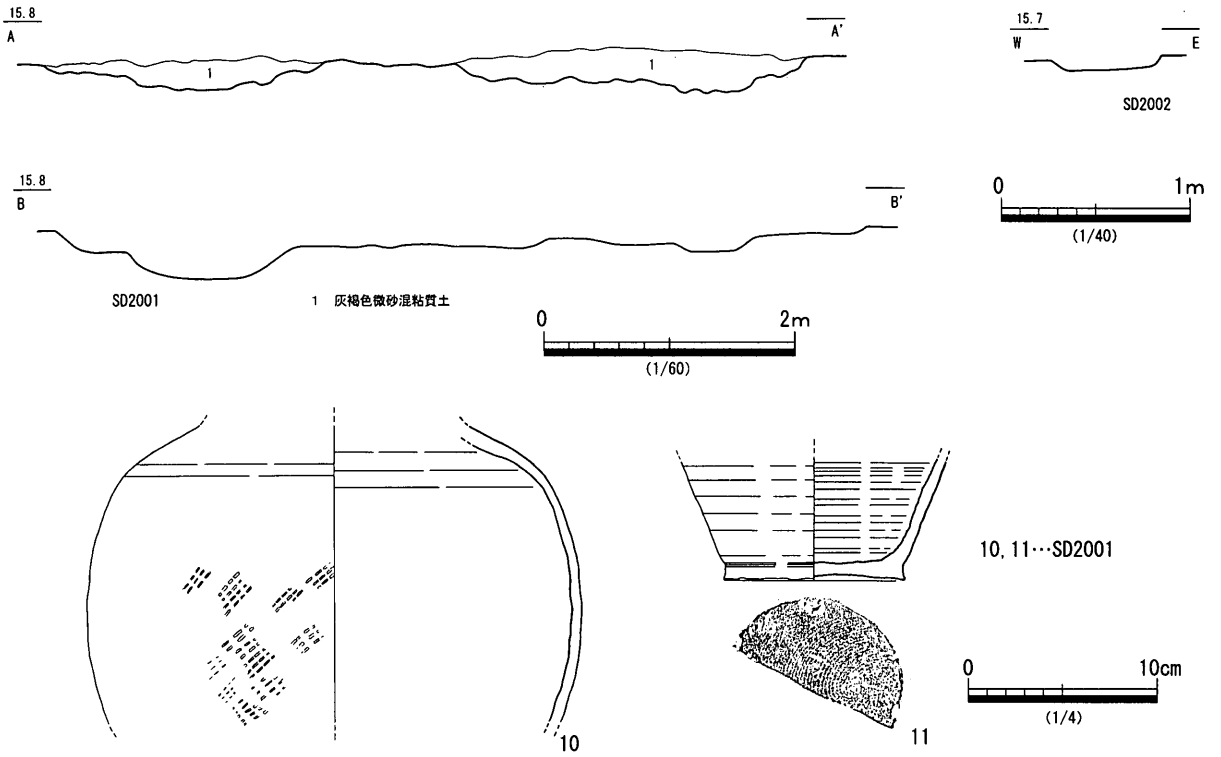
SD2001（第 45 図）

調査区東部で検出した溝状遺構である。北部は調査区外に延びる。また南部は未掘部の下位で途切れる。幅 6.7 m、深さ 0.25 ～ 0.32 mを測る。主軸方向はＮ－ 28°－Ｗである。検出位置と規模より条里坪界溝と見られる。埋土は主に薄い灰褐色系粘質土である。ただ北部では下位で灰色系砂質土が堆積しており、遺物の多くがこの層より出土した。

出土遺物には須恵器甕 (10)、壺 (11) がある。10 は体部外面に格子叩きを施した後、回転ナデを加えてこれをナデ消している。11 は篠焼であり、底部を静止糸切りする。出土遺物には弥生土器、石器(削器・楔形石器・剥片)、須恵器がそれぞれごく少量ある。溝状遺構の時期は出土遺物より古代末と考えられる。

SD2002（第 45 図）

調査区の北西部で検出した溝状遺構である。SK2001 を切り、最大幅 0.55 m、深さ 0.07 mを測る。埋土は黄味がかる淡灰色粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土より古代末～中世と考えられる。

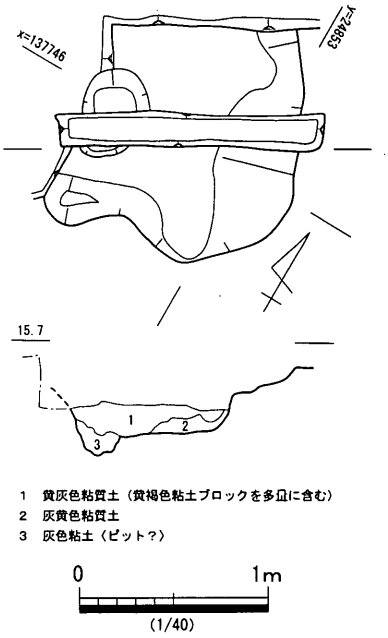


第 45 図　SD2001 断面図 (1/60)・出土遺物 (1/4)・SD2002 断面図 (1/40)

土坑

SK2001（第 46 図）

調査区西側で検出した土坑である。北部を SD2002 に切られ、西側は調査区外に延びる。平面形はやや不整な方形と推定される。規模は東西 1.6 m以上、南北 1.2 m以上、深さ 0.4 mを測る。埋土は黄灰色系粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代末～中世と考えられる。



第 46 図　SK2001 平・断面図 (1/40)

＜C 区の調査成果＞

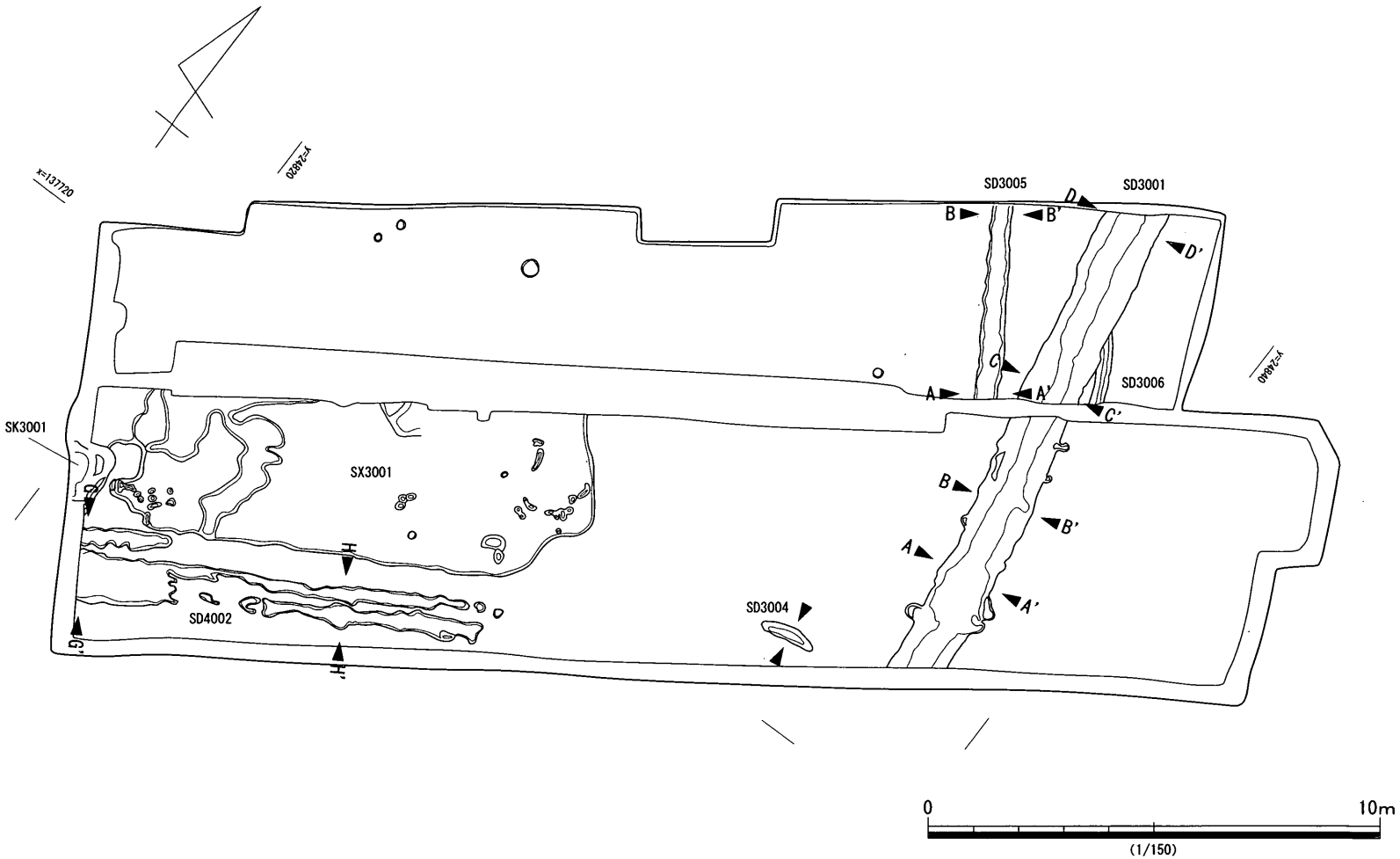
(1) 弥生時代の遺構・遺物

溝状遺構

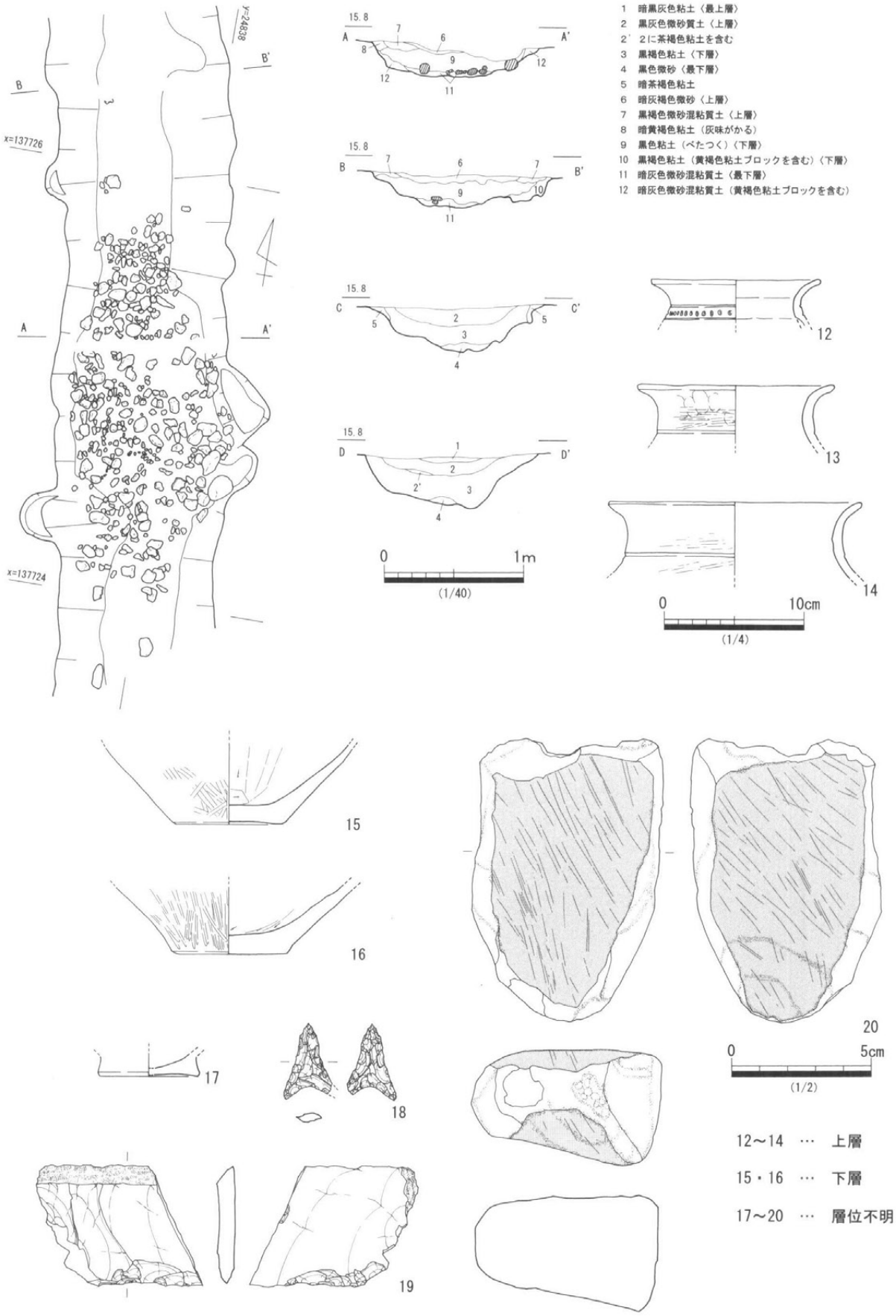
SD3001（第 48 図）

調査区の東側で検出した溝状遺構である。幅 1.5 m、深さ 0.25 ～ 0.35 mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は遺構の残りが最もよいD－D´ ラインを見ると 4 層に大別でき、粘土と微砂（質土）が互層に堆積している。そして他の土層でも最上層（1 層）より下位の土層堆積状況は同様である。このため流水と滞水が繰り返される環境にあったと推定される。

またこぶし大程度の礫が南側で部分的に密集して検出された。これらの礫は概ね底面の平坦面上にあり、層位的には最下層の黒褐色系微砂（混粘質土）より出土した。この土層より最下層の堆積時には緩やかな流水はあるものの比較的穏やかな環境にあったと推定される。よってこの礫は自然の流水作用に



第 47 図　C区 遺構配置図 (1/150)



第48図　SD3001 断面図・遺物出土状況（1/40）・出土遺物（1/4）

よらず、人為的な行為により集積したと考えられる。ただ面を揃えるとか、敷き詰めたというレベルでの意図的な配置はなされていない。

礫群の性格については2つの可能性がある。1つは単なる廃棄である。ただ、形成されたのが最下層の堆積段階であり、その後もSD3001が機能しているため考えにくい。2つめは堰である。同様な事例は高松市林・坊城遺跡(※)の縄文時代晩期末の10号溝で礫の集積として検出され、「簡易な堰」と報告されている。10号溝の堰の手前では分水される小規模な溝状遺構が数条検出されているため妥当な評価であろう。

この例と比較するとSD3001付近では分水される溝状遺構が検出されていない。だが、SD3001で流水と停止が繰り返されたことはSD3001を経由して配水を受ける水田での給排水とある程度対応していると見られる。よってこの礫群の性格は堰であり、分水される溝状遺構が確認されていないのは南側の調査区外に存在するか後世の削平のため失われたかであると考える。

出土遺物には少量の弥生土器、石器がある。12～14は上層の出土遺物であり、いずれも壺の口縁部である。12は頸部に2条のヘラ描き沈線を施し、その間を刺突文で充填する。13・14は頸部の段から口縁部にかけて直立させた後、小さく外反させる。調整は摩滅が著しいものの外面ではヘラミガキが見られる。15・16は下層から出土した壺の底部である。外面には縦方向へ著しいヘラミガキを行い、内面には板ナデを認める。17～20は出土層位不明の遺物である。17は甕の底部である。底端部から体部に向かってやや窪む。18は凹基式の石鏃である。縁辺部、基部ともに細かい調整剥離を加えていない部分があり、粗い作りである。19は削器である。刃部の両面に調整剥離を加える部分は限られているが、これは厚みが大きい部分だけ厚みを減じるために調整しているためである。20は砂岩製の砥石である。研磨により両面とも強く磨耗している。また下端部には敲打痕が見られ、叩き石としても使用されている。溝状遺構の時期は出土土器より弥生前期後半と考えられる。

(※) 信里芳紀「林・坊城遺跡Ⅱ」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第53冊　中森遺跡　林・坊城遺跡Ⅱ　東山崎・水田遺跡Ⅱ』 香川県教育委員会 (2004)

(2) 中世以前の遺構・遺物

溝状遺構

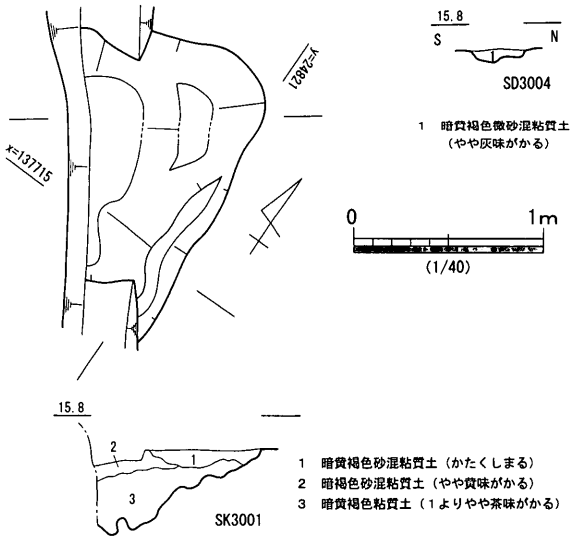
SD3004（第49図）

調査区の南東部で検出した溝状遺構である。幅0.35 m、深さ0.06 mを測る。埋土は暗黄褐色微砂混粘質土である。出土遺物はない。溝状遺構の時期は類似した埋土をもつSK3001が中世以前と判断されるため、中世以前と考えられる。

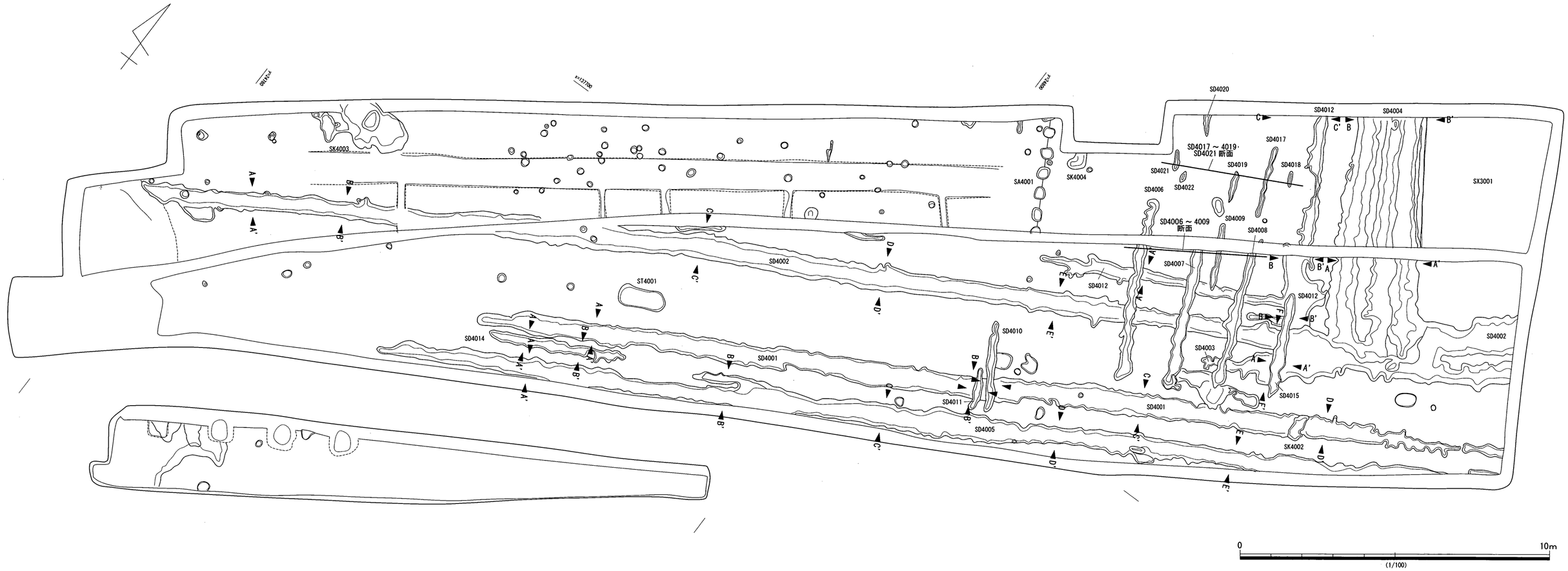
土坑

SK3001（第49図）

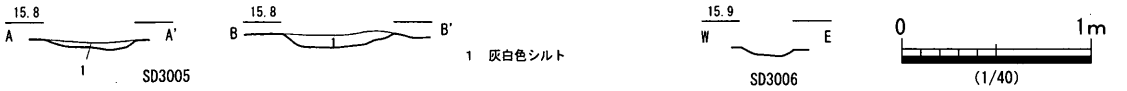
調査区西側で検出した土坑である。西部は調査区外に延び、SX3001に切られる。平面形はやや不整な方形と推定される。断面形は縁辺部で浅く、



第49図　SK3001平・断面図・SD3004断面図
(1/40)



第 50 図　D区 遺構配置図 (1/100)



第 51 図　SD3005・3006 断面図 (1/40)

中央に向かって急激に下る。規模は南北 1.6 m以上、東西 0.8 m以上、深さ 0.45 mを測る。埋土は 3 層に細分されるが、いずれも暗黄褐色系砂混粘質土である。出土遺物には弥生土器がごく少量ある。土坑の時期は古代末～中世に属する SX3001 に切られるため中世以前と考えられる。

(3) 古代末～中世の遺構・遺物

溝状遺構

SD3005（第 51 図）

調査区の北東部で検出した溝状遺構である。北部は調査区外に延び、南部は本来、調査区南部に延びていたはずであるが確認できていない。幅 0.52 m、深さ 0.07 mを測る。埋土は灰白色シルトである。主軸方向はＮ－ 34°－Ｗである。出土遺物には弥生土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は埋土より古代末～中世と考えられる。

SD3006（第 51 図）

調査区の北東部で検出した溝状遺構である。図化できていないが、SD3001 を切り込んで掘削されており、北部は調査区外に延びる。南部は本来、調査区南部に延びていたはずであるが確認できていない。幅 0.3 m、深さ 0.04 mを測る。埋土は灰白色シルトである。主軸方向はＮ－ 36°－Ｗである。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土より古代末～中世と考えられる。

性格不明遺構

SX3001（第 47 図）

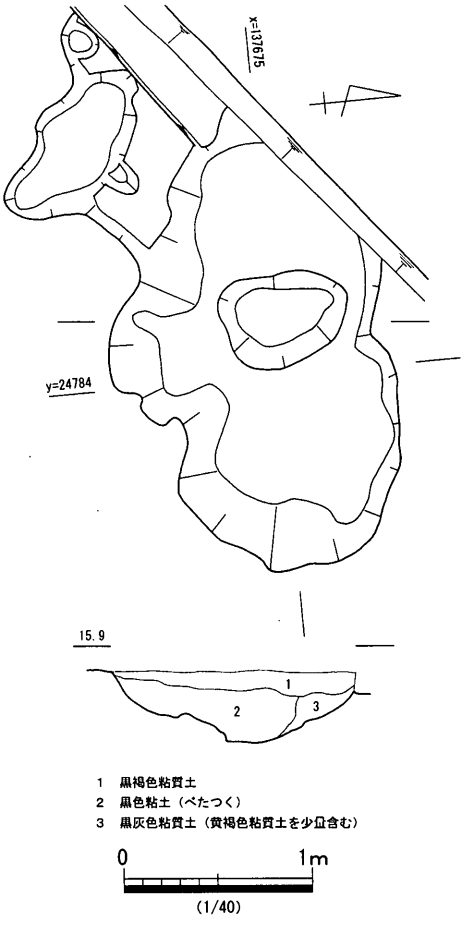
調査区西側からＤ区にかけて検出した浅い落ち込みである。平面形は方形であり、断面形は皿状を呈し、底場には起伏が著しい。規模は長径約 19 m、短径 5.2 m、深さ 0.15 mを測る。埋土は灰白色シルトである。遺構の性格は平面形の南側と東側をＤ区 SD4002・4004 という一連の溝状遺構に接し、規制されたかの様な配置を採ること、規模や形状から畑などの耕作地であると考えられる。出土遺物はない。遺構の時期は SD4002・4004 との関係から 10 世紀前半と考えられる。

＜Ｄ区の調査成果＞

(1) 弥生時代の遺構・遺物

土坑

SK4003（第 52 図）



第 52 図　SK4003 平・断面図 (1/40)

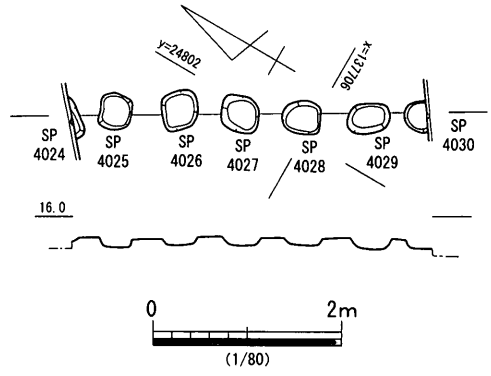
調査区の北西部で検出した土坑である。北部は調査区外に延びる。平面形は凹凸がある隅丸方形と推定される。断面形はU字状を呈する。規模は東西3.2ｍ以上、南北1.6ｍ以上、深さ0.35ｍを測る。埋土は3層に細分されるが、黒褐色系粘質土である。出土遺物にはごく少量のサヌカイト片がある。土坑の時期は埋土より弥生時代と考えられる。

(2) 古代末～中世の遺構・遺物

柵列跡

SA4001（第53・57図）

調査区の中央北部で検出した柵列跡である。北側は調査区外に延びるため規模は6間以上である。主軸方向はN－30°－Wである。柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、径は0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土は黄灰色微砂混粘質土である。これは東側に接する12世紀代の鋤溝群（西からSD4006・4021・4022・4020・4007・4009・4019・4017・4008・4015）でも多く見られる埋土であり、配置も合わせて考えると同時併存したと考えられる。出土遺物には12世紀後半の土師器椀（36）がある。柵列跡の時期は出土遺物と鋤溝群との関係から12世紀後半に位置づけられる。



第53図　SA4001 平・断面図（1/80）

溝状遺構

SD4001（第54図）

調査区の南部で検出した溝状遺構である。東側は調査区外に延び、SD4010・4011、SK4002に切られる。幅0.9ｍ、深さ0.08ｍを測る。埋土は灰色系粘質土である。主軸方向はN－59°－Eである。検出位置から見て条里坪界溝と考えられる。

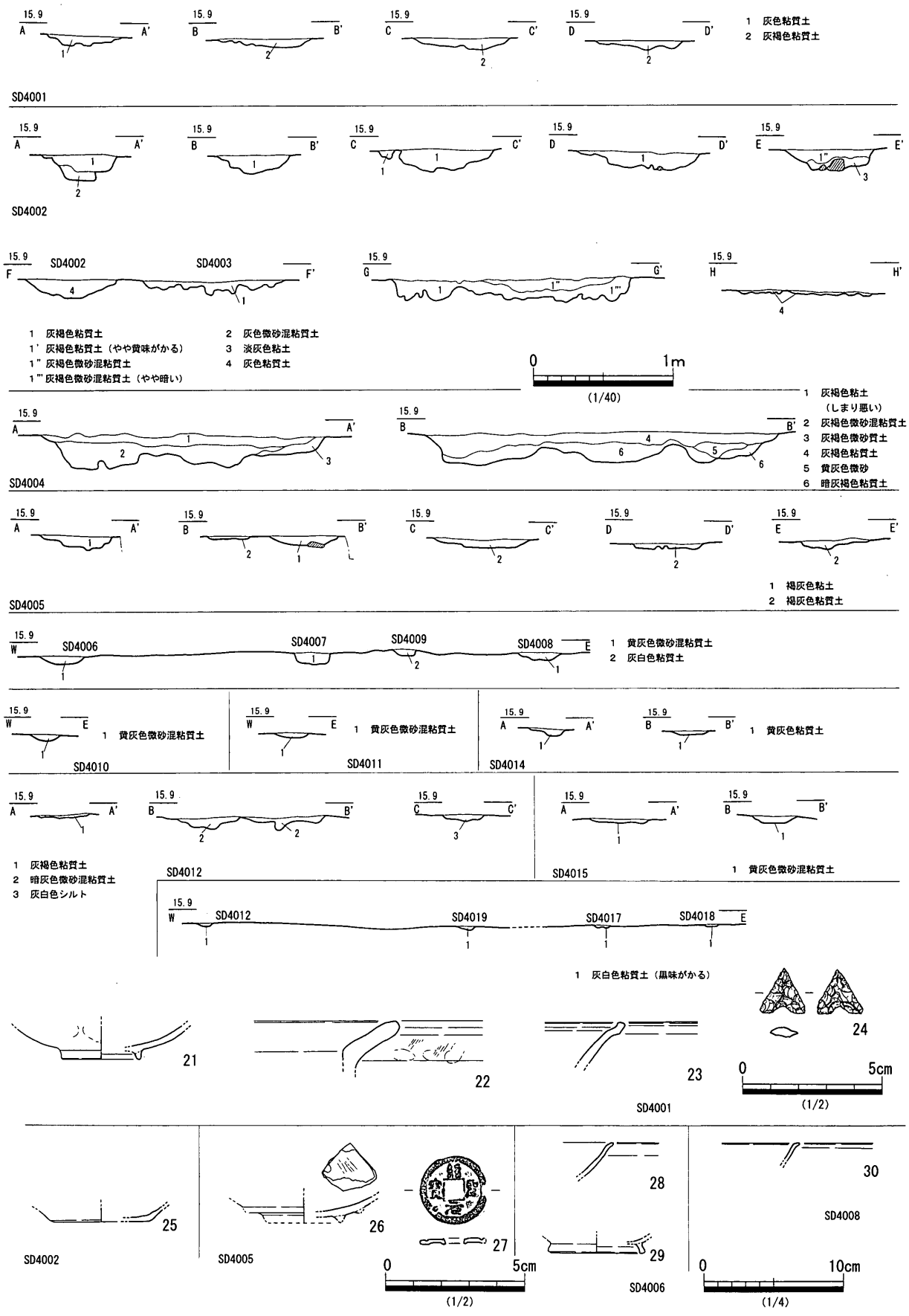
出土遺物には弥生土器、サヌカイト、土師器、瓦器椀（21）、土師質土器甕（22）、須恵器壺（23）、石鏃（24）がごく少量ある。21は小さい高台を貼り付ける。時期は12世紀代と考えられる。22は口頸部外面に指オサエが目立つ。時期は古代である。23は内外面に薄く自然釉が付着する。24は形状、剥離面の大きさが整い丁寧に作られている。溝状遺構の時期は出土遺物より12世紀代と考えられる。

SD4002・4004（第54図）

調査区の南部、東部で検出した2条の溝状遺構である。平面形は大きくはT字状であり東西方向に走るSD4002から派生するSD4004はD区東端部で北へ向かって屈曲する。この屈曲部以東ではSD4002の幅が広がり、C区に延びる。

SD4002はSD4006～4009・4015に切られ、SD4012を切る。幅は屈曲部以西で幅0.8ｍ、深さ0.11～0.18ｍ、以東で幅2.4ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は薄い灰褐色系粘質土である。主軸方向はN－62°－Eである。検出位置から見て条里坪界溝と考えられる。またSD4004は幅2.4～3.5ｍ、深さ0.2ｍを測る。断面形は底場で凹凸がある。埋土はやはり薄い灰褐色系粘質土である。SD4002との交差部の北東側に接してSX3001が広がる。

出土遺物には弥生土器、サヌカイト、土師器、須恵器杯（25）がごく少量ある。25は焼きが悪く、



第54図　SD4001～4012・4014・4015・4017～4019断面図（1/40）・SD4001・4002・4005・4006・4008出土遺物（1/4・1/2）

灰白色を呈する。時期は10世紀前半と考えられる。溝状遺構の時期は出土遺物より10世紀前半と考えられる。

SD4005（第54図）

調査区の南部で検出した溝状遺構である。東側は調査区外に延びる。幅1.0～1.1m、深さ0.05～0.08mを測る。埋土は褐灰色系粘質土である。主軸方向はN－61°－Eである。検出位置から見て条里坪界溝と考えられる。出土遺物には弥生土器、サヌカイト、須恵器、土師器、瓦器、黒色土器托状椀(26)、青磁、銅銭(27)などが少量ある。26は外面に回転ナデ、内面にヘラミガキを加える。27は北宋銭の「紹聖元寶」(初鋳年1094年)である。溝状遺構の時期は出土遺物より12世紀代と考えられる。

SD4006～4009・4015・4017～4022（第54図）

調査区の東部で検出した南北方向に走る小溝群である。互いに0.5～1.0m程度の間隔を空けて並ぶため鋤溝と考えられる。埋土は黄灰色微砂混粘質土が主体である。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器などがごく少量あり、SD4006から土師器椀(28・29)、SD4008からは土師器椀(30)が出土した。28・30は口縁部外面に強いナデを加え、口縁端部を外反させる。29は断面方形の高台である。28は11世紀後半～12世紀前半、29・30は11～12世紀代に位置づけられる。

鋤溝と同時期の遺構についてはまず坪界溝であるSD4001(12世紀代)が挙げられる。これは両者の出土遺物の時期がほぼ同時期であることによる。またこのことは鋤溝群がSD4002・4012を切る一方でSD4001とは一定間隔を空けるという配置からも首肯できる。次いで柵列跡であるSA4001(12世紀後半)は埋土と出土遺物より同時期と考えられる。この柵列跡の西側には古代末～中世に属する柱穴群が分布するため東側にある鋤溝群とは柵列跡により区画されたと見られる。以上より坪界溝であるSD4001に区画された坪内に形成された居住域(調査区北西部の柱穴群)と耕作地(鋤溝群)が柵列跡(SA4001)により区画された状況を復元できる。以上の別遺構との関係も考慮すると、鋤溝の時期は12世紀代と考えられる。

SD4010・4011（第54図）

調査区の南部で検出した溝状遺構である。どちらもSD4001を切り、幅0.3m、深さ0.05mを測る。埋土は黄灰色微砂混粘質土である。主軸方向はN－30°－Wである。SD4010から弥生土器がごく少量出土した。溝状遺構の時期は12世紀代に位置づけられるSD4001を切るため12世紀代以降と考えられる。

SD4012（第54図）

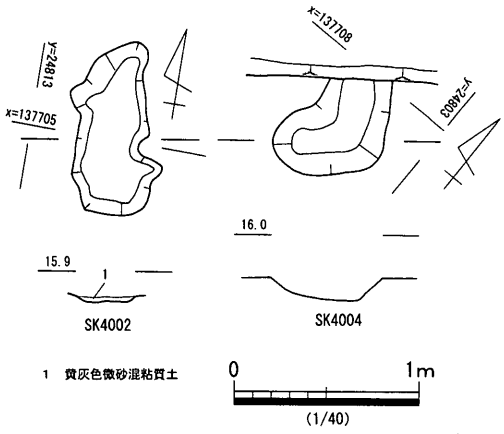
調査区の東部で検出した溝状遺構である。SD4002・4006～4009・4015に切られる。主軸方向を揃え、近接した位置にあり同様な地点で屈曲するSD4002・4004に先行する溝状遺構と考えられる。埋土は灰褐色系粘質土である。出土遺物には弥生土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は10世紀前半に位置づけられるSD4002に切られることから10世紀前半以前と考えられる。

SD4014（第54図）

調査区の西部で検出した溝状遺構である。幅0.3～0.6m、深さ0.03～0.06mを測る。主軸方向はN－63°－Eである。埋土は黄灰色系粘質土である。出土遺物にはごく少量の古代の須恵器甕がある。溝状遺構の時期は埋土より古代末～中世と考えられる。

土坑

SK4002（第55図）



第55図　SK4002・4004平・断面図（1/40）

調査区の南東部で検出した土坑である。SD4001を切る。平面形は不整な方形、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径0.9m、短径0.4m、深さ0.03mを測る。埋土は黄灰色微砂混粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は12世紀代に位置づけられるSD4001を切るため12世紀代以降と考えられる。

SK4004（第55図）

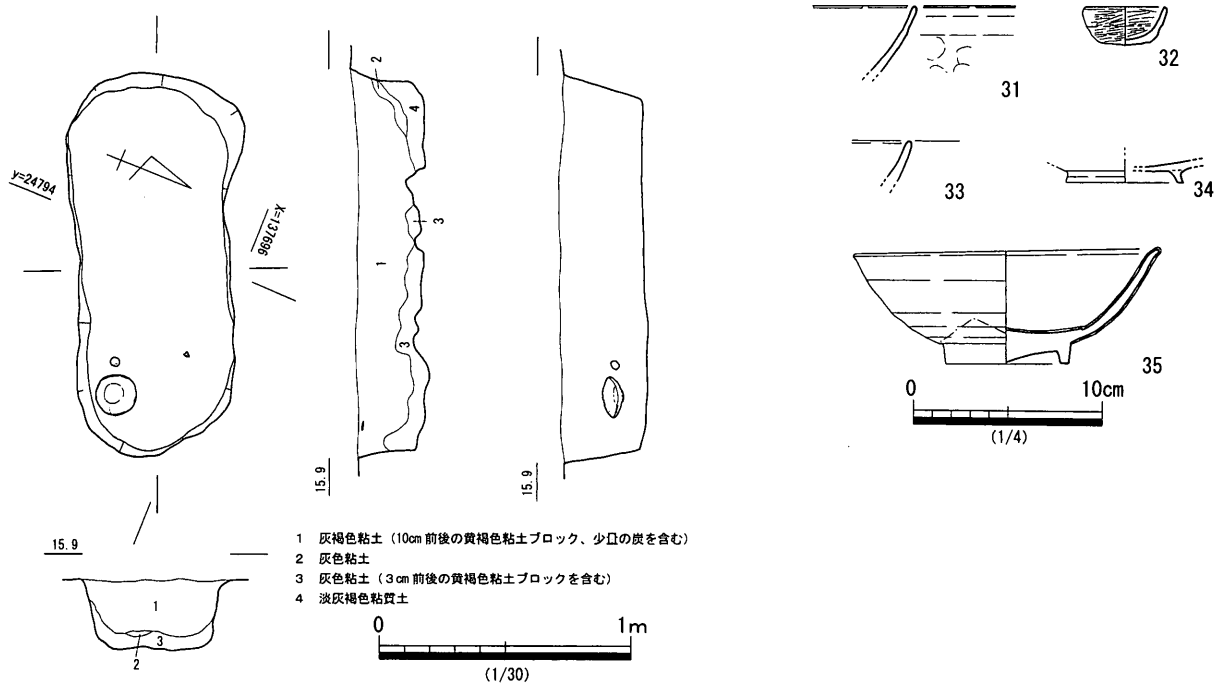
調査区の北東部で検出した土坑である。北側は調査区外に延びるが、平面形は「く」の字状を呈し、断面形は皿状である。規模は南北0.5m以上、東西0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は灰白色粘質土である。出土遺物はない。土坑の時期は埋土より古代末～中世と考えられる。

墓

ST4001（第56図）

調査区の西部で検出した土壙墓である。平面形は西側でやや膨らむが、整った長楕円形である。断面形は壁がほぼ直立し底面は平坦であるが、微妙な凹凸がある。規模は長径1.5m、東西0.6m、深さ0.38mを測る。埋土は灰色系粘質土であり、1・3層には地山ブロックを含み、人為的な埋め戻しを示すと考えられる。ただ棺痕跡は明確でない。

出土遺物には瓦器椀（31・32）、土師器杯（33）、黒色土器椀（34）、白磁碗（35）、骨の小片などがある。31は外面に強いナデと顕著な指オサエが見られ、和泉系の瓦器椀と見られる。12世紀代～13世紀前半に位置づけられる。32は通常の瓦器椀とは異なる盃状の小型品である。内外面に炭素が吸着し、細かいヘラミガキを密に施す。また底部外面にも回転ヘラ削り後にヘラミガキを加える。34は白磁V類で

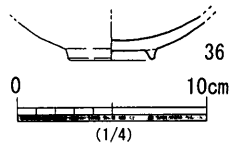


第56図　ST4001平・断面図（1/30）・出土遺物（1/4）

ある。高台の設置面が磨耗しており、長期に渡る使用が推測される。このうち35は完形であり、32も口縁部を一部欠くのみであることから副葬品と考えられる。35の出土状況については口縁部を上位に向けており、3層の上面で出土した。またそのすぐ西側で同レベルより丸い小石が出土している。経などの文字の記入は見られない。

これらの遺物は口縁部を上位に向けた出土状況、レベルから見て原位置を保っていると考えられる。(木棺が用いられていたとしても棺蓋上に設置された副葬品が蓋の腐朽により落下するという2次的な移動が生じたとは考えにくい。) また3・4層はほぼ水平に堆積する。よって3・4層は墓壙掘削後に床面に敷かれた置き土と考えられる。

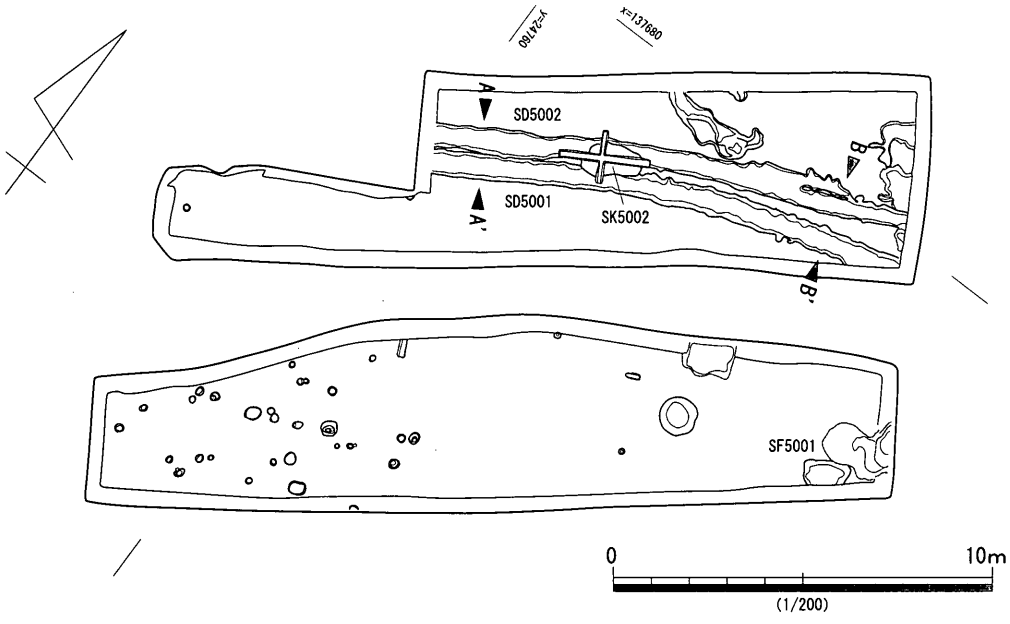
墓の時期は瓦器椀、白磁碗および周辺遺構の時期より12世紀代と考えられる。



第57図　D区 SP 出土遺物 (1/4)

ピット出土遺物 (第57図)

36はSP4026からの出土した土師器椀である。小さい三角形の高台をもつ。12世紀後半に位置づけられる。



第58図　E区 遺構配置図 (1/200)

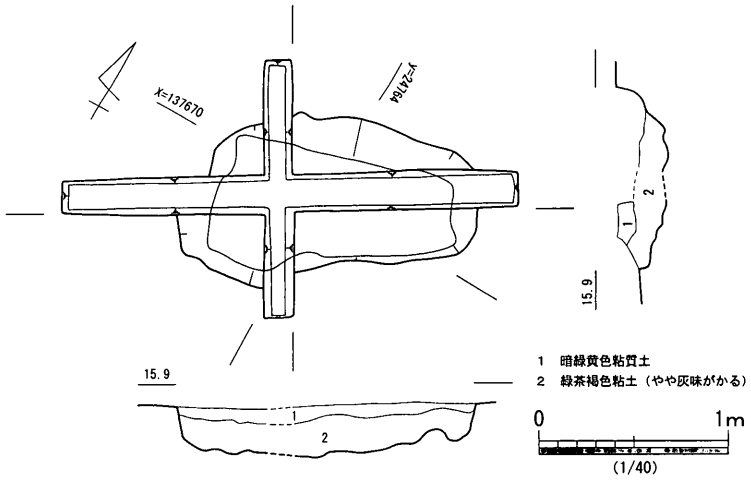
＜E区の調査成果＞

(1) 中世以前の遺構・遺物

土坑

SK5002 (第59図)

調査区の北部で検出した土坑である。SD5001・5002に切られる。平面形は西側で広がる方形、断面形は壁が直立気味で底場は中央へ緩やかに下る。規模は長径1.6m、短径0.86m、深さ0.27mを測る。埋土は暗黄褐色系粘質土である。出土遺物は



第59図　SK5002 平・断面図 (1/40)

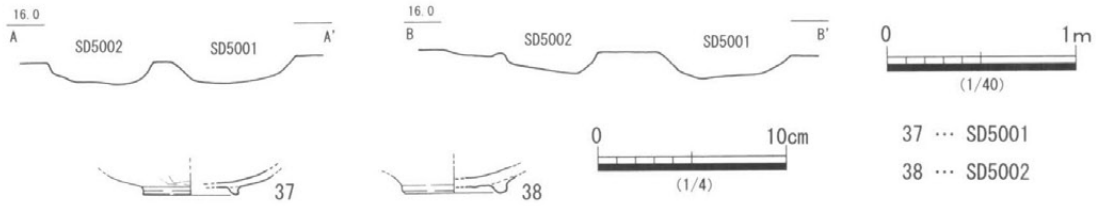
ない。土坑の時期はC区SK3001などと類似した埋土と遺構の切り合いより中世以前と考えられる。

(2) 古代末～中世の遺構・遺物

溝状遺構

SD5001・5002（第60図）

調査区の北部で検出した溝状遺構である。SD5001がSD5002を切る。どちらも西側では直線的であるが、東側では南側へ向かって緩やかに曲がる。幅0.5～0.7m、深さ0.1～0.12mを測る。主軸方向は西側でN－60°－Eである。埋土はともに黄味がかった灰褐色系粘質土である。遺物はSD5001から弥生土器、須恵器、土師器、瓦器椀（37）がごく少量、SD5002から弥生土器、須恵器、黒色土器A類椀（38）がごく少量出土した。37は矮小な高台を、38は断面方形の太い高台をもつ。37は12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる。溝状遺構の時期は出土遺物よりSD5001が12世紀末～13世紀初頭、SD5002が遺構の切り合いから13世紀初頭以前であるが、埋土の類似よりSD5001と近接した時期と考えられる。



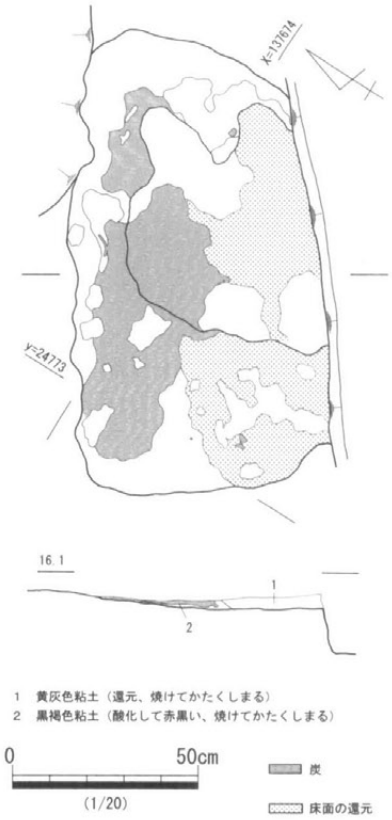
第60図　SD5001・5002断面図（1/40）・出土遺物（1/4）

(3) 中世以降の遺構・遺物

焼成遺構

SF5001（第61図）

調査区の南東部で検出した焼成遺構である。掘り込み面は古代末～中世の包含層である淡灰色粘質土である。南部は調査区外に延びるが、調査区南壁では東西幅0.5m程度しかかからない。よって平面形は南部で狭まる三角形状を呈すると推定される。規模は長径2.5m、短径1.6m以上を測る。床面は薄く粘土を貼って構築しているが、南へ向かって緩やかに下るので南側に焚き口が存在したと考えられる。出土遺物はない。遺構の時期は掘り込み面より中世以降と考えられる。



第61図　SF5001平・断面図（1/40）

＜F区の調査成果＞

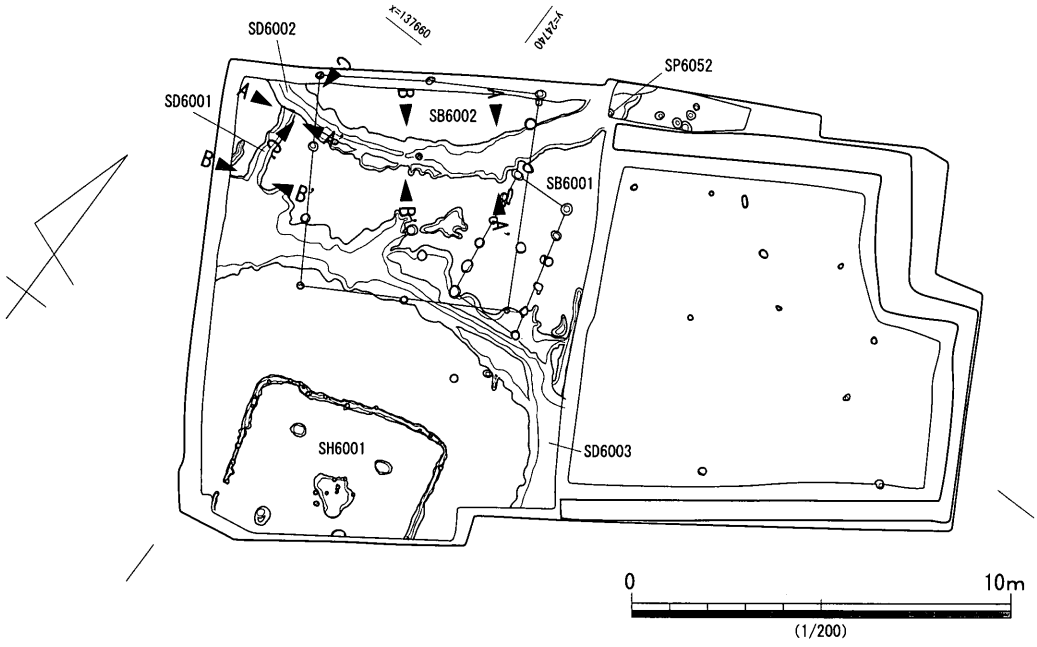
(1) 弥生時代の遺構・遺物

建物跡

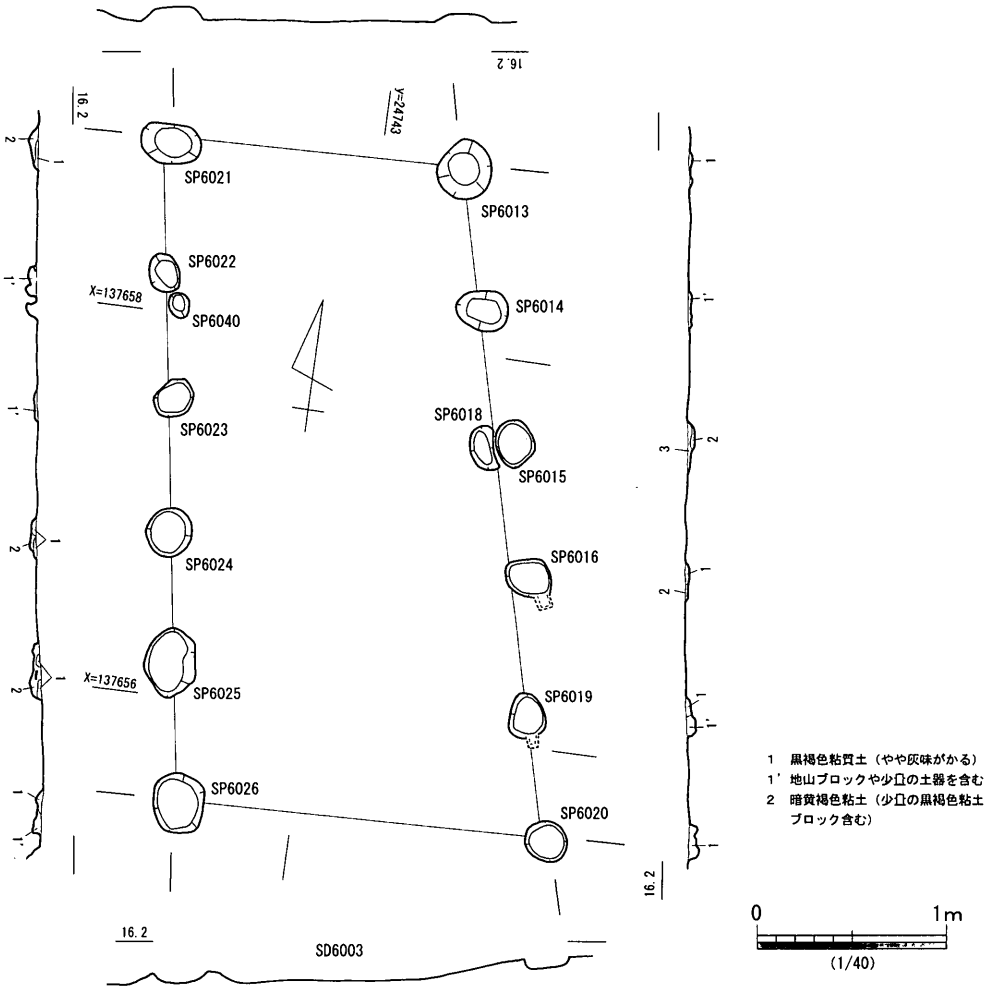
SB6001（第63図）

調査区中央部で検出した側柱建物である。SD6002・6003の間に位置し、SP6019・6020・6026はSD6003下層を切る。

規模は梁間1間×桁行5間（1.6m×3.5m。床面積5.6㎡。）



第 62 図　F 区 遺構配置図 (1/200)



第 63 図　SB6001 平・断面図 (1/40)

である。主軸方向はN－10°－Wである。柱穴の規模は0.2～0.33m、深さ0.02～0.05mを測る。柱穴跡の中心間距離は梁間が1.6mと1.88m、桁行が0.6～0.8mとかなり狭い。埋土は黒褐色粘質土である。SP6015・6022に接してSB6001構成柱穴と同程度の径、深度と埋土をもつ柱穴跡が検出されており、建て替えられたと考えられる。出土遺物には少量の弥生土器がある。

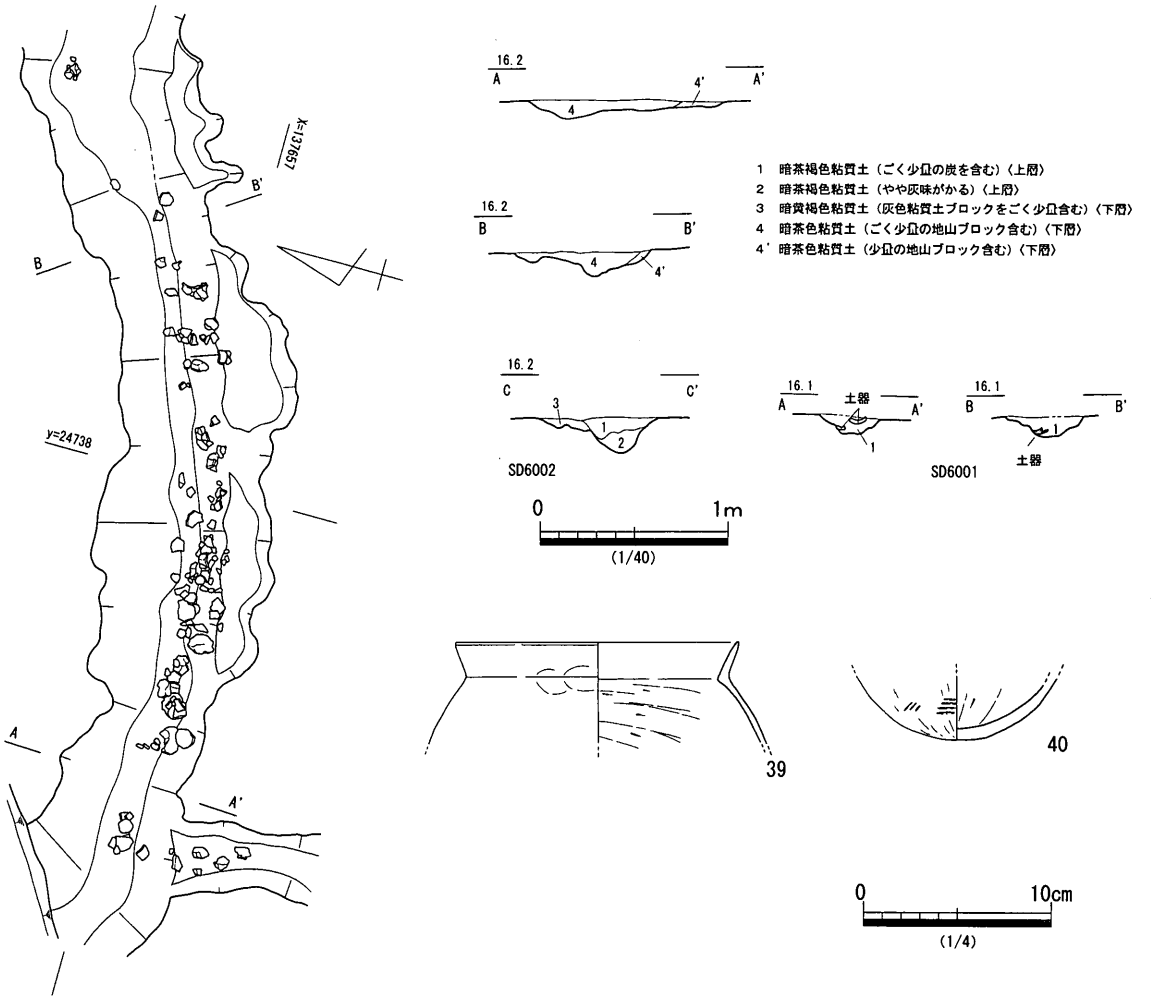
建物跡の時期は弥生土器細片が出土していること、SH6001と主軸方向を揃え、埋土も類似することよりSH6001と同じく弥生時代終末期に属すると考える。この場合SH6001と併存するSD6003を切る点が問題となるが、下層しか切っていないため上層の埋没途中の時期にSB6001が形成されたと考える。

溝状遺構

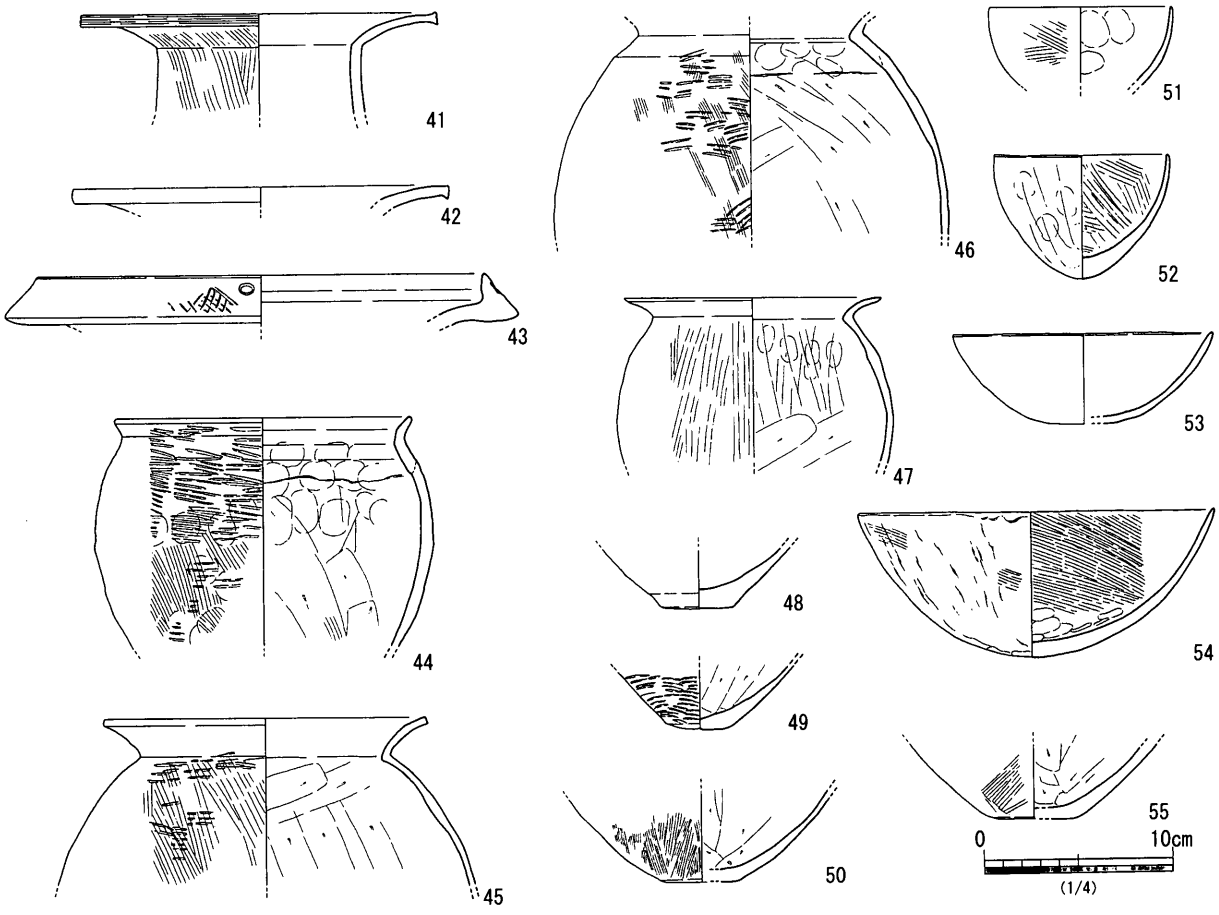
SD6001・6002（第64・65図）

SD6002は調査区の北西部で検出した弧を描く溝状遺構である。竪穴住居跡を囲む状況は未確認であるが、後述するSD6003と同様に周溝と考えられる。これはSD6002と6003を結ぶ小溝（SD6001）とこれらの溝状遺構がそれぞれ埋土を共有することや出土遺物よりSD6002がSD6003やSH6001と同じく弥生時代終末期に位置づけられること、規模や形状が周溝であるSD6003に類似することによる。

規模は幅0.6～1.2m、深さ0.1～0.18mを測る。埋土は4層に分けられるが、2層に大別できる。上層（1・2層）は暗茶褐色系粘質土である。ほぼC断面以西でのみ確認できたが、C断面と調査区北壁



第64図　SD6001・6002断面図・遺物出土状況（1/40）・出土遺物（1/4）



第 65 図　SD6002 出土遺物（下層）(1/4)

で断面形状を見ると下層を切り込んでいるため掘り直しされていると考える。下層（3・4・4' 層）は暗黄褐色系粘質土である。少量の地山ブロックや地山に由来する黄褐色系の堆積土が見られる。

出土遺物には 28 リットル入りコンテナ 1.5 箱の弥生土器がある。これらは概ね溝状遺構の中央部から層位的には下層を中心として出土した。41 ～ 55 は下層からの出土遺物である。41 ～ 43 は壺である。41 は直立する頸部、屈曲して外上方に延びる口縁部をもつ。口縁部は上下に小さく拡張し、ごく浅い凹線を施す。調整は口縁部から頸部にかけて縦ハケであるが、口縁部上位ではヨコナデによりナデ消す。42 は 41 と同様な器形を呈する。43 は口縁部を上下に拡張し、内傾させる。断面形は三角形状を呈するが、その外面には鋸歯文と竹管文が見られる。44 ～ 47 は甕である。44 は肩が張らない体部から小さく口縁部を外反させる。口縁部にも体部と同様にタタキが見られるためこれが折り返して形成されたことが窺える。

内面は頸部以下でヘラ削り、上部で著しい指オサエを認める。45 ～ 47 は体部が卵形を呈する。調整は 45・46 で外面にタタキ後ハケ目、内面で頸部以下にヘラ削りを加える。48 ～ 50・55 は底部である。いずれも平底で丸味は帯びていないが、底径は小さい。調整は外面では 49 がタタキ、50、55 がハケ目であり、内面では 49・50・55 でヘラ削りである。51 ～ 54 は鉢である。51・52 は小型でやや深く、同様な器形を呈する。52 は底部に丸味を帯びるものの、突出気味である。外面は板ナデ、内面はハケ目調整する。54 は底部が 53 と同様に平底であるが、かなり丸みを帯びる。調整は外面にシワが目立つが、内面では丁寧に横ハケを加える。これらの遺物は弥生時代終末期に位置づけられるため SD6002 はこの時期に位置づけられる。

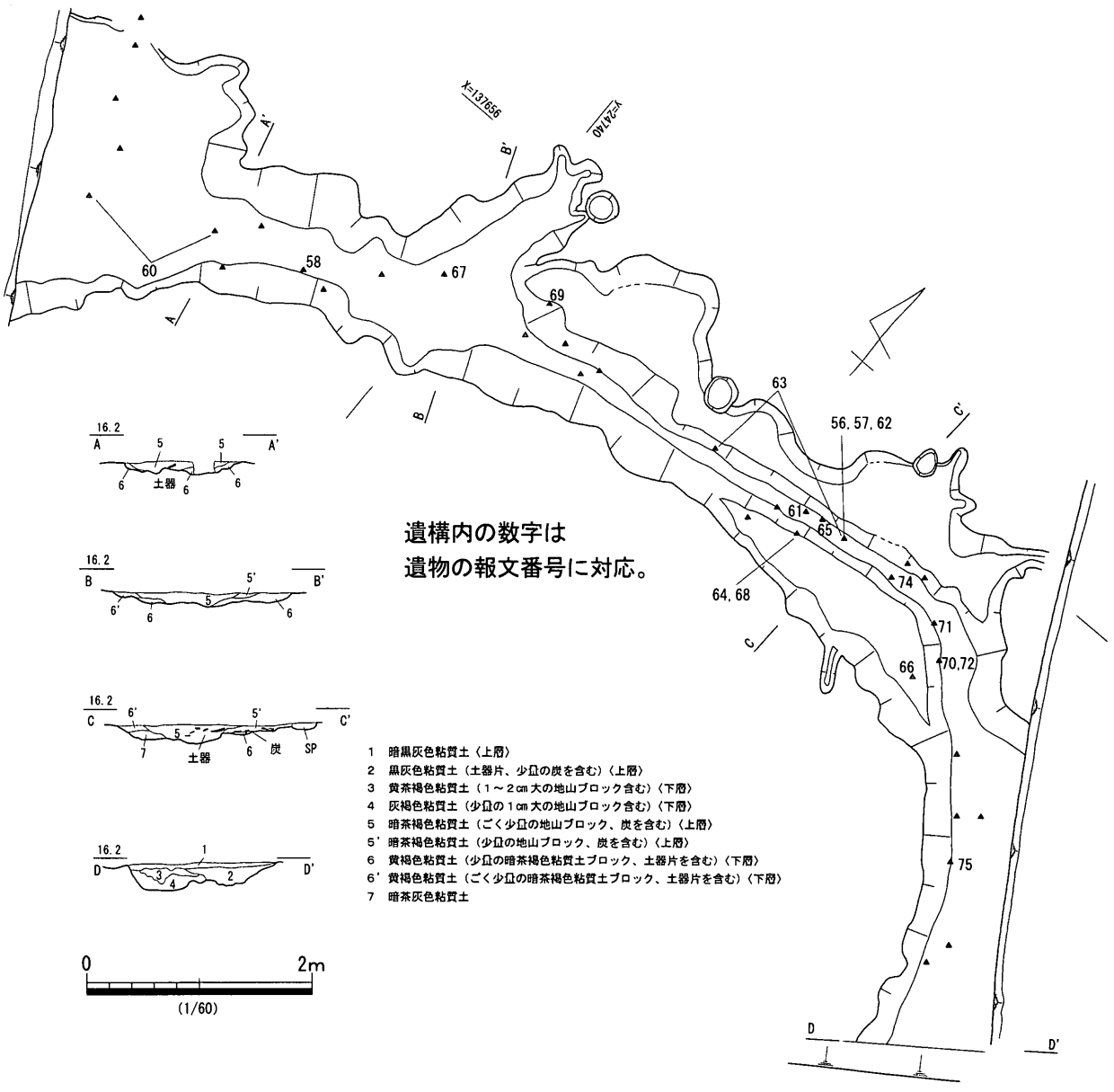
SD6001 は SD6002 と SD6003 をつなぐ小溝である。幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は SD6002 で見られた 1 層（上層）であり、SD6002 と共有している。このため SD6002 下層の堆積後に SD6001 が掘削されたことが窺える。また、SD6001 と SD6003 の接続部に断ち割りを入れ、1 層が SD6003 にも延び、A － A' 断面 5 層（上層）に対応することを確認した。このため SD6003 下層の堆積後にやはり SD6001 が掘削されたことがわかる。

出土遺物には少量の弥生土器がある。これらは SD6002 と接する北端部で集中して出土した。39・40 の 2 点を図化したが、どちらも甕である。39 は肩が張らない体部から直立気味の口縁部へ延びる。内面は頸部付近までヘラ削りを施す。40 は丸底化した底部であるがわずかに平坦面を残す。外面にタタキ、内面にヘラ削りが見られる。

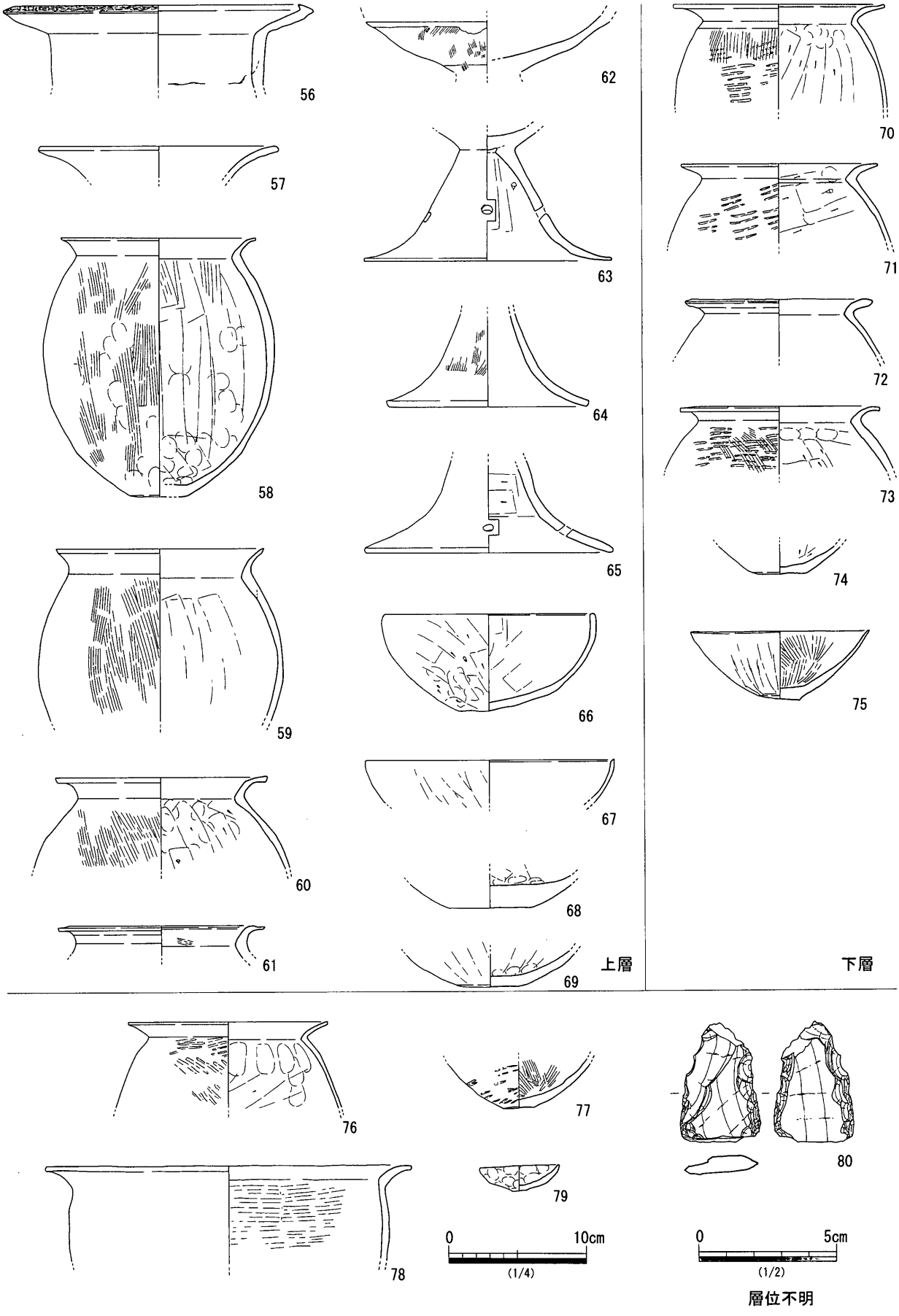
溝状遺構の時期は出土土器より弥生時代終末期に位置づけられる。

SD6003（第 66・67 図）

調査区の南西部で検出した溝状遺構である。SH6001 の壁溝より約 2.5 m離れた位置でこれをとり囲



第 66 図　SD6003 断面図・遺物出土状況（1/60）



第 67 図　SD6003 出土遺物 (1/4・1/2)

むように巡るため竪穴住居跡に伴う周溝と考えられる。SD6001・6002の報告で述べた通りSD6001を介してSD6002と同時併存する。規模は幅1.2～2.4m、深さ0.1～0.2mを測る。埋土は上、下層に大別できる。上層は色調が茶～黒褐色系で地山ブロックの含有量は少量であるのに対し、下層は色調が暗黄褐色系で地山ブロックないし地山に由来する堆積土を多く含む。また、先述の通りSB6001の構成柱穴がSD6003の上層を切る。

出土遺物には28リットル入りコンテナ1.5箱の弥生土器（56～79）、石器（80）がある。これらは溝状遺構全体で偏りなく見られ、上層からの出土が目立つ。56～69は上層からの出土遺物である。56・57は壺である。56は直立する頸部から口縁部が強く外頃する。口縁端部は上下に拡張して強く内傾させるが、その外面には2条の櫛描波状文が見られる。58～61は甕である。58は卵形の体部から延びる口縁部を小さく外反させる。底部は径が小さい平底である。調整は外面では全体に縦ハケを、内面では上位にハケ目、その下位にヘラケズリを施す。59は器形、調整ともに58と類似する。60・61は口縁部を強く外反させ、端部を水平気味に延ばす。60は調整では58と同様であるが、器形的には肩がやや張る。62～65は高杯である。62・63は円盤充填法で形成する。63～65の脚部はやや膨らみながら下方に延び、「ハ」の字形に低く延びて脚端部に至る。63・65では円孔が見られる。調整は64の外面で縦ハケ、65の内面では横方向のヘラケズリを加える。66・67は鉢である。66は底部に丸みを帯びる。内外面とも板ナデ調整するが、外面ではこれに先行してヘラケズリを施す。なお、66の出土位置は東側であるが、SD6002東側で出土した鉢（出土層位は上層？）と遺構間接合した。この2遺構の同時性を示す資料である。68・69は底部である。どちらも平底であるが、わずかに丸味を帯びる。68は分厚いが、内面にはヘラ削りを施す。

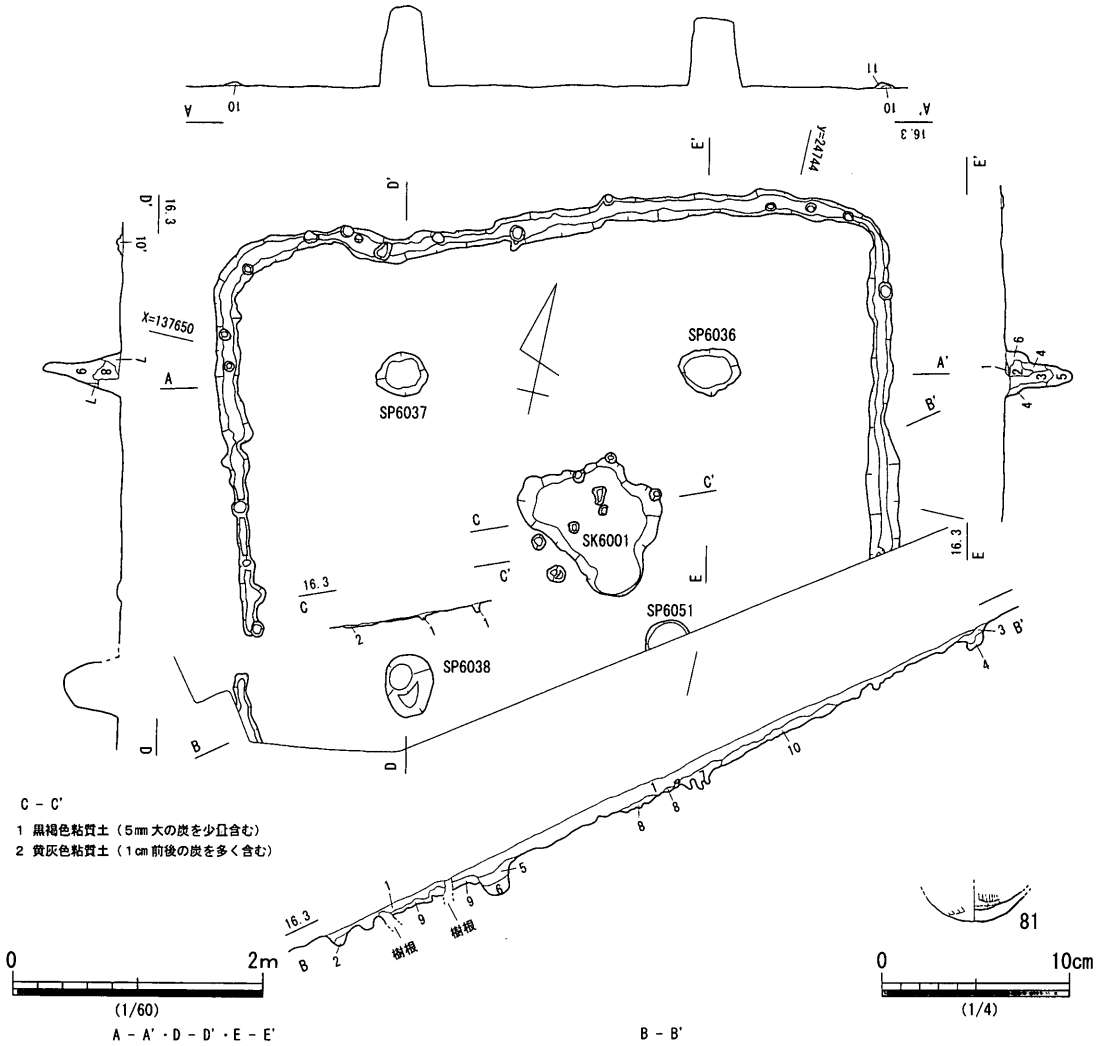
70～75は下層出土遺物で、70～73は甕である。上層から出土した甕と調整、器形を比べると調整は70・71・73の外面でタタキが見られる以外は類似する。75は鉢である。底部は部分的に丸みを帯びるが、基本的に平底である。内面には上下2段に分けて放射状に縦ハケを加える。

76～80は出土層位不明遺物である。78は鉢である。直立気味の体部から口縁部は強く外反させる。口縁端部はほぼ水平である。内面の頸部以下には横ハケを加える。78の出土位置は西側でSD6001に近接する位置であるが、SD6001の南側から出土した鉢の破片と遺構間で接合した。これはSD6001・6003間での埋土の共有と合わせて遺構の同時性を示す。79はミニチュア土器の鉢である。内外面に顕著な指オサエが見られるが、口縁部は内面からの強い指オサエにより形成される。80は大型の石鏃である。右図側の右上で大きな剥離が加えられたためにこの裏側（左図側左上）では先行する小さい剥離面がほとんど失われている。よって製作途中での破損品と見られる。上層・下層からの出土遺物はどちらも弥生時代終末期に位置づけられる。よって溝状遺構の時期は弥生時代終末期に位置づけられる。

竪穴住居跡

SH6001（第68図）

調査区の南西部で検出した竪穴住居跡である。南部は調査区外に延びるが、周溝（SD6003）を伴う。規模は東西5.4m×南北4.02m以上、深さ0.12mを測る。床面に貼り床（B－B'断面9・10層）を施した上から主柱穴、炉跡、壁溝を掘り込む。主柱穴は3基（SP6036～6038）を確認した。径0.42～0.48m、深さ0.45～0.6mを測る。またSP6036・6037で検出した柱痕は径0.2mを測る。炉跡（SK6001）は長径1.2m、短径0.9m、深さ0.12mを測る。内部には炭化物が集中するものの床面の被熱や焼土



A - A'・D - D'・E - E'

1 灰色粘質土
2 灰色粘質土（やや黒味がかる）
3 黒灰色粘質土
4 青黄色粘質土（灰色粘土ブロックを含む）
5 灰色粘土（やや黄味がかる）
6 黄褐色粘質土（少量の灰色粘土ブロックを含む）
7 暗黄褐色粘質土（少量の灰色粘土ブロック含む）
8 暗灰色粘質土（少量の暗黄褐色粘土ブロック含む）
9 灰褐色粘土
10 灰色粘質土
10' 灰色粘質土（少量の地山ブロック含む）
11 黄褐色粘質土（少量の灰色粘土ブロック含む）

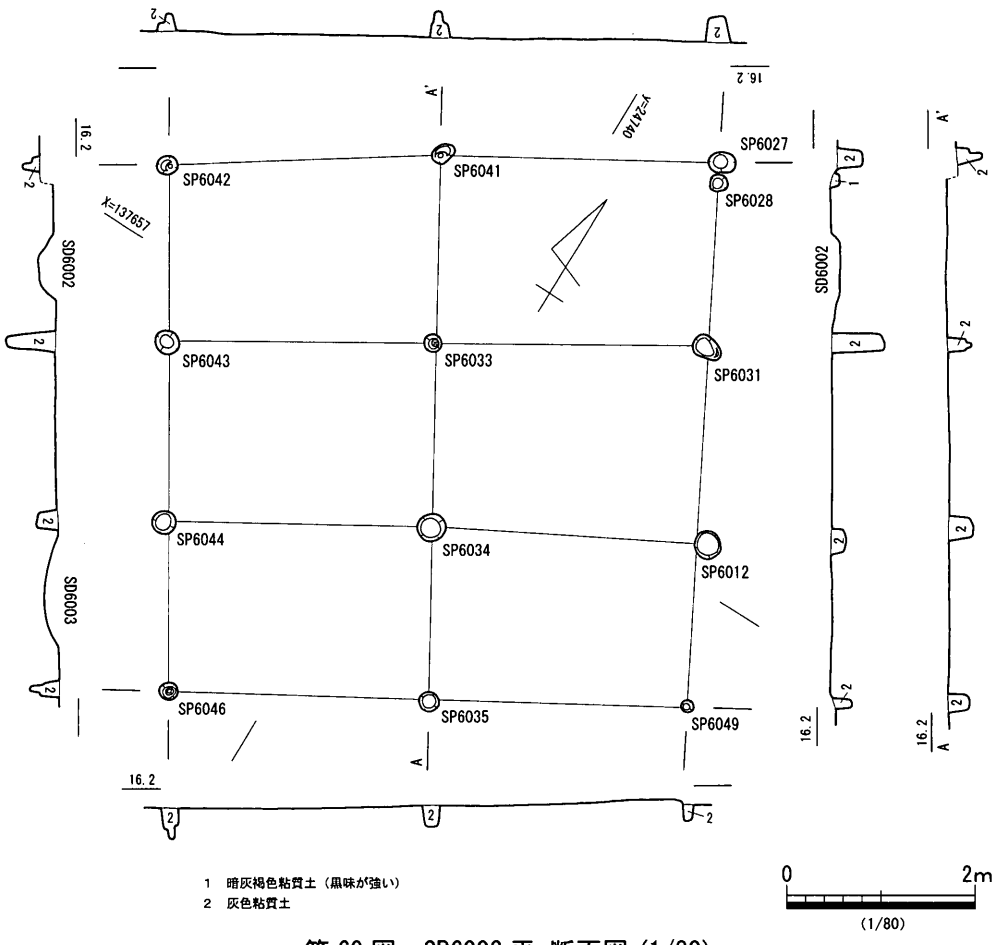
B - B'

1 暗茶褐色粘質土（少量の土器片を含む）
2 茶灰色粘質土（やや暗い）〈壁溝〉
3 暗茶灰色粘質土〈壁溝〉
4 暗茶灰色粘質土（1cm大の地山ブロックを少量含む）〈壁溝〉
5 灰色粘質土（やや茶味がかる）〈SP6038〉
6 暗黄茶褐色粘質土（少量の茶灰色粘質土ブロックを含む）〈SP6038〉
7 黒褐色粘質土（5mm大の炭を含む）〈SK6001〉
8 灰茶色粘質土（3mm大の炭を少量含む）〈SK6001〉
9 暗灰黄色粘質土（3mm前後の地山ブロック、土器片を含む）〈貼り床〉
10 茶灰色粘質土（1～5mm大の地山ブロックを多く含む）〈貼り床〉

第68図　SH6001平・断面図（1/60）・出土遺物（1/4）

は見られない。壁溝は幅0.12～0.27m、深さ0.05～0.15mを測る。底面で径0.1m前後の小ピット群を検出した。これらの間隔は0.3～0.6mとばらつきがあり柱通りも不揃いであるが、等間隔に並ぶ箇所もある。壁溝の目的は竪穴住居の周囲に巡らせた土手の崩壊防止のため、土手に貼り巡らせた壁板の根元を埋めて固定することと見られる。このように考えれば小ピット群の性格は壁溝内に立てた壁板を固定するための杭痕跡と考えられる。

出土遺物には少量の弥生土器（81）がある。81は床面付近の埋土から出土した。強い丸みを帯びた底部である。これは弥生時代終末期に位置づけられるため竪穴住居跡の時期は弥生時代終末期と考えられる。この時期は周溝（SD6002・6003）やこれらをつなぐSD6001と同時期であり、併存したと見られる。



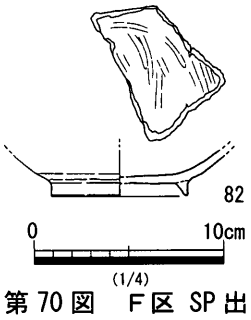
第 69 図　SB6002 平・断面図 (1/80)

(2) 古代末～中世の遺構・遺物

掘立柱建物跡

SB6002（第 69 図）

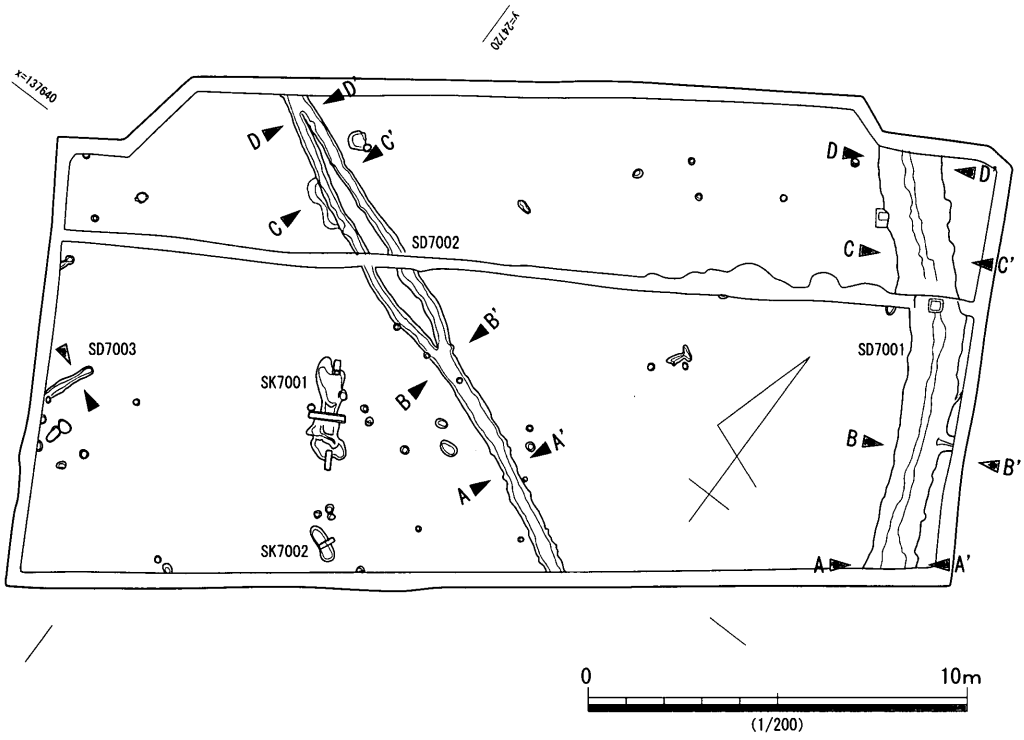
調査区北西部で検出した総柱建物である。構成柱穴が SD6002・6003 を切り、北部に延びる。規模は梁間 2 間×桁行 3 間以上 (5.6 m× 5.6 m以上。床面積 31.56 ㎡以上。) である。主軸方向はＮ－ 30°－Ｗである。柱穴跡の規模は 0.12 ～ 0.21 m、深さ 0.16 ～ 0.55 mを測る。柱穴跡の中心間距離は梁間が 2.72 ～ 2.99 m、桁行が 1.72 ～ 2.0 mとかなり狭い。埋土は灰色粘質土である。出土遺物にはごく少量の弥生土器がある。建物跡の時期は埋土より古代末～中世と考える。



第 70 図　F 区 SP 出土遺物 (1/40)

ピット出土遺物（第 70 図）

82 は SP6052 から出土した黒色土器 A 類椀である。内面に比較的密にヘラミガキを施す。10 世紀中葉に位置づけられる。



第 71 図　G区 遺構配置図 (1/200)

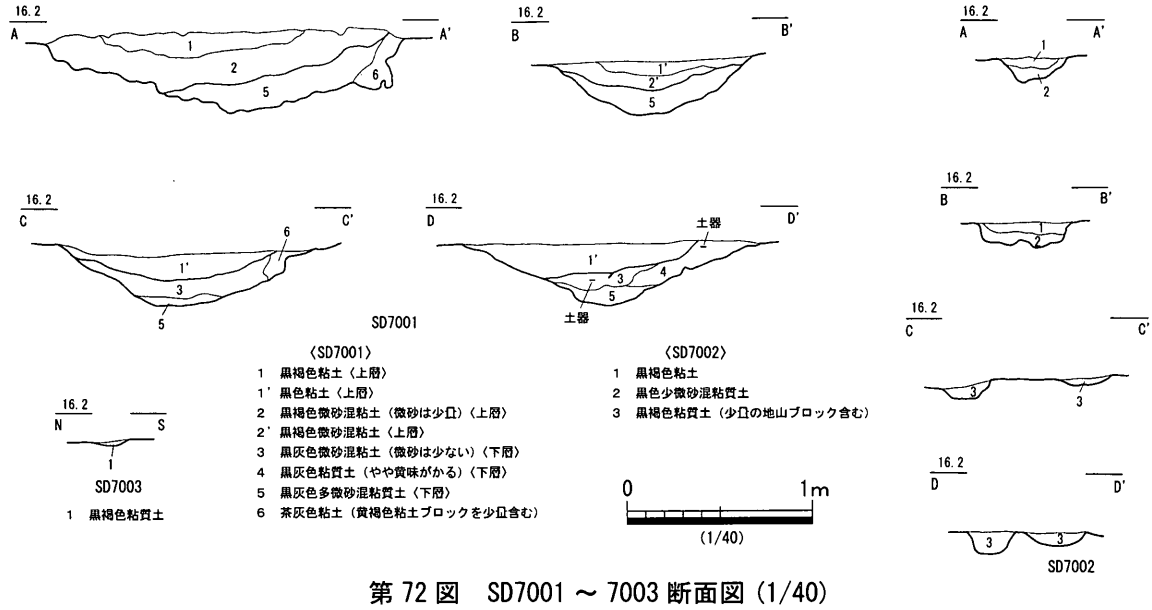
＜G区の調査成果＞

(1) 弥生時代の遺構・遺物

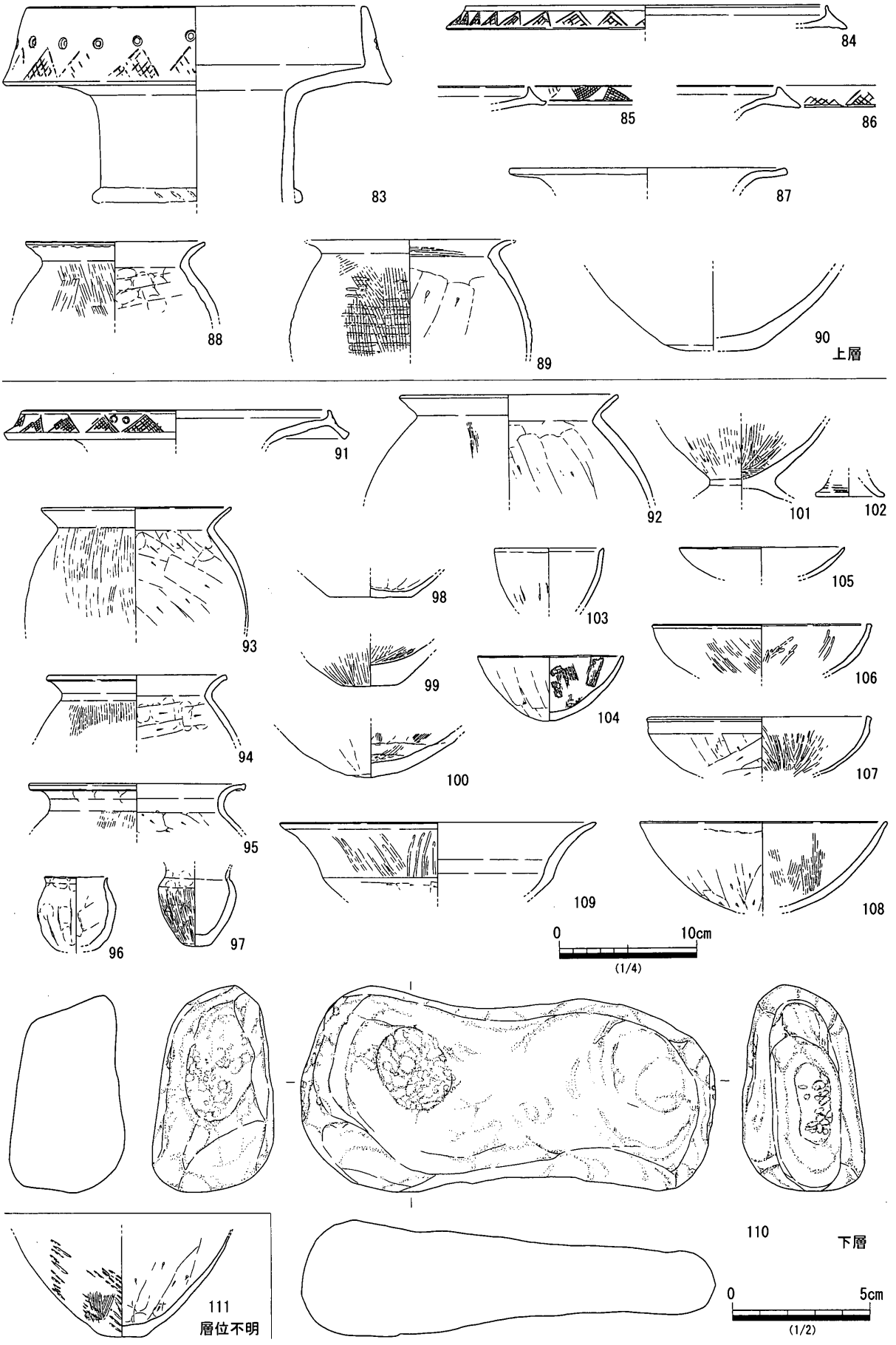
溝状遺構

SD7001（第 72・73 図）

調査区の東部で検出した溝状遺構である。北側でやや西に振り、幅 1.3 ～ 1.8 m、深さ 0.35 ～ 0.44 mを測る。断面形は扁平なV字状を呈し、埋土は上、下層に大別される。上層は色調が黒褐色系で砂をほとんど含まないのに対し、下層は黒灰色系で微砂を多く含む。このため下層の堆積時にはある程度流水があったと考えられる。出土遺物は 28 リットル入りコンテナ 1.5 箱の弥生土器 (83 ～ 109・111)、石器 (110) がある。83 ～ 90 は上層出土遺物である。83 ～ 87・90 は壺である。83 は上方に大きく拡



第 72 図　SD7001 ～ 7003 断面図 (1/40)



第 73 図　SD7001 出土遺物 (1/4・1/2)

張した口縁端部に鋸歯文と竹管文を施す。84～86は上下に拡張し、断面三角形状の口縁端部に鋸歯文が見られる。88・89は甕である。どちらも肩が張らない体部から口縁部を小さく外反させる。調整はどちらの外面でも縦ハケが見られるが、89では先行してタタキを加える。内面は頸部までヘラケズリを施す。

91～110は下層出土遺物である。91は口縁部を上下に拡張し、特に下方へは大きく垂下させる。断面「T」字状の口縁端部には鋸歯文と竹管文が見られる。92～97は甕である。92は肩が張り丸みを帯びた体部から、93・94は肩が張らない体部から延びる口縁部を「く」の字状に外反させる。調整は外面で粗い縦ハケ、内面は頸部までヘラケズリを加える。96・97はミニチュアの甕である。どちらも口縁部直下に強いヨコナデを加えて口縁部を形成する。外面の調整は96で指オサエ、97で縦ハケが見られる。97ではまたやや丸みが強い底部をもつ。98～100は底部である。98は甕のしっかりした平底、99は平底であるがやや丸みを帯びる。100は壺の丸底であるが、内面には粘土紐を巻き上げ痕跡が4列見られ、粗雑な作りである。101は台付鉢である。外面は縦ハケ、内面は密にヘラミガキを加える。102は製塩土器である。外面にはタタキが見られる。103～108は鉢である。法量の大小、深浅にバリエーションが多いが、106と107は口縁部直下に強いヨコナデを加え、口縁部を直立気味にしており法量、器形も類似する。調整は104・106・107の外面下半部でヘラケズリが、106・108の内面ではヘラミガキが見られる。104は平底であるが、矮小でやや丸みを帯びる。109は高杯である。口縁部外面には縦方向に丁寧なヘラミガキを加える。110は砂岩製の叩き石兼砥石である。3ヶ所で敲打痕が見られるが、図面中央の左側部のそれが最も著しい。またこの裏側部分は砥石として使用されている。

111は出土層位不明遺物で、甕である。底部は矮小であるが平底であり、SD7001出土遺物の中では少ない形状である。上層、下層からの出土遺物はどちらも弥生時代終末期に位置づけられる。よって溝状遺構の時期はこの時期に位置づけられる。

SD7002（第72図）

調査区の中央部で検出した溝状遺構である。北側で2条に分岐するが、北端で再び1条に収束する。幅0.6～0.65m、深さ0.05～0.13mを測る。主軸方向はN－67°－Wである。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色系粘質土である。出土遺物には少量の弥生土器、サヌカイトがある。溝状遺構の時期は出土遺物より弥生時代と考えられる。

SD7003（第72図）

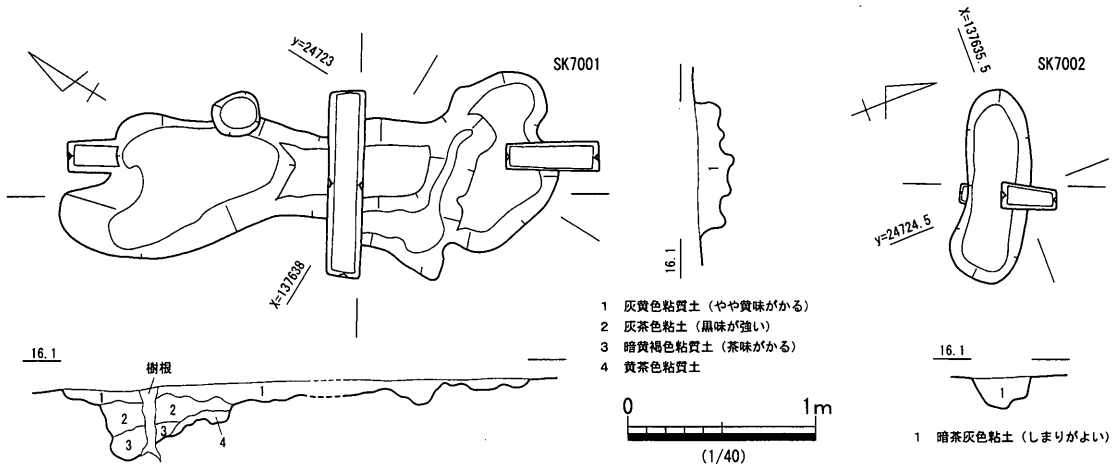
調査区の西端部で検出した溝状遺構である。西側は調査区外に延びる。幅0.3m、深さ0.03mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質土である。主軸方向はN－23°－Eである。出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土より弥生時代と考えられる。

(2) 中世以前の遺構・遺物

土坑

SK7001（第74図）

調査区の西部で検出した土坑である。平面形は不整な長楕円形、断面形は北端で大きく落ち込むが、他では浅い皿状を呈する。規模は長径2.6m、短径0.9m、深さ0.37mを測る。埋土は暗黄褐色系粘

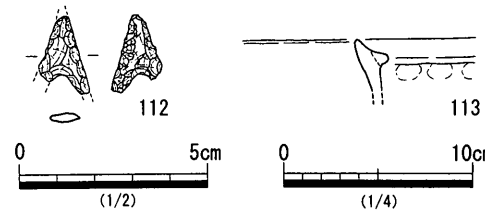


第 74 図　SK7001・7002 平・断面図 (1/40)

質土である。出土遺物にはごく少量のサヌカイトがある。土坑の時期は埋土より中世以前と考えられる。

SK7002（第 74 図）

調査区の西部で検出した土坑である。平面形は長楕円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径 1.0 m、短径 0.4 m、深さ 0.16 mを測る。埋土は暗茶灰色粘土である。出土遺物にはごく少量のサヌカイトがある。土坑の時期は埋土より中世以前と考えられる。



第 75 図　G区 出土遺物 (1/2・1/4)

その他の出土遺物（第 75 図）

112・113 は遺構外からの出土遺物である。112 は石鏃である。113 は土師質土器土釜である。口縁部が短く、矮小なつばをもつ。15 世紀代に位置づけられる。

第５章　自然科学的分析

第１節　稲木北遺跡の放射性炭素年代測定

（株）加速器分析研究所

（１）遺跡の位置

稲木北遺跡は、香川県善通寺市下吉田町895-1（北緯34°　14′　25″、東経133°　46′　15″）に所在する。丸亀平野の南西部に位置し、金倉川の左岸に立地する。

（２）測定の意義

出土した土器がごく少量のため、遺跡の年代決定の根拠に乏しい。このため年代測定を行うことにより、これを補うデータとしたい。

（３）測定対象試料

測定対象試料は、SB4003-SP4037の柱痕層（11a層）から出土した木片（No.B0041：IAAA-70435）、SB3001-SP3011の柱痕層（12a層）から出土した木片（No.B0044:IAAA-70436）、SB1001-SP1003の柱痕層（8層）から出土した木片（No.B0046：IAAA-70437）、合計３点である。試料は、採取後、全体が水に浸かる状態でタッパに密封し、保管された。対象となった木片はすべて表皮を残していないが、年輪の最も外側と考えられる箇所から測定試料を採取した。

（４）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（５）測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器によ

り 13C/12C の測定も同時に行う。

（6）算出方法

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。

2）BP 年代値は、過去において大気中の 14C 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950 年を基準年として遡る 14C 年代である。

3）付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、χ2 検定を行い測定値が 1 つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ 13C の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される δ 13C の値を用いることもある。

δ 13C 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

δ 14C = [(14AS − 14AR) / 14AR] × 1000　（1）

δ 13C = [(13AS − 13APDB) / 13APDB] × 1000　（2）

ここで、　14AS：試料炭素の 14 C濃度：(14C/12C)S または (14C/13C)S

14AR：標準現代炭素の 14 C濃度：(14C/12C)R または (14C/13C)R

δ 13C は、質量分析計を用いて試料炭素の 13C 濃度（13AS = 13C/12C）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に 13C/12C を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した δ 13C を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、Δ 14C は、試料炭素が δ 13C = − 25.0（‰）であるとしたときの 14C 濃度（14AN）に換算した上で計算した値である。（1）式の 14C 濃度を、δ 13C の測定値をもとに次式のように換算する。

14AN = 14AS × (0.975 ／ (1 + δ 13C ／ 1000))2　（14AS として 14C/12C を使用するとき）

または

= 14AS × (0.975 ／ (1 + δ 13C ／ 1000))（14AS として 14C/13C を使用するとき）

Δ 14C = [(14AN − 14AR) / 14AR] × 1000　(‰)

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない δ 14C に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

14C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使わ

れており、Δ 14C との関係は次のようになる。

Δ 14C = (pMC ／ 100 − 1) × 1000 (‰)

pMC = Δ 14C ／ 10 + 100 (%)

国際的な取り決めにより、このΔ 14C あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

T = − 8033 × ln [(Δ 14C ／ 1000) + 1]

= − 8033 × ln (pMC ／ 100)

5) 14C 年代値と誤差は、1 桁目を四捨五入して 10 年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10 較正プログラム (Bronk Ransey1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001) を使用した。

(7) 測定結果

SB4003-SP4037 の柱痕層 (11a 層) から出土した木片 (No.B0041 : IAAA-70435) の 14C 年代が 1420 ± 30yrBP、SB3001-SP3011 の柱痕層 (12a 層) から出土した木片 (No.B0044 : IAAA-70436) の 14C 年代が 1540 ± 30yrBP、SB1001-SP1003 の柱痕層 (8 層) から出土した木片 (No.B0046 : IAAA-70437) の 14C 年代が 1290 ± 30yrBP である。暦年較正年代 (1 σ = 68.2%) は、No.B0041 が 610 ～ 655AD であり飛鳥時代中頃、No.B0044 が 430 ～ 490AD (37.6%)・500 ～ 570AD (30.6%) であり古墳時代後期～飛鳥時代前半、No.B0046 が 670 ～ 715AD (43.7%)・740 ～ 770AD (24.5%) であり飛鳥時代末～奈良時代前半頃に相当する。試料は年輪の最も外側から採取されているが、樹皮を残さない柱であり、測定年代は柱の伐採年代を若干遡ると推測される。化学処理および測定の内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

IAA Code No.	試　料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-70435	試料採取場所　：香川県善通寺市下吉田町 895-1 稲木北遺跡	Libby Age (yrBP)：1,420 ± 30
		δ 13C (‰)、(加速器)　＝-22.96 ± 0.84
	試料形態　：木片	Δ 14C (‰)　＝-162.0 ± 3.2
	試料名（番号）　：B0041	pMC (%)　＝83.80 ± 0.32
	（参考）δ 13C の補正無し	δ 14C (‰)　＝-158.5 ± 2.9
		pMC (%)　＝84.15 ± 0.29
#1779-1		Age　(yrBP)：1,390 ± 30
IAAA-70436	試料採取場所　：香川県善通寺市下吉田町 894-1 稲木北遺跡	Libby Age (yrBP)：1,540 ± 30
		δ 13C (‰)、(加速器)　＝-27.21 ± 0.74
	試料形態　：木片	Δ 14C (‰)　＝-174.8 ± 3.2
	試料名（番号）　：B0044	pMC (%)　＝82.52 ± 0.32
	（参考）δ 13C の補正無し	δ 14C (‰)　＝-178.5 ± 2.9
		pMC (%)　＝82.15 ± 0.29
#1779-2		Age　(yrBP)：1,580 ± 30
IAAA-70437	試料採取場所　：香川県善通寺市稲木町 1302 稲木北遺跡	Libby Age (yrBP)：1,290 ± 30
		δ 13C (‰)、(加速器)　＝-25.62 ± 0.63
	試料形態　：木片	Δ 14C (‰)　＝-148.7 ± 3.1
	試料名（番号）　：B0046	pMC (%)　＝85.13 ± 0.31
	（参考）δ 13C の補正無し	δ 14C (‰)　＝-149.8 ± 2.9
		pMC (%)　＝85.02 ± 0.29
#1779-3		Age　(yrBP)：1,300 ± 30

参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-70435	B0041	1420 ± 30
IAAA-70436	B0044	1543 ± 31
IAAA-70437	B0046	1293 ± 29

ここに記載する Libby　Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

第２節　放射性炭素年代測定（AMS 法）に対するコメント（長井）

稲木北遺跡の大型建物群･柵列群の存続期間については出土土器から 8 世紀初頭～前葉と考えている。これに対し放射性炭素年代測定（AMS 法）による柱材の測定年代では SB3001 － SP3011 出土柱材（27）が 430 ～ 490AD（37.6%）・500 ～ 570AD（30.6%）、SB4003 － SP4037 出土柱材（34）が 610 ～ 655AD とやや古い。これについては分析者が指摘するとおり測定対象が樹皮を全く残さない柱材であるため測定年代が柱材の伐採年代をやや遡ることによると考えられる。

この場合、SB1001 － SP1003 出土柱材において放射性炭素年代測定による鑑定結果と出土土器からの年代観が整合的であることが逆に問題となる。これについてはこの柱材の年代が 670 ～ 715AD と 7 世紀後半に遡る数値を含むこと、他の 2 つの柱穴跡より検出された柱痕規模が小さいため相対的に樹皮に近い部分が年代測定された可能性があることなどによると考えられる。以上より放射性炭素年代測定(AMS 法）による結果は出土土器から判断する大型建物群・柵列群の存続期間に対して概ね整合的であると考える。

第３節　稲木北遺跡より出土した柱材の樹種

試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の３方向の切片を切り、封入剤ガムクロラールでプレパラートを作製し、生物顕微鏡で観察、同定をおこなった。以下に同定された分類群を示す。

No.41 スギまたはヒノキ科（根材）

No.44 スギまたはヒノキ科（幹材）

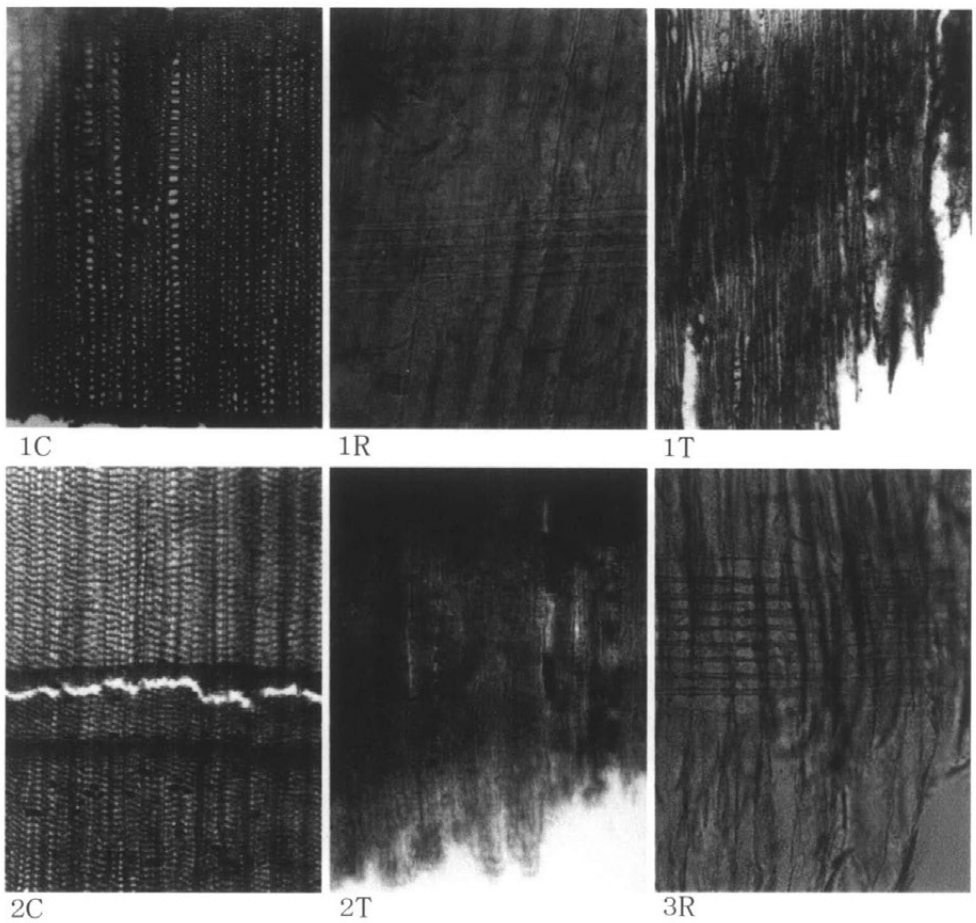
No.46 スギまたはヒノキ科（幹材）

No.41 は材がねじれており、No.46 は１年輪に満たなかった。また、No.44 と No.46 は一度乾燥した形跡があった。以下に同定された樹種の木材解剖学的記載を行う。

スギまたはヒノキ科（ Cryptomeria japonica (L.f.)D.Don. and/or Cupressaceae ）：横断面観は、年輪界が明瞭で、晩材部はやや厚く樹脂細胞が点在する。仮導管にはらせん肥厚はなく、水平・垂直樹脂道ともに認められない。放射細胞は柔細胞のみで、３試料とも分野壁孔は溶けて確認できなかったため、スギかヒノキ科か識別できない。なお、No.41 は横断面で見た細胞の形が不揃いで膜が薄いため根材と考えられる。組織の保存状態が悪かったため、No.44 は横断面と接線断面、No.46 は放射断面の写真のみ記載した。

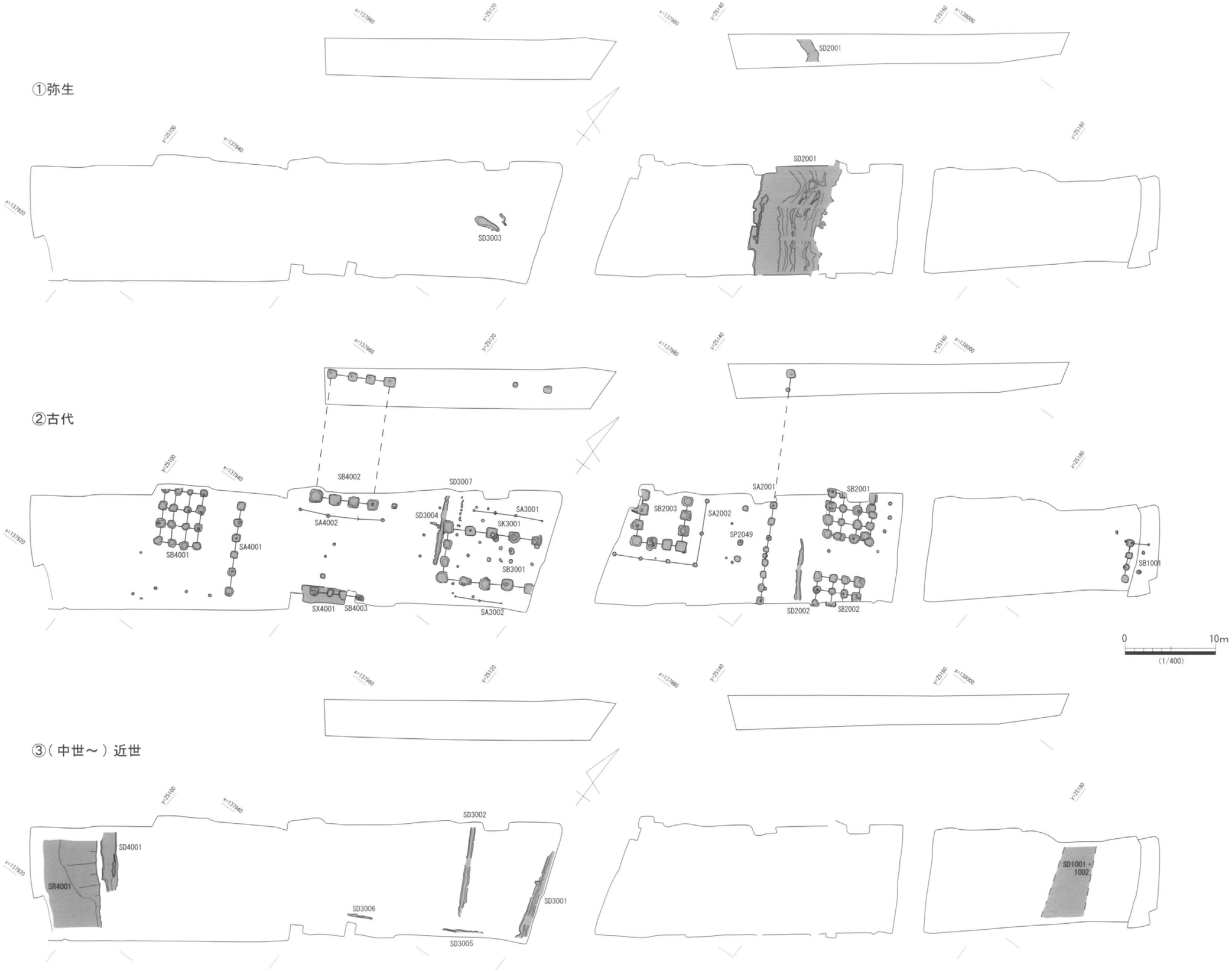
スギは本州から九州に分布し、ヒノキ科は日本全土に分布する。

※）本測定は、当社協力会社・古代の森研究舎にて実施した。



1～3　スギまたはヒノキ科　1: B0041　2: B0044　3: B0046
C: 横断面　R: 放射断面　T: 接線断面　スケールは 0.1mm

第 76 図　稲木北遺跡出土柱材の顕微鏡写真



第77図　稲木北遺跡　遺構変遷図（1/400）

第６章　まとめ

第１節　稲木北遺跡の遺構の変遷と古代遺構の特性

(1) 遺構の変遷

稲木北遺跡は調査対象地全体が微高地上に位置し、弥生時代前期から近世にかけての遺構・遺物を確認した。以下ではこれらの遺構・遺物について時期ごとに説明する。

弥生時代

この時期に属する遺構にはⅡ区 SD2001、Ⅲ区 SD3003 などのごく少数があるのみで当該期の遺物もⅡ区 SD2001 以外からはほとんど出土していない。このうちⅡ区 SD2001 は弥生時代前期の溝状遺構で、立地的には微高地の頂部に掘削される。少量の土器以外に、石器製作に伴う遺物がまとまって出土した。調査地近辺に集落跡が展開する可能性が高い。

古代（8 世紀初頭～前葉）

柱穴跡の径が 1 m前後を測る大型建物群や、これらを区画する柵列群を検出した。この時期の遺構は調査区全体に広がる。「第 3 章第 1 節　遺跡の立地と地形」に記載したとおり、微高地の範囲は東西が約 150 m、南北が約 110 mと推定されるので、最大で約 16,500 ㎡の遺跡範囲が見込まれる。

遺構の特徴としては次の 8 点を指摘しておく。

①　検出した大型の掘立柱建物跡 8 棟や大型柵列跡 2 基は、1 棟の建物跡（Ⅰ区 SB1001）を除き、推定条里坪界線を基準線として、東西方向へ左右対称を意識した配置に並ぶ。

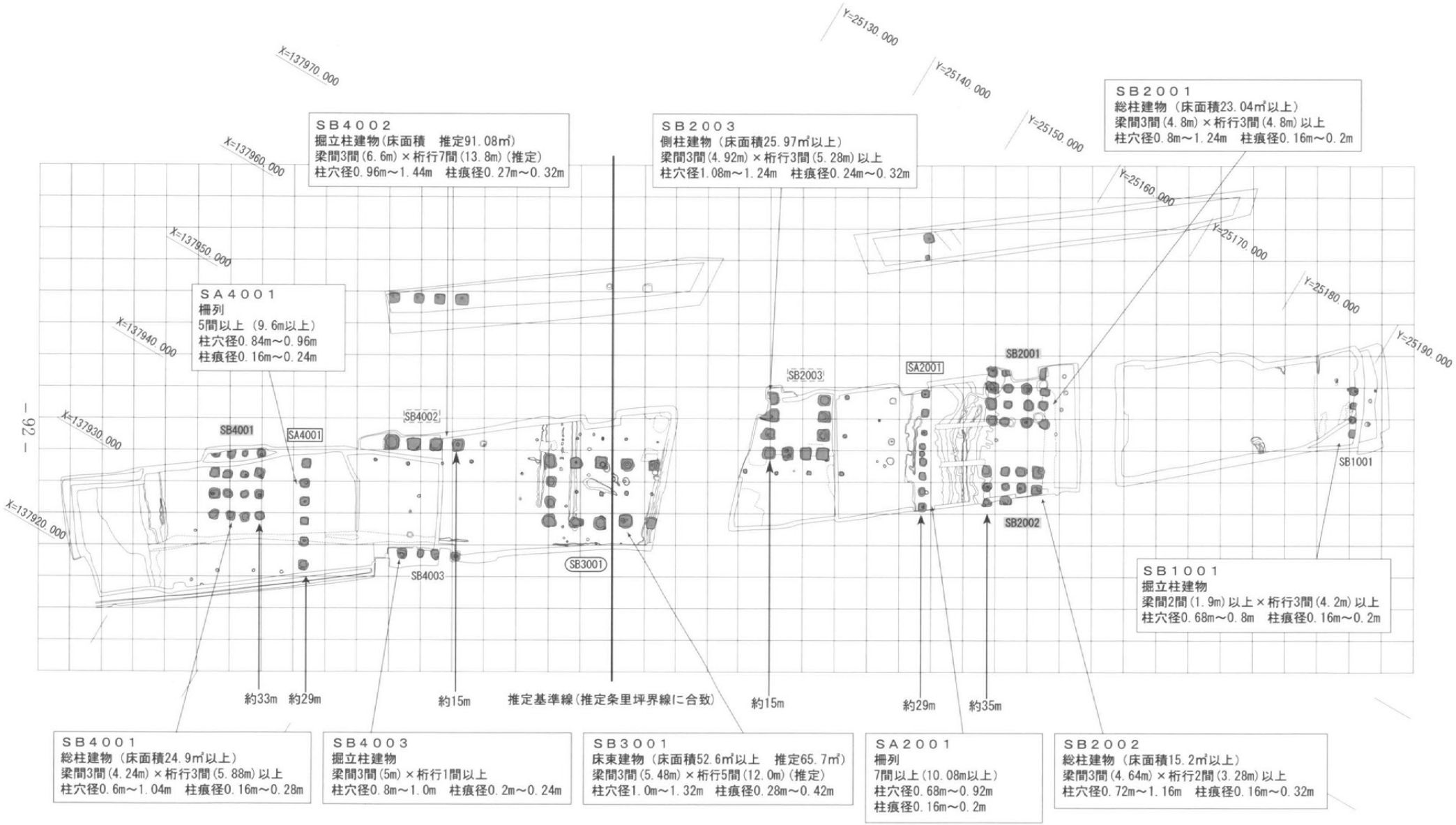
②　左右対称の関係にある遺構間では基準線から建物跡・柵列跡への距離がほぼ等しいだけでなく、建物跡の種類や規模も概ね対応する。具体的には基準線上に位置する床束建物（Ⅲ区 SB3001）を中心として東西へ向かって順に側柱建物（Ⅱ区 SB2003 とⅣ区 SB4002）、柵列跡（Ⅱ区 SA2001 とⅣ区 SA4001）、総柱建物（Ⅱ区 SB2001・2002 とⅣ区 SB4001）がそれぞれ対応して配置される。

③　異なる建物間で柱筋を揃えるものがある。具体的には、Ⅱ区 SB2001 とⅡ区 SB2002 は南北方向の 4 列の柱筋全てを、Ⅳ区 SB4002 とⅣ区 SB4003 は東側桁行の柱筋を、Ⅱ区 SB2003 とⅣ区 SB4002 は南側梁間の柱筋を揃える。

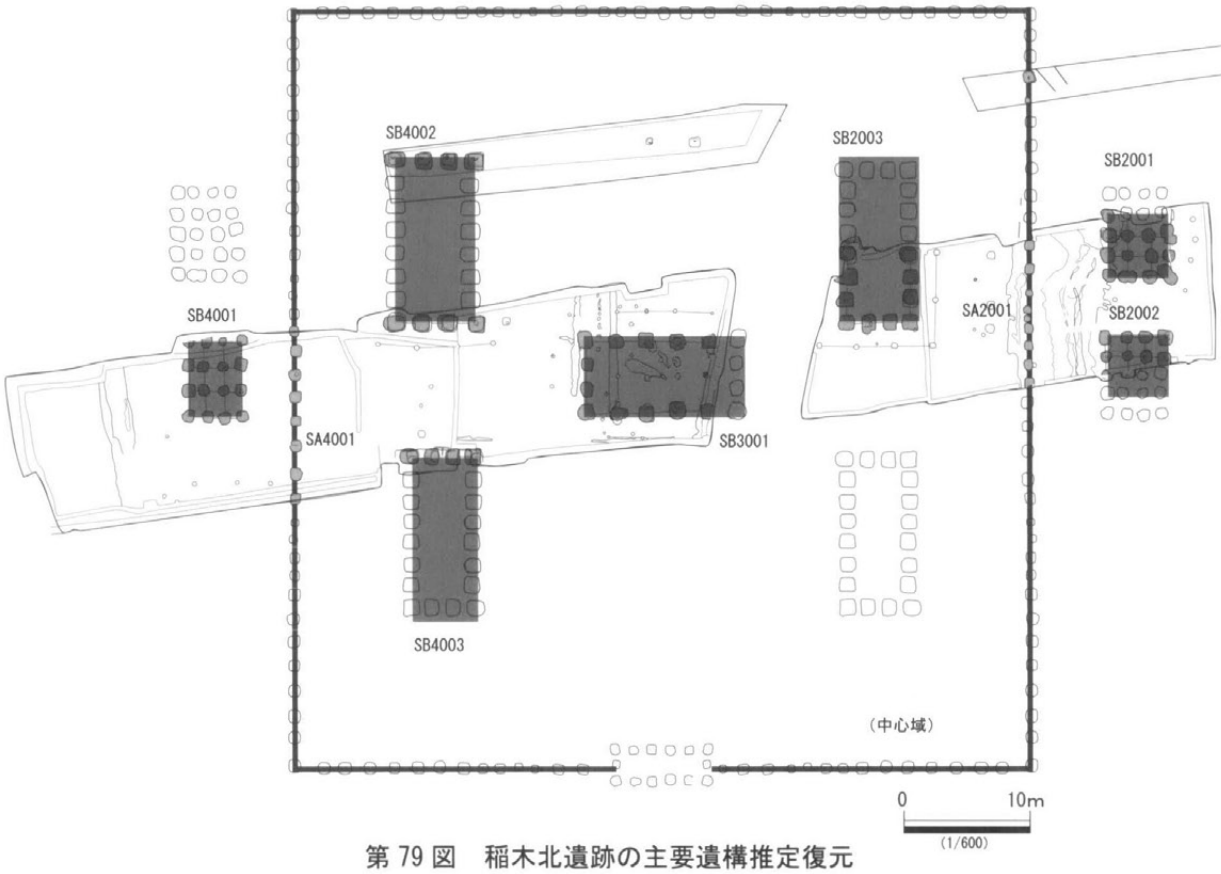
④　柵列の内部では床束建物を中心とする中核建物群が、外部では総柱建物からなる倉庫群が形成され、位置によって機能の異なる建物群が構築されている。またこれらは整然とした「H」字形の建物配置を呈する。

⑤　①・②でⅢ区 SB3001 の構築位置が条里型地割の方格に則って言えば東西 2 坪の中央にあることを述べたが、南北方向の 1 坪においても中心にある。すなわち東西方向に連続する条里型地割の東西 2 坪、南北 1 坪の中央に位置する。このことは大型建物群・柵列群形成に際して条里坪界線が基準線として使用されたことと同様に、条里地割が強く意識されていることを示す。

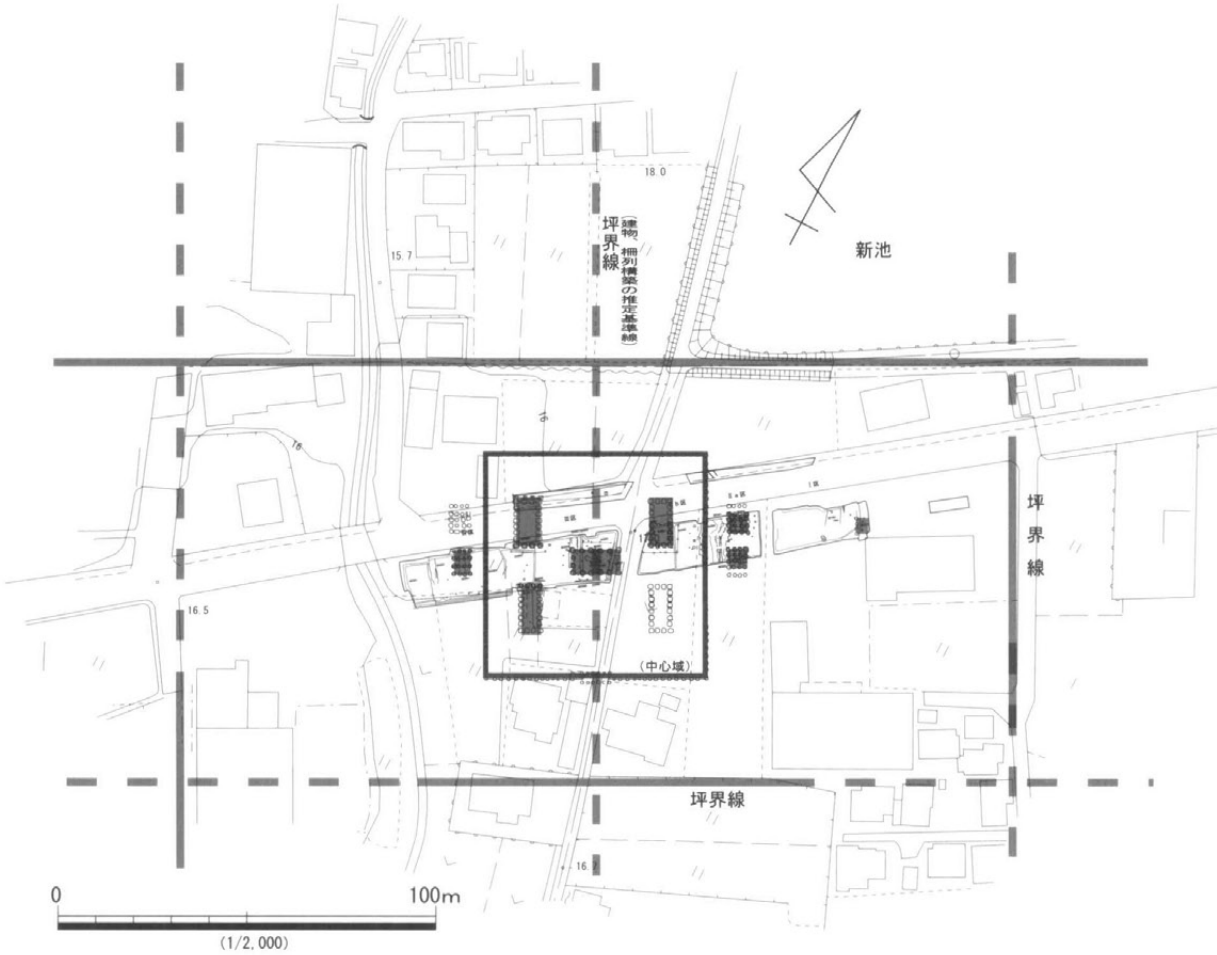
⑥　⑤のとおりⅢ区 SB3001 は中心に位置するが、それだけでなく他の建物と比べて建物構造（床束建物で南北 2 面に柵列ないし庇を伴う）が異なり、床面積・柱穴規模・柱痕規模（0.28 ～ 0.42 mで最大）



第78図　稲木北遺跡遺構配置図（1/500　10尺メッシュ）
（トーン掛けは８世紀初頭～前葉の主要な建物、柵列）



第 79 図　稲木北遺跡の主要遺構推定復元



第 80 図　稲木北遺跡の位置（条里地割の東西２坪の中央にある）

は建物群の中で大型である。また柱通りと柱間距離が揃い、整然とした柱配置をとる。

⑦　柵列による区画範囲は東西約60ｍを測り、全国で確認されている郡衙政庁の区画規模[1]と同等以上である。

⑧　各遺構には重複や立て替えの痕跡がほとんどなく、比較的短い期間で廃絶する。

まとめると、①～⑥からは建物群・柵列群が左右対称に並ぶこと、区画された柵列内部の中核建物群は、「H」字形の規格的配列をとること。また区画範囲（中心域）の中央に位置する建物跡（SB3001）は条里型地割の連続する2坪においても中央に配置されたことが見て取れる。中核建物群の「H」字形の建物配置は、郡衙政庁でしばしば採用される品字型と類似する。このタイプとの相違点は脇殿に対して柱筋の一部を揃えて北に直列する別の建物が存在する点である。これは品字型の変化形と考えることができる。また、⑦からは柵列による中核建物群の区画範囲の規模が郡衙政庁に匹敵する。これらのことから、当遺跡における古代の遺構は、官衙的様相をもつ建物群と評価できる。

一方、遺物については、⑧の要素も関わるが、全体的に出土量が極めて乏しい。須恵器、土師器の供膳具（杯）、煮沸具（甕）、貯蔵具（壺）、移動式竈が少量出土したにすぎない。また、官衙などに伴う特殊な遺物（硯、墨書土器、木製祭祀具、木簡、帯金具など）は出土していない。

（中世～）近世

この時期に属する遺構には溝状遺構、旧河道などがある。Ⅳ区SR4001はこの時期には東肩部が耕地化されているが、耕作土より古代に属する土師器、須恵器などが出土している。

(2) 古代の稲木北遺跡の特性

上述の通り、稲木北遺跡では8世紀初頭～前葉の大型建物群・柵列群において官衙的な様相が見られた。そこで、県内で官衙的様相がみられる他の遺跡と比較することにより、稲木北遺跡の特性を抽出する。まず県内において官衙的様相がみられる生野本町遺跡、下川津遺跡[2]、前田東・中村遺跡[3]を取り上げる。

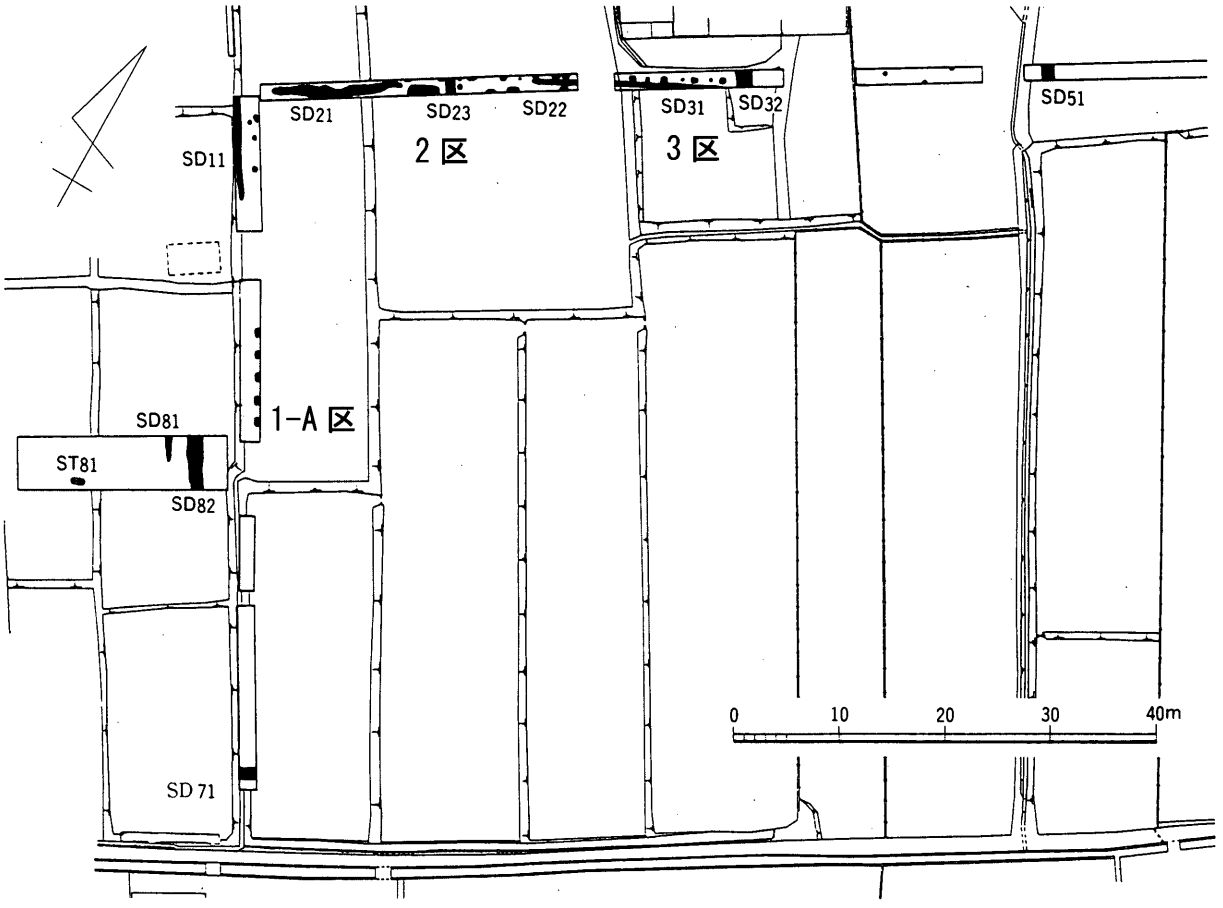
〈生野本町遺跡〉

遺構の様相　生野本町遺跡[4]は稲木北遺跡から南へ約3km離れた位置にあり、当遺跡と同じ旧多度郡に属す。発掘調査された範囲がごく小規模であるので遺跡内容については不明瞭な部分が大きいものの、7世紀後葉～8世紀前葉の遺構・遺物が確認された。検出遺構には条里型地割と主軸方向をそろえる2棟の大型建物跡（西側に位置）、9基からなる大型柱穴列（北側に位置し、3ｍ間隔で並ぶ。1基の柵列跡ないし2棟程度の大型建物跡を構成か）と、これらを取り囲むと推定される溝状遺構（SD32、82）などがある。この溝跡を区画溝とするならば、区画範囲は東西約55ｍを測る。この区画域は条里型地割における1坪のほぼ中央に位置することから、未調査域である区画内部の遺構は不明ながらも、生野本町遺跡の中心域として位置づける見解[5]もある。

遺物の様相　出土遺物には、土師器（杯、皿、椀、高杯、鉢、甕など）・須恵器（杯蓋、杯身、皿、高杯、壺、甕など）がある。器種構成が多様で、畿内産と考えられる暗文土師器なども出土している。

〈下川津遺跡〉

遺構の様相　大型建物群4はL字形を呈する大型柵列跡の内部にこれに沿って建物群がL字形に配置される。また、個々の建物跡は柱間距離を揃える。大型建物群5は小規模な溝状遺構により「コ」の字



第 81 図　生野原本町遺跡　遺構配置図（7 世紀後葉～ 8 世紀前葉）

状に区画された内部に 4 棟からなる細長い建物群が桁行柱筋を概ね揃えて直列する [6]。

遺物の様相　大型建物群 4 に伴う整地層下位では、金銅製圭把頭・耳環・管玉･勾玉が見られ、地鎮的な威信財の投棄と評価できる。また低地帯からは人形、斎串などの木製祭祀具や円面硯・墨書土器などが出土している。

〈前田東・中村遺跡〉

遺構の様相　A、B 区建物群では 4 列の柱筋を揃えて直列する 2 棟の総柱建物や片側の柱筋を揃える大型建物跡 2 棟（うち、1 棟は床面積が 80 ㎡以上あり、県下で最大クラス）などが見られる。

遺物の様相　G 区の旧河道からは多量の木製祭祀具（人形、斉串）が出土した。また遺跡内からは帯金具や円面硯、墨書土器も出土している。

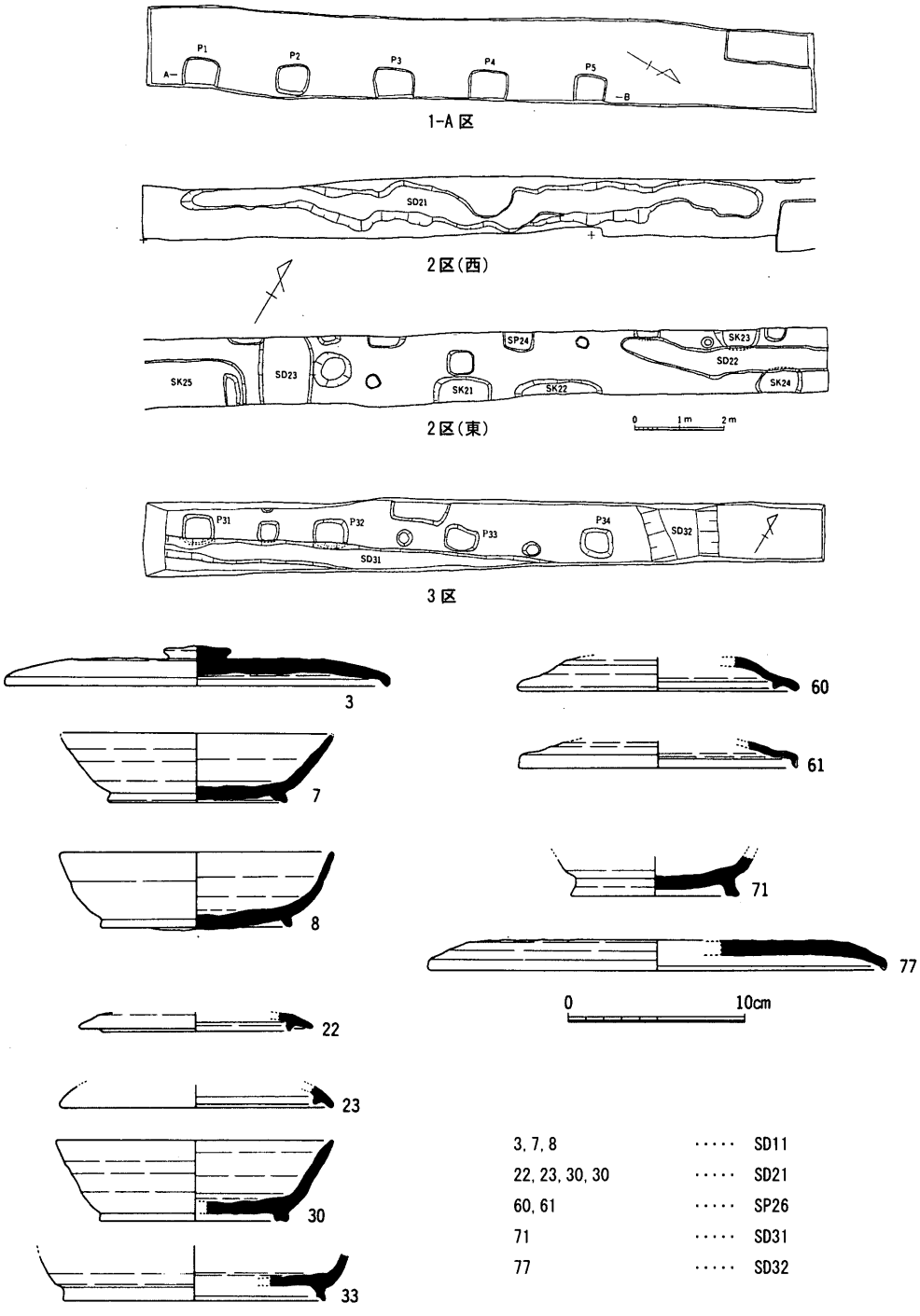
このように上記の 3 遺跡では、ある程度規格的な建物配置やこれに伴う区画施設、官衙的遺物を確認できる。しかし、この内容を（1）でまとめた稲木北遺跡の特徴と比較した場合、稲木北遺跡と生野本町遺跡では、下川津遺跡や前田東・中村遺跡とは異なる下記の 2 つの要素を備えていることが指摘できる。

A　建物配置の整然性

稲木北遺跡では大型建物群・柵列群が左右対称に配置され、かつ中枢建物（SB3001）を中心に「H 字形」建物配置（「品字形」配置の変化形）をとる。

B　条里地割との明確な整合性

稲木北遺跡では中核建物群が並ぶ中心域は、条里地割の東西 2 坪、南北 1 坪の中央に位置する。生野

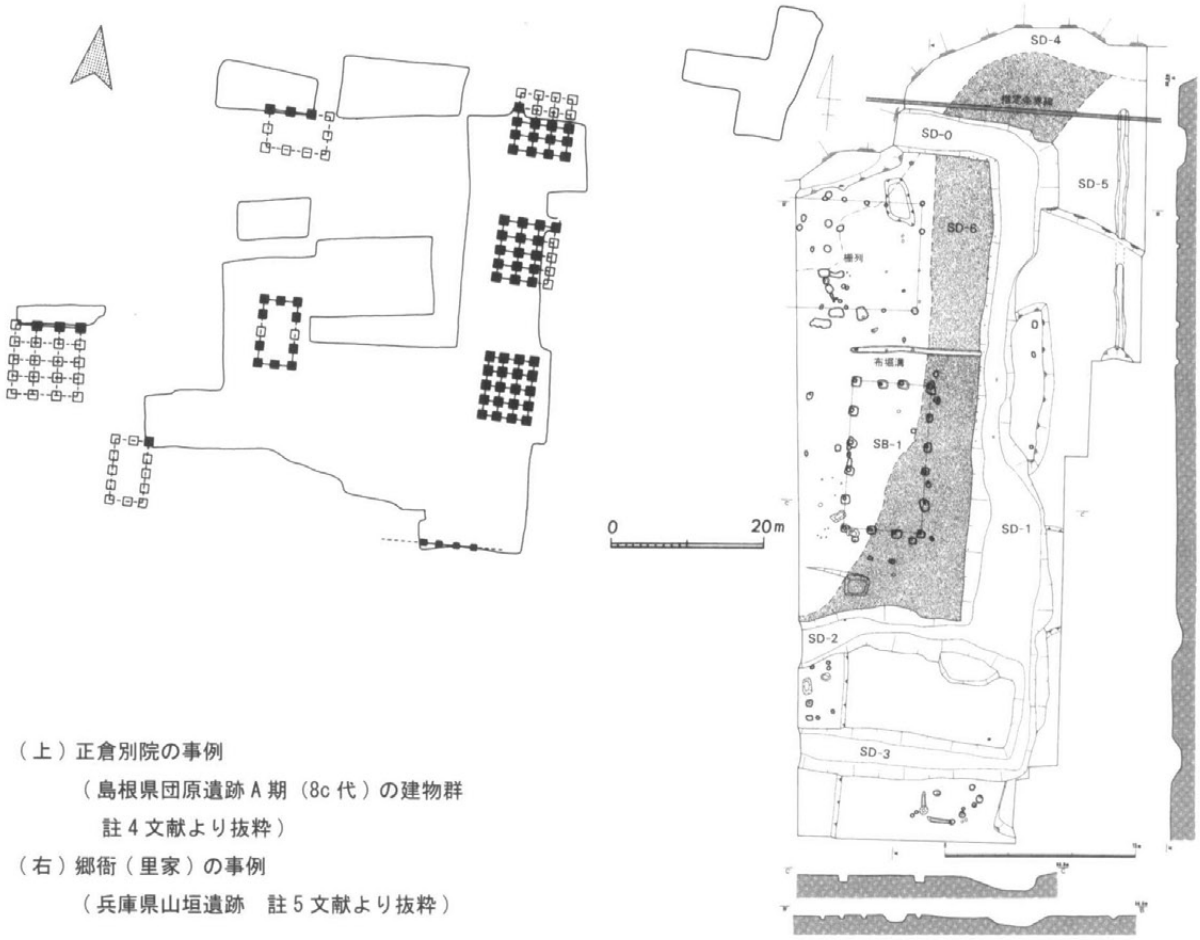


第 82 図　生野本町遺跡の検出遺構と出土遺物（S=1/4）

本町遺跡でも、上述のように、条里地割との整合性を指摘する見解がある[7]。

このように、稲木北遺跡や生野本町遺跡では官衙的遺物の出土を見ないものの、施設整備の厳密な規格性という観点では、他の二例を凌ぐ状況が認められた。この点では、現段階の県内官衙遺跡を評価するにあたって、最も優位を占める２遺跡であると言える。

(3) 稲木北遺跡と官衙遺跡との比較



（上）正倉別院の事例
（島根県団原遺跡A期（8c代）の建物群
註4文献より抜粋）
（右）郷衙（里家）の事例
（兵庫県山垣遺跡　註5文献より抜粋）

第83図　他県における官衙遺跡の事例

次いで、他県において性格付けが行われている官衙遺跡と、今回の稲木北遺跡の調査成果を対比する。まず、島根県松江市団原遺跡[8]を取り上げる。ここでは直列する正倉と推定できる倉庫群と側柱建物2棟が検出され、郡衙に付属する正倉別院と位置づけられている。中央に位置する側柱建物は正倉群の管理を目的とした建物と見られるが、その規模は稲木北遺跡の中核建物群より小さく、かつ前庭をもつ建物配置ではない点で稲木北遺跡とは異なるものと言える。

次に兵庫県春日町山垣遺跡[9]では南北40mほどの範囲が溝で区画され、その内部には掘立柱建物跡2棟が検出されている。また「里長」と書かれた木簡などが出土しており、郡の下位にある（郷）里の支配に関わる遺跡と考えられている。内部の南北棟建物の規模は、稲木北遺跡の大型掘立柱建物跡と同等の規模を有するが、区画範囲が一回り小さい。

また、龍野市小犬丸遺跡[10]は、古代山陽道に面する遺跡である。一辺80mの築地による区画が巡り、内部に礎石建物や掘立柱建物が規格的に配置される。区画規模は稲木北遺跡より一回り大きく、瓦葺建物が建てられるなど、官衙的色彩が強い遺跡である。区画に南接して道幅約20mの古代山陽道が検出されたことから、「布勢駅家」に比定されている。稲木北遺跡では中世における基幹道である伊予街道に近接するが、古代にまでその基幹道がさかのぼるか否か、明かでない。

以上の官衙遺跡との対比において、稲木北遺跡の古代遺構は、正倉、駅家、郷衙に比定される上記の遺跡とは少なからず相違点が見られた。これらの公的施設が全国一律の規格をもつ訳ではないが、稲木北遺跡の機能的側面を考える際の手がかりとなる。

(4) 多度郡衙の可能性がある稲木北遺跡と生野本町遺跡

最後に、県内で官衙遺跡として評価するにおいて優位とした同じ旧多度郡内の稲木北遺跡、生野本町遺跡を対比する。

まず、生野本町遺跡であるが、佐藤竜馬氏は同遺跡について、

① 大型建物群・大型柱穴列（を構成する柱穴群）の配置に規格性が見られる。（近接する柱穴群の間で柱筋を揃えたり、それぞれの柱穴群において柱穴跡の中心間距離を揃えたりする）

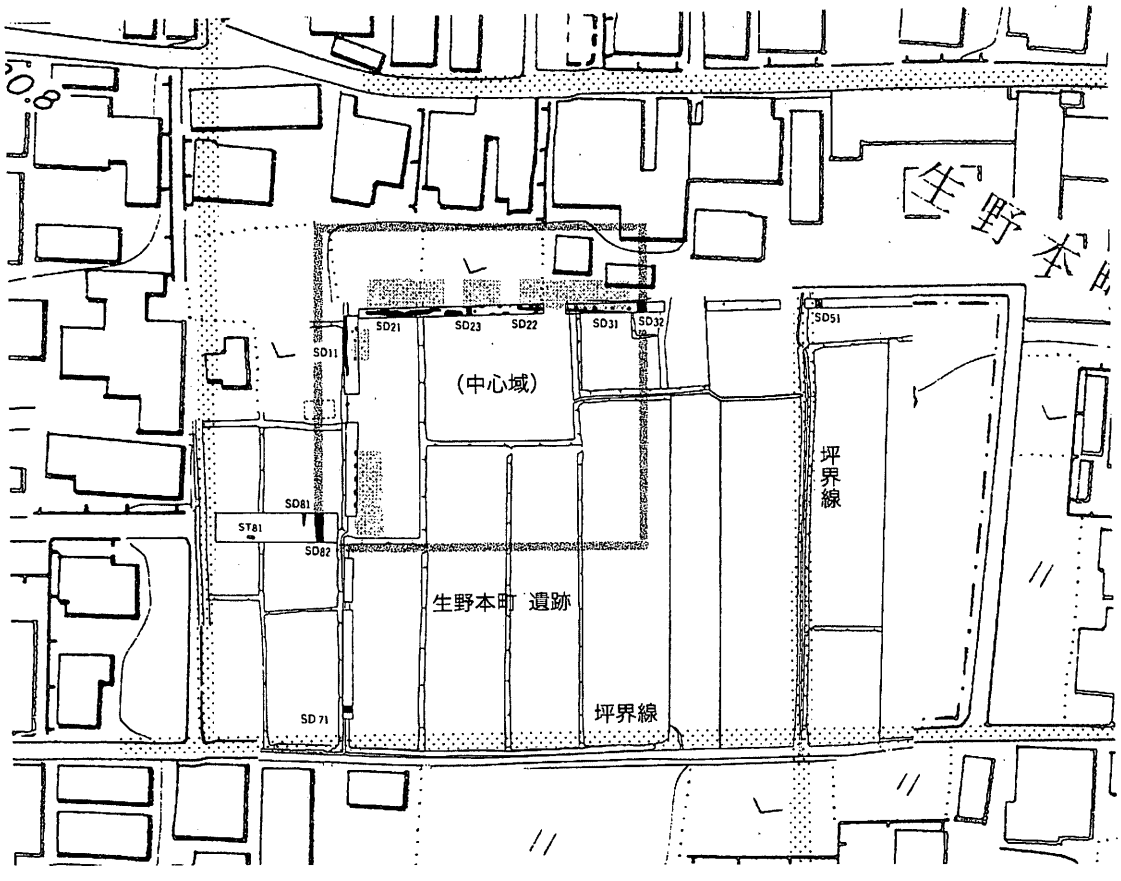
② 大型建物跡などが分布する中心域が明瞭に区画されている。かつ約 55 mを測る区画範囲の規模は郡衙政庁で見られるそれと同等である。

③ 土器組成において暗文を施す土師器が一定量含まれる。（主体は須恵器）

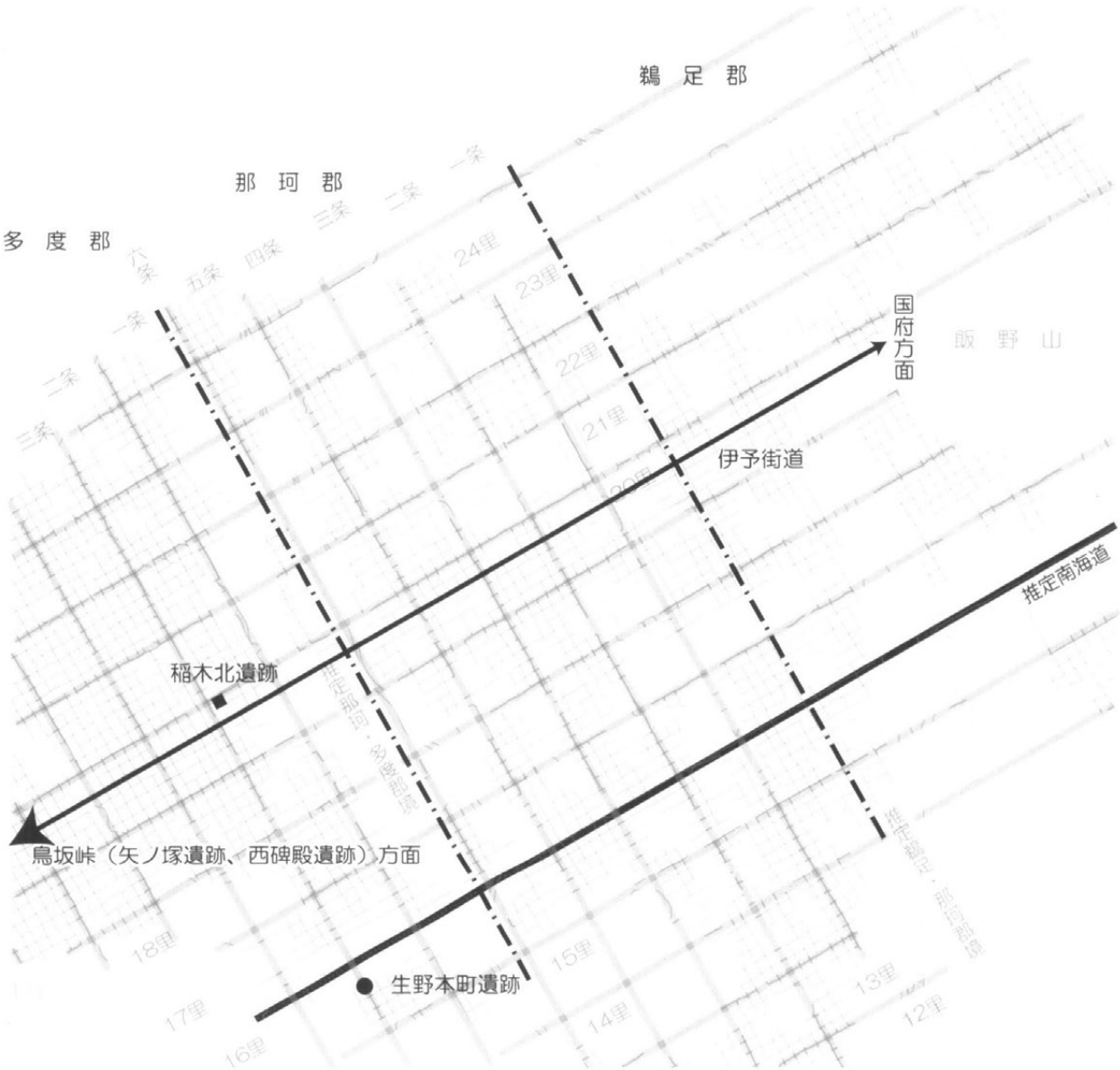
④ 遺跡の所在地が有力豪族の本拠地である。（近隣に氏寺と見られる仲村廃寺と善通寺が分布する他、佐伯直氏が造営した可能性が高い火葬墓群も存在）

⑤ 推定南海道に近接する。

の 5 点を指摘し、とくに②が豪族居宅や公的施設と評価される下川津遺跡、前田東・中村遺跡より官衙的な要素をより強く示すことからと郡衙と推定している [11]。しかし、調査面積が少なく、建物配置や区画溝の復元は、推測の域を超えていない点で留意が必要である。条里型地割との整合性も稲木北遺跡ほど積極的に評価できる訳ではない。とはいえ、第 82 図に示したように、大型柱穴跡が 30 mにわたって直線的に並ぶ状況は、それが柵列跡、建物跡にかかわらず、すでに述べたように県内の官衙的様相を



第 84 図　生野原本町遺跡の推定遺構分布 [5]（1/1250）



第85図　条里型地割における稲木北遺跡と生野本町遺跡の位置[12]**(S ≒ 1/60,000)**

もつ遺跡と比較して、規格性の点で傑出するのは間違いない。

一方、稲木北遺跡は、今回の調査成果を踏まえて生野本町遺跡と対比すると、上記の多くの点で共通する。相違点といえば③の出土遺物が少ない点、⑤の南海道近接のみである。③については稲木北遺跡の今回の調査地が区画内部の中枢部にあたり、廃棄空間が含まれていなことが起因するといえる。⑤については考古学的には南海道の実態がまだ十分に明らかでない以上、過大評価することはできない。

よって、稲木北遺跡と生野本町遺跡は、同じ旧多度郡にありながら、いずれも同程度の官衙的様相を保持しており、時期的にもほぼ同時期に営まれた遺跡と見ることができる。

第2章では稲木北遺跡が所在する旧多度郡北部、生野本町遺跡が所在する同南部は、いずれも古代の遺跡分布が顕著で、特に旧多度郡北部の遺跡では官衙的な建物配置をもつ遺跡（稲木）、河川管理祭祀を行う遺跡（金蔵寺下所）、交通の要衝に立地する遺跡（西碑殿・矢ノ塚）など、それぞれに固有の機能的側面を見いだせる遺跡が取り巻く状況を詳説した。7世紀末から8世紀初頭は、一般的に各地で郡

が成立する時期に相当する。律令体制の下で、在地支配層が地域の基盤整備に強い規制力を行使する過程において、稲木北遺跡と生野本町遺跡との間には様々な関係が生じていたことと推測する。今後の調査により、生野本町遺跡の建物配置の具体相、あるいは稲木北遺跡の廃棄空間の確認等により、その諸関係についての検討が進むことを期したい。

(1) 郡衙政庁の範囲については概ね50 m前後の近似した規模であることが指摘されている。以下ではいくつか事例を示しておく。

福岡県小郡遺跡（筑後国御原郡衙）

区画施設を伴わないが、政庁を構成する建物群がコの字形配置をとるためその外縁部までの規模を測ると、東西約63 m×南北約56 m（推定）である。

岐阜県弥勒寺東遺跡（美濃国武義郡衙）

政庁域を区画する柵列跡が四方で検出されており、その規模は東西約47 m×南北約59 mである。

茨城県神野向遺跡（常陸国鹿島郡衙）

政庁域を区画する柵列跡が四方で検出されており、その規模は約52 m× 52 mである。

山中敏史「第一章第二節　郡庁の構造と機能」『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房（1994）

(2) 西村尋文「下川津遺跡における6～8世紀の集落構造と動向」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会（1990）

(3) 森格也『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊　前田東・中村遺跡』 香川県教育委員会（1995）

(4) 國木健司『生野本町遺跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会（1993）

(5) 佐藤竜馬『生野南口遺跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会（2003）

(6) 建物群表記は下記の文献による。

佐藤竜馬「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題―南海道を中心に―』古代学協会四国支部（1998）

(7) 註（5）文献に同じ

(8) 三宅博士他『史跡　出雲国山代郷正倉跡』島根県教育委員会（1981）

(9) 平田博幸他『山垣遺跡―「里長」関連遺構の調査―発掘調査報告書　近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財発掘調査報告書（XⅢ）兵庫県教育委員会（1990）

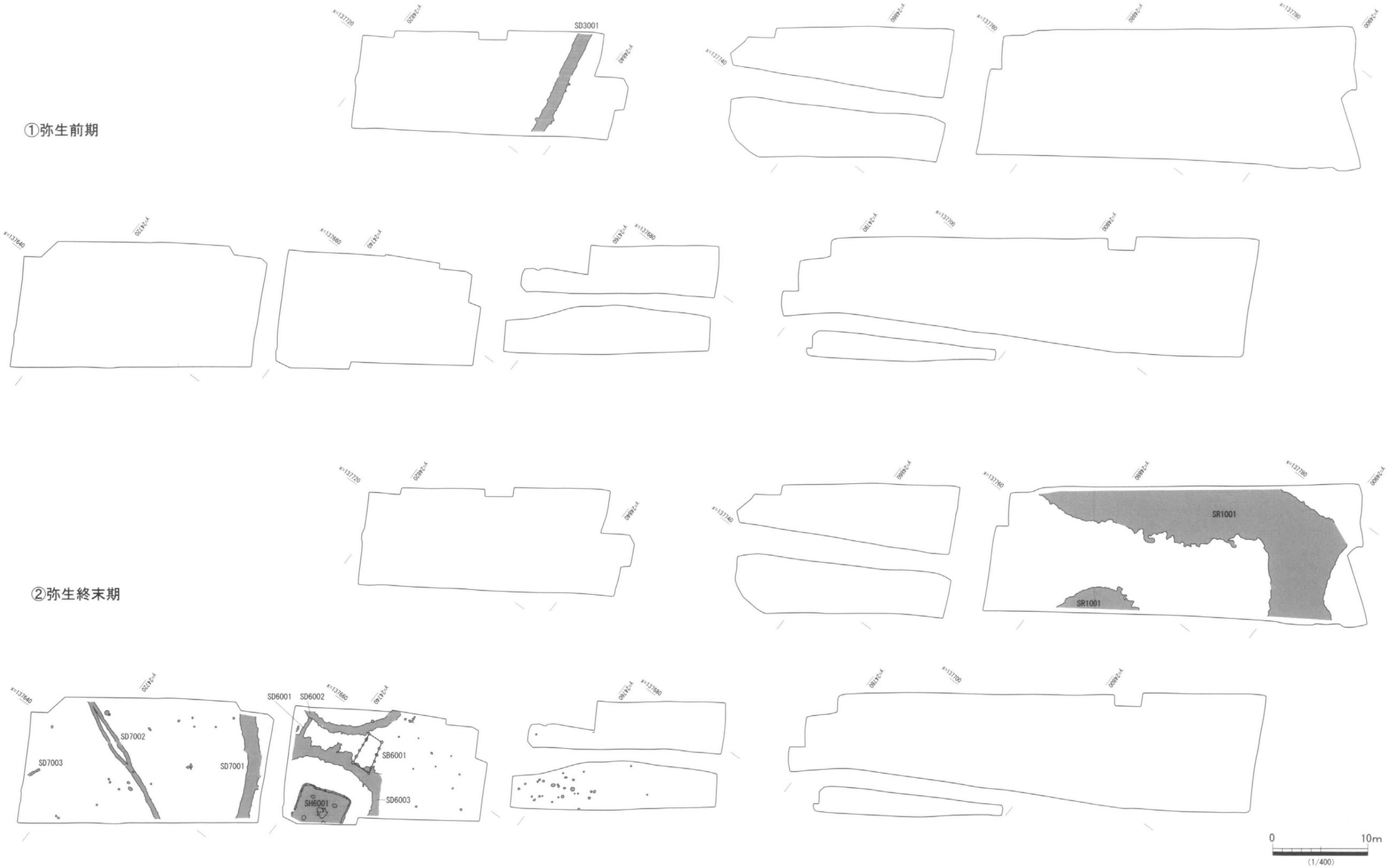
(10) 岸本道昭『山陽道駅家跡 西日本の古代社会を支えた道と駅』同成社刊（2006）

(11) 註（5）、（7）文献に同じ

(12) 中里伸明「古代の主要施設と条里型地割」『田村久雄先生傘寿記念論文集　十瓶山Ⅱ』 田村久雄先生傘寿記念会（2006）

第2節　永井北遺跡の遺構の変遷

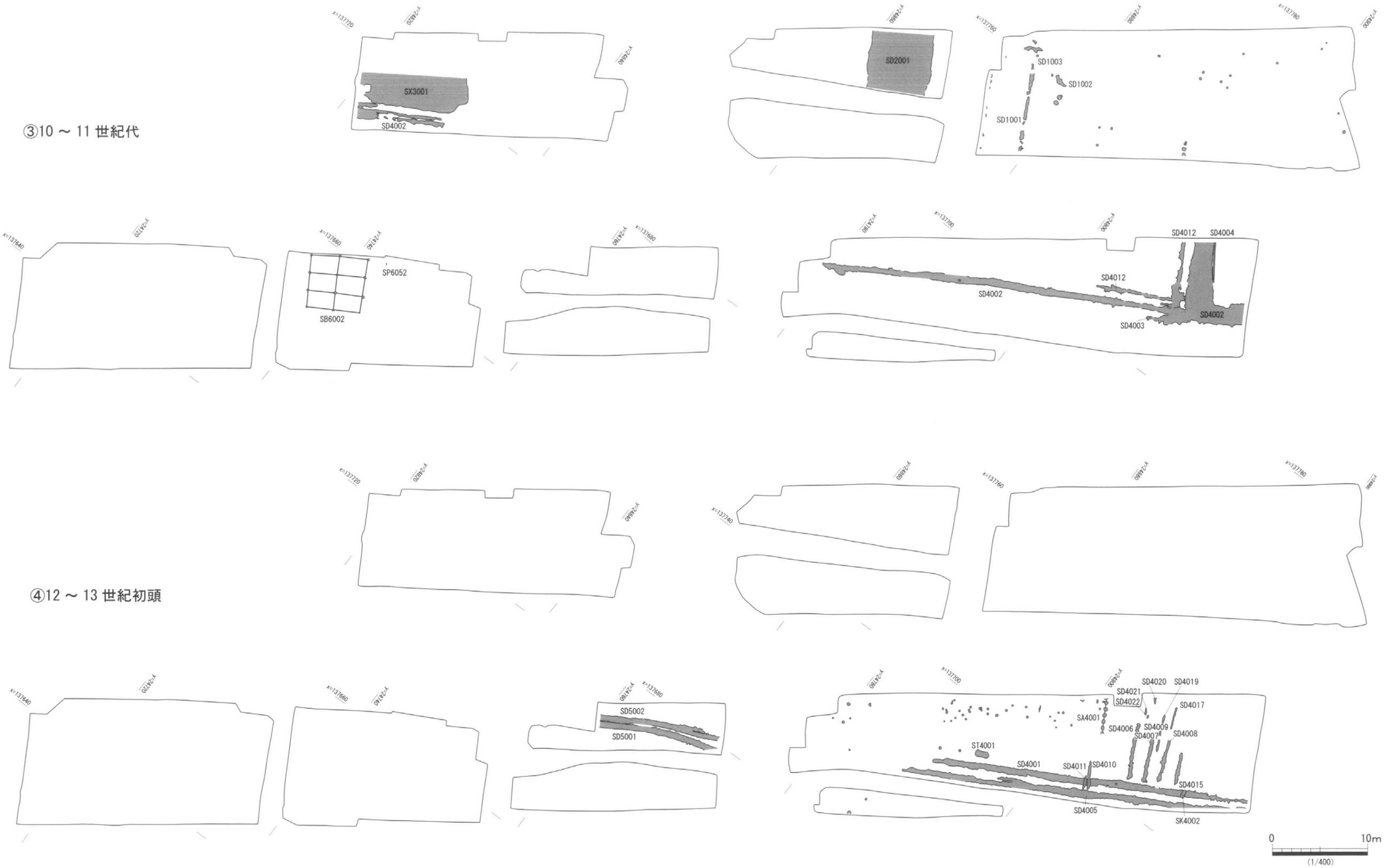
永井北遺跡では弥生時代前期から中世にかけての遺構・遺物を確認した。以下ではこれらの遺構・遺物について時期ごとに説明する。



第 86 図　永井北遺跡　遺構変遷図 1（1/400）

③10 ～ 11 世紀代

④12 ～ 13 世紀初頭



第 87 図　永井北遺跡　遺構変遷図２（1/400）

弥生時代前期

この時期に属する遺構にはＣ区 SD3001 があるのみで当該期の遺物もこの遺構以外からは出土していない。本遺構の南部では底場に接する礫群を検出した。これについては事実報告で述べたとおり堰と考えられ、水田への給排水時に利用されたと見られる。立地的には微高地の縁辺部に形成されており、周辺地形は SD3001 の東側へ下る。（Ａ区 SR1001 が検出された辺りが低位部）このため東側の低位部の辺りに水田域が広がっていたと推測される。

弥生時代後期後半～終末期

この時期に属する遺構は微高地（Ｅ～Ｇ区）上と低位部（Ａ区）で検出した。微高地上の遺構には掘立柱建物跡（SB6001）、竪穴住居跡（Ｆ区 SH6001）とこれを取り囲む周溝（Ｆ区 SD6002、SD6003）、溝状遺構（Ｇ区 SD7001 など）、ピットがあり、いずれも弥生時代終末期に位置づけられる。検出できた竪穴住居跡は１棟であるが、２条の周溝はＦ区 SD6001 で接続され同時併存しているため２棟以上の住居が併存していたと言える。また周溝間に位置するＦ区 SB6001 については柱穴跡の一部がＦ区 SD6003 の下層を掘り込んでいるため上層の埋没途上で形成され、やはり併存したと考えられる。

Ｆ区 SB6001 はごく小規模な側柱建物であることから倉庫と考えられ、住居群間の空閑地に共有施設が設けられたと見られる。なお、住居群の西側にはＧ区 SD7001 がある。これは周溝よりも深くしっかりとした溝状遺構であるが、Ｆ区 SH6001 との配置より西側の周溝も兼ねていたと推定される。

一方、低位部の遺構にはＡ区 SR1001 がある。出土土器は弥生後期後半に属するが、南東に約 1km 離れた「稲木地区」SR04（昭和 61 年度善通寺市調査）はこれと連続する旧河道であり、弥生時代後期後半から終末期の土器が出土している。よって SR1001 も弥生時代終末期にかけて流下していたと考えられる。

古代Ⅰ（10 ～ 11 世紀代）

この時期に属する遺構は調査区のほぼ全域に広がり、多くは条里型地割の方向に規制されている。内容は掘立柱建物跡（Ｆ区 SB6002）も見られるものの遺物と同様に希薄である。ピットはほとんどがまばらに分布し、建物跡などを復元できない。溝状遺構も条里の坪界溝〔①南北に延びるＢ区 SD2001、②東西に延びるＤ区 SD4002（Ｃ区 SD3002、SD3003 はこれと同一遺構）、③ SD4002 に先行する、東西に延びるＤ区 SD4012〕を除くとごく少数である。なお、調査対象地内の条里坪界については上記の①～③以外にＤ、Ｅ区間の市道部分が南北の坪界線と推定される。

このため地形的に微高地であり掘立柱建物跡も検出されたＦ区の位置する坪より東側の坪（Ｄ区以東）は、主に畑などの耕作地として利用されたと考えられる。

古代Ⅱ～中世（12 ～ 13 世紀初頭）

この時期に属する遺構は多くがＤ区に分布し、他の調査区で確実に当該期に位置づけうる遺構はＥ区の溝状遺構のみである。これらは前代と同様に条里型地割の方向に規制されている。先述のとおりＤ、Ｅ区間の市道は南北の条里坪界線と考えられるためＤ区とＥ区を区分して説明する。

Ｄ区の検出遺構にはピット群、柵列跡（SA4001）、鋤溝群（SD4006 ～ 4009、4015、4017 ～ 4022）、土壙墓（ST4001）、条里坪界溝（SD4001、4005）などがある。このうち土壙墓以外はある期間、同時併存

していたと考えられ、坪内に形成された居住域と耕作地が柵列により区画されていた状況を復元できる。またＥ区では２条の溝状遺構を検出した。これらは条里坪界溝（SD5001、SD5002）と見られる。SD5002に切られるSD5001から12世紀末～13世紀初頭の瓦器碗が出土しているためＥ区の坪界溝も12世紀代には掘削されたと考えられる。

遺物観察表　土器

稲木北遺跡

報文番号	報文遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
1	Ⅱ区 SD2001	弥生	甕	2.5Y7/2 灰黄	7.5Y5/1 灰	中・多					20.6				ﾏﾒﾂ ﾏﾒﾂ(板ﾅﾃﾞ)	ﾏﾒﾂ	口縁部 2/8	
2	Ⅱ区 SD2001	弥生	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・多							5.6		ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	底部 8/8	全体的に磨滅、剥落が著しい。鉢か？
3	Ⅱ区 SD2001	弥生	壺	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・並							7.2		ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	底部 3/8	全体に磨滅、剥落が著しい
10	Ⅱ区 SD2001	弥生	壺	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR4/6 褐	中・多									ﾍﾗﾐｶﾞｷ後ﾍﾗ描き文様	板ﾅﾃﾞ	胴部破片	外面に黒斑あり
17	Ⅱ区 SD2001	弥生	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多							7.7		ﾏﾒﾂ ﾍﾗﾐｶﾞｷ	板ﾅﾃﾞ後指ｵｻｴ	底部 8/8	磨滅、剥落が著しい。内面に黒斑あり
18	Ⅱ区 SD2001	弥生	壺	2.5Y6/2 灰黄	10YR7/4 にぶい黄橙	中・多							6.8		ﾏﾒﾂ ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ	底部 8/8	全体的に磨滅、剥落が著しい。外面に黒斑あり
22	Ⅱ区 SA2001	須恵器	高台付杯	N7/ 灰白	N8/ 灰白						15.1	4.3	9.9		回転ﾅﾃﾞ爪状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	底部 2/8	
23	Ⅱ区 SA2001	須恵器	高台付杯	N8/ 灰白	N8/ 灰白	中・多							10.0		回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	底部 2/8	灰白色でやや軟質焼成。粗雑な作り。胎土も雑。
24	Ⅱ区 SB2003	須恵器	杯身	N5/ 灰白	N5/ 灰白					中・少				体径 12.8	回転ﾅﾃﾞ回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	体部 1/8	
25	Ⅱ区 SB2003	土師質土器	移動式竈	2.5YR7/3 浅黄	2.5YR6/6 橙	中・多									ﾅﾃﾞ後指ｵｻｴ粘土貼付痕ﾅﾃﾞ？	板ﾅﾃﾞ後指ｵｻｴ	底部破片	
26	Ⅱ区 SP2049	須恵器	杯蓋	N7/ 灰白	N7/ 灰白										回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ回転ﾅﾃﾞ	仕上げﾅﾃﾞ回転ﾅﾃﾞ	口縁部 1/8	器高は低く扁平。口縁端部を明瞭に折る
28	Ⅳ区 SB4002	須恵器	杯蓋	N7/ 灰白	N7/ 灰白						推定 32.0				回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	口縁部破片	左端やや歪む。口縁端部を小さく折り返す。
29	Ⅳ区 SB4002	須恵器	甕	5PB6/1 青灰	N6/ 灰					中・多					回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	口縁部破片	
30	Ⅳ区 SB4002	須恵器	甕	N7/ 灰白	N7/ 灰白					中・少					回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	口縁部破片	
31	Ⅲ区 SB4002	須恵器	甕	N7/ 灰白	N7/ 灰白					中・多					ﾀﾀｷ	当て具痕(青海波文)	胴部破片	全体に磨滅が著しい
32	Ⅳ区 SB4002	土師器	杯	5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少			8.4		回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ？	回転ﾅﾃﾞ	底部 1/8	全体に磨滅が著しい
35	Ⅳ区 SR4001	須恵器	杯	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・少			7.5		回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ貼付高台 ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	底部 2/8	高台の外端部が接地
36	Ⅳ区 SR4001	須恵器	壺	7.5YR4/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ	N7/ 灰白					細・少				頸部 10.8	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	頸部破片	外面自然袖付着
37	Ⅳ区 SR4001	須恵器	壺	N6/ 灰	N6/ 灰					中・多			8.2		回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後仕上げﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	底部 1/8	
38	Ⅳ区 SR4001	須恵器	甕	N5/ 灰	N4/ 灰					中・多	23.3						口縁部破片	
39	Ⅳ区 SR4001	土師器	甕	2.5YR7/8 橙	5YR7/6 橙	中・並								頸部 14.4	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	頸部破片	全体に磨滅、剥落が著しい

遺物観察表・石器

報告番号	報告遺構名	器種	法量				材質	備考
			長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）		
4	Ⅱ区 SD2001	打製石鏃	22.0	15.5	3.0	0.62	サヌカイト	凹基式。基部の一部を欠損
5	Ⅱ区 SD2001	打製石斧	90.0	65.0	16.0	126.46	サヌカイト	使用による磨耗痕が両面に残る
6	Ⅱ区 SD2001	石核	130.0	97.0	32.0	575.46	サヌカイト	
7	Ⅱ区 SD2001	叩き石	147.0	45.0	42.0	385.04	砂岩	両端部に敲打痕が残る
8	Ⅱ区 SD2001	楔形石器	73.0	49.0	30.0	55.39	サヌカイト	
9	Ⅱ区 SD2001	楔形石器	64.0	47.0	8.5	33.92	サヌカイト	
11	Ⅱ区 SD2001	打製石斧	80.0	55.0	9.0	63.13	サヌカイト	自然面を残す　使用による磨耗痕が両方に残る
12	Ⅱ区 SD2001	打製石斧	23.0	44.0	6.0	6.97	サヌカイト	使用による磨耗痕が両面に残る
13	Ⅱ区 SD2001	打製石庖丁	60.2	71.0	10.5	67.08	サヌカイト	
14	Ⅱ区 SD2001	打製石鏃	21.0	13.0	2.5	0.47	サヌカイト	凹基式。基部の一部を欠損する
15	Ⅱ区 SD2001	打製石鏃未製品	19.5	15.0	2.0	0.73	サヌカイト	未製品
16	Ⅱ区 SD2001	打製石鏃未製品	37.5	14.5	4.0	2.38	サヌカイト	柳葉形鏃の未製品
19	Ⅱ区 SD2001	打製石鏃	21.0	10.0	3.0	0.65	サヌカイト	凹基式　基部の一部を欠損
20	Ⅱ区 SD2001	打製石鏃	28.5	12.5	4.5	1.78	サヌカイト	柳葉形
21	Ⅱ区 SD2001	打製石庖丁	77.5	56.5	13.0	65.98	サヌカイト	
40	Ⅳ区撹乱	磨製石斧	74.0	41.0	14.0	82.83	緑泥片岩	扁平片刃石斧

遺物観察表　木器

報文番号	報告遺構名	器種	法量			樹種	木取り	備考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）			
27	Ⅲ区 SB3011	柱材	31.4	14.6	3.0			芯無し
33	Ⅳ区 SB4003	柱材	19.2	5.9	5.2			芯無し
34	Ⅳ区 SB4003	柱材	16.8	14.3	3.2			芯無し

大型建物跡計測表

遺構名	建物構造	柱構造	梁間（m）	桁行（m）	床面積（㎡）	柱穴径（m）	柱痕径（m）
SB1001	掘立柱建物	2間以上×3間以上	1.9	4.2	－	0.68～0.8	0.16～0.2
SB2001	総柱建物	3間×3間以上	4.8	4.8	23.04以上	0.8～1.24	0.16～0.2
SB2002	総柱建物	3間×2間以上	4.64	3.28	15.2以上	0.72～1.16	0.16～0.32
SB2003	側柱建物	3間×3間以上	4.92	5.28	25.97以上	1.08～1.24	0.24～0.32
SB3001	床束建物	3間×5間（推定）	5.48	12	推定65.7	1.0～1.32	0.28～0.42
SB4001	総柱建物	3間×3間以上	4.24	5.88	24.9以上	0.6～1.04	0.16～0.28
SB4002	掘立柱建物	3間×7間（推定）	6.6	13.8	推定91.08	0.96～1.44	0.27～0.32
SB4003	掘立柱建物	3間×1間以上	5	－	－	0.8～1.0	0.2～0.24

大型柵列跡計測表

遺構名	柱構造	検出長（m）	柱穴径（m）	柱痕径（m）
SA2001	7間以上	10.08以上	0.68～0.92	0.16～0.2
SA4001	5間以上	9.6以上	0.84～0.96	0.16～0.24

遺物観察表　土器

永井北遺跡

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
1	A区 SR1001	弥生	壺	5YR5/6 明赤褐	5YR4/6 赤褐	中・少	中・少		中・並		21.6				ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部 1/8	全体に磨滅がすすむ
2	A区 SR1001	弥生	壺	10YR4/6 明黄褐	10YR4/6 明黄褐	中・並			細・少						ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部破片	全体に磨滅気味
3	A区 SR1001	弥生	高杯	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並			細・並				2.7		マメツ	ヘラケズリ　指オサエ　マメツ	破片	全体に磨滅がすすむ 円盤充填の部分
4	A区遺構外	土師器	杯	7.5YR4/6 褐	7.5YR5/8 明褐					細・少			7.6		回転ナデ 回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	全体に磨滅がすすむ
5	A区遺構外	土師器	杯	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・少	中・少						4.6		マメツ	マメツ	底部 3/8	全体に磨滅が著しい 底部は回転ヘラ切りか？
6	A区遺構外	土師器	椀	2.5Y8/4 淡黄	10YR6/4 にぶい黄橙					細・少			5.6		貼付高台 回転ヘラ切り	ヘラミガキ	底部 1/8	
7	A区遺構外	黒色土器	椀	5Y2/1 黒	5Y2/1 黒	中・多			細・並				6.8		ヨコナデ　貼付高台　マメツ	マメツ	底部 2/8	土師器か？　全体に摩滅がすすむ
8	A区遺構外	須恵器	杯	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少	12.0				回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	全体にやや磨滅している
10	B区 SD2001	須恵器	甕	5B4/1 暗青灰	N7/ 灰白					中・少				肩部径 22.2	回転ナデ　格子目タタキ後回転ナデでガ消す	回転ナデ	肩部 2/8	外面の肩部に自然釉が付着する
11	B区 SD2001	須恵器	壺	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少			9.6		回転ナデ 静止糸切り	回転ナデ	底部 4/8	底部内面に自然釉がゴマ状に付着する
12	C区 SD3001	弥生	壺	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多					12.0				刺突文　マメツ ヘラ描沈線2条		口縁部 1/8	全体に磨滅がすすむ
13	C区 SD3001	弥生	壺	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・多	細・少				13.9				ナデ　指オサエ 後ヘラミガキ　段	ナデ	口縁部 1/8	全体に磨滅がすすむ 口頸部の段は沈線下削りこみによるもの
14	C区 SD3001	弥生	壺	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	粗・多	中・並				18.0				ヨコナデ　マメツ ヘラミガキ　段	ヨコナデ	口縁部 1/8	外面に黒斑あり 口頸部の段は沈線下削りこみによるもの
15	C区 SD3001	弥生	壺	10YR3/1 黒褐	10YR6/3 にぶい黄橙	粗・多							7.6		剥離　ヘラミガキ　板ナデ	板ナデ後ナデ	底部 5/8	外面に黒斑あり
16	C区 SD3001	弥生	壺	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	粗・多							8.3		ヘラミガキ ナデ	指ナデ	底部 8/8	外面に黒斑あり
17	C区 SD3001	弥生	甕	10YR8/3 浅黄橙	10YR4/1 褐灰	細・多							7.0		マメツ	マメツ	底部 4/8	内部に黒斑有り 全体に磨滅がすすむ
21	D区 SD4001	瓦器	椀	N8/ 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少			5.5		マメツ(指オサエ) 貼付高台	マメツ	底部 1/8	全体に磨滅がすすむ
22	D区 SD4001	土師質土器	甕	7.5YR4/3 褐	10YR5/3 にぶい黄褐					粗・多					ハケメ後 ヨコナデ後 指オサエ	ヨコナデ	破片	
23	D区 SD4001	須恵器	壺	2.5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白					細・少					回転ナデ 自然釉が薄く付着している	回転ナデ	口縁部破片	
25	C区 SD3003	須恵器	杯	N 8/ 灰白	N8/ 灰白					細・少			7.0		マメツ	マメツ	底部 1/8	全体に磨滅が著しい
26	D区 SD4005	黒色土器A	托状椀	10YR6/2 灰黄褐	5Y3/1 オリーブ黒					細・多					回転ナデ	ヘラミガキ	高台部破片	全体に磨滅が著しい
28	D区 SD4006	土師器	椀	2.5Y8/3 淡黄橙	2.5Y8/4 淡黄橙					細・少					ナデ	ナデ	口縁部破片	全体に磨滅がすすむ

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
29	D区 SD4006	土師器	椀	10YR8/1 灰白	N4/ 灰					細・少			7.0		回転ナデ	ヘラミガキ	高台部 1/8	全体に磨滅がすすむ
30	D区 SD4008	土師器	椀	10YR8/3 淡黄橙	10YR8/3 淡黄橙					細・少					回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	全体に磨滅がすすむ
31	D区 ST4001	瓦器	椀	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/1 褐灰					中・少					回転ナデ 指オサエ	マメツ	口縁部破片	全体に磨滅が著しい
32	D区 ST4001	瓦器	椀	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰					中・少	4.4	2	2.6		ヘラミガキ 回転ケズリ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	7/8	一部を欠損する
33	D区 SK4001	土師器	杯	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙					細・少					マメツ	マメツ	口縁部破片	全体に磨滅が著しい
34	D区 ST4001	黒色土器	椀	5YR7/6 橙	10YR4/1 褐灰					細・少			6.0		ナデ 貼付高台	ヘラミガキ？	底部 1/8	全体に磨滅が著しい
35	D区 ST4001	白磁	碗	7.5Y8/1 灰白	N8/ 灰白					中・少	16.0	5.9	6.5		回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ施釉 削り出し高台	施釉	底部 8/8	ほぼ完形（口縁をごく一部欠く） 白磁のV類
36	D区 SP4026	土師器	椀	10YR8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄					細・多			4.6		マメツ 貼付高台	マメツ	底部 1/8	全体に磨滅が著しい
37	E区 SD5001	瓦器	椀	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙					細・少			5.1		マメツ（ナデ）	マメツ	底部 2/8	全体に磨滅が著しい
38	E区 SD5002	黒色土器A	椀	10YR8/1 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙					細・少			5.1		マメツ（回転ナデ）	マメツ	底部 3/8	全体に磨滅が著しい
39	F区 SD6001	弥生	甕	7.5YR7/8 黄橙	2.5Y4/1 黄灰	細・並					15.0				ヨコナデ 指オサエ マメツ	ヨコナデ ヘラケズリ マメツ	口縁部 2/8	全体に磨滅が著しい
40	F区 SD6001	弥生	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並	細・少								タタキ後ナデ ナデ	ヘラケズリ後ナデ	底部 8/8	
41	F区 SD6002	弥生	壺	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	細・多					18.8				ヨコナデ 擬凹線2条ハケメ	ヨコナデ 指オサエ後ナデ	口縁部 3/8	口縁内面に黒斑あり
42	F区 SD6002	弥生	壺	5YR5/6 明赤褐	5YR5/8 明赤褐	中・並	細・少				20.0				ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部 1/8	全体に磨滅が著しい
43	F区 SD6002	弥生	壺	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・並					23.6				竹管文 鋸歯文 斜格子文 ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部 1/16	全体に磨滅。剥落する。器台かも？
44	F区 SD6002	弥生	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5Y7/1 灰白	細・並		細・少			15.8				ナデ タタキ後ハケメ後指オサエ	ナデ ハケメ後ナデ 指オサエ ヘラケズリ後ハケメ後指オサエ	口縁部 3/8	内外面（口縁部）に黒斑あり
45	F区 SD6002	弥生	甕	10YR7/3 にぶい黄橙 2.5Y4/1 黄灰	7.5YR7/4 にぶい黄橙	細・並					17.2				ヨコナデ タタキ後ハケメ後ナデ マメツ	ヨコナデ ヘラケズリ マメツ	口縁部 3/8	外面に黒斑あり全体に磨滅気味
46	F区 SD6002	弥生	甕	7.5YR8/4 浅黄橙	5Y6/1 灰	粗・多	中・並								ナデ タタキ後ハケメ	指オサエ後ナデ ヘラケズリ	口縁部 4/8	全体に磨滅・剥落が著しい
47	F区 SD6002	弥生	甕	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・多					13.6				ヨコナデ 粗い縦ハケメ	ヨコナデ 指オサエ後板ナデ ヘラケズリ	口縁部 1/8	全体に磨滅が著しい
48	F区 SD6002	弥生	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	粗・多	中・多						3.7		マメツ	ナデ	底部 8/8	外面に黒斑あり 外面の磨滅がすすむ
49	F区 SD6002	弥生	甕	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄	中・多							3.1		タタキ ナデ	板ナデ	底部 8/8	外面に黒斑あり
50	F区 SD6002	弥生	甕	5YR5/6 明褐	7.5YR7/6 橙	中・並							4.0		ハケメ ナデ	ヘラケズリ	底部 2/8	

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
51	F区 SD6002	弥生	鉢	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	粗・並				9.6				ハケメ	ナデ	口縁部 1/ 8	全体に磨滅気味 外面に黒斑あり
52	F区 SD6002	弥生	鉢	10YR6/6 明黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	中・並					9.2	6.5			板ナデ後指オサエ	ハケメ	4/8	外面に黒斑あり
53	F区 SD6002	弥生	鉢	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	中・並	粗・並				13.7	4.6	3.4		マメツ	マメツ	口縁部 1/8	外面に黒斑あり　全体に磨滅が著しい
54	F区 SD6002	弥生	鉢	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	中・並					18.9	7.6			ナデ ハケメ後ナデ指オサエ	ナデ　ハケメ指オサエ後ナデ	5/8	外面に黒斑あり
55	F区 SD6002	弥生	甕	2.5Y5/3 黄褐	2.5Y6/2 灰黄	細・多			細・並				4.4		ハケメ　ナデ	ヘラケズリ後ナデ	底部 2/8	外面に黒斑あり
56	F区 SD6003	弥生	壺	10YR5/6 黄褐	10YR6/2 灰黄褐	細・多			細・多		22.5				波状紋　ヨコナデ　マメツ	ヨコナデ マメツ	頸部の 3/8	全体に磨滅が著しい
57	F区 SD6003	弥生	壺	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	中・並		細・少	細・少		17.4				マメツ	マメツ	口縁部 1/8	磨滅がすすむ
58	F区 SD6003	弥生	甕	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・多					14.0	18.4	4.0		ナデ　ハケメ後指オサエ マメツ	ナデ　ハケメ ヘラケズリ後指ナデ？ マメツ	3/8	外面に黒斑あり
59	F区 SD6003	弥生	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	細・並			細・少		15.0				ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ヘラケズリ	口縁部 1/8	全体に磨滅・剥落がすすむ
60	F区 SD6003	弥生	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR5/4 にぶい黄褐	中・多	細・少		細・並		15.4				ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ　ヘラケズリ後指オサエ	口縁部 3/8	
61	F区 SD6003	弥生	甕	7.5YR6/3 にぶい褐	10YR6/3 にぶい黄橙	細・少	粗・少		細・少		15.0				ヨコナデ マメツ	ヨコナデ ハケメ　マメツ	口縁部 2/8	全体に磨滅気味
62	F区 SD6003	弥生	高杯	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/4 にぶい褐	粗・多		中・少	中・少						ナデ ハケメ	板ナデ後ナデ？ マメツ	杯部 2/8	内外面の磨滅 剥落がすすむ
63	F区 SD6003	弥生	高杯	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	細・多			細・少				18.0		マメツ ヨコナデ	マメツ　板ナデ ヨコナデ	脚部 1/8	全体に磨滅が著しい 穿孔 2 箇所現存
64	F区 SD6003	弥生	高杯	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	細・並			細・少				14.3		ハケ目 ヨコナデ	マメツ	脚部 1/8	全体に磨滅がすすむ
65	F区 SD6003	弥生	高杯	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・多	細・少		中・多				18.0		マメツ	ヘラケズリ ハケメ後ナデ	脚部 1/8	全体に磨滅がすすむ　穿孔 1 個現存
66	F区 SD6002	弥生	鉢	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	中・並					15.2	6.9	2.4		ナデ　ヘラケズリ後板ナデ指オサエ	板ナデ後ナデ マメツ	口縁部 2/8	全体に磨滅気味 外面に黒斑あり
67	F区 SD6003	弥生	鉢	10YR6/4 明黄褐	10YR6/4 明黄褐	中・並					18.0				ナデ　板ナデ後ナデ	ヨコナデ	口縁部 1/8	
68	F区 SD6003	弥生	壺	7.5YR6/6 橙	2.5Y4/1 黄灰				中・並				6.0		ナデ　マメツ	ヘラケズリ後指オサエ	底部 4/8	全体に磨滅気味 外面に黒斑あり
69	F区 SD6003	弥生	壺	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	中・少							4.8		板ナデ ナデ	板ナデ後指オサエ	底部 4/8	全体に磨滅がすすむ 内外面に黒斑あり
70	F区 SD6003	弥生	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR2/1 黒	中・並					15.3				ヨコナデ タタキ後ハケメ	ヨコナデ　ヘラケズリ後指オサエ	口縁部 6/8	
71	F区 SD6003	弥生	甕	7.5YR6/6 橙	5Y6/1 灰	中・並			細・少		14.0				ナデ　ハケメ タタキ	ナデ　ヘラケズリ後ナデ ヘラケズリ	口縁部 2/8	全体に磨滅がすすむ 外面に黒斑あり
72	F区 SD6003	弥生	甕	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	細・並			細・並		13.5				ヨコナデ 板ナデ	ヨコナデ 板ナデ マメツ	口縁部 1/8	全体に磨滅がすすむ 端部に偶発的に工具痕がつく？
73	F区 SD6003	弥生	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	細・並	中・少		細・少		14.4				ヨコナデ　タタキ後ハケメ	ヨコナデ ヘラケズリ	口縁部 2/8	口縁内面に黒斑あり

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
74	F区 SD6003	弥生	甕	7.5YR4/3 褐	10YR4/1 褐灰	細・少			細・多				4.0		ナデ	指オサエ ヘラケズリ マメツ	底部 4/8	全体に磨滅気味
75	F区 SD6003	弥生	鉢	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多					13.0	5.0	3.0		ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ ハケメ	口縁部 4/8	内外面に黒斑あり
76	F区 SD6003	弥生	甕	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	細・並					14.4				ヨコナデ タタキ	ヨコナデ 指オサエ 板ナデ	口縁部 1/8	やや磨滅気味
77	F区 SD6003	弥生	鉢	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	細・少							2.1		タタキ後ナデ ナデ	ハケメ後ナデ	底部 4/8	全体に磨滅気味
78	F区 SD6003	弥生	鉢	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙 10YR5/1 褐灰	細・多					26.4				ヨコナデ ナデ? マメツ	ヨコナデ ハケメ マメツ	口縁部 1/8	全体に磨滅がすすむ 口縁内面に黒斑あり
79	F区 SD6003	弥生	ミニチュア鉢	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	中・少			細・少		5.8	1.8	1.0		指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	4/8	ミニチュア鉢 外面に黒斑あり
81	F区 SH6001	弥生	(底部)	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	細・並			細・並				1.3		ハケメ後ナデ	ヘラケズリ後ハケメ	底部 8/8	外面に黒斑あり
82	F区 SP6052	黒色土器A類	椀	7.5YR7/6 橙	N3/ 暗灰					中・少			7.1		回転ナデ後ナデ 回転ナデ	ヘラミガキ	底部 4/8	
83	C区 SD3001	弥生	壺	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	粗・多	中・多				24.8				竹管文 鋸歯文 貼付け突帯刻目?マメツ	マメツ 板ナデ	口縁部 2/8	全体に磨滅・剥落が著しい
84	G区 SD7001	弥生	壺	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	細・少	細・少				26.0				鋸歯文 マメツ	マメツ	口縁部 1/10	全体に磨滅がすすむ 器台か?
85	G区 SD7001	弥生	壺	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	細・多	細・少		細・少						鋸歯文 ナデ	ヨコナデ	破片	器台か?
86	G区 SD7001	弥生	壺	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	粗・少	細・少								鋸歯文 マメツ	マメツ	破片	磨滅が著しい 器台か?
87	G区 SD7001	弥生	壺	7.5YR5/6 明褐	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多					20.0				マメツ	マメツ	口縁部 1/8	全体に磨滅が著しい
88	G区 SD7001	弥生	甕	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	細・並			細・少		13.2				ヨコナデ ハケメ マメツ	ヨコナデ ヘラケズリ後指オサエ	口縁部 2/8	全体に磨滅がすすむ 口縁内面に黒斑あり
89	G区 SD7001	弥生	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/2 灰黄褐	粗・並									ヨコナデ ヨコナデ後ハケメ タタキ後ハケメ	ヨコナデ ハケメ ナデ ヘラケズリ	頸部の 1/8	全体に磨滅がすすむ
90	G区 SD7001	弥生	壺	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	細・並			細・並				7.2		ナデ	ナデ	底部 1/8	
91	G区 SD7001	弥生	壺	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	中・並					22.0				ヨコナデ 鋸歯文 竹管文 2個1組	ヨコナデ	口縁部 2/8	
92	G区 SD7001	弥生	甕	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/4 浅黄	細・並					15.8				ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ヘラケズリ	頸部の 2/8	全体に磨滅がすすむ
93	G区 SD7001	弥生	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多	中・並		中・多		13.9				ヨコナデ ハケメ マメツ	ヨコナデ 指オサエ ヘラケズリ マメツ	口縁部 5/8	磨滅がすすむ
94	G区 SD7001	弥生	甕	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	細・並			細・少		13.2				ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ヘラケズリ後指オサエ	口縁部 1/8	磨滅がすすむ
95	G区 SD7001	弥生	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/6 明黄褐	細・並					15.8				ナデ 指オサエ後ナデ ハケメ	ナデ マメツ ヘラケズリ	口縁部 1/8	
96	G区 SD7001	弥生	ミニチュア甕	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・少			中・多		4.6				ヨコナデ 指オサエ後ナデ	ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ	3/8	

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
97	G区SD7001	弥生	ミニチュア甕	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	細・少			中・多				2.2		指オサエ後ヨコナデ　ハケメ後指オサエ	指オサエ後ナデ	7/8	外面に黒斑あり
98	G区SD7001	弥生	甕	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	中・多			細・多				5.8		マメツ	ヘラケズリ後指オサエ	底部 4/8	内面に炭化物付着の痕跡あり
99	G区SD7001	弥生	壺	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	細・並			細・並				4.3		ハケメ後ヘラミガキ　ナデ	ハケメ	底部 8/8	底部外面にクラックが入る（粘土乾燥時 or 焼成時）
100	G区SD7001	弥生	壺	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	細・少							3.2		板ナデ	ハケメ後指オサエ	底部 8/8	全体に磨滅気味
101	G区SD7001	弥生	台付鉢	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	細・並			細・並					台接合部径 4.8	ハケメ　指オサエ後ナデ	ヘラミガキ	台接合部の 3/8	外面の磨滅がすすむ
102	G区SD7001	弥生	製塩土器	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白	中・並							5.0		タタキ　ナデ	ナデ	脚部 2/8	磨滅がすすむ
103	G区SD7001	弥生	鉢	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	中・並					8.0				板ナデ	ナデ	口縁部 1/8	
104	G区SD7001	弥生	鉢	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	細・多			細・並		10.6	4.8	1.5(?)		ナデ　ヘラケズリ後ナデ	ナデ　ハケメ　ナデ	底部 4/8	全体に磨滅がすすむ
105	G区SD7001	弥生	鉢	N4/ 灰	2.5Y5/2 暗灰黄	中・並					12.0				マメツ	マメツ	口縁部 1/8	全体に磨滅・剥落が著しい
106	G区SD7001	弥生	鉢	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	細・多			細・並		16.0				ヨコナデ　ハケメ　マメツ	ヨコナデ　ヘラミガキ　マメツ	口縁部 1/8	全体に磨滅気味
107	G区SD7001	弥生	鉢	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	細・並			細・並		15.6				ヨコナデ　強いヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	ヨコナデ　ヘラミガキ	口縁部 1/8	
108	G区SD7001	弥生	鉢	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	細・並			細・多		17.9				ナデ　ヘラケズリ	ハケメ	口縁部 1/8	外面に黒斑あり
109	G区SD7001	弥生	高杯	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	粗・多			中・並		23.0				ヨコナデ　ハケメ後ヘラミガキ　ヘラケズリ　マメツ	ヨコナデ　マメツ	口縁部 1/8	全体に磨滅が著しい
111	G区SD7001	弥生	甕	2.5Y5/1 黄灰	5Y4/1 灰	中・多			細・並				3.3		タタキ後ハケメ　ナデ	ヘラケズリ　指オサエ後ヘラケズリ	底部 8/8	全体に磨滅がすすむ　外面に黒斑あり
113	G区遺構外	土師質土器	土釜	5YR4/6 赤褐	5YR6/1 褐灰				中・少						ヨコナデ　指オサエ後ナデ	ヨコナデ	口縁部破片	

遺物観察表　石器

報文番号	報告遺構名	器種	法量				材質	備考
			長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）		
9	A区	打製石庖丁	4.9	9.3	1.1	64.72		自然面を部分的に残す
18	C区 SD3001	打製石鏃	26.0	17.5	3.5	0.92	サヌカイト	凹基式。基部の一部を欠損
19	C区 SD3001	スクレイパー	60.0	43.0	6.5	19.74	サヌカイト	一部に自然面を残す。折損してある
20	C区 SD3001	砥石	96.2	64.5	41.0	390.03	砂岩	二面を砥面に使用
24	D区 SD4001	打製石鏃	16.0	16.0	4.0	0.28	サヌカイト	凹基式。完形
80	F区 SD6003	打製石鏃	4.4	2.9	6.0	8.13	サヌカイト	製作途中か？（平基式）先端を欠損する。
110	G区 SD7001	叩き石	150.0	72.0	42.0	623.43	不明	
112	G区	打製石鏃	2.5	1.2	2.2	0.44	サヌカイト	凹基式。先端と基部の一端を欠損。全に風化が進む。

遺物観察表　銅製品

報文番号	報告遺構名	器種	法量				材質	備考
			長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）		
27	D区 SD4005	銭	24.0	2.4	1.0	2.27	銅	「紹聖元寳」北宋銭。一部を欠損

小 塚 遺 跡

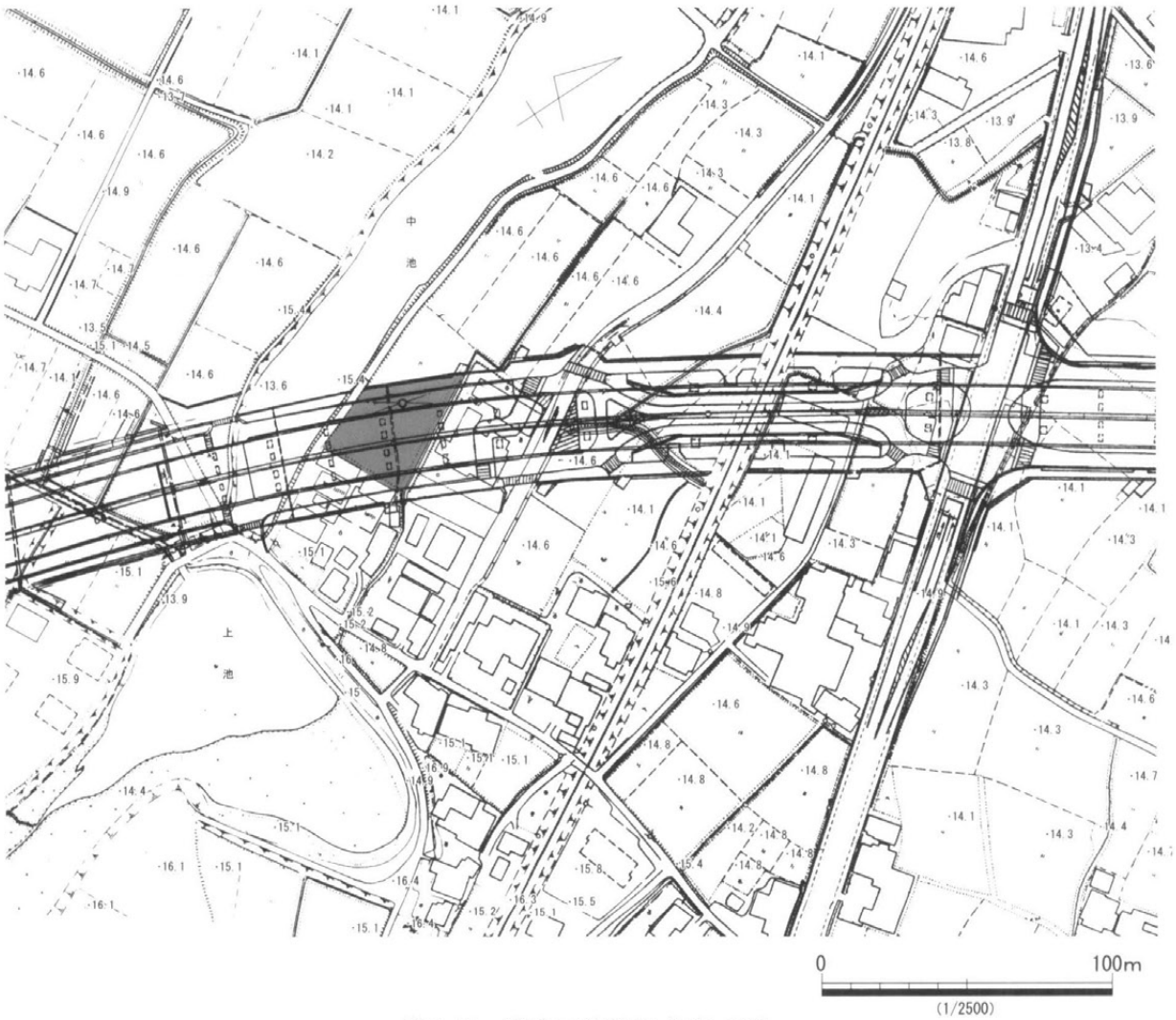
第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

一般国道11号は徳島市を起点に、高松市を経由しながら香川県を横断して終点の松山市に至る236.0㎞の幹線道路であり、３つの県都を結ぶ重要な路線である。県内においては東讃地方や西讃地方と高松を結ぶ大動脈であるため、朝晩の通勤ラッシュ時には交通渋滞などを招いておりそうした問題を解消するために、高松から丸亀に至る部分では復員の拡幅やバイパス路線の建設などが進められてきた。坂出丸亀バイパスはその一部分にあたり、その終点部となっていた原田～稲木区間は県道善通寺多度津線と平面交差していることから慢性的な交通渋滞を招いていた。これを解消すべく、県道善通寺多度津線とＪＲ土讃線を高架橋で立体交差させたバイパスの西への延伸が建設省（当時、現・国土交通省）によって計画された。

この事業計画を受けて、香川県教育委員会事務局文化行政課（当時、現・香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課）は、埋蔵文化財の有無を確認するために平成９年10月に試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の包蔵地を確認したことから、文化行政課と建設省との間でその保護措置について協議を行い、820㎡を対象として発掘調査を実施することで合意した。

第１図　遺跡位置図



第２図　調査区位置図（1/2,500）

これを受けて、文化行政課は平成11年４月１日付け『平成11年度　埋蔵文化財調査契約』を財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（当時、現・香川県埋蔵文化財センター）と締結し、発掘調査が行なわれる運びとなった。

第２節　調査・整理の経過

発掘調査は、香川県教育委員会を調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを担当者として平成11年４月１日に着手した。調査方法は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが現場作業員を雇用する直営方式を採用して行った。調査面積が狭いことと、残土の仮置き場所を用地内で確保できたことから、対象地を一度に調査して効率化を図っている。調査は埋め戻しを含めて５月31日に終了した。

整理作業は、平成19年６月１日に開始した。出土品の洗浄は現地で終了していたため、遺物復元、実測遺物抽出、遺物実測、遺構・遺物図面トレース、レイアウト、遺物写真撮影、遺物観察表作成、原稿執筆、編集、台帳整備、収納などの作業を行い、７月31日に終了した。

第３節　調査・整理の体制

平成 11 年度の発掘調査及び平成 19 年度の整理作業は以下の体制で実施した。なお、平成 15 年度末をもって財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが解散となり業務が香川県埋蔵文化財センターに移行したため、整理作業は香川県埋蔵文化財センターが実施している。

調査（平成 11 年度）

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	小原克己
	課長補佐	小国史郎
	副主幹	廣瀬常雄
総務	係　長	中村禎伸
	主　査	三宅陽子
	主　事	亀田幸一
埋蔵文化財	係　長	西村尋文
	文化財専門員	森　格也
	主任技師	塩崎誠一

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	菅原良弘
	次長	川原裕章
総務	副主幹	六車正憲
	副主幹	大西誠治
	係　長	新　一郎
	主　査	山本和代
	主任主事	高木康晴
調査	主任文化財専門員	藤好史郎
	主任技師	野崎隆亨
	技　師	松本和彦
	調査技術員	豊岡多恵
	参　事	長尾重盛

整理（平成 19 年度）

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括・生涯学習推進グループ

課　長	鈴木健司
課長補佐	武井壽紀
副主幹	古田　泉
主　任	林　照代

文化財グループ

課長補佐	藤好史郎
副主幹	片桐孝浩
主　任	白井洋二
文化財専門員	森　格也
文化財専門員	信里芳紀

香川県埋蔵文化財センター

総括	所　長	渡部明夫
	次　長	廣瀬常雄
総務課	課　長	野口孝一
	主　任	宮田久美子
	主　任	嶋田和司
	主　任	古市和子

資料普及課

課　長	廣瀬常雄（兼務）
文化財専門員	宮崎哲治
嘱　託	朝田加奈子
嘱　託	伊井惠子
嘱　託	磯崎福子
嘱　託	岡崎江伊子
嘱　託	奥田光輝
嘱　託	香川和子

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

仲多度郡多度津町は、香川県中部（中讃地方）に広がる丸亀平野の北西部で、瀬戸内海の海岸線に接したところに位置している。このため、町域の東・南には広大な平野が広がり、北には風光明媚な瀬戸内海が、そして西には三豊平野との境界をなす天霧山塊が聳え立つという環境にある。小塚遺跡は多度津町の南東端、多度津町葛原 1977 番地ほかに所在しており、丸亀平野の西半を流れる金倉川から西へ１km弱の位置にあたる。遺跡の周辺には金倉川の旧河道をはじめとする幾筋もの河川の痕跡を示す地形が残っており、その一部は現代の溜池として利用されているものもみられる。小塚遺跡はそのような旧河道を利用して構築された上池、中池、千代池と連なるため池のうち、中池の東側のやや小高い部分に存在している。すなわち旧河道の東側に存在した微高地の縁辺部に立地していると言い換えることができる。現地表面の標高は約 14 mを測る。

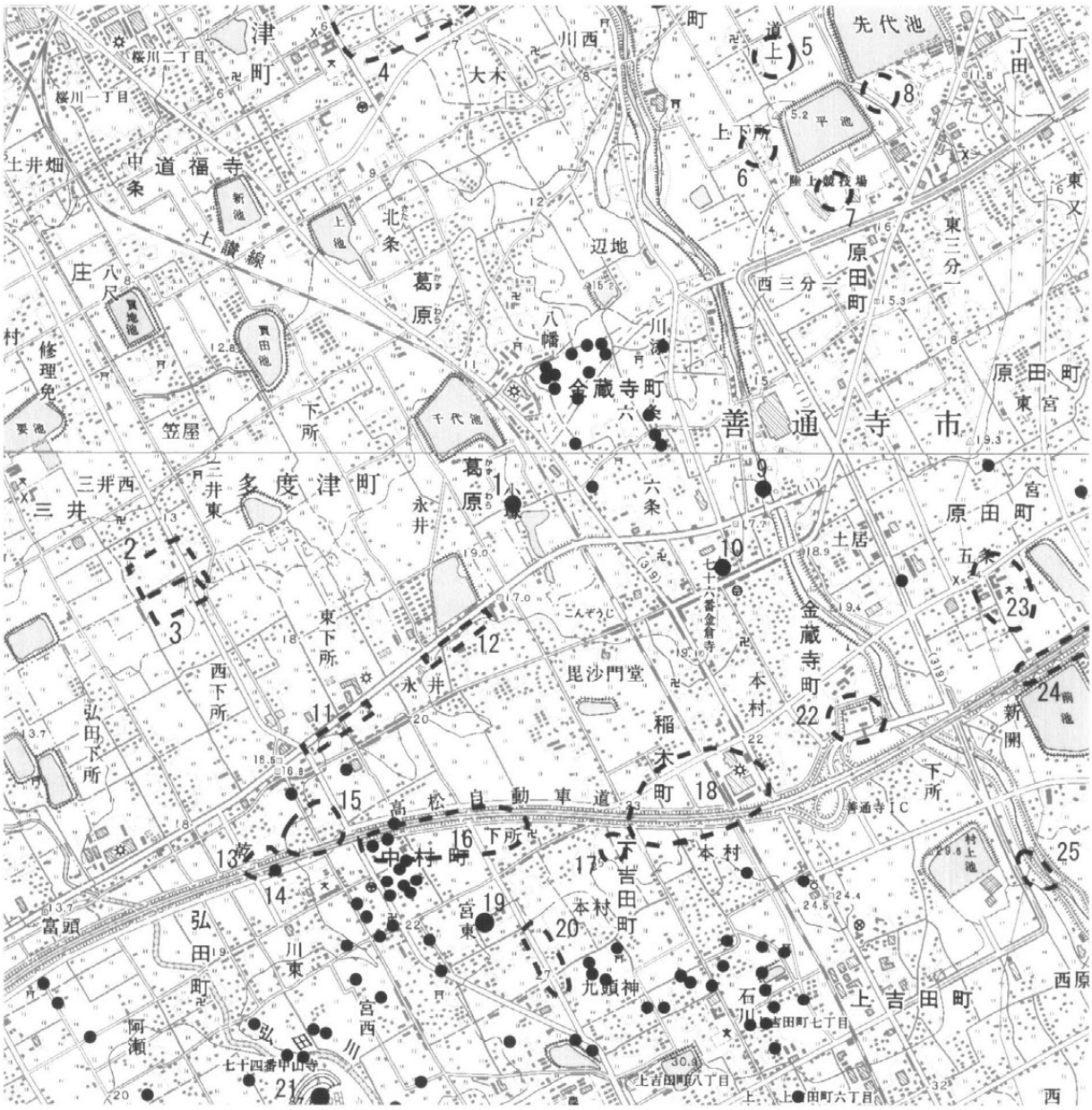
第２節　歴史的環境

小塚遺跡の周辺には周知の遺跡が少なく、遺跡地図にも北東の葛原正八幡神社の乗る微高地上に古墳とされるドットが落ちている程度であり、その内容もはっきりしないものである。やや南に下った辺りや北東の先代池周辺では四国横断自動車道や県営陸上競技場建設など開発に伴う発掘調査例が多く、その内容も把握されている遺跡が多い。それらを中心に歴史的環境を概観する。

旧石器時代では金倉川流域の龍川五条遺跡でチャート製の角錐状石器が、金蔵寺下所遺跡ではサヌカイト製のナイフ形石器が出土しており、旧石器人の活動がうかがえる。

縄文時代では後期から晩期の永井遺跡で旧河道の堆積層から多量の土器・石斧を中心とした石器・ドングリをはじめとする植物遺体が出土しており、縄文人の食生活の一端がうかがえる。平池西遺跡でも晩期の旧河道内から土器とともにクルミ、トチ、ドングリなど食用植物の種子が出土している。また、漆を塗った土器も見つかるなど、縄文人の美意識を垣間見ることもできる。

弥生時代前期に入ると、遺跡数は増加するが、縄文時代晩期末の凸帯文土器の段階から続く遺跡も多い。五条遺跡、龍川五条遺跡、中の池遺跡では集落を取り囲む環濠も見つかっており、集落から破棄された土器などが多量に出土している。中の池遺跡では環濠外の低湿地を利用した水田が確認され、稲作農耕が定着したことがわかる。弥生時代の生活習俗は墓制にも及び、龍川五条遺跡では円形・方形周溝墓や木棺墓という新しいスタイルの墓が出現している。これらの集落は前期で途絶えてしまい、中期の集落は丸亀平野の西や南西の山裾や山の中腹以上に形成されるようで、平野部での遺跡はほとんどみられない。後期に入ると拠点的な集落は香色山裾の旧練兵場遺跡であるが、九頭神遺跡や稲木遺跡など再び平野にも集落が営まれるようになる。稲木遺跡では集落を構成する竪穴住居跡のみならず、周溝墓や集石墓など墓制を示す遺構も検出している。鉄器も出土していることから、鉄の普及が始まっていることがうかがえる。小塚遺跡南西の永井北遺跡でも、弥生時代終末期の周溝を巡らせた竪穴住居跡を検出している。



第３図　遺跡位置及び周辺の遺跡（1/25,000）

番号	種別	遺跡名	時代
1	集落	小塚遺跡	弥生・中世
2	包含地	三井遺跡	弥生
3	包含地	西下所散布地（三井遺跡）	弥生
4	包含地	南鴨遺跡	弥生，古墳
5	包含地	中の池遺跡	弥生
6	包含地	平池西遺跡	縄文・弥生
7	散布地	平池南遺跡	弥生
8	包含地	平池東遺跡	弥生
9	寺院	仏名廃寺	?
10	寺院	金倉廃寺	?
11	集落	永井北遺跡	弥生－古代
12	集落	稲木北遺跡	古代
13	集落	乾遺跡	中世～近世

番号	種別	遺跡名	時代
14	古墳	－	古墳
15	集落	中村遺跡	弥生～近世
16	集落	永井遺跡	縄文～近世
17	包含地	石川遺跡２号	弥生
18	集落	稲木遺跡	弥生～古代
19	山城	中村城跡（仲村城跡）	中世
20	集落	九頭神遺跡	弥生
21	山城	甲山城跡（弘田城跡）	中世
22	集落	金蔵寺下所遺跡	縄文～古代
23	包含地	五条遺跡	弥生
24	集落・墓	龍川五条遺跡	弥生～近世
25	集落	京免遺跡	古代～中世

第１表　小塚遺跡周辺の遺跡

古墳時代の集落としては稲木遺跡がある。前期から中期の竈をもたない竪穴住居跡を検出している。稲木遺跡では後期の竪穴住居跡も確認しており、集落が継続していることがわかる。古墳に目を向けると、南方の大麻山系に前期から後期にわたる古墳が集中して存在しており、小塚遺跡近辺で内容の判別きる古墳は知られていない。

古代の集落としては、７世紀代の掘立柱建物群で構成される稲木遺跡、７世紀末から８世紀初頭の金蔵寺下所遺跡がある。金蔵寺下所遺跡では正方位と条里地割方向という２つの方向を持つ掘立柱建物跡群がみられ、前者から後者への移行が指摘されている。このことは当該地の条里制の施行を考えるうえで重要なポイントとなろう。また、集落南の旧河道からは斎串・人形・刀・馬・舟などの木製祭祀具が出土している。また、稲木北遺跡では８世紀代前半の大型掘立柱建物群や柵列跡等が整然と並んでおり、官衙関連遺跡の可能性が指摘されている。なお、建物等の方向は条里方向に合致している。

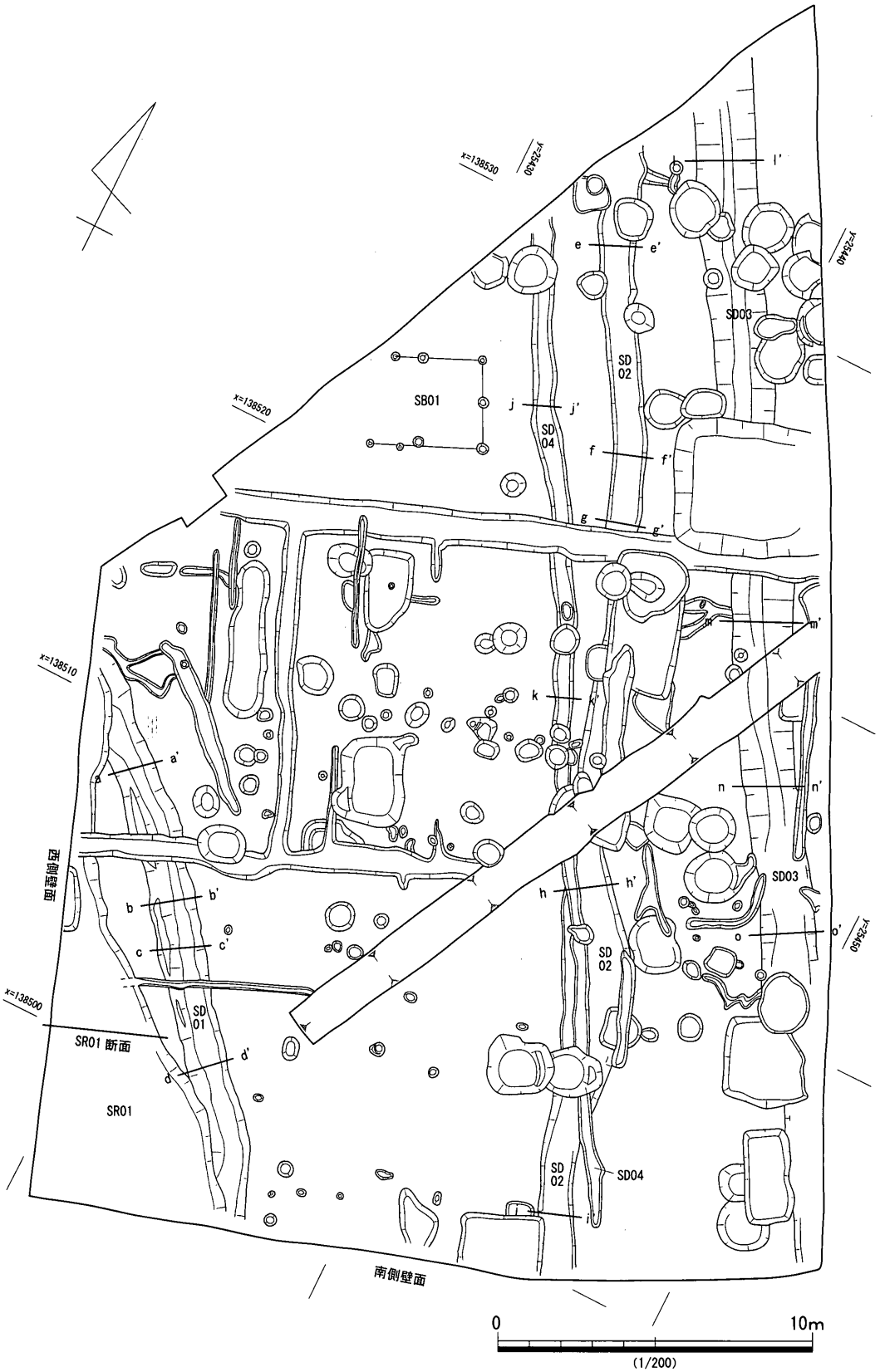
古代寺院としては８世紀後半に創建され、円珍（智証大師）生誕の地といわれる金倉寺があり、現在は四国霊場第七十六番札所としてその法灯を守り伝えている。

平安時代の分類漢和辞典『倭名類聚抄』には多度郡内にある七つの郷名が記載されており、小塚遺跡の所在する現地名の多度津町葛原はその中の一つ葛原郷の遺称地と考えられることから、小塚遺跡周辺は多度郡葛原郷に属していたと思われる。古代後半（平安時代）以降の遺跡の調査例は少ない。先述した永井北遺跡では古代末～中世前半の集落の一部も見つかっている。古代末の集落は総柱構造の掘立柱建物跡と京都・篠窯産の須恵器壺が出土した坪界溝がある。中世の集落は柱穴群と畑跡を柵列跡で区画しており、土地利用状況が窺える資料である。庄八尺遺跡は中世末頃に栄えた集落遺跡で、50棟を超える掘立柱建物跡が確認され、白磁や備前焼など各地との交流を示す遺物が出土している。また、中世には県下一円に城館が多く築造される時代であるが、小塚遺跡の近辺では知られていない。

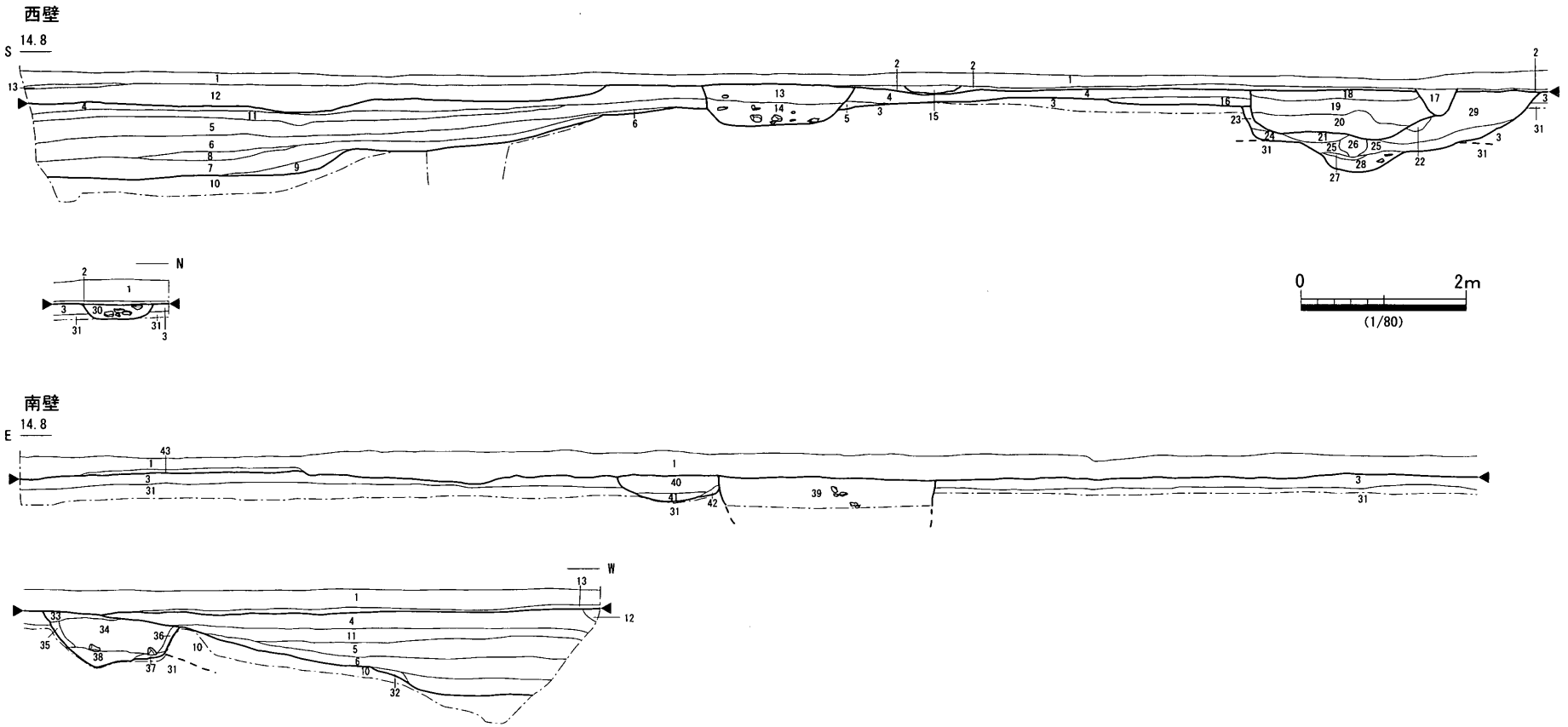
小塚遺跡の調査は、丸亀平野の歴史の解明に大きな役割を果たした四国横断自動車道の調査地の北方で、発掘調査の空白地帯での調査であり、小規模ではあったがまた一つの貴重な資料を提供する調査となった。

＜参考文献＞

・『香川県史　第１巻　原始・古代』香川県　1988
・『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　稲木遺跡』香川県教育委員会ほか　1984
・『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第９冊　永井遺跡』香川県教育委員会ほか　1990
・『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第10冊　金蔵寺下所遺跡・西碑殿遺跡』香川県教育委員会ほか　1994
・『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第23冊　龍川五条遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか　1996
・『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第29冊　龍川五条遺跡Ⅱ・飯野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会ほか　1998
・『平成５年度　香川県土木部道路整備事業に伴う発掘調査報告集　五条遺跡・八丁地遺跡・仲善寺遺跡』香川県教育委員会　1994
・『中の池遺跡発掘調査概要　香川県丸亀市金倉町所在の弥生時代遺跡の調査』丸亀市教育委員会　1982
・『九頭神遺跡発掘調査報告書』九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会　1988
・『香川県埋蔵文化財調査年報　平成７年度』香川県教育委員会　1996
・『香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度』香川県教育委員会　1997
・『香川県埋蔵文化財調査年報　平成12年度』香川県教育委員会　2001
・『香川県埋蔵文化財調査年報　平成13年度』香川県教育委員会　2002
・『香川県埋蔵文化財調査年報　平成15年度』香川県教育委員会　2004
・『香川県埋蔵文化財調査年報　平成16年度』香川県教育委員会　2005
・『香川県埋蔵文化財調査年報　平成17年度』香川県教育委員会　2006



第４図　遺構配置図 (1/200)



1 耕作土 10YR5/1 褐灰色粘質土
2 床土 10YR5/6 黄褐色粘質土
3 ベース土Ⅱ 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
4 SR01 2.5Y7/3 浅黄色混砂シルト質土 Feを多く含む
5 SR01 2.5Y5/2 暗灰黄色混砂粘質土
6 SR01 2.5Y5/3 黄褐色混砂粘質土
7 SR01 2.5Y4/2 暗灰黄色混砂粘質土
8 SR01 10YR6/2 灰黄褐色混砂シルト質土
9 SR01 5Y5/1 灰色混砂粘質土
10 (SR01) 10YR3/2 黒褐色粘質土 3と近似 無遺物層
11 SR01 2.5Y6/4 にぶい黄色混砂シルト質土 やや粘性を帯びる (4に比して)
12 撹乱層 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/1 褐灰色粘質土ブロックを多く含む
13 不明土坑 7.5YR6/1 褐灰色混砂シルト質土 側溝により消滅 (近世)
14 不明土坑 10YR5/1 褐灰色混砂シルト質土 瓦片等を含む 側溝により消滅 (近世)
15 SD06 2.5Y6/6 明黄褐色粘土
16 SR01 2.5Y6/4 にぶい黄色混砂粘質土
17 不明土坑 2.5Y7/4 浅黄色粘質土 側溝により消滅 (近世) 遺物なし
18 不明土坑 10YR7/4 にぶい黄橙色混砂粘質土 側溝により消滅 (近世) 遺物なし
19 不明土坑 5Y4/1 灰色粘質土 3のブロックを多く含む 側溝により消滅 (近世) 遺物なし
20 不明土坑 5Y5/1 灰色粘質土 3に加え、31のブロックを多く含む 側溝により消滅 (近世) 遺物なし
21 SD01 7.5Y6/1 灰色混砂シルト質土
22 SD01? 5Y3/1オリーブ黒色粘質土
23 SD01 2.5Y5/2 暗灰黄色混砂粘質土 下層埋没後の流入層
24 SD01 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色混砂粘質土
25 SD01(中層) 10YR4/2 灰黄褐色混砂粘質土
26 SD01(ブロック) 10YR3/2 黒褐粘質土 3と近似
27 SD01 2.5Y6/1 黄灰色砂質土 (シルト質状)
28 SD01 (下層) 5Y4/1 灰色砂質土
29 SD01 (上層) 10YR5/4 にぶい黄褐色混砂粘質土
30 不明土坑 10YR5/1 褐灰色粘質土 礫を多く含む
31 ベース土Ⅲ 10YR7/6 明黄褐色粘土
32 SR01 10YR6/2 灰黄褐色混砂シルト質土
33 SD01 2.5Y5/3 黄褐色混砂粘質土 最終埋没時の流入層 3のブロック土を含む
34 SD01(上層) 10YR6/2 灰黄褐色混砂シルト質土 b-b' 1と同じ
35 SD01 2.5Y4/2 暗灰黄色混砂粘質土
36 SD01 2.5Y4/3 オリーブ褐色混砂粘質土
37 SD01 5Y3/2 オリーブ黒色混砂粘質土
38 SD01(下層) 10YR5/1 褐灰色砂質土 b-b' 6と同じ
39 SX01 花崗土充填層 礫を多く含む (2mm～10cm大) 撹乱土坑
40 SD02 上層 10YR5/2 灰黄褐色混砂粘質土 緩やかな堆積 遺物を少量含む 遺物取り上げ 上層
41 SD02 下層 10YR3/2 黒褐色混砂粘質土 砂質度が高い 多量の土器を含む 遺物取り上げ 下層
42 SD02 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
43 床土 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土

※ ▷は遺構検出面を示す

第5図 調査区土層断面図 (1/80)

第３章　調査の成果

第１節　調査区の概要と土層序

調査区は南東から北西の方向にかけてごく緩やかに傾斜する扇状地形で、標高約 14 ｍの地点に位置する。調査着手前は東・南側を住宅地に、西側を中池（溜池）に囲まれた長方形をした一筆の水田として土地利用されていた。調査対象面積はこの水田の約３分の２にあたる 860 ㎡である。

基本の土層序は、現代の耕作土である灰色粘質土と床土である黄褐色混砂粘質土（合わせて厚さ約 30 ㎝）の直下に灰黄褐色～明黄褐色を呈する粘質土が堆積している。この黄褐色系粘質土は丸亀平野一円で見られる基盤層で、その上部には旧石器や縄文時代の遺物が包蔵されていたり、その上面が弥生時代以降の地山（ベース）層となるものである。小塚遺跡でもこの基盤層の上面で３時期の遺構を検出している。基盤層の上面はわずかに北西に向かって傾斜している。遺跡の立地する地点は、すぐ西に存在する中池（旧河道利用の溜池）に面する微高地縁辺部で、本来は西に向かって傾斜する地形であったことがわかるが、基盤層の東西方向はほぼ水平になっている。これは後世の水田開墾の際に階段状に削平を受けたことを示しており、検出遺構の上部もそれに伴って削平されて本来の規模を失っている部分が含まれるものと思われる。

第２節　遺構・遺物

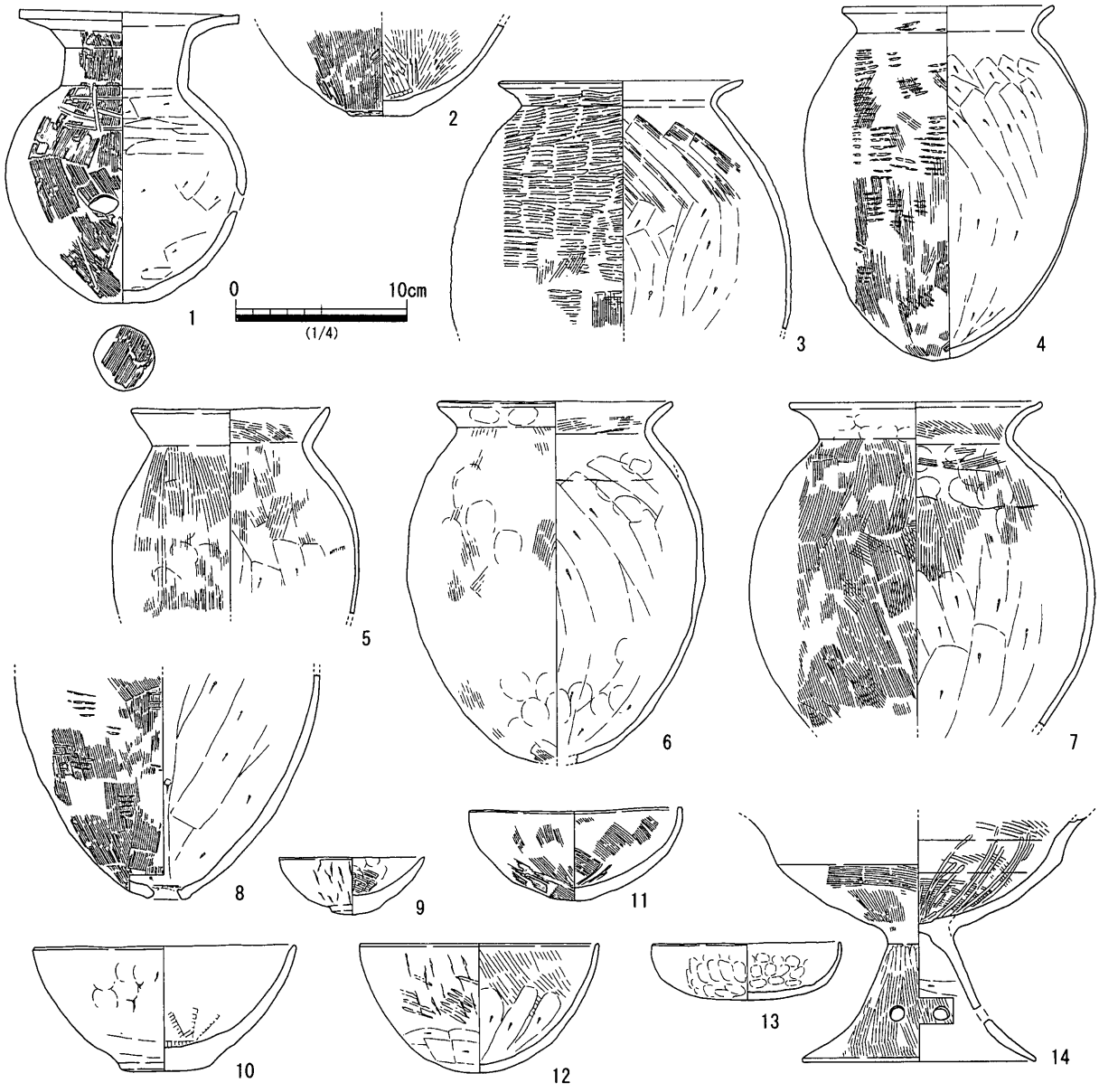
【溝状遺構】

ＳＤ 01（第６～ 15 図）

調査区南西隅付近で検出した溝状遺構である。検出した部分は直線的であり、Ｎ 40°Ｗと概ね南東－北西方向を有している。検出長約 17.8 ｍ、幅約 1.2 ～ 1.5 ｍ、深さ 0.6 ｍを測る。断面形状は基本的にＶ字形を呈するが、部分的にテラス状の小平坦面を持った２段掘り込み様のＵ字形を呈する箇所もみられる。底面はほぼ平坦で明瞭な勾配は認められないが、周囲の地形などからみて北西方向へ流れていたものと想定される。埋土は大きく二分することができ、下位約４分の１の厚さに下層の灰褐色砂質土層、その上に上層の黄灰色混砂粘質土（厚さ約４分の１）・灰黄色混砂シルト質土（厚さ約２分の１）が堆積している。この上層とした２つの土層は、断面図ｂ－ｂ’に見られるように間に溝状遺構の両肩が崩落した土層が挟まれている部分もあり時間差も想定されるが、それぞれの土層から出土した土器片の接合例も多数見られることから比較的短い期間で連続的に形成されたものと考えられる。

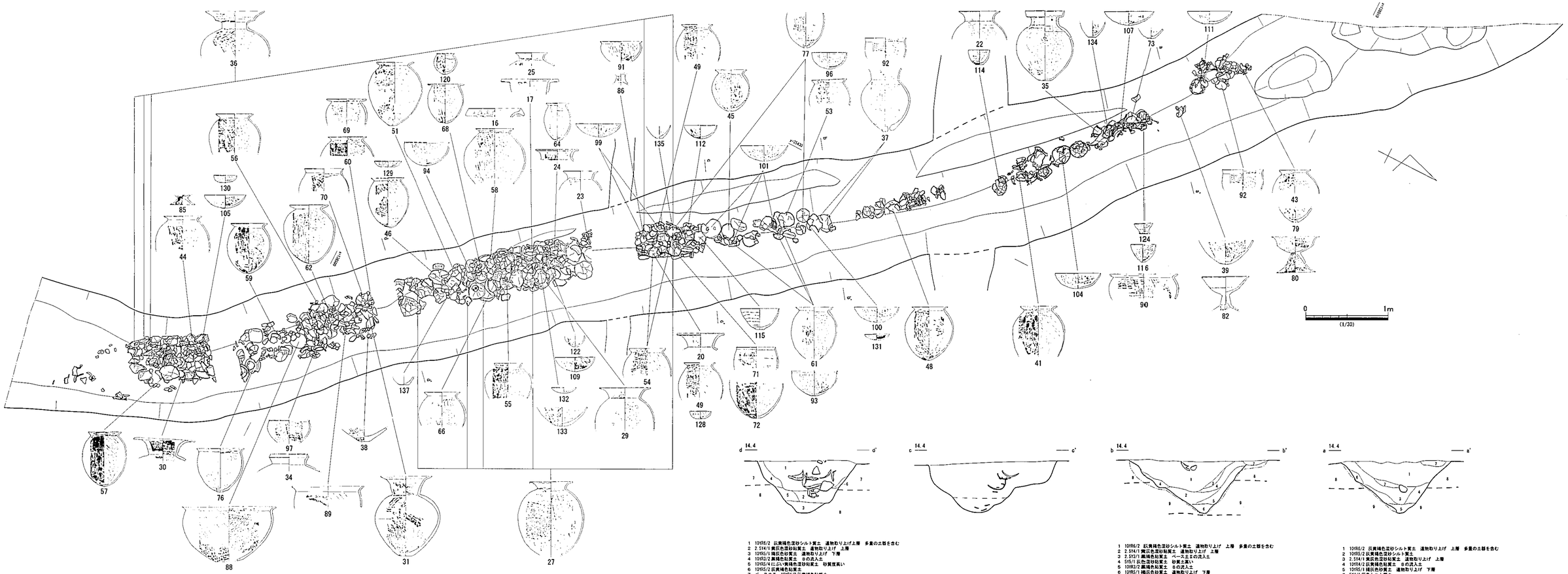
溝状遺構内からは南端部と北端部付近を除いて、数十個体分の土器が破損した状態で折り重なるようにして出土した。北約３分の１はやや疎らだが、南約３分の２はかなり濃密に分布している状況で、その量は 28 リットル入りコンテナ 30 箱分にのぼる。その内訳は下層からの出土がコンテナ３箱弱で他はすべて上層と、圧倒的に上層が凌駕している状況にある。遺物の取り上げは上・下層に２分して行っているため、以下、層位・器種ごとに記述する。

１～ 14 は下層から出土した遺物である。１・２は壺である。１は球形の体部に直立して大きく外方へ開く口縁部を持った広口壺である。外面のハケ調整が顕著で、体部中位に焼成後の穿孔１個が穿たれ



第６図　ＳＤ01出土遺物①（1/4）

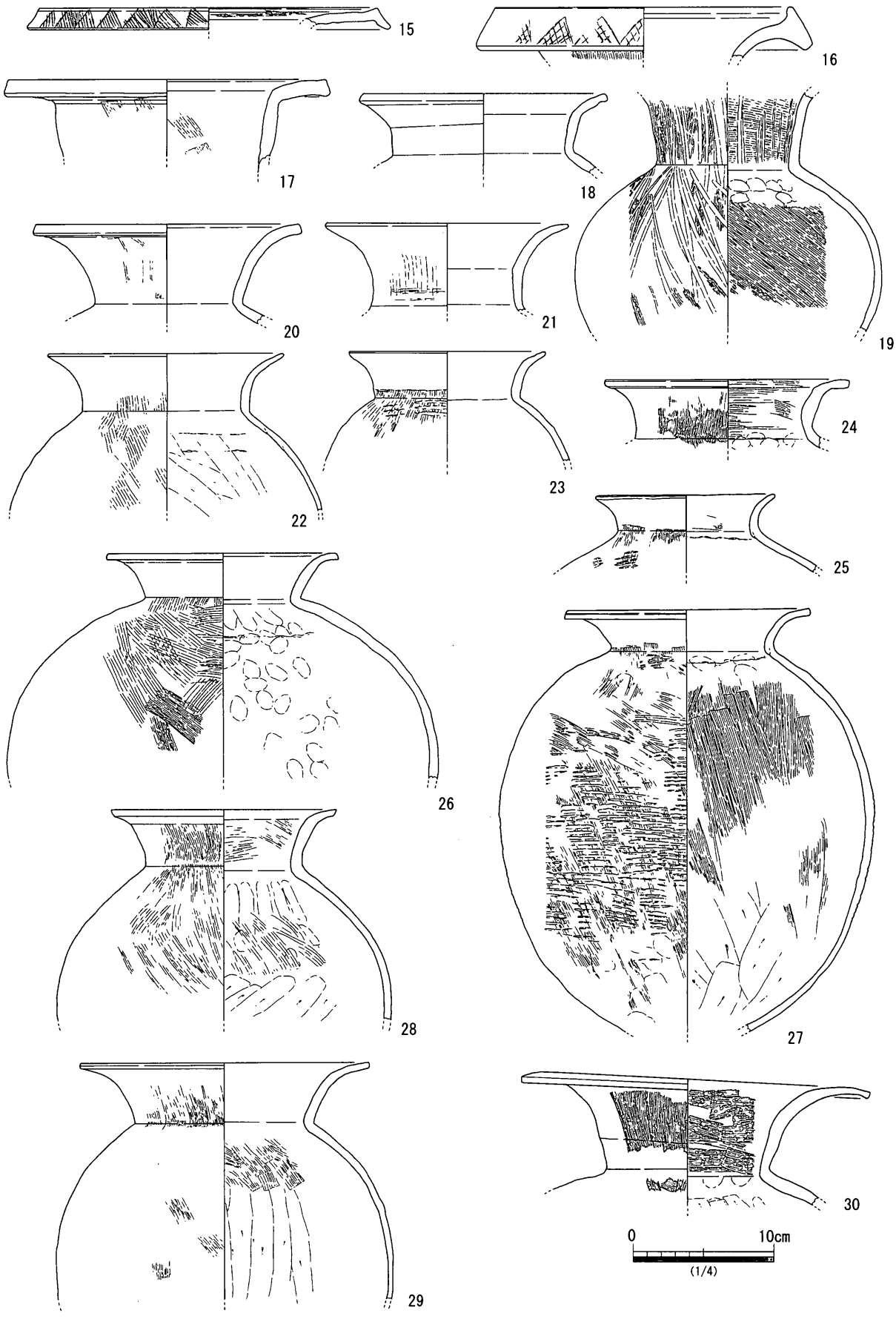
ている。１・２ともに小さな平底の底部を有している。３～７は甕である。いずれもくの字に強く屈曲する口縁部を有している。体部がやや縦長の卵形を呈するもの（４～６）と、球形に近いもの（３・７）がみられる。３は体部上半にタタキ調整を明瞭に残すが、４はタタキ調整の上にハケ調整で仕上げている。４・６には体部下半に被熱痕があり、７は中位にススが付着しているなど、これらは実際に煮炊きに使用されたものと判断できる。８は底部に穿孔をもつ甑である。卵形の体部に丸底に近い底部を有する。９～13はいずれも内弯しながら立ち上がる直口口縁を有する鉢である。９は小型品で丸みを帯びて短く突出する底部を持つ。10は平底を持つ中型品で、白い胎土を用いている。11・12は丸底の中型品である。13は内外面に指頭圧痕を明瞭に残した手捏ねの鉢である。14は高杯である。中位から外反して大きく開く口縁をもつ杯部に、途中から角度を変えて開く脚部を付したものである。ヘラミガキ調整が顕著である。



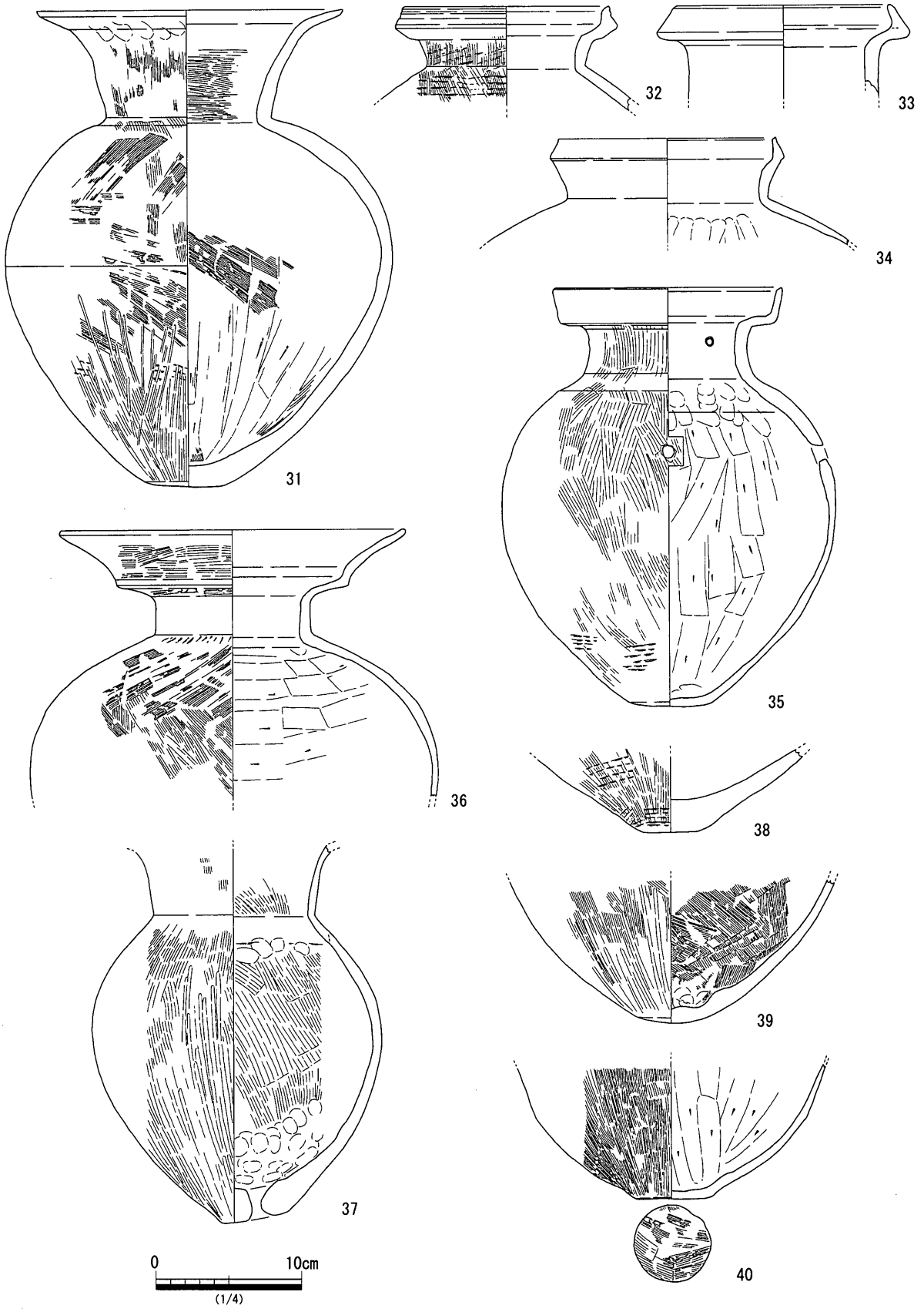
第７図　ＳＤ０１遺物出土状況図、断面図 (1/30)

15 ～ 137 は上層として取り上げた遺物である。15 ～ 40 は壺である。15・16 は外傾して立ち上がる頸部から外反を強めた口縁部を持つ広口壺で、口縁端部を上下方向へ拡張させて内傾する面を作り出し、そこにヘラ描きの鋸歯文を施している。17 ～ 19 は直立気味の頸部から強く屈曲してほぼ水平に開く口縁部を持つものである。17 はやや頸部が長く屈曲の度合いも強いが、18 は頸部が短く屈曲も弱い。19 は口縁部を欠損するものの、17 と同じような器形を呈するものと思われる。20 ～ 25 は頸部から外反して連続的に口縁部に至るもので、口頸部の長さと外反の度合いに差異が見られる。20 ～ 23 は長く大きく開いているが、24・25 は口頸部が短いためにより外反度が強く感じられる。体部はハケ調整が顕著である。23・25 はタタキ調整を施した後それをハケ調整で消している。26 ～ 31 は外傾する頸部から屈曲して開く口縁部を持つものである。やはり口頸部の長さと屈曲度にバリエーションがある。26 ～ 28 は口頸部が短く屈曲が弱めであるが、29 ～ 31 は口頸部が長いためより大きく開いているように感じられる。これらの壺の体部は中位付近に最大径を持つ扁球形を呈するとみられるが、26 や 27 のように球形に近いものも存在するようである。これらの体部の調整もハケ調整が目立つ。30・31 は口頸部内外面をハケ調整で仕上げている。31 は平底を有している。32 ～ 34 は短く立ち上がる頸部から折れて口縁部に続くもので、口縁部の立ち上がりは直立ないし強く内傾し、端部付近は内傾する面を有する。32・34 は立ち上がりが直立するもので、32 は凹線２条をめぐらせている。33 は立ち上がりが内傾している。これらは短い二次口縁を付した複合口縁とみることも、口縁端部を上方に拡張させたものとみることもでき、その判断は今後の資料の増加に期したい。35・36 は二重口縁を有するものである。35 は直立気味の頸部から強く折れて口縁部に続くもので、直線的にやや外傾して立ち上がる二次口縁部を有する。体部は最大径を中位に持った倒卵形で、外面はハケメ調整が、内面はヘラケズリ調整が顕著である。小さな平底を有しており、頸部内面には竹管文が、体部上半に焼成後の穿孔が１穴みられる。白い胎土を用いている。36 は短く直立する頸部から強く折れて口縁部に続くが、大きく外反して開く二次口縁部を有する。体部は扁球形で頸部との接合部分に刺突文をめぐらす。細かいハケ調整が顕著である。外面全体と口縁部内面に赤彩が施されていたらしく痕跡が残る。37 は縦長の体部に長めの外傾する頸部を付したものである。小さな平底を有しており、そこに焼成後に穿孔を施している。体部外面はヘラミガキ調整、内面はハケ調整が顕著である。38 ～ 40 は壺の底部である。いずれも小さな平底を有するが、39 はかなり丸底に近い形態である。

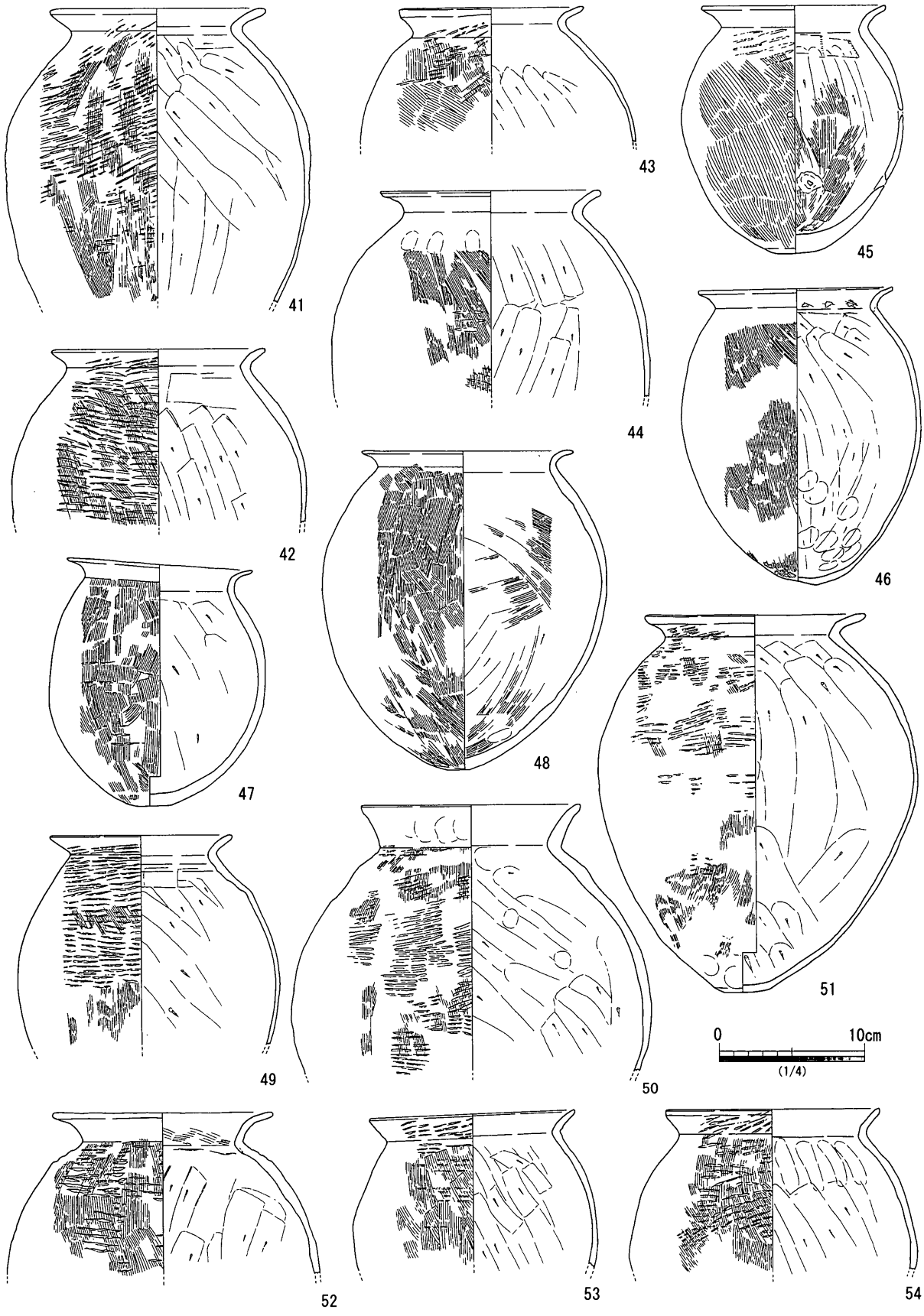
41 ～ 74 は甕である。41 ～ 48 は外反する口縁部を有し、体部からの屈曲が弱めのものである。口縁部は短めのものが多い。体部の形態は体部中位からやや上の付近に最大径を持った倒卵形が多いが、45 ～ 47 のようにかなり球形に近いものも見られる。底部の形態はかなり丸底化が進んでおり、46 や 48 のように尖り気味の丸底のものが見られるが、45 や 47 のような小さな平底を持つものもある。外面の調整はタタキ調整を施した後にハケメ調整で仕上げるものが多いが、ハケメ調整の強弱によって、タタキ調整が明瞭に残るものもみられる。内面調整はヘラケズリ調整を基本とするが、45 や 48 のようにハケメ調整を施すものもある。45 は体部中位と下位にほぼ正対するように焼成後の穿孔が施されている。47 は体部中位にススが付着しており、煮炊きに使用したことがわかる。49 ～ 67 は体部からの屈曲が強いもので、内面には稜をなすものが多い。口縁部は総じて短めで、外反するもの、直線的なもの、わずかに内弯気味のものなどバリエーションが認められる。体部の形態は最大径を中位付近に有する縦長の扁球形が多いが、55 のようにやや肩が張ったような形態のものもある。底部の形態は丸底化が進んでおり、57・59・62 などは尖り気味の丸底である。51 は小さな平底を有するが丸みを帯びている。64・



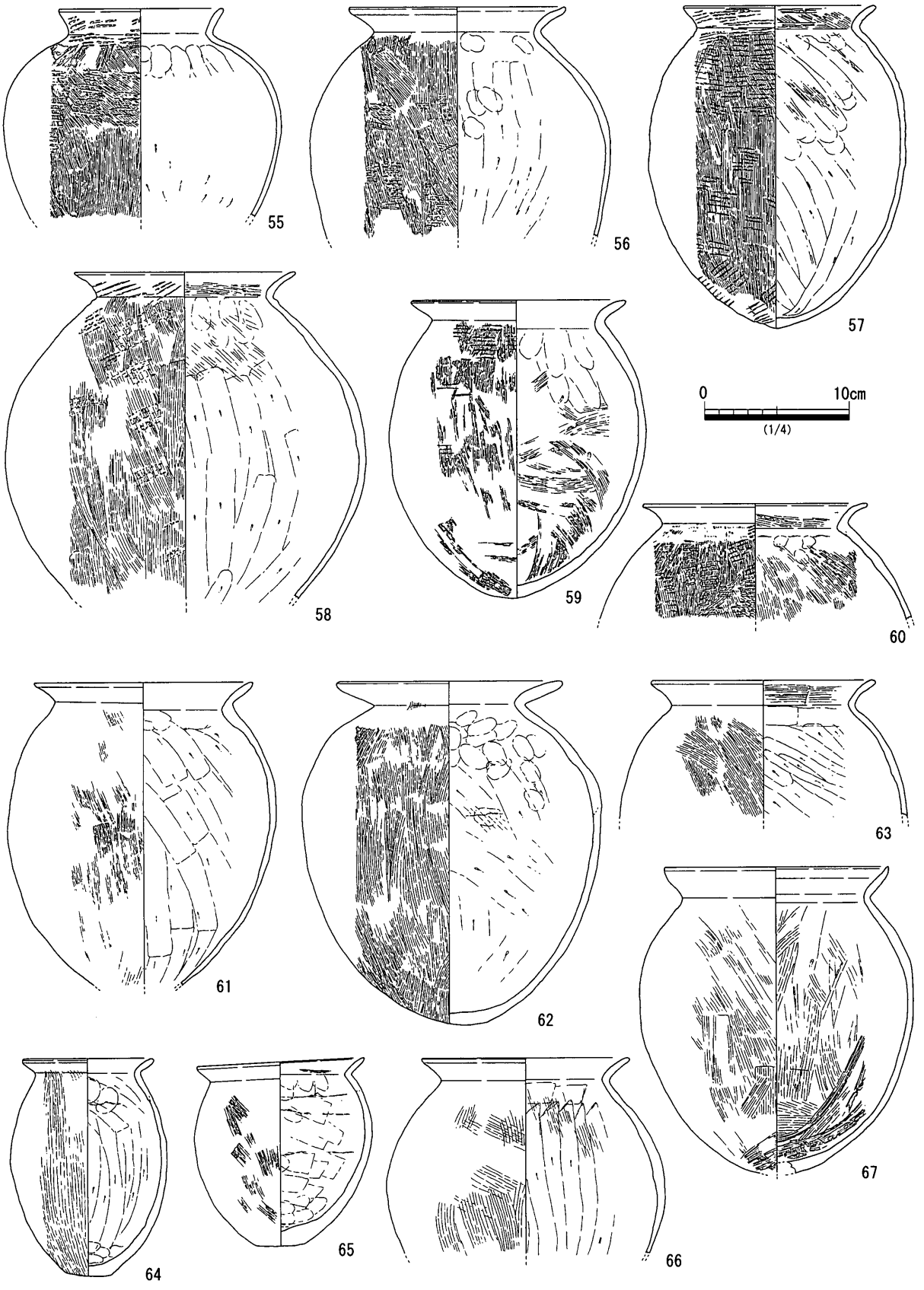
第８図　ＳＤ 01 出土遺物② (1/4)



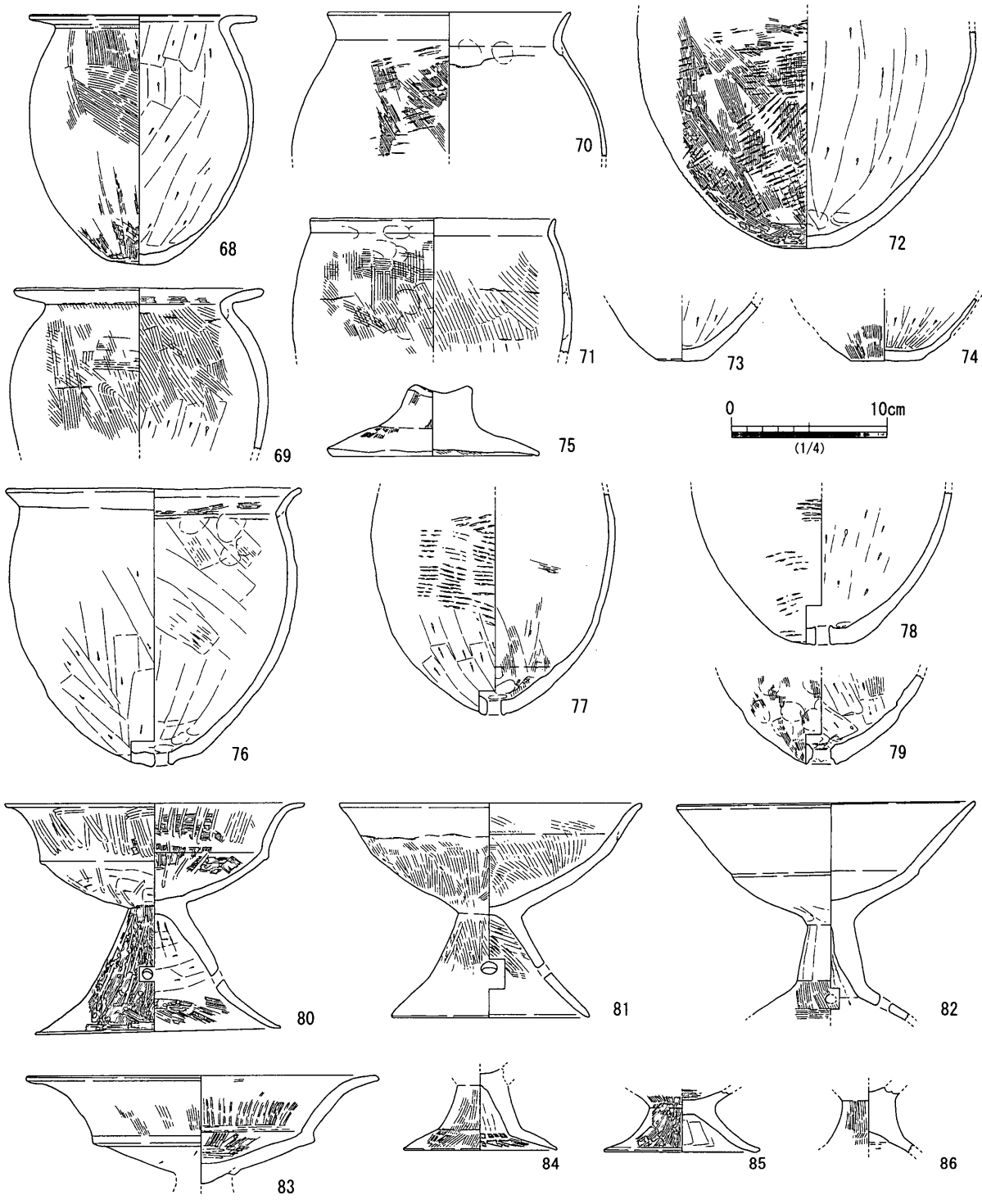
第９図　ＳＤ 01 出土遺物③ (1/4)



第10図　ＳＤ01出土遺物④ (1/4)

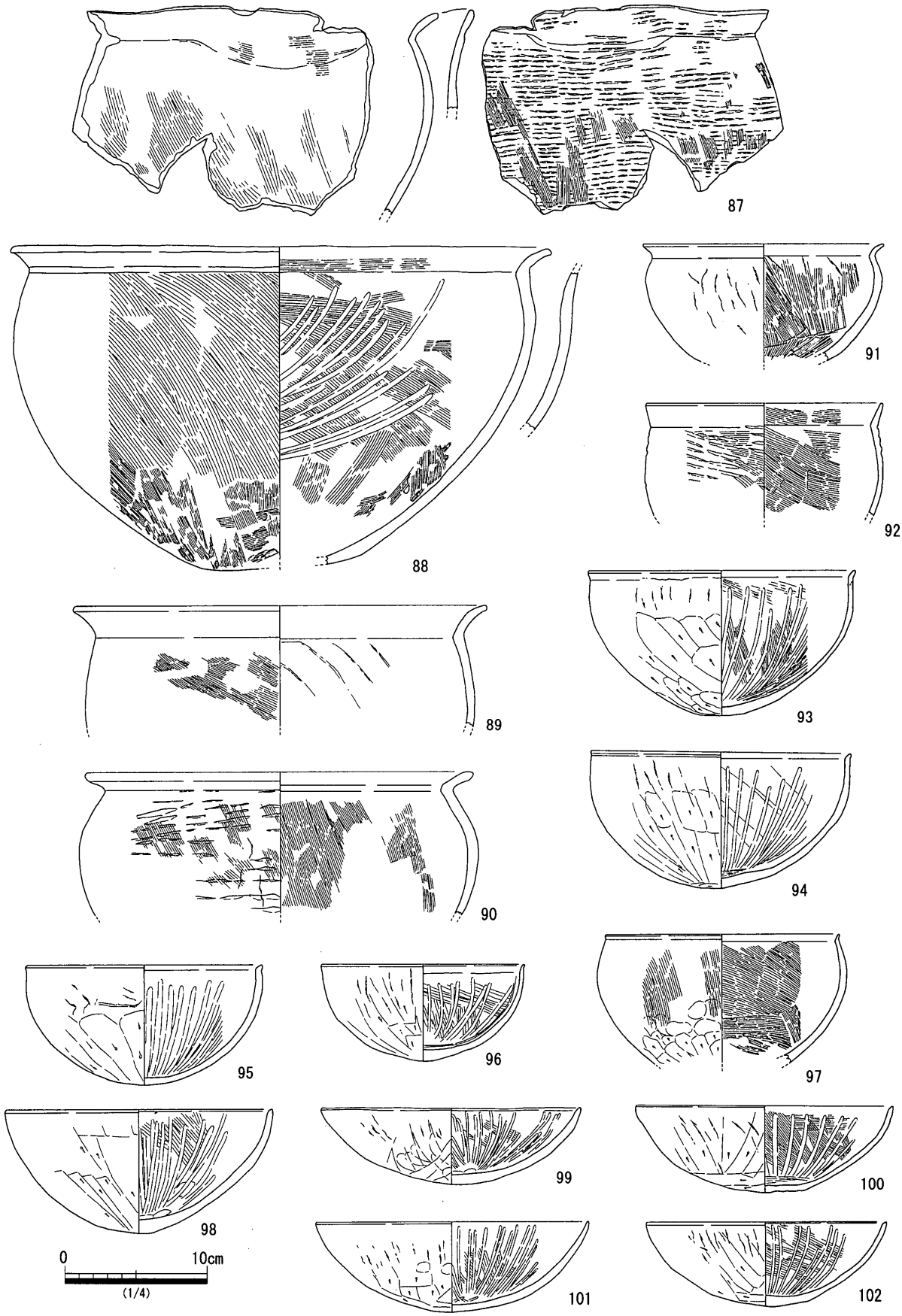


第 11 図　ＳＤ 01 出土遺物⑤ (1/4)

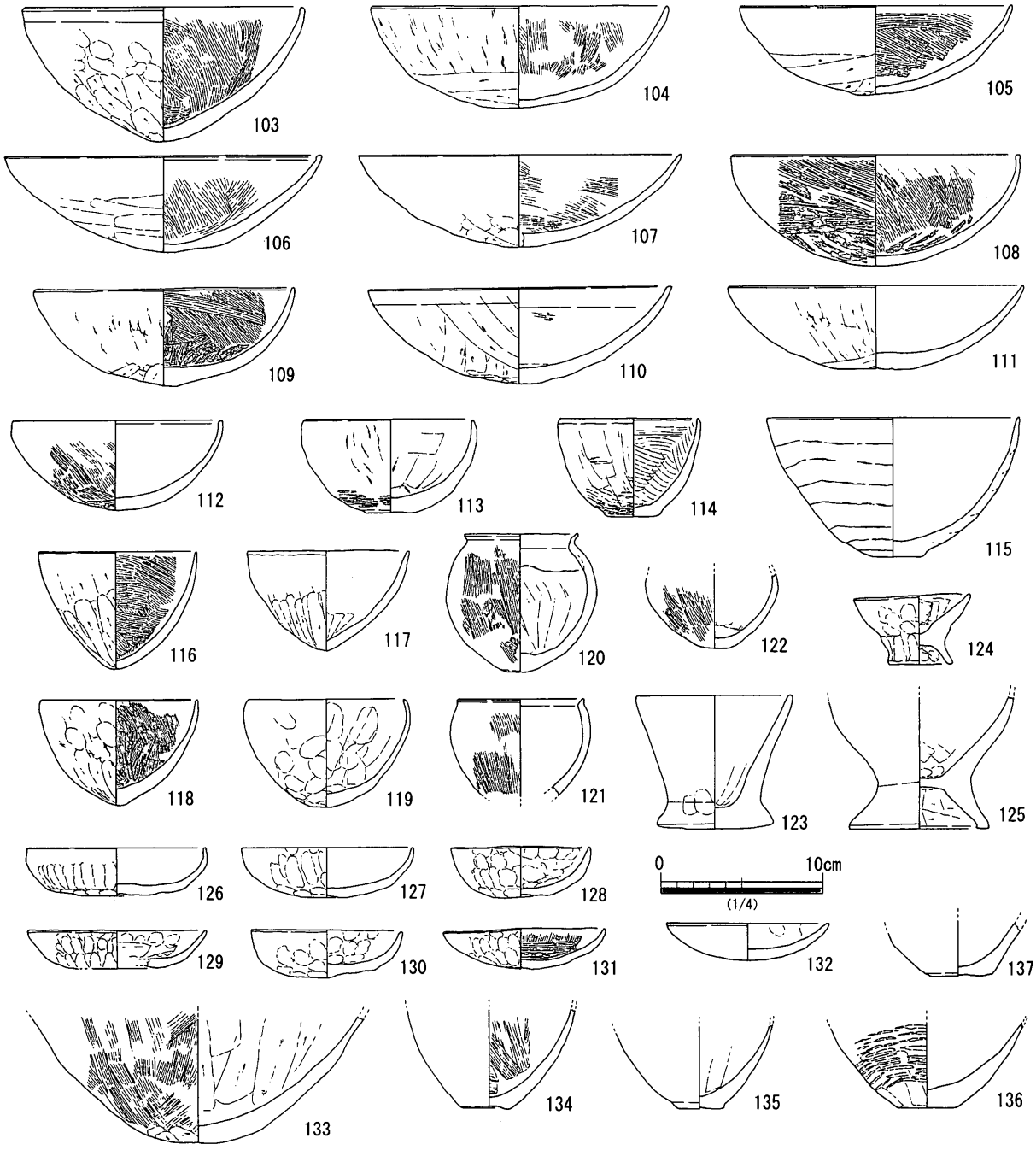


第 12 図　ＳＤ 01 出土遺物⑥ (1/4)

65 の小型品の底部は平底である。外面の調整はタタキ調整の後にハケメ調整で仕上げるものが多いが、ハケメ調整の間にタタキ調整が残るものもある。また、タタキ調整が口縁部にまで及んでいるものもあり、タタキ調整後に口縁部を折り返して成形したことがわかる。内面調整はヘラケズリ調整を基本とするが、ヘラケズリの後でハケメ調整を施すものもある。61 は外面下半に二次的に火を受けた痕跡が認められ、煮炊きに使用したことがうかがえる。63 と 65 は白い胎土を用いている。68・69 は体部からの屈曲が強く、ほぼ水平に開く口縁部を有するものである。体部中位付近にある最大径は口径とほぼ同じ

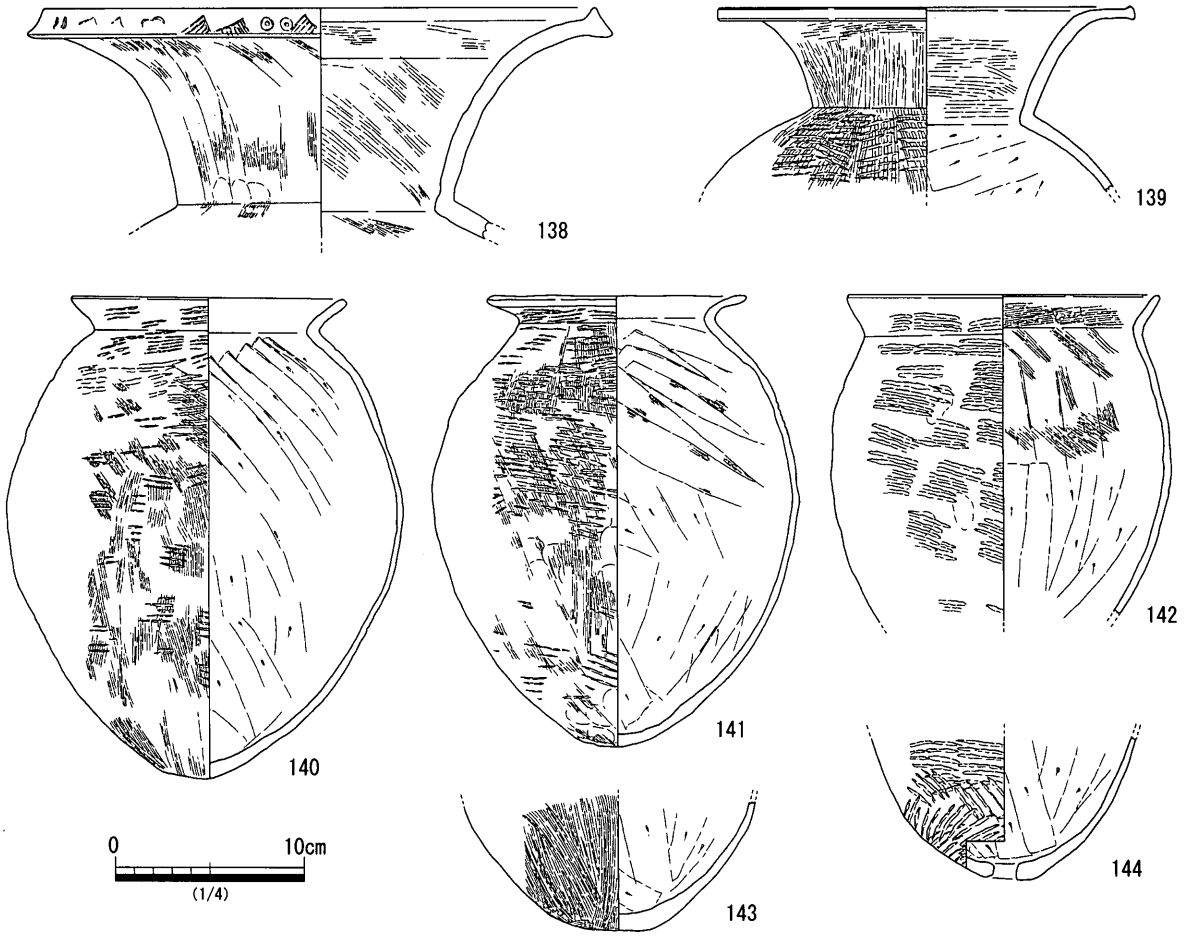


第13図　ＳＤ01出土遺物⑦ (1/4)



第 14 図　ＳＤ 01 出土遺物⑧ (1/4)

であり、縦長の扁球形を呈する。68 の底部はかなり丸みを帯びた平底である。ハケ調整が顕著で、69 では内面の調整にも使用されている。70・71 は体部からの屈曲も口縁部の外反も弱いものである。70 は弱く外反する口縁部を有しており、体部は中位に最大径を持つ縦長の扁球形を呈すると思われる。外面調整はタタキ調整の後にハケ調整で仕上げている。71 は端部を摘み出しただけのような短い直線的な口縁部を持ち、ほとんど胴の張らない縦長の胴の長い体部を呈すると思われる。内外面にハケ調整が顕著である。71 は甕というよりも甑のような他の器種を想定したほうがよいかもしれない。72 ～ 74 は甕の底部である。いずれも平底であるが、72 はかなり丸みを帯びている。72 は体部下半に二次的な被熱痕があり、煮炊きに使われたことがうかがえる。



第15図　ＳＤ01出土遺物⑨ (1/4)

75は蓋である。低い笠形の中央部に突起状の摘み部を持つ。摘み部の頂部は窪んでいる。底部はほぼ平らであり、中実のため重量感がある。甕の蓋と思われる。

76～79は甑である。いずれも底部中央に焼成前の穿孔を1穴有する。底部の形態は76・78が小さな平底、77・79が尖り気味の丸底である。全体の器形が分かるのは76で、大きく開いた頸部に外反する短い口縁部が付いた甕のような形態をしている。外面下半や内面はヘラケズリ調整で仕上げており、外面のヘラケズリ調整は、砂粒の動きから土器を倒立させて下から上へ削った可能性がある。

80～86は高杯である。80・83の杯部は、明瞭な段を有する中位から外反して大きく開く口縁部を持つものである。外反の度合いは83の方が強い。83は脚部との接続に円盤充填法を採用している。80・81の脚部は円錐状に開く形態で、中位でやや強く開くものである。脚端部は丸く収めている。81の杯部も中位から外反して開く口縁部を持つものだが、中位に明瞭な段などはみられず滑らかに連続するもので、口縁の外反の度合いも弱い。80・83の杯部がヘラミガキ調整が顕著であるのに対して、81はハケ調整が顕著である。82は杯部下位からわずかに屈曲して直線的に長く立ち上がる口縁部をもつものである。屈曲部には小さく退化した段がみられる。脚部はやや開き気味の軸部から低く「ハ」の字に開くものである。白い胎土を用いている。84～86は脚部である。84は開き気味の軸部から低く「ハ」の字に開く形態で、内外面ともにハケメ調整が顕著である。85は杯部との接合部から低く「ハ」の字に開く形態で、外面はハケメ調整が、内面はヘラケズリ調整が顕著である。台付き鉢の脚部の可能性があ

る。86 は脚部上半の破片で、大きく外反しながら開く形態を呈すると思われる。外面はハケメ調整で、白い胎土を用いている。

87 ～ 137 は鉢である。87 ～ 92 は半球状の体部に短く外反する口縁部が付くものである。87 ～ 90 は大型品で、87・88 はともに口縁部を歪ませて片口を作り出している。87 はタタキ調整が、88 はハケメ調整が顕著である。88 の底部は明瞭な平底を形成している。89・90 は下半部を欠損しているため定かではないが甕の可能性も残る。91・92 は中古品である。口縁部の屈曲の度合いに差異は見られるものの、共に内面のハケメ調整が顕著である。93 ～ 97 は半球形の体部を持つやや深めのボウル形をした中型品である。いずれも口縁端部を外方に摘み出している。外面下半はヘラケズリ調整で内面にはヘラミガキ調整が顕著である。97 は内面をハケ調整で仕上げている。外面に亀裂を生じているものが多くみられる。底部は基本的に丸底であるが、93 は小さな平底となっている。93 は白い胎土を用いている。98 ～ 119 は深さに差異はみられるためにボウル形や深めの皿形を呈するもので、口縁端部は摘み出すことなくそのまま終わっているものである。98 ～ 111・115 は中型品、112 ～ 114・116 ～ 119 は小型品である。外面下半はヘラケズリ調整が主流で、底部から口縁部に向かって施すものが多いが、100 や 104 ～ 106 のように横方向にヘラケズリを行うものもある。外面に亀裂が生じているものがおおい。内面はハケ調整が基本とみられ、中型品ではその後に粗いヘラミガキ調整を施すものもみられる。119 は他の小型品と同様の形態を持つが、指頭痕が明瞭に残るなど手捏ねのままで仕上げている。中・小型品ともに底部は基本的に丸底であるが、尖り気味のものや平底のようなものもみられる。中型品の 115、小型品の 113・114 は明瞭な平底である。115 は粘土紐の接合痕が明瞭に残る、造りの粗雑な鉢である。98・101・115・116 は白い胎土を、106 は橙色の胎土を用いている。120 ～ 122 は小型品で、球形の体部で口縁端部を外方へ短く摘み出したものである。121 は底部を欠いているが、120・122 は小さな平底を有する。外面はハケ調整が顕著である。120 は白い胎土を用いている。123 は直線的に外に開いたジョッキ形を呈する平底の鉢である。分厚い底部は外方へ大きく張り出している。124・125 は台付き鉢である。124 は手捏ねの小型品。125 は白い胎土を用いており、脚台に内弯しながら立ち上がる体部が付く。126 ～ 132 は浅い皿形をした小型品である。手捏ねのため内外面に指頭痕が明瞭に残る。131 は外面には指頭痕が残るが、内面はハケ調整で仕上げている。132 は指頭痕が確認できず、形態も他とは異なり丸底の浅い皿状である。橙色の胎土を用いている。126 は白い胎土を使用している。133 ～ 137 は底部の破片である。133 は丸底の外面をヘラケズリ調整していたため鉢の底部に含めたが、壺の底部の可能性がある。134 ～ 137 は小さな平底を持つ。136 は白い胎土を用いた底部だが、外面にタタキ調整があり甕の可能性がある。

138 ～ 144 は溝状遺構内に設定した断面観察用の畦などから出土した土器である。上層に属する可能性が高いと思われるが、取り上げ時の記録がないため、ここでは層位不明の土器としてまとめて掲載する。138・139 は広口壺である。138 は外傾して立ち上がる頸部から外反を強めた口縁部を持つ広口壺で、口縁端部を上方へ拡張して内傾する面を作り出し、そこにヘラ描きの鋸歯文と２個１組の竹管文を施している。口頸部は内外面ともハケ調整で仕上げている。139 は外傾する頸部から強く屈曲してほぼ水平に開く口縁部を持つものである。138 同様に口頸部は内外面ともハケ調整で、体部外面はタタキ調整の後にハケ調整で仕上げている。内面のヘラケズリ調整は頸部の屈曲部までおよんでいる。140 ～ 143 は甕である。140・141 は体部からの屈曲が強いもので、内面には稜をなしている。短めで直線的な口縁部を有する。体部は中位に最大径を持つ縦長の扁球形で、底部は尖り気味の丸底である。外面はタタ

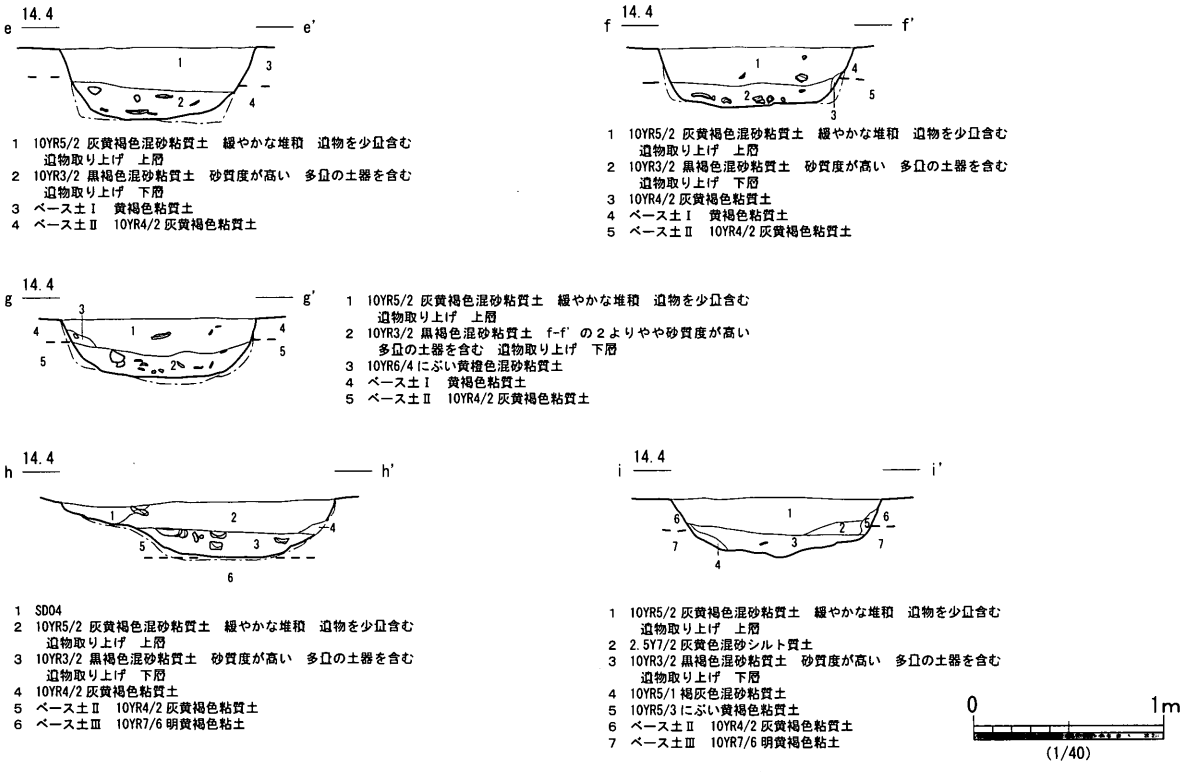
キ調整の後にハケ調整で仕上げている。内面はヘラケズリ調整が顕著で、屈曲部の下まで及んでいる。142は体部からの屈曲が弱く直立気味の短い口縁部を有するものである。体部は最大径が中位やや上に位置したやや胴長の形状を呈する。外面はタタキ調整のみで仕上げている。内面はヘラケズリ調整後にハケ調整を施している。143は甕の底部で、丸みを帯びた小さな平底を持つ。外面のハケメ調整が顕著である。144は底部に焼成前の穿孔を1穴施した甑である。丸底を呈し、外面調整はタタキ調整のままである。

以上、ＳＤ01から出土した土器を見てきた。下層・上層それぞれから出土した土器の諸特徴は、下層の壺（1）や鉢（10)、高杯（14）などにやや古い特徴がうかがえるものの、主体となる部分はほぼ同じであり、その堆積に要した時間差は余りないようである。主要器種である壺・甕・高杯・鉢の特徴を抽出してみると、壺は、広口壺に口縁端部を拡張して鋸歯文などを施すものと途中で屈曲しながらラッパ状に大きく開くものがあり、二重口縁壺では二次口縁部が大きく外反するものがある。甕は、口縁部の屈曲で内面に稜を持つものと持たないものが混在しており、内弯気味に立ち上がる口縁部を持つものもわずかにみられる。体部内面のヘラケズリ調整は屈曲部まで及ばないものが多く体部外面のタタキ調整をハケ調整で消しきれないものが多い。底部はほとんどが尖り気味の丸底となっている。高杯は段を持つ中位で屈曲して外反する杯部に大きくラッパ状に広がる脚部を持つものと、小さな段を持つ下位から直線的に外方へ伸びる杯部に軸から「ハ」の字に低く開く脚部をもつものがある。鉢は大・中・小型品が揃い、やや深めのボウル形が目立つ。ほとんどが丸底で平底はほんのわずかである。手捏ねの浅い皿形のものが見られる、などの特徴を挙げることができる。これ以外に、器種構成上の特徴として、高杯の絶対量が少ない、小型丸底壺・小型器台が含まれない、「下川津Ｂ類土器」が認められないなどが挙げられる。これらの諸特徴の多くは、下川津遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年である下川津Ⅰ～Ⅶ式（大久保1990）に照らしてみると、Ⅴ式に位置付けることができよう。ただし、下層に見られた古い特徴を持つものは前段階のⅣ式に、上層の甕（67）や高杯（82）などの新しい様相を持つものは次段階のⅥ式にかかるものと思われる。

また、調査時の所見では上層の遺物は口縁部を上に向けた検出例が多いことから、溝状遺構の中に意図的に土器を正置した可能性を指摘している。遺物の接合関係を見ると、比較的近接したところからの接合資料が多いものの、27や36の壺のように３～６ｍ離れた破片が接合した例もみられる。また、遺物自体の観察からは、共に少量ではあるものの、ススの付着や被熱痕などから煮炊きに使用した甕や焼成後の穿孔を施した壺・甕の存在が認められるなど、使用によって破損したあるいは祭祀用に転じたと見られる土器の両方の資料が混在している状況にある。「廃棄」なのか「祭祀」なのか、その判断は難しくこの資料からはいずれともいえない。

ＳＤ02（第16～18図）

調査区のほぼ中央部で検出した溝状遺構である。検出した部分はほぼ直線的であり、Ｎ23°Ｗと南南東－北北西方向を有している。検出長約35.0ｍ、幅約1.0～2.1ｍ、深さ0.3～0.4ｍを測る。断面形状は基本的に浅いＵ字形を呈しており、底面はほぼ平坦となっている。周囲の地形などからみて北北西方向へ流れていたことが想定される。埋土は大きく二分することができ、下位約３分の１の厚さで下層の黒褐色混細粘質土層、その上に約３分の２の厚さで上層の灰黄褐色混砂粘質土が堆積している。遺物は上・下層の両方から28リットル入りコンテナ５箱分出土しているが、総じて下層の方が出土量

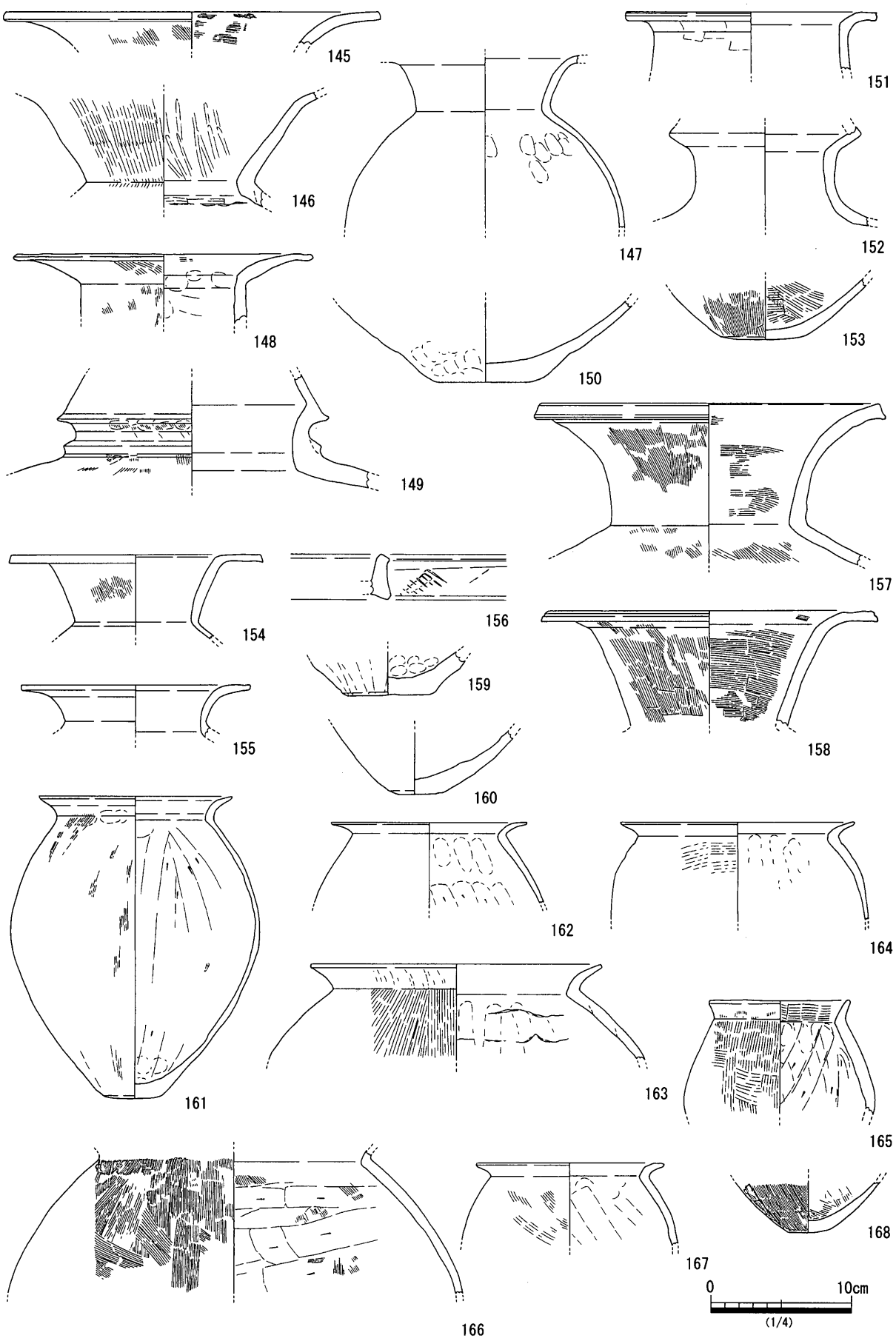


第16図　ＳＤ02断面図 (1/40)

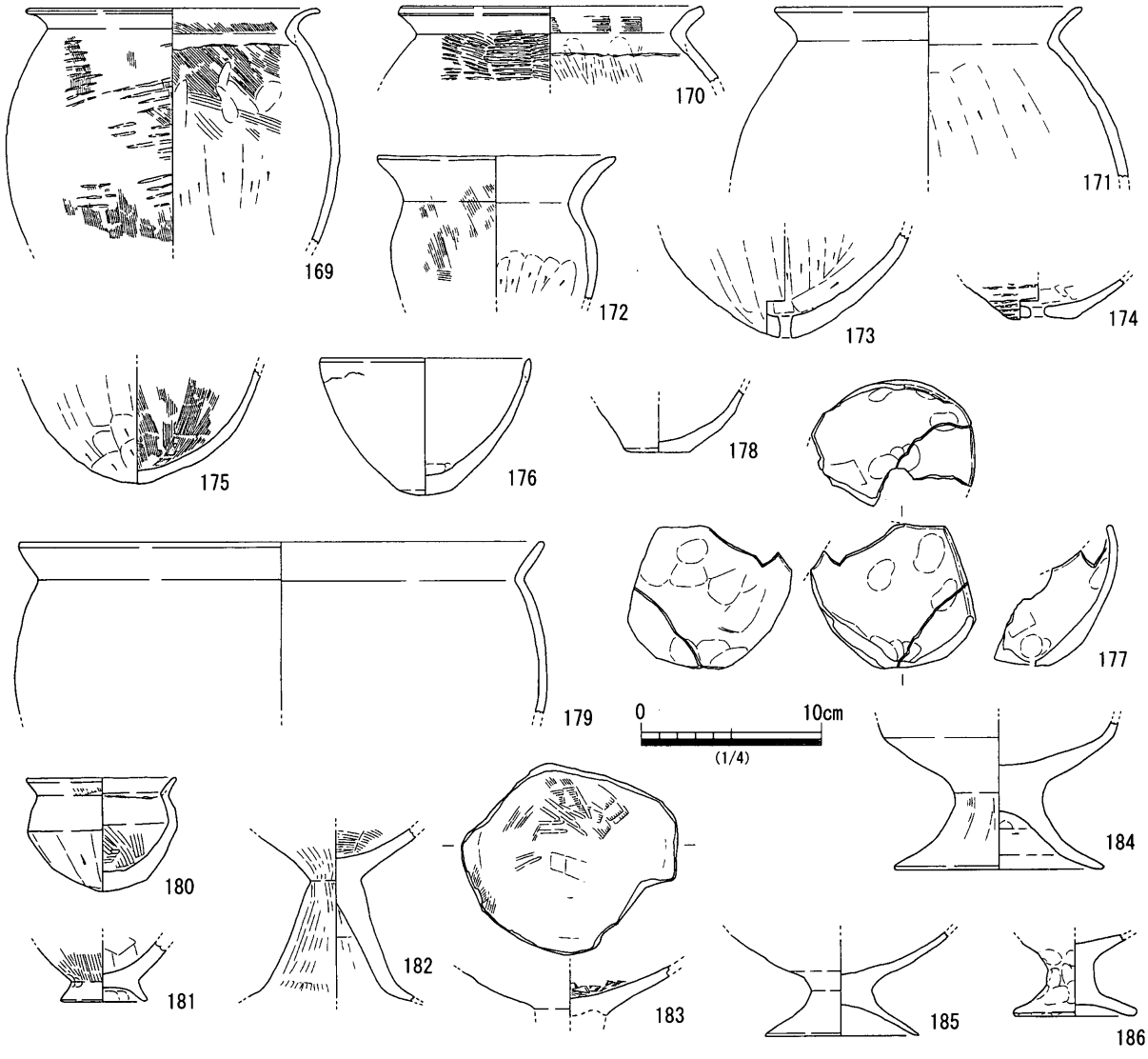
は多い。遺物の取り上げは上・下層に２分して行っている。

145 ～ 150 は上層から出土した壺である。145 ～ 147 は外傾する頸部から屈曲して開く口縁部を持つ広口壺である。146 よりも 147 の方が口縁部の屈曲の度合いは強い。147 は最大径を体部中位に持つもので、なで肩の体部となっている。148 は直立する頸部から屈曲して外方へ開く口縁部を有する広口壺である。口縁端部は丸く収めている。149 は短く外反する口径部に内傾する口縁部を付けた壺である。体部と頸部の接続部には１条の凸帯をめぐらせている。150 は平底の壺の底部である。151 ～ 153 は下層から出土した壺である。151 はやや内傾する頸部から強く屈曲して水平に開く口縁部を持つ広口壺である。口縁端部は四角い面を持ち凹線が１条めぐる。152 は外反する頸部から強く屈曲して口縁部に続き、さらに二次口縁を貼り付けていたものであるが、接合面で剥離している。153 は平底の壺の底部である。154 ～ 160 は層位不明のものである。154・158 は外傾する頸部から屈曲して水平に開く口縁部を有する広口壺である。155・157 は外傾気味の頸部から連続して開く口縁部に続く広口壺である。いずれも口縁端部は四角く面を持つ。157 はわずかに拡張させて凹線状の窪みがめぐる。156 は広口壺の口縁端部で、上方に拡張して面を持たせ、ヘラ描きによる鋸歯文を施している。159・160 は壺の底部である。白い胎土を持つ 159 はしっかりした平底だが、橙色の胎土を持つ 160 はかなり小さな平底である。

161 ～ 164 は上層から出土した甕である。口縁部の屈曲は 161・162 よりも 163・164 の方が強く屈曲している。161 は体部中位に最大径を持った縦長の扁球形をしており平底を有する。162・163 の内面のヘラケズリ調整は屈曲部までは至っていない。164 は体部外面にタタキ調整が明瞭に残る。165 ～ 168 は下層から出土した甕である。165 は屈曲が弱く短い口縁部を有する。体部外面と口縁部内面はハケ調整が顕著である。166 は大型品で外面はハケ調整で仕上げている。168 は小さな平底である。169 ～ 172



第17図　ＳＤ02出土遺物①（1/4）



第18図　ＳＤ02　出土遺物②（1/4）

は層位不明のものである。169・170は屈曲が弱く外反する口縁部を有する。外面調整は169がタタキ調整の後にハケ調整で仕上げているが、170はタタキ調整のままである。171は強く屈曲して直線的な口縁部を持つ。172は大きく開く口縁部を有しており、体部の最大径より口径の方が大きい。

173は下層から出土した甑で尖り気味の丸底を呈する。174は層位不明の甑で平底を呈している。

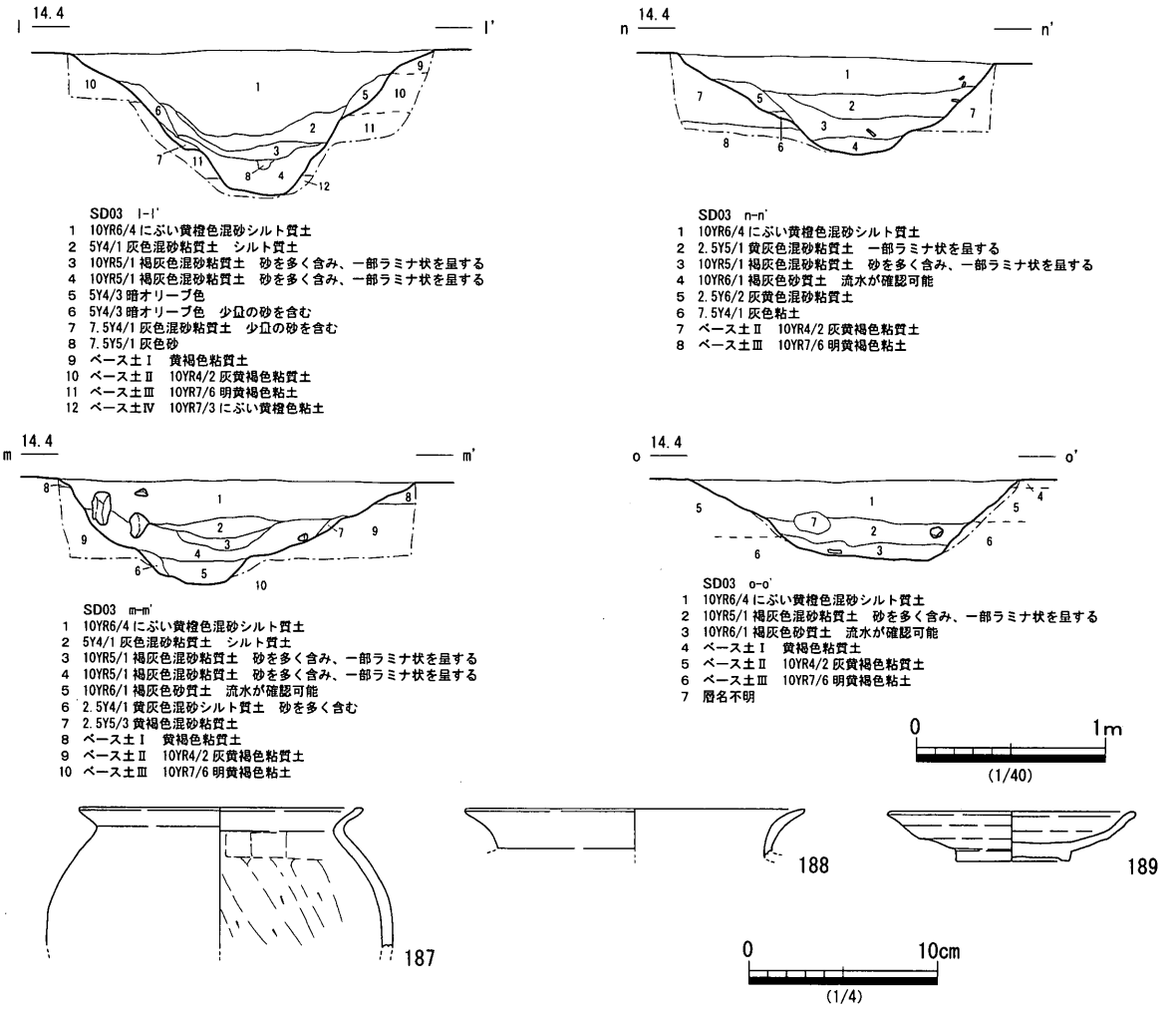
175～177は上層から出土した鉢である。175は外面のヘラケズリ調整と内面のハケメ調整から鉢と判断した。尖り気味の丸底である。176は深いボウル形に丸みを帯びた小さな平底を有する小型品で、白い胎土を用いている。177は一部を欠損するため全体の形状は判明しないが、小型品のボウル形をした小型品の口縁部が斜めに切り落とされたような形状をした見慣れないものである。通常の鉢とは異なる用途が想定される。178は下層から出土した鉢である。ボウル形をした小型品で平底を呈する。小型の壺の可能性も残る。179～181は層位不明のものである。179は球形の体部に弱めに屈曲する口縁部が付く大型品である。180は算盤玉のような体部に外反する短い口縁がつくものである。尖り気味の丸底を呈している。181は小型の台付鉢である。

182は上層から出土した高杯である。杯部の形状は判明しないが、脚部は円錐状に開く形態で裾部付近でやや強く外方へ開いている。183～186は層位不明のものである。183は杯部下半の破片で、脚部を差し込んで接続するものである。184・185は脚部の短いものである。184は途中で屈曲する杯部を持つ。186は全体に指頭痕が明瞭に残る手捏ねのもので、小型の高杯と判断したが、器台のミニチュアの可能性も残る。

出土遺物の年代は、鉢の丸底化が見られるものの壺や甕はまだ平底であることや、壺の口縁部の形態などから、弥生時代終末期（下川津Ⅴ式）に位置づけることができる。

ＳＤ03（第19図）

調査区東端で東壁に沿うような形で検出した溝状遺構である。検出した部分は直線的であり、N31°Wの方向を有している。この方位は丸亀平野に遺存する方格地割に合致している。検出長約37.5ｍ、幅約1.7～2.0ｍ、深さ約0.4～0.8ｍの規模を測る。基本的な断面形状は途中に小さなテラス状の平坦面を持った逆凸形を呈するが、南半では逆台形を呈している。床面の標高から南東から北西方向へ流下していたことがわかる。埋土は概ね３層に分けることができ、下層に褐灰色砂質土層、中層に褐灰色混細砂粘質土層、上層ににぶい黄橙色混砂シルト質土の順で堆積している。溝状遺構の北半の断面を示



第19図　ＳＤ03断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

したN・M・L断面図にはこの３層に先行する土層が認められることから、ＳＤ 03 は最低１回の掘り直し（溝浚え）が行われたものと思われる。

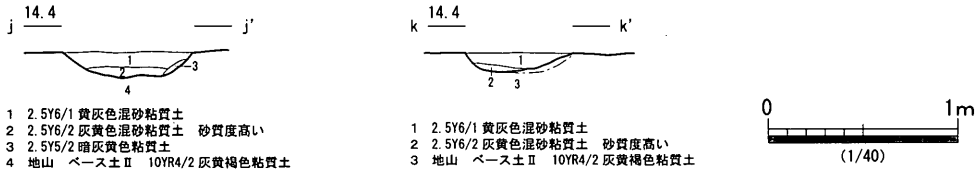
遺物は上～下層から出土しているが、先行する土層からは出土しなかった。遺物の量は極めて少ない上に細片となっているものがほとんどである。また、遺物の大半は混入したとみられる弥生土器の破片が占めており、図化した 189 の緑釉陶器以外には、古代に属するとみられる須恵器の甕の細片（図化不能）がわずかにみられる程度である。

187・188 は混入した弥生土器である。187 は甕、188 は高杯の杯部である。２点とも全体に著しく磨滅しており溝状遺構内を流されたことがうかがえる。弥生時代終末期頃の年代が想定される。189 は緑釉陶器の椀である。破片となって中・下層から出土している。硬質で、高台は削り出し高台である。釉薬は深い緑色で高台内面以外の全面に施釉している。京都産であろう。その形態から９世紀末頃に位置付けることができる。

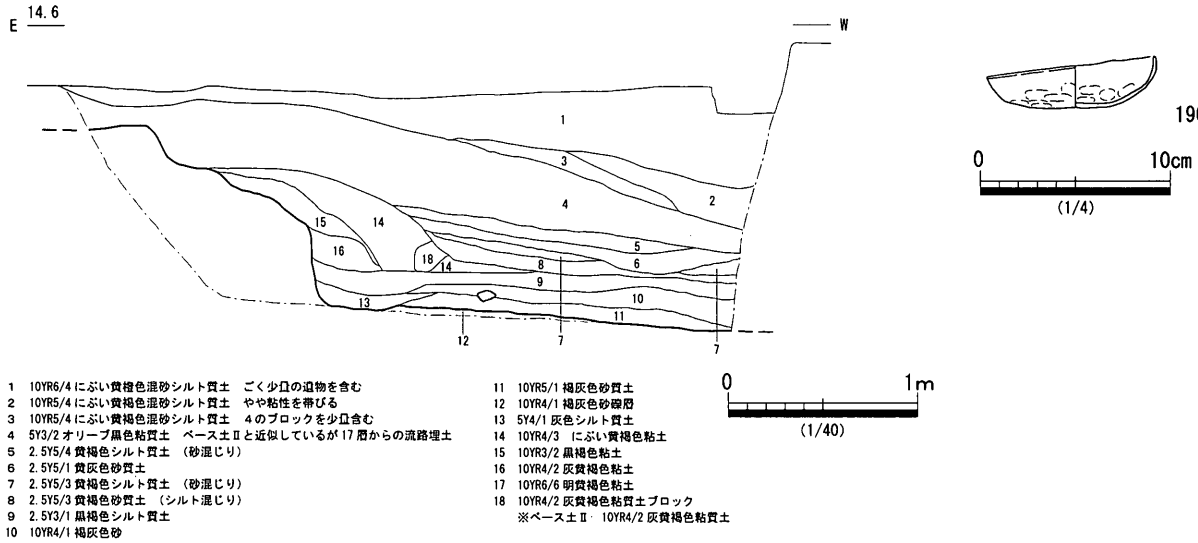
以上の状況と年代観から、ＳＤ 03 は開削後次第に埋まって浅くなってきたために１回の溝浚えが行われたのち、再び埋まり始めて下～中層が堆積した（半ばほどまで埋まった）のが９世紀末頃ということができよう。ＳＤ 03 の開削時期は９世紀末を遡ることは間違いないが、開削年代を示す資料がないため時期は特定できない。また、混入した弥生土器はＳＤ 03 の上流にＳＤ 01・02 と同時期（弥生時代終末期頃）の遺構があることを示唆するものである。

ＳＤ 04（第 20 図）

調査区のほぼ中央部でＳＤ 02 に一部重なるように検出した溝状遺構である。検出した部分は直線的であり、Ｎ 30°Ｗと南東－北西方向を有している。この方位は丸亀平野に遺存する方格地割に合致しており、ＳＤ 03 とは溝の肩間で約 5.0 ｍの間隔を持って平行している。検出長約 33.5 ｍ、幅約 0.3 ～ 0.8 ｍ、深さ約 0.1 ｍを測る。断面形状は浅い皿形を呈しており、底面はほぼ平坦となっている。ＳＤ 03 同様に北西方向へ流れていたものだろう。南へ行くほど浅くなり南壁手前で途切れているが、当該地は上面の削平を受けているため、本来は南へ連続していたものと想定できる。埋土は２層に大別され、下層に灰黄色混砂粘質土、上層に黄灰色混砂粘質土が堆積している。遺物は上・下層の両方から 28 リットル入りコンテナ１箱分弱が出土しているが、そのほとんどは重複するＳＤ 02 から混入した弥生土器片である。上層から辛うじて７世紀代に属する可能性がある須恵器杯身の細片１点が出ているが、これを持ってＳＤ 04 の埋没年代とするのは困難である。



第 20 図　ＳＤ 04 断面図 (1/40)



第21図　ＳＲ01断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

【自然河川】

ＳＲ01（第21図）

調査区の南西隅付近、ＳＤ01のすぐ西隣で自然河川である。東肩部分を検出したに過ぎないため、全体の規模は判明していない。検出長約17.5ｍ、最大幅5.6ｍ、深さ約1.2ｍを測る。埋土は大きく２つに分けることができ、その堆積状況は下から順に、下層は砂礫層～シルト質土層、上層は砂質土層～シルト質土層と、２回の流滞水を繰り返して埋没し、上層は長期間低湿地状態を呈していたことがうかがえる。上・下層の間の東肩斜面部分には、河岸が崩落したとみられる粘土層の堆積がある。出土遺物には弥生土器、須恵器（甕・杯身・高杯脚部の破片）がみられるが、その量はごく少量にすぎずほとんどが上層に属する。190は弥生土器鉢である。内外面に指頭痕が明瞭に残り、手捏ねのために全体の器形が歪んでいる。弥生時代終末期～古墳時代初頭に比定できるものでありＳＤ01からの混入品の可能性が高い。須恵器は細片のため図化できなかったが、杯身の年代観から６世紀末頃に比定できると思われる。

隣接する弥生時代終末期～古墳時代初頭のＳＤ01とは南北両端で重複しているが、両者の土層断面観察からはＳＲ01の下層の堆積が終了した後、ＳＤ01が掘り込まれ、ＳＤ01の埋没後にＳＲ01の上層が埋没したという順序が見て取れる。出土遺物から見た年代を当てはめれば、下層は弥生時代終末期以前、上層は６世紀末頃に埋没したということになる。

【掘立柱建物跡】

ＳＢ01（第22図）

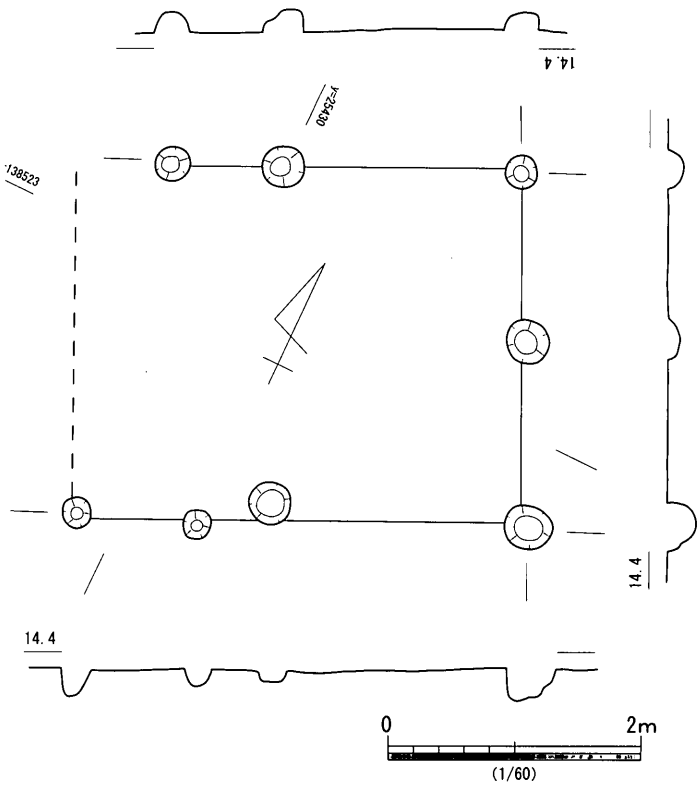
調査区の中央部北壁付近で検出した掘立柱建物跡である。西北隅の柱穴が調査区外のため確認できないが、建物跡南辺の延長上に柱穴が見つからなかったことから、梁行２間（2.8ｍ）×桁行２間（3.6ｍ）の建物跡と判断した。柱間は梁行1.4ｍだが、桁行は西側が1.6ｍで東側が2.0ｍと間隔が異なっている。床面積は10.1㎡で、桁行の方向はＮ65°Ｅを示す。柱穴からの出土遺物が皆無であり直接年代を示す資料はないが、ＳＢ01の南側に掘られた複数の近世の溝状遺構と同一の方向を示していることか

ら、近世に属するものと判断しておく。

【近世の遺物】(第23図)

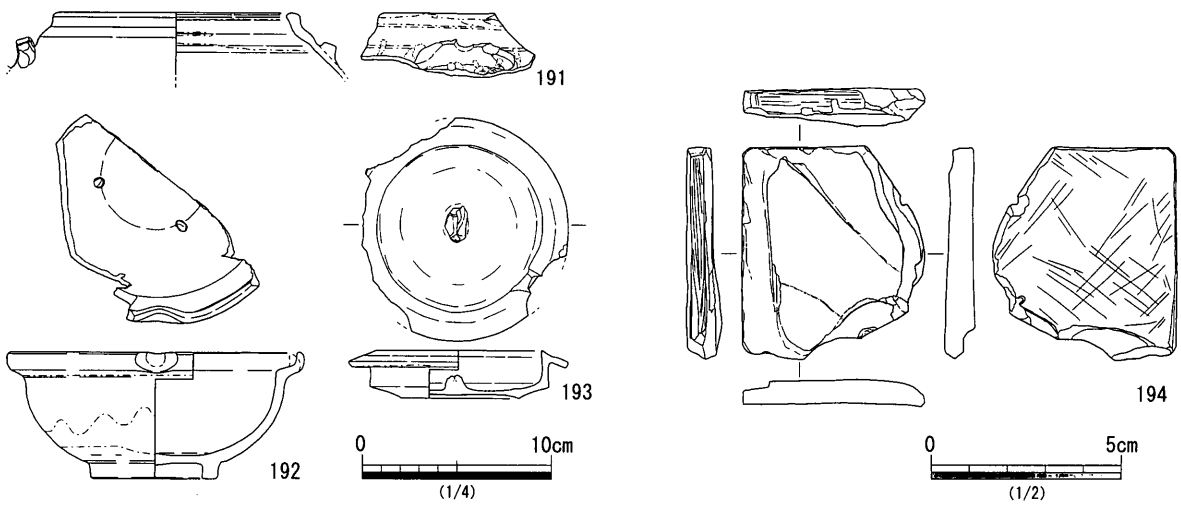
ここでは特徴的な近世の遺物についていくつか取り上げる。

191～193は包含層と近世の性格不明遺構から出土した陶器である。胎土分析を実施していないため確定はできていないが、東かがわ市白鳥町に所在する谷遺跡で焼かれた陶器と同じような形状・胎土を持つもので、谷窯跡産の可能性がある。191はソロバン玉形をした土瓶の口縁部で、貼り付けられた把手の一部が残る。白色の釉薬で描かれた文様が一部残る。192は鉢で、扁平な体部から伸びる口縁部を外側に屈曲させさらに先端を直立気味に折り曲げている。口縁部は一部を内側にへこませたもので輪花状を呈すると思われる。高台は大きめで、断面形状が方形のものを削り出している。茶色の釉薬をかけた上に青色系の釉薬を施しており、青色系の釉薬は部分的に発泡して白化している。193は土瓶の蓋である。外方へ折り返した口縁部を土瓶に引っかけて蓋をするもので、引っ込んだ内面にアーモンド状のつまみを付している。



第22図　ＳＢ01平・断面図(1/60)

194は性格不明遺構から出土した砥石である。頁岩ないし緻密な流紋岩を使用したもので、遺存する長側面には成形時に使用した鋸による線条痕が残る。砥面は1面のようで、裏面には成形時と思われる不整方向の細かい線条痕が認められる。石材や形態などから京都産のものと思われる。高松市の西打遺跡で同様の京都産砥石が14世紀代に埋没した井戸から出土しているが、小塚遺跡では近世の染付椀とともに出土している。



第23図　近世出土遺物(1/4・1/2)

第４章　まとめ

遺構の変遷

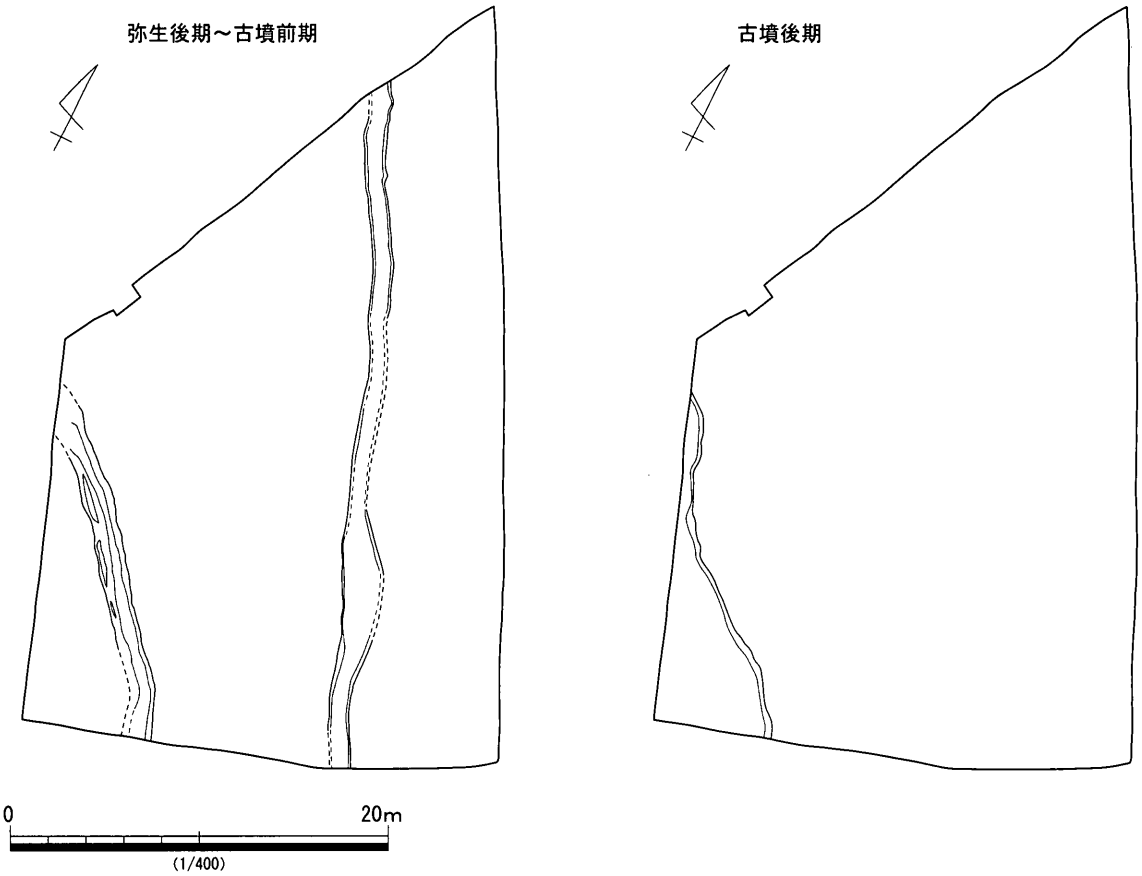
「第３章第２節遺構・遺物」では検出した遺構・遺物について、遺構の種類ごとに説明した。ここではこれらのデータを基に、小塚遺跡の変遷をみることにする。なお、出土遺物がなく直接時期比定ができなかった遺構については検出方位、位置、埋積状況、他の遺構との先後関係を考慮して該当時期を推定したものもある。

第１期　弥生時代終末期より前

調査区南西隅で検出した自然河川ＳＲ 01 の下層からは遺物の出土がないものの、溝状遺構ＳＤ 01 との先後関係から弥生時代終末期より前ということがうかがえる。

第２期　弥生時代後期～古墳時代初頭（第 24 図）

この時期の遺構はＳＤ 01・02 などの溝状遺構が主体となっている。ＳＤ 01 に隣接して同じ方向を指向するＳＤ 08 も当該期に属する可能性がある。ＳＤ 01 内から出土した大量の土器は、「廃棄」か「祭祀」なのかその判断はつかないが、これらの土器を入れた集団の集落が近辺にあることを示唆するものとい



第 24 図　遺構変遷図①（1/400）

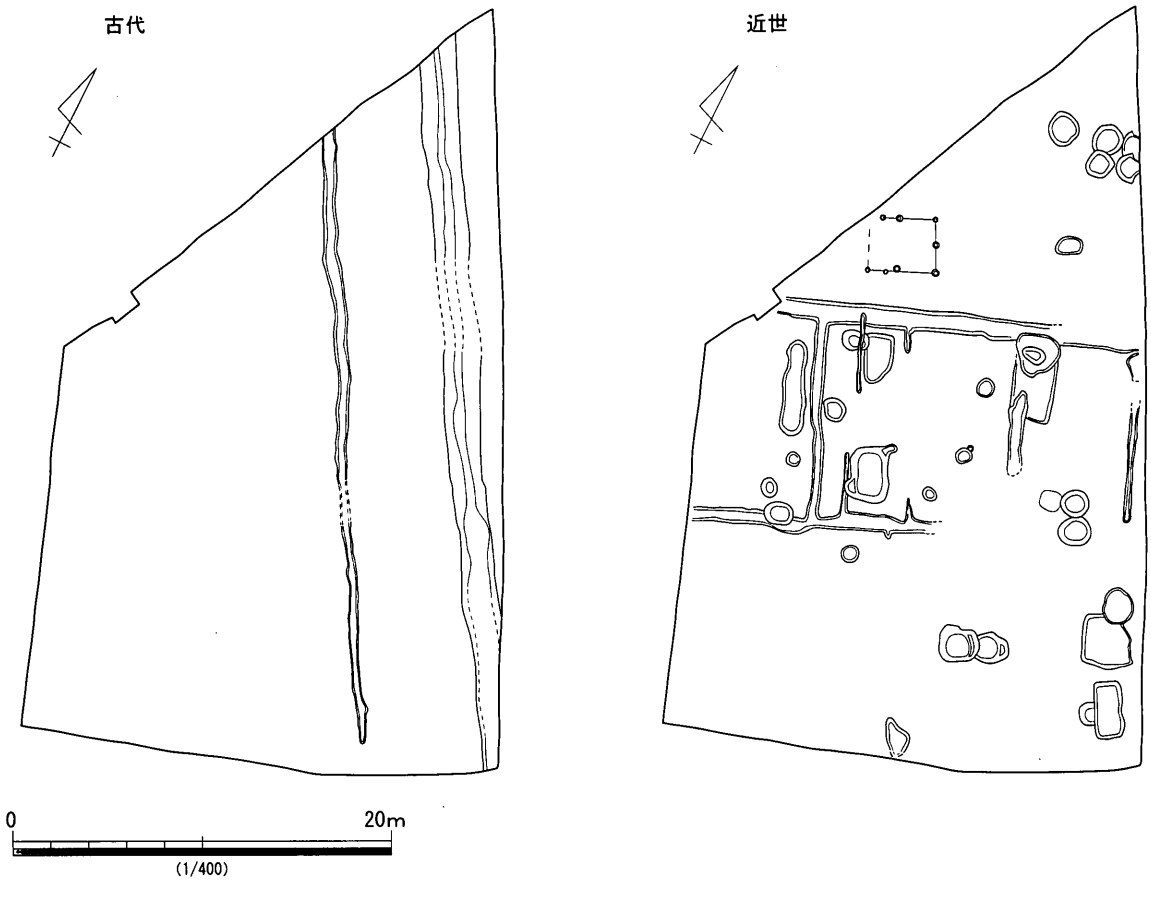
えよう。また、土器群は弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけての土器型式の１～２型式と短い期間が想定されることから、これを使用した集落も短期間で廃絶した集落の可能性が高い。

第３期　古墳時代後期（第 24 図）

この時期の遺構は、自然河川ＳＲ 01 の上層があるだけで、他に遺構は見受けられない。

第４期　古代（第 25 図）

この時期の遺構には、溝状遺構ＳＤ 03･04 が挙げられるのみで、他の遺構はない。この両者の方向は、現在も丸亀平野に広く残る条里地割の名残りである方格地割と同じ方向を有する。丸亀平野の条里地割については復元案が提示されており、それによるとＳＤ 03 を検出した位置は多度郡条里の１条と２条の条界と推定された部分に相当している。ＳＤ 03 は１回の溝浚えを行ったのち９世紀末頃以降、おそらく 10 世紀の前半段階にはほぼ埋没して溝としての機能を果たさなくなったものとみられる。丸亀平野の条界方向の溝状遺構は 10 m内外の誤差が認められるものが多いという例もあり、調査区外（東側）に新たに掘られた溝に機能を譲ったのであろうか。小塚遺跡の南方には丸亀平野を横断するトレンチを入れたように四国横断自動車道建設と都市計画道路建設による発掘調査が行なわれており、その成果がまとまってきている。それによれば、ＳＤ 03 を南に延長した部分には、善通寺市稲木町に所在する稲木遺跡（平成２年度善通寺市教育委員会調査部分）のＳＤ 02 が当てはまると思われる。稲木遺跡ＳＤ



第 25 図　遺構変遷図②（1/400）

02は「この遺構は奈良時代以前に構築され、奈良時代末には埋没し機能しなくなっていたようである」と報告されている。ＳＤ03の開削年代が判明しない以上、ＳＤ02との直接的な関係を判断することはできないが、ＳＤ03の開削時期がＳＤ02と同時期（７世紀代か）である可能性はありうるであろう。また、ＳＤ03に約５ｍ間隔で平行するＳＤ04についても、ＳＤ03と同時期に機能していれば両者の間を道路状遺構と見なすことが可能であるが、ＳＤ04の年代を示す資料がないことから、ここではその可能性を指摘するにとどめたい。条里地割に伴う道路状遺構については、今後の資料の増加を待ちたい。

第５期　近世（第25図）

この時期の遺構は他の時期に比べて圧倒的に遺構密度が高い。掘立柱建物跡ＳＢ01以外に、複数の溝状遺構、土坑、性格不明遺構が見られる。建物や溝状遺構、長方形の土坑などの主軸はほぼ揃って同じ方向を指向しているが、その方向は前代の溝状遺構とは若干異なるようである。また、これらの遺構の中には重なるものも見られることから、近世の中においても時期差があることがわかる。遺物は溝状遺構よりも土坑や性格不明遺構から多数出土しており、陶磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦類などがある。器種としてはすり鉢、皿、鉢、椀、焙烙、鍋、土瓶などの日常雑器が中心であり、17～18世紀代に比定することができよう。これらの土坑や性格不明遺構は土器類などを廃棄するために掘られた可能性がある。また、ＳＢ01以外の建物は確認できないことから、集落の中心というよりは村外れに近い部分に相当すると思われる。ＳＢ01は住居とみるには規模が小さすぎ、倉庫的な役割を持った小屋であろう。これらのことから、当該地は集落の縁辺部にあたり、破損した土器類などを廃棄するための場として土地利用されたものと想定される。

以上のように、小塚遺跡では、第１期と第５期は近辺に集落の存在がうかがえる以外は、主に田畑などの生産域として土地利用がされたと想定される。

＜参考文献＞

・香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター他
『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成11年度』2000.3
・香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター他
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第52冊　谷遺跡』2004.10
・香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター他
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　稲木遺跡』1989.3
・香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター他
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第32冊　中間西井坪遺跡』1999.3
・香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター他
『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ　下川津遺跡』1990.3
・稲木遺跡発掘調査団
『稲木遺跡～県道西白方善通寺線樫薮踏切切除去工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～』1989.3
・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』1993.3
・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅴ　特集・７世紀の讃岐』1997.3
・丸亀市史編さん委員会
『新編　丸亀市史　１　自然・原始・古代・中世編』1995.2

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
1	SD01	弥生土器	壺	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR3/2 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	中・多			中・多		(12.8)	16.8	3.6		ヨコナデ・ヨコナデ→ハケメ・ハケメ→ヘラミガキ・ハケメ→ナデ	指押え→ヨコナデ・指ナデ→ヘラケズリ・指ナデ・ヘラケズリ・指押え→ヘラケズリ	底 8/8	焼成後の穿孔1孔あり・外面に黒斑あり
2	SD01	弥生土器	壺	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並							3.7		ハケメ	ヘラケズリ状のハケメ	底 8/8	外面に黒斑あり
3	SD01	弥生土器	甕	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多	細・少		細・並		14.3				ヨコナデ・タタキ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	口 8/8	
4	SD01	弥生土器	甕	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	中・並	細・少				(12.3)	20.3	1.8		ヨコナデ・タタキ・タタキ→ハケメ・タタキ→ナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	口 3/8	外面に黒斑あり・外面下半に被熱痕あり→煮炊きした？
5	SD01	弥生土器	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並			細・少		11.4				ナデ・指押え→ハケメ	ハケメ・ヘラケズリ	口 5/8	内・外面に黒斑あり
6	SD01	弥生土器	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐 7.5YR6/4 にぶい橙	中・少			細・少		(13.6)				ナデ・指押え→ナデ・指押え→ハケメ→ナデ	ハケメ？→ナデ・ナデ・指押え→ヘラケズリ	口 3/8	外面に黒斑あり・外面下半に被熱痕あり→煮炊きした？
7	SD01	弥生土器	甕	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	細・少			細・並		14.7				ナデ・指押え→ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ→ナデ・指押え→ハケメ・ヘラケズリ	口 7/8	外面に黒斑あり・外面中位にススが付着
8	SD01	弥生土器	甑	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/8 黄褐	粗・並			細・少				2.3		タタキ→ハケメ	ヘラケズリ	底 8/8	外面に黒斑あり・穿孔1孔（焼成前）
9	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	中・少			細・並		8.6	3.3	2.8		ヨコナデ・指押え→ナデ・	ヨコナデ・指押え→ハケメ	口 6/8	外面にクラック多・外面に黒斑あり
10	SD01	弥生土器	鉢	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・少	細・少				(15.2)	(7.2)	5.0		指押え→板ナデ？・ナデ・磨滅	磨滅・ハケメ	底 8/8	外面に黒斑あり・全体に磨滅・剥落が著しい
11	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	中・多	中・少				12.3	5.2			ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ→ヘラミガキ・磨滅	口 8/8	完形・外面に黒斑あり・内外面の剥落が著しい
12	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	中・多	中・多		中・多		14.0	7.4			ヨコナデ・タタキ→ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ハケメ→指ナデ	底 8/8	完形・表面にクラックあり
13	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR7/6 橙 2.5YR2/1 黒	7.5YR6/6 橙	中・並			中・少		11	3.3			指押え→ナデ	指押え→ナデ	口 8/8	完形・外面に黒斑あり・全体に磨滅がすすむ
14	SD01	弥生土器	高杯	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	細・少						13.5		ヨコナデ・ハケメ・ハケメ→ナデ・ハケメ→ヘラミガキ・ヘラケズリ？・ナデ	ハケメ→ヘラミガキ	底 6/8	剥落がすすむ・穿孔6穴
15	SD01	弥生土器	壺	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・多			細・多		(24)				磨滅	ハケメ	口 1/8	雲母土器・外面の剥落がすすむ・鋸歯文あり
16	SD01	弥生土器	壺	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並	中・少		細・並		(20.8)				ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・磨滅	口 1/8	内面の磨滅・剥落がすすむ・鋸歯文・斜格子文
17	SD01	弥生土器	壺	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	粗・並	細・並			中・多	(22.6)				ヨコナデ・ヨコナデ→ハケメ・磨滅	ヨコナデ・ハケメ・磨滅	口 4/8	雲母土器・全体に磨滅が著しい・口縁部がわずかにへこむ（凹線まではいかない）

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
18	SD01	弥生土器	壺	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	粗・並					17.2				ヨコナデ・磨滅・剥落	ヨコナデ・磨滅・剥落	口 6/8	全体に磨滅・剥落が著しい
19	SD01	弥生土器	壺	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y4/1 灰黄	中・並	中・少							頸部径 10.2	ハケメ→ヘラミガキ	ハケメ→ヘラミガキ・ヨコナデ・指ナデ・ハケメ	頸 8/8	内面が磨滅気味・内面に黒斑あり
20	SD01	弥生土器	壺	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	粗・多					18.7				ハケメ・磨滅	磨滅	口 6/8	全体に磨滅・剥落が著しい
21	SD01	弥生土器	壺	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR5/8 赤	中・並					17.2				ナデ・ハケメ→ナデ	剥落	口 8/8	内面の剥落が著しい
22	SD01	弥生土器	壺	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	細・少	細・並				(16.8)				ハケメ・磨滅	ヘラケズリ・磨滅	口 7/8	全体に磨滅・剥落がすすむ
23	SD01	弥生土器	壺	10YR7/4 にぶい黄褐	7.5YR4/4 褐	中・多	中・少				(14)				ヨコナデ・タタキ→ハケメ	磨滅・	口 2/8	全体に磨滅が著しい
24	SD01	弥生土器	壺	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	中・並					17.2				ヨコナデ・ハケメ→ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・指押え	口 8/8	
25	SD01	弥生土器	壺	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並	中・少				(12.3)				磨滅・タタキ→ハケメ	磨滅・ハケメ？	口 4/8	全体に磨滅・剥落が著しい
26	SD01	弥生土器	壺	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい褐	細・多	中・並		中・並		(16.2)				ヨコナデ→指押え・ハケメ→ナデ	ヨコナデ・指ナデ・指押え→ナデ	口 2/8	
27	SD01	弥生土器	壺	7.5YR7/6 橙	2.5YR7/2 灰 5Y6/1 灰	中・並		中・少			(17.2)				ナデ・ハケメ→ナデ・指押え→ハケメ→ナデ・タタキ→ハケメ・指押え→ハケメ	ナデ・指押え→ナデ・ハケメ・ヘラケズリ	口 4/8	外面に黒斑あり・口縁部に擬凹線 1 条・外面にクラックあり・全体に磨滅がすすむ
28	SD01	弥生土器	壺	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄 10YR5/4 にぶい黄橙	中・少			中・多		(16)				ヨコナデ・ハケメ・磨滅	ヨコナデ・ハケメ・指ナデ・指押え→ハケメ→ナデ・ヘラケズリ・磨滅	口 2/8	全体に磨滅気味
29	SD01	弥生土器	壺	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多	中・少				(20.4)				ヨコナデ→ナデ・ハケメ→ナデ・磨滅	ヨコナデ→ナデ・ナデ・ハケメ・指ナデ→ヘラケズリ・ヘラケズリ・磨滅	口 1/8	全体に磨滅ぎみ
30	SD01	弥生土器	壺	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	中・多	中・少				(24.8)				ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ハケメ→ヨコナデ・指押え・ヘラケズリ	口 4/8	内面に黒斑あり
31	SD01	弥生土器	壺	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	粗・多	中・少	中・多			(21)	32.2	6.1		ヨコナデ→指ナデ・ハケメ・ヘラミガキ・タタキ→ヘラミガキ・磨滅	ヨコナデ・ハケメ・ハケメ→ナデヘラケズリ	口 4/8	外面に黒斑あり・ほぼ完形
32	SD01	弥生土器	壺	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/8 橙	中・並			中・多		(14.0)				ヨコナデ・ナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・剥落・磨滅	口 1/8	複合口縁・擬凹線 2 条・内面の磨滅剥落がすすむ
33	SD01	弥生土器	壺	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	粗・多			中・並		(14.4)				磨滅	磨滅	口 2/8	全体に磨滅・剥落が著しい
34	SD01	弥生土器	壺	5Y6/2 灰ｵﾘｰﾌﾞ	7.5YR6/6 橙	粗・多					(14.8)				磨滅	ヨコナデ・指ナデ・磨滅	口 4/8	全体に磨滅・剥落が著しい

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
35	SD01	弥生土器	壺	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y5/1 黄灰	中・多	細・並				(15.6)	(28.3)	(5.6)		ヨコナデ・ハケメ・タタキ→ハケメ・	ヨコナデ・ナデ・指押え・ナデ・ヘラケズリ・	口 2/8	外面に黒斑あり・全体に磨滅がすすむ
36	SD01	弥生土器	壺	2.5YR5/6 明赤褐	2.5Y7/2 灰黄	中・並	細・少	中・少			(23.5)				ハケメ・ヨコナデ・ハケメ・磨滅	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ・磨滅	口 2/8	外面全面と口縁部内面に赤彩の痕跡あり・列点文
37	SD01	弥生土器	壺	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	粗・並							4.5		ハケメ→ヨコナデ・ヨコナデ・ハケメ→ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ハケメ・指押え・指押え→ナデ	頸 1/8	焼成後の穿孔 1 孔・甑に転用？
38	SD01	弥生土器	壺	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・並		細・少	中・並				3.8		タタキ→粗いハケメ・ナデ	磨滅・剥落	底 3/8	外面に黒斑あり・内面の剥落が著しい
39	SD01	弥生土器	壺	10YR8/4 浅黄橙	5Y5/1 灰	中・少	細・少						(4.4)		ハケメ・ヘラミガキ	ハケメ・指押え→ハケメ	底 8/8	外面に黒斑あり・外面の磨滅がすすむ
40	SD01	弥生土器	壺	10YR1.7/1 黒	7.5YR5/6 明褐	細・少			中・多				5.3		ハケメ	ヘラケズリ	底 8/8	外面に黒斑あり
41	SD01	弥生土器	甕	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	細・並			細・少		14				ナデ・タタキ・タタキ→ハケメ	ナデ・ヘラケズリ	口 2/8	外面に黒斑あり
42	SD01	弥生土器	甕	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並					(14.6)			頸部 (12.8)	ヨコナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・板ナデ・ヘラケズリ	頸 3/8	外面に黒斑あり
43	SD01	弥生土器	甕	10YR8/4 浅黄橙	5Y5/2 灰オリーブ	中・並	中・少				(12)				ナデ・タタキ→ハケメ・	ヘラケズリ・磨滅	口 4/8	内面の磨滅が著しい
44	SD01	弥生土器	甕	7.5YR6/3 にぶい褐	2.5YR5/8 明赤褐	中・少					15.0				ヨコナデ・指押え→ナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ・板ナデ・ヘラケズリ	口 6/8	外面が磨滅気味
45	SD01	弥生土器	甕	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5YR7/2 灰黄	中・多			中・多		(12.5)	16.8	4.2		ヨコナデ・タタキ→ナデ・ハケメ・剥落	ヨコナデ・板ナデ・ヘラケズリ・ハケメ	口 3/8	外面に黒斑あり・ほぼ反対の位置に焼成後の穿孔 2 個あり
46	SD01	弥生土器	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	5YR6/4 にぶい橙	中・並					13.4	20.2	2.5		ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ→ヨコナデ・ヘラケズリ・指押え→ヘラケズリ	口 7/8	外面に黒斑あり
47	SD01	弥生土器	甕	7.5YR8/6 浅黄橙	5YR7/8 橙	中・並	粗・少				(12.8)	(16.5)	2.6		ヨコナデ・タタキ→ハケメ・スス付着	ヨコナデ・ヘラケズリ	口 2/8	外面中位にスス付着→煮炊きに使用？・全体に・剥落がすすむ
48	SD01	弥生土器	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・多	細・少				(14.6)	21.7	2.7		ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ→ハケメ・磨滅	底 8/8	外面に黒斑あり・全体に磨滅・剥落がすすむ
49	SD01	弥生土器	甕	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・並					(12.6)				ヨコナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・板ナデ→ナデ・板ナデ・ヘラケズリ	口 8/8	
50	SD01	弥生土器	甕	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	中・少			細・並		(15.0)				ヨコナデ・指押え→ヨコナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・磨滅・ヘラケズリ→指ナデ・ヘラケズリ	口 3/8	全体に磨滅がすすむ
51	SD01	弥生土器	甕	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	中・多					15	25.6	(4)		ヨコナデ・タタキ・タタキ→ハケメ・指押え→ハケメ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	口 7/8	外面に黒斑あり・外面の磨滅がすすむ

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
52	SD01	弥生土器	甕	10YR7/4 にぶい黄褐	10YR7/3 にぶい黄褐	中・並			細・並		(15.0)				ヨコナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・ハケメ→ナデ・ナデ・ヘラケズリ	口 3/8	
53	SD01	弥生土器	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/1 褐灰	中・多			細・少		(14)				ヨコナデ・タタキ→ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	口 8/8	外面に黒斑あり
54	SD01	弥生土器	甕	7.5YR5/6 明褐	7.5YR6/6 橙	中・少			中・並		(14.7)				ヨコナデ・タタキ→ヨコナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・剥落・指ナデ・ヘラケズリ	口 4/8	内面の磨滅・剥落がすすむ
55	SD01	弥生土器	甕	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	細・並			細・少		11.4				ヨコナデ・タタキ→ヨコナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・指ナデ・磨滅・剥離・ヘラケズリ	口 6/8	外面に黒斑あり・内面の剥落・磨滅が著しい
56	SD01	弥生土器	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	細・並					(15)				ヨコナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・指ナデ・指ナデ→板ナデ・ヘラケズリ	口 2/8	外面に黒斑あり
57	SD01	弥生土器	甕	10YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR5/6 明褐	粗・多	中・多				(13.1)	22.0			タタキ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ハケメ→指ナデ・ヘラケズリ	口 4/8	外面に黒斑あり
58	SD01	弥生土器	甕	2.5YR5/8 赤褐	7.5YR4/2 灰褐	中・少			細・少		(15.2)				ヨコナデ・タタキ→ヨコナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・ハケメ→ナデ・指ナデ→ハケメ・ヘラケズリ	口 4/8	外面に黒斑あり
59	SD01	弥生土器	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい黄褐	粗・多	中・少				(14.9)	20.4			ヨコナデ・タタキ・ハケメ	ヨコナデ・指ナデ→ハケメ・ヘラケズリ→ハケメ	口 4/8	外面に黒斑あり
60	SD01	弥生土器	甕	5YR4/6 赤褐	10YR5/3 にぶい黄褐	中・並			細・多		(15.4)				ヨコナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・ハケメ→ヨコナデ・ハケメ	口 1/8	
61	SD01	弥生土器	甕	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	中・多		中・少			15.1				ヨコナデ・ハケメ・磨滅	ヨコナデ・磨滅・指押え・指押え→ヘラケズリ	口 7/8	外面に黒斑あり・外面下半に2次焼成あり？（→煮炊きした？）・全体に磨滅がすすむ
62	SD01	弥生土器	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・並					(15.7)	23.9	4.2		ヨコナデ・ハケメ→ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・指ナデ・ヘラケズリ	口 3/8	丸底気味・外面に黒斑あり
63	SD01	弥生土器	甕	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	細・並					(15.6)				ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・板ナデ・ヘラケズリ	口 4/8	
64	SD01	弥生土器	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	細・並		中・少			(9.1)	15	3.3		ヨコナデ・磨滅・ハケメ	ヨコナデ・磨滅・指押え→板ナデ・ヘラケズリ・指押え	口 4/8	外面に黒斑あり・外面の磨滅がすすむ
65	SD01	弥生土器	甕	2.5YR8/2 灰白	5YR6/6 橙	中・少	中・少				11.6	12.7	3.4		ナデ・ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ・指押え→板ナデ・指押え	口 2/8	白い胎土
66	SD01	弥生土器	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	中・多	中・少		中・並		(14.4)				ヨコナデ・ハケメ→ナデ・ハケメ	ヨコナデ・板ナデ→ハケメ・ヘラケズリ→ハケメ	口 2/8	外面に黒斑あり・外面の磨滅・剥落がすすむ

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調 外面	色調 内面	胎土 石英・長石	胎土 赤色粒	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 砂粒	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	法量 その他(cm)	調整 外部	調整 内部	残存率	備考
67	SD01	弥生土器	甕	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	粗・並	中・並	中・並			15.4	(21.2)			ヨコナデ・磨滅・ハケメ→ナデ・	ヨコナデ・ヘラケズリ→ハケメ	口 6/8	内外面に黒斑あり
68	SD01	弥生土器	甕	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	中・多					(14.6)	15.8	3.6		ヨコナデ・ハケメ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・ヘラケズリ	口 4/8	外面に黒斑あり
69	SD01	弥生土器	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	細・少			細・並		(16)				ヨコナデ・ハケメ→ナデ・ハケメ・磨滅	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ→ハケメ	口 3/8	
70	SD01	弥生土器	甕	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	中・多			中・多		(15.6)				ヨコナデ・タタキ→ナデ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・磨滅	口 3/8	全体に磨滅・剥落がすすむ
71	SD01	弥生土器	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/2 にぶい黄橙	中・並	中・少		中・少		(15.8)				指押え→ナデ・指押え→ハケメ	ナデ・ハケメ→ナデ・ハケメ・ヘラケズリ	口 2/8	(甑か?)
72	SD01	弥生土器	甕	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・並							4.1	胴部最大径(21.8)	指押え→タタキ→ハケメ・指押え→ハケメ→ナデ	ヘラケズリ・指押え→ヘラケズリ	底 8/8	外面下部に2次焼成痕→使用していたのか?
73	SD01	弥生土器	甕	10YR6/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	粗・多							3.4		ナデ	ヘラケズリ	底 8/8	
74	SD01	弥生土器	甕	2.5Y2/1 黒	10YR5/2 灰黄褐	中・少							4.4		ハケメ	ハケメ状ヘラケズリ	底 8/8	外面に黒斑?・外面に粘土紐の接合面での剥離あり
75	SD01	弥生土器	蓋	10YR7/1 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	細・並			細・多			4.4	13.3	つまみ径 4.1	ハクリ・ハケメ→ナデ・剥落	ハケメ・磨滅	底 8/8	全体に磨滅・剥落が著しい・内外面に黒斑あり
76	SD01	弥生土器	甑	7.5YR4/4 褐	7.5YR4/4 褐	中・並	中・並		中・少		(18.7)	17.5	4.7		ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ・指押え・ナデ・部分的にハケメ状・板ナデ→	口 6/8	外面に黒斑あり
77	SD01	弥生土器	甑	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	粗・多	細・少						1.2		タタキ・ヘラケズリ	ハケメ→ナデ指押え→ナデ	底 8/8	焼成後の穿孔1孔・外面に黒斑あり
78	SD01	弥生土器	甑	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	粗・並							4.2		タタキ	ヘラケズリ・ナデ	底 8/8	内外面に黒斑あり・全体に磨滅が著しい
79	SD01	弥生土器	甑	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	中・少							(2.0)		指押え→ハケメ→ナデ	ヘラケズリ	底 4/8	外面に黒斑あり・穿孔1孔
80	SD01	弥生土器	高杯	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・多	中・並		中・並		19.3	14.5	(15.8)		ヨコナデ・ハケメ→ヘラミガキ・ヘラケズリ→ヘラミガキ・ハケメ→ヘラミガキ・ヨコナデ・磨滅・シボリメ→ヘラケズリ・ハケメ→ナデ	ヨコナデ・ハケメ→ヘラミガキ	口 7/8	外面に黒斑あり・穿孔3孔
81	SD01	弥生土器	高杯	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並			細・少		19.4	(14.6)	(12.5)		ナデ・ヘラケズリ→ハケメ・ハケメ→ナデ・ハケメ→ヘラケズリ・磨滅・剥落	ハケメ→ナデ・ハケメ・磨滅	口 6/8	穿孔四つ
82	SD01	弥生土器	高杯	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5YR8/2 灰白	粗・多	中・並				(19.2)			接合部径 3.0	板ナデ→ナデ・ハケメ・磨滅	磨滅・シボリメ・ヘラケズリ	接 8/8	全体に磨滅気味・穿孔1孔

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
83	SD01	弥生土器	高杯	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・多	中・少				22.7				ヨコナデ・ハケメ→ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケメ→ナデヘラケズリ	口 8/8	外面の磨滅がすすむ
84	SD01	弥生土器	高杯	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・並	(黒色粒) 中・少		細・少				9.9		ハケメ・ヨコナデ	ナデ・ハケメ	脚 7/8	杯部との接合部に外面・内面(脚端部付近) と同じ原体のハケメがある
85	SD01	弥生土器	高杯	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並			中・並				10.0		ヘラミガキ・ハケメ・ヨコナデ	指押え・ヨコナデ	脚 3/8	
86	SD01	弥生土器	高杯	2.5YR8/3 淡黄	2.5YR8/3 淡黄	細・少	中・少							接合部径 3.4	ハケメ	ナデ・ヘラケズリ	接 8/8	やや磨滅気味
87	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・多	中・少		中・少						タタキ→ナデ・タタキ→ハケメ	ナデ・ハケメ→ナデ	破片	片口あり・外面に黒斑あり
88	SD01	弥生土器	鉢	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並					(37.8)	22.5	(11.5)		ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ・ハケメ→ヘラミガキ	口 4/8	片口あり・内面に黒斑あり
89	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	中・並	中・少		細・少		(28.8)				ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・板ナデ→ナデ	口 1/8	内面の磨滅がすすむ
90	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並		細・少	細・少		(27)				ナデ・タタキ→ハケメ・磨滅	ナデ・ハケメ	口 3/8	外面の磨滅がすすむ・片口を有しているらしい・外面にクラックあり
91	SD01	弥生土器	鉢	5YR4/1 褐灰	7.5YR6/3 にぶい褐	中・並			細・並		(16.8)				ヨコナデ・磨滅	ヨコナデ・板ナデ→ヨコナデ・板ナデ→ハケメ	口 3/8	表面にクラック多
92	SD01	弥生土器	鉢	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄橙	中・少			中・少		(16.6)				ヨコナデ・ハケメ→タタキ	ヨコナデ・ハケメ	口 2/8	
93	SD01	弥生土器	鉢	2.5YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白	細・少					18.8	10.1	2.5		ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ・ハケメ→ヘラミガキ	口 5/8	外面に黒斑あり・全体にやや磨滅気味
94	SD01	弥生土器	鉢	10YR5/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄橙	中・多			中・並		18.1	9.5			ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・板ナデ→ヘラミガキ・ヘラミガキ	口 8/8	ほぼ完形・外面に黒斑あり
95	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・多			細・少		16.6	8.4			ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ→ヘラミガキ・ナデ→ヘラミガキ	口 8/8	完形・外面に黒斑あり
96	SD01	弥生土器	鉢	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並			中・多		14.2	6.7			ヨコナデ・ヘラケズリ→ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ→ヘラケズリ	口 6/8	外面にクラックあり・外面に黒斑あり
97	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/3 にぶい褐	中・少		細・少	細・少		(16.4)				ヨコナデ・ハケメ・指押え・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ	口 2/8	
98	SD01	弥生土器	鉢	10YR8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	中・少	中・少				(18.6)	8.75			ヨコナデ・板ナデ・ヘラケズリ・磨滅	ヨコナデ・指押え→ハケメ→ヘラミガキ	口 4/8	白い胎土・外面の剥落がすすむ
99	SD01	弥生土器	鉢	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	細・並			細・少		(18)	5.5	(2.5)		ヨコナデ・指押え→ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ→ヘラケズリ・指押え	口 2/8	外面にクラックあり
100	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR4/4 褐 5Y7/1 灰白	7.5YR5/4 にぶい褐	中・少			細・少		18	6.2	2.8		ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ→ヘラミガキ	口 7/8	外面にクラックあり・外面に黒斑あり

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
101	SD01	弥生土器	鉢	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	細・少					(19)	6.2			ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ→ヘラミガキ・ハケメ→ヘラミガキ	口 6/8	
102	SD01	弥生土器	鉢	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	中・多			中・多		16.8	5.9			ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ→ヘラミガキ	口 8/8	ほぼ完形・底部に焼成後の穿孔?1個あり
103	SD01	弥生土器	鉢	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	粗・並			細・少		17.4	8.2			ヨコナデ・指押え→ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ	口 7/8	内外面に黒斑あり
104	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	中・並	中・少				18.2	6.2			ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ→ナデ	口 6/8	外面に黒斑あり・全体に磨滅気味
105	SD01	弥生土器	鉢	2.5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR6/6 橙	中・少			中・少		16.6	5.4			ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ	口 6/8	外面に黒斑あり
106	SD01	弥生土器	鉢	5YR7/8 橙	5YR6/8 橙	中・少	中・少				19.6	5.9			ヨコナデ・磨滅	磨滅	口 6/8	橙色の胎土・全体に磨滅・剥落が著しい・外面に黒斑あり
107	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR7/6 橙	中・並	中・少		細・少		(20)	5.6	(2)		指押え→ヘラケズリ?・磨滅	ハケメ・磨滅	口 1/8	外面に黒斑あり・全体に磨滅がすすむ
108	SD01	弥生土器	鉢	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	粗・並					(17.8)	(6.8)			ヨコナデ・ヘラケズリ→ハケメ	ヨコナデ・ハケメ→ナデ	口 4/8	外面に黒斑あり
109	SD01	弥生土器	鉢	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並					15.8	6			ナデ・ヘラケズリ	ハケメ	口 4/8	外面にクラックあり・外面に黒斑あり
110	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	粗・並	中・少		中・多		18.7	5.9			ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ハケメ	口 7/8	全体に磨滅が著しい
111	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・多			細・少		(18)	5.1	(4.6)		ヨコナデ・ヘラケズリ→ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・表面剥離・磨滅	口 1/8	外面に黒斑あり・内面の剥落が著しい・外面にクラックあり
112	SD01	弥生土器	鉢	5YR6/8 橙	10YR6/6 橙	中・並			中・並		(13)	5.4			ヨコナデ・ハケメ→ナデ・指ナデ→ハケメ	ヨコナデ・指押え→ナデ	口 7/8	
113	SD01	弥生土器	鉢	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	粗・多					(8.5)	6	3.6		タタキ→板ナデ→ナデ・シボリ・ヘラミガキ	ハケメ	底 8/8	外面に黒斑あり
114	SD01	弥生土器	鉢	10YR5/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	中・並			中・並		(10.3)	5.7	3.1		ヨコナデ・ナデ・タタキ・ナデ	ヨコナデ・板ナデ→ナデ・	底 8/8	
115	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR6/6 橙	7.5YR8/3 浅黄	中・少	中・少				(15.4)	8.5	3.2		磨滅	剥落・磨滅	胴 4/8	全体にマメツ・剥落が著しい・外面に黒斑あり・粘土紐の接合痕が明瞭に残る
116	SD01	弥生土器	鉢	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	細・少					(9.8)	7.2			ヨコナデ・ヘラケズリ→ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ	口 3/8	外面に黒斑あり
117	SD01	弥生土器	鉢	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	中・並			中・多		(10)	6.1			ヨコナデ・ナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・板ナデ→ナデ	口 4/8	内外面に黒斑あり・雲母土器
118	SD01	弥生土器	鉢	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・少					(9.7)	8.4			ナデ・指押え・ヘラケズリ	ハケメ	底 8/8	尖り底・外表面にクラックあり
119	SD01	弥生土器	鉢	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・少			細・少		(9.5)	6.6	2.3		ヨコナデ・指押え→ナデ	ヨコナデ・指ナデ・板ナデ	口 6/8	外面に黒斑あり
120	SD01	弥生土器	鉢	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・少			細・少		(6.9)	8.4	2.2		ナデ・ハケメ→ナデ・ハケメ・ハケメ→ヘラミガキ?・磨滅	ハケメ・ナデ・ヘラケズリ・指ナデ?	口 7/8	白い胎土

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
121	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	細・並			細・少		(7.7)				ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	口 2/8	全体に磨滅・剥落がすすむ
122	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	中・並	細・少						1.8		ハケメ・ナデ	ナデ・板ナデ	底 6/8	外面に黒斑あり・小丸かも？
123	SD01	弥生土器	鉢	2.5Y7/2 灰黄 2.5Y5/6 明赤褐	2.5Y7/2 灰黄	粗・多					(9.5)	8.1	7.2		ナデ・指ナデ・ナデ	磨滅・板ナデ？	口 5/8	外面に黒斑あり・全体に磨滅気味
124	SD01	弥生土器	台付鉢	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/6 橙	中・並			中・並		8.3	4.3	3.9		指押え→ナデ・指ナデ	指押え→板ナデ	口 8/8	ほぼ完形・外面に黒斑あり
125	SD01	弥生土器	台付鉢	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	中・少	中・並		細・多				8.6		磨滅・ナデ・ヘラケズリ	強い板ナデ	脚 8/8	外面に黒斑あり・全体に磨滅がすすむ
126	SD01	弥生土器	鉢	2.5YR6/6 橙	10YR8/2 灰白	細・少	細・少				(10.7)	2.9	8.2		ヨコナデ・指押え	ヨコナデ・ナデ	底 8/8	白い胎土・外面に黒斑あり
127	SD01	弥生土器	鉢	2.5YR7/8 橙	2.5YR7/6 橙	中・少	中・少				10.4	3.0			磨滅	磨滅	口 6/8	全体に磨滅・剥落が著しい・内外面に黒斑あり
128	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR6/2 灰褐	5YR5/6 明赤褐	中・少					8.8	3.2	3.1		指ナデ	指ナデ	口 8/8	ほぼ完形
129	SD01	弥生土器	鉢	2.5YR4/8 赤褐	2.5YR4/8 赤褐	中・少			細・並		(11)	2.4	(4.9)		指押え・指ナデ	指押え→板ナデ	口 2/8	底面に黒斑あり
130	SD01	弥生土器	鉢	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	細・並		細・少	中・多		9.4	3			ヨコナデ・指押え→ナデ	ヨコナデ・指押えナデ・	口 4/8	手づくね
131	SD01	弥生土器	鉢	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並			中・並		(9.1)	2.5	2		ヨコナデ・指押え→ナデ	ヨコナデ・ハケメ	口 8/8	外面の指頭痕が顕著
132	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	中・多					10	2.3			磨滅	指押え・磨滅	底 8/8	全体に磨滅・剥落が著しい
133	SD01	弥生土器	壺	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・少							6.8		ハケメ・ハケメ→ナデ・ヘラケズリ	ヘラケズリ・ヘラケズリ→ナデ	底 7/8	
134	SD01	弥生土器	鉢	10YR8/3 浅黄橙	5YR7/6 橙		細・少						2.2		ナデ・ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	底 8/8	全体に磨滅気味
135	SD01	弥生土器	鉢	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	中・並						2.6		ナデ・磨滅	板ナデ・磨滅	底 8/8	全体に磨滅が著しい
136	SD01	弥生土器	鉢	2.5YR8/2 灰白 2.5YR3/1 黒褐	2.5YR8/2 灰白	中・少	中・少		細・少				3.6		指押え→タタキ・板ナデ・ナデ	磨滅	底 6/8	白い胎土・外面に黒斑あり・全体に磨滅がすすむ
137	SD01	弥生土器	鉢	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・少			細・少				3.8		ナデ	ナデ	底 7/8	外面に黒斑あり
138	SD01	弥生土器	壺	5YR6/8 橙	5YR7/4 にぶい橙	粗・多	中・多				29.2				ヨコナデ・ハケメ・指押え・磨滅	ヨコナデ・ハケメ・磨滅	口 7/8	内面の磨滅がすすむ・鋸歯文と竹管文は各 2 個 1 対で繰り返す
139	SD01	弥生土器	壺	5YR7/6 橙	7.5YR8/6 浅黄橙	中・少					22.2				ヨコナデ・ナデ・ハケメ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・磨滅・指ナデ→ハケメ・ヘラケズリ	口 7/8	全体にやや磨滅気味
140	SD01	弥生土器	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・多	粗・並				14.4	25.1	2.2		ヨコナデ・ヨコナデ→タタキ・タタキ→ハケメ	ヨコナデ・ヘラケズリ	口 8/8	外面に黒斑あり

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
141	SD01	弥生土器	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並	中・少		細・少		13.2	23.6			ヨコナデ・タタキ？ハケメ？→ナデ・指押え→タタキ→ハケメ	ヨコナデ・板ナデ・ヘラケズリ	口 6/8	外面に黒斑あり・体部に小さな焼けひずみあり
142	SD01	弥生土器	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多	中・並				16.4				ヨコナデ→タタキ・指押え→タタキ	ヨコナデ→ハケメ・ハケメ風の板ナデ・ヘラケズリ	口 7/8	
143	SD01	弥生土器	甕	7.5YR2/1 黒	7.5YR2/4 にぶい橙	中・少	細・少		細・少				3.4		ハケメ・ナデ	ヘラケズリ	底 8/8	内外面に黒斑あり
144	SD01	弥生土器	甑	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/3 にぶい褐	中・並			細・少				2.3		タタキ→ナデ？	ヘラケズリ	底 8/8	外面に黒斑あり・焼成後の穿孔１孔
145	SD02	弥生土器	壺	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並			細・少		(26.6)				ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	口 4/8	部分的に剥落がみられる
146	SD02	弥生土器	壺	2.5Y8/3 淡黄	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並			細・少					頸部径 13.0	ヨコナデ・ハケメ・ハケメ→ナデ	ヘラミガキ・磨滅・ナデ・指押え→ハケメ	頸 4/8	内面に黒斑あり
147	SD02	弥生土器	壺	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・少	中・少								磨滅	ヨコナデ・ナデ・磨滅	頸 8/8	全体に磨滅が著しい
148	SD02	弥生土器	壺	10YR5/3 にぶい黄褐	2.5Y6/3 にぶい黄	粗・並	中・少	中・少			(21.4)				ハケメ→ナデ・磨滅	ハケメ・指押え→ナデ・磨滅	口 2/8	内面に黒斑あり・全体に磨滅・剥落が著しい
149	SD02	弥生土器	壺	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・多	中・少							頸部径 (18.2)	磨滅・剥落・ヨコナデ・指押え→ハケメ→ナデ・ハケメ	ナデ・磨滅	頸 1/8	全体に磨滅・剥落が著しい・貼付突帯１条
150	SD02	弥生土器	壺	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR6/8 橙	粗・並	中・少		細・少				7.2		指押え→板ナデ	ナデ	底 7/8	外面に黒斑あり・全体に磨滅気味
151	SD02	弥生土器	壺	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・多					(17.8)				板ナデ・磨滅	磨滅・ハケメ・磨滅	口 3/8	全体に磨滅・剥落が著しい・擬凹線１条
152	SD02	弥生土器	壺	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並	中・少		細・少					頸部径 (10.0)	磨滅	磨滅	頸 1/8	全体に磨滅・剥落が著しい
153	SD02	弥生土器	壺	5Y3/1 ｵﾘｰﾌﾞ黒 10YR7/4 にぶい黄橙	5Y4/1 灰	中・多							6		ハケメ・ハケメ→ナデ	ハケメ	底 8/8	外面に黒斑あり
154	SD02	弥生土器	壺	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・並	中・少				18.1				ヨコナデ・ハケメ・ヨコナデ・磨滅	磨滅	口 2/8	
155	SD02	弥生土器	壺	2.5YR7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	細・並	中・少				16.4				ヨコナデ	ヨコナデ	口 5/8	全体的に磨滅がすすむ
156	SD02	弥生土器	壺	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・少									板ナデ・ナデ	板ナデ→ナデ	口破片	外面にヘラ描沈線文あり
157	SD02	弥生土器	壺	2.5Y8/2 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	中・並					(24)				ヨコナデ・ハケメ・磨滅	ハケメ・磨滅	口 2/8	全体に磨滅がすすむ
158	SD02	弥生土器	壺	10YR4/1 褐灰	10YR6/3 にぶい黄橙	中・少			細・少		(24.0)				ハケメ→ヨコナデ・ハケメ	ハケメ→ヨコナデ・ハケメ	口 3/8	内面に部分的は剥落が多い・擬凹線１条
159	SD02	弥生土器	壺	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙		中・少						5.8		板ナデ・板ナデ→ナデ	指押え→板ナデ	底 8/8	外面に黒斑あり
160	SD02	弥生土器	壺	2.5YR6/8 橙	2.5YR5/8 明赤褐	粗・多	中・少						3.8		磨滅	磨滅	底 8/8	全体に磨滅・剥落が著しい

報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
161	SD02	弥生土器	甕	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	粗・多	細・少				13.8	21.5	4.2		ヨコナデ・ハケメ・磨滅	ヨコナデ・ヘラケズリ・指押え・磨滅	底 8/8	全体に磨滅が著しい
162	SD02	弥生土器	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並			細・少		(14.0)				ヨコナデ・ナデ・磨滅	ヨコナデ・指ナデ・ヘラケズリ	口 3/8	全体に磨滅・剥落がすすむ
163	SD02	弥生土器	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・少	中・少				(20.6)				ヨコナデ・粗いハケメ	ヨコナデ・指ナデ・磨滅	口 2/8	内面の磨滅がすすむ
164	SD02	弥生土器	甕	5B4/1 暗青灰	N7/ 灰白	中・少					(16.4)				ヨコナデ・タタキ・磨滅	ヨコナデ・指ナデ・磨滅	口 3/8	全体に磨滅が著しい
165	SD02	弥生土器	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	中・少					(10.0)				ハケメ→ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・指ナデ→ヘラケズリ	口 1/8	外面に黒斑あり
166	SD02	弥生土器	甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	細・少	細・少		細・少					頸部径 (18.0)	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ→ヘラケズリ	頸 2/8	外面に黒斑あり
167	SD02	弥生土器	甕	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・並	中・少				(13.4)				ヨコナデ・磨滅・ハケメ→ナデ	ヨコナデ・磨滅・指押え→ナデ	口 2/8	外面に黒斑あり・口縁部の磨滅・剥落がすすむ
168	SD02	弥生土器	甕	5Y2/1 黒	5Y2/1 黒	中・多							2.8		ハケメ→ナデ・ナデ	指押え・ハケメ状のヘラケズリ	底 8/8	外面に黒斑あり
169	SD02	弥生土器	甕	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	中・並			中・少		(16.2)				ヨコナデ・タタキ→ハケメ→ナデ	ヨコナデ→ハケメ・ハケメ→指ナデ・ヘラケズリ	口 1/8	外面に黒斑あり
170	SD02	弥生土器	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	中・少					(16.6)				ヨコナデ・タタキ	ヨコナデ・ハケメ・ハケ状板ナデ	口 2/8	
171	SD02	弥生土器	甕	10YR7/1 灰白	10YR6/1 褐灰	中・並					(19.0)				ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	口 2/8	やや磨滅気味
172	SD02	弥生土器	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並			細・並		13				ナデ・ハケメ→ナデ	ナデ・ヘラケズリ	口 5/8	外面に黒斑あり・剥落がすすむ
173	SD02	弥生土器	甑	5YR7/6 橙	5YR5/6 明赤褐	中・少							(0.8)		板ナデ	ヘラケズリ	底 4/8	外面に黒斑あり・穿孔
174	SD02	弥生土器	甑	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並			細・並				3.5		タタキ・磨滅	板ナデ・磨滅	底 6/8	外面に黒斑あり・穿孔 1 孔
175	SD02	弥生土器	鉢	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/3 浅黄	中・並	細・少						1.8		板ナデ・指押え→ヘラケズリ	ハケメ	底 8/8	外面に黒斑あり
176	SD02	弥生土器	鉢	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・少	細・少				11.6	7.5	2.9		磨滅	指押え・磨滅	口 1/8	全体に磨滅が著しい
177	SD02	弥生土器	片口鉢	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・並									板ナデ・指ナデ	板ナデ・指ナデ	口 1/8	
178	SD02	弥生土器	鉢	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	粗・並	中・少		中・多				3.6		ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	底 7/8	全体に磨滅がすすむ・雲母土器・いびつな土器・（小型壺か？）
179	SD02	弥生土器	鉢	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・多	細・少				(29)				ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	口 1/8	全体に磨滅がすすむ
180	SD02	弥生土器	鉢	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・少			中・少		8.3	6.2			ハケメ・ナデ・板ナデ	ナデ・ハケメ	口 6/8	
181	SD02	弥生土器	鉢	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並			細・少				4.5		ハケメ・指押え→ナデ	板ナデ・磨滅	底 5/8	全体に磨滅気味
182	SD02	弥生土器	高杯	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/1 灰白	中・並	中・少		中・少					脚部接合部 3.0	粗いハケメ・磨滅・絞り目・ヘラケズリ・磨滅	ハケメ・磨滅	接 8/8	全体に磨滅気味・脚部穿孔なしか？

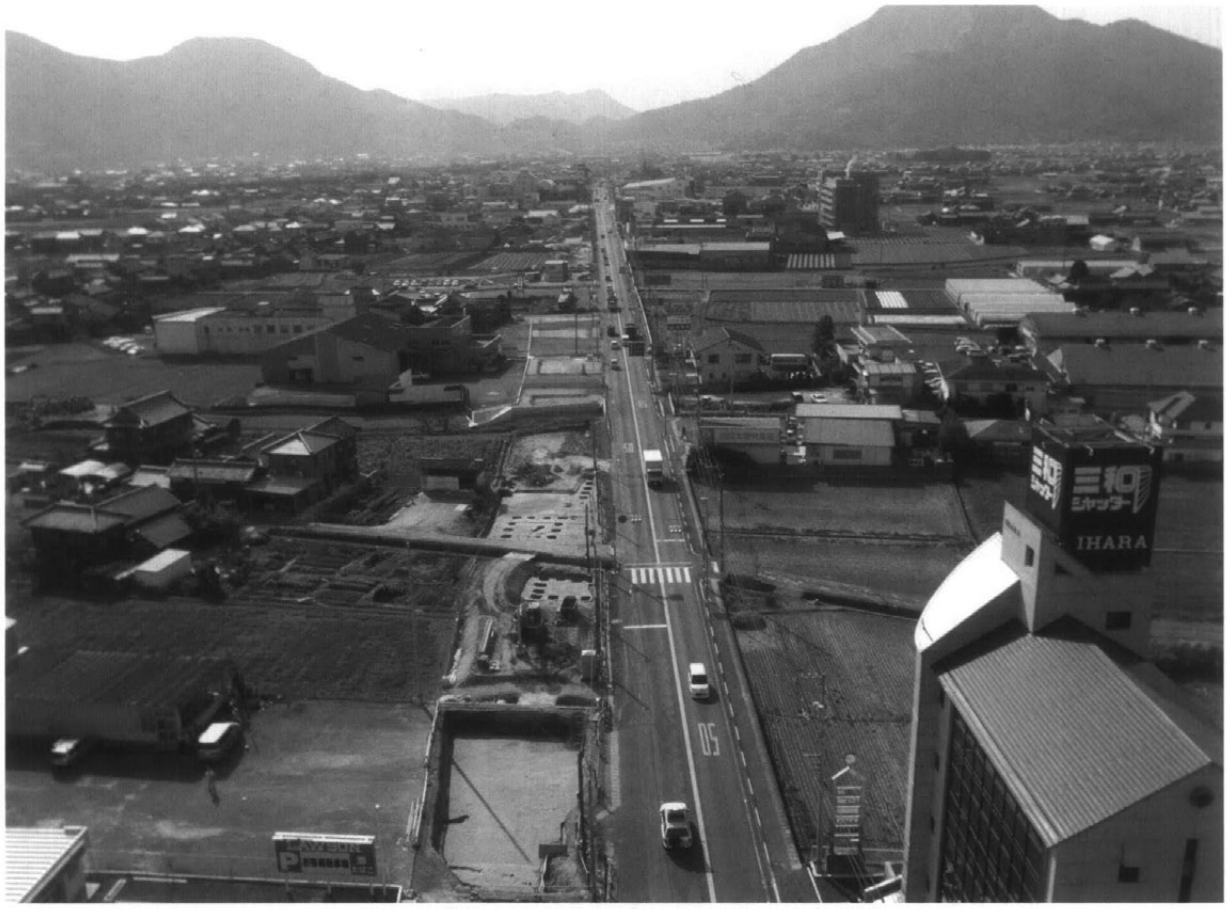
報文番号	報告遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量				調整		残存率	備考
				外面	内面	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他(cm)	外部	内部		
183	SD02	弥生土器	高杯	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並			細・少						板ナデ？磨滅	ハケメ→ヘラミガキ・磨滅	杯 4/8	全体に磨滅・剥落がすすむ
184	SD02	弥生土器	高杯	10R5/6 赤	10R5/6 赤	粗・多			中・並				(11.4)		ハケメ・ナデ・指押え・ヘラケズリ・磨滅	磨滅	脚 2/8	全体に磨滅・剥落が著しい
185	SD02	弥生土器	高杯	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・多	中・多						(8.6)		磨滅	磨滅	脚 2/8	全体に磨滅・剥落が著しい
186	SD02	弥生土器	高杯	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・少							(6.8)		ナデ・指押え→ナデ・ナデ	磨滅	接 8/8	内面に黒斑あり・部分的に剥落がすすむ
187	SD03	弥生土器	甕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並			細・並		(15.0)				ナデ・磨滅	ナデ・指ナデ・ヘラケズリ	口 2/8	雲母土器・全体に磨滅がすすむ
188	SD03	弥生土器	甕	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	中・少	細・少				(18.0)				ヨコナデ	ヨコナデ	口 2/8	全体に磨滅・剥落がすすむ
189	SD03	緑釉陶器	皿	10Y6/2 ｵﾘｰﾌﾞ灰	10Y8/1 灰白					細・少	(12.5)	2.65	5.8		回転ナデ・削り出し高台・回転ナデ	回転ナデ	底 8/8	施釉は高台内面以外すべてに及ぶ
190	SR01	弥生土器	鉢	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	粗・並			中・多		(9.0)	(2.5)	4.1		指押え・磨滅	指押え・磨滅	底 7/8	全体に磨滅・剥落が著しい
191	包含層	陶器	土瓶	5Y6/3 ｵﾘｰﾌﾞ黄	5Y7/2 灰白					細・少	(13.0)				回転ナデ・貼り付け取手	回転ナデ	口 1/8	内面は口縁付近のみ施釉・谷遺跡の製品の可能性大
192	SX17	陶器	鉢	7.5YR4/3 褐 青い釉	N7/ 灰白					細・少	(15.2)	6.6	(6.4)		回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	口 1/8	内面見込み部付近に目跡が２つ残る（本来は３つか）・谷遺跡の製品の可能性大
193	SX03・17	陶器	土瓶蓋	5Y6/3 ｵﾘｰﾌﾞ黄	5Y7/2 灰白					細・多	11.5	2.5	6.2		回転ヘラ削り	回転ヘラケズリ	底 8/8	アーモンド状のつまみを付ける・谷遺跡の製品の可能性大

遺物観察表・石器

報文番号	報告遺構名	器種	法量				材質	備考
			長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）		
194	SX06	砥石	55	48	8	27.73	頁岩か流紋岩	京都産

写 真 図 版

図版１　稲木北遺跡

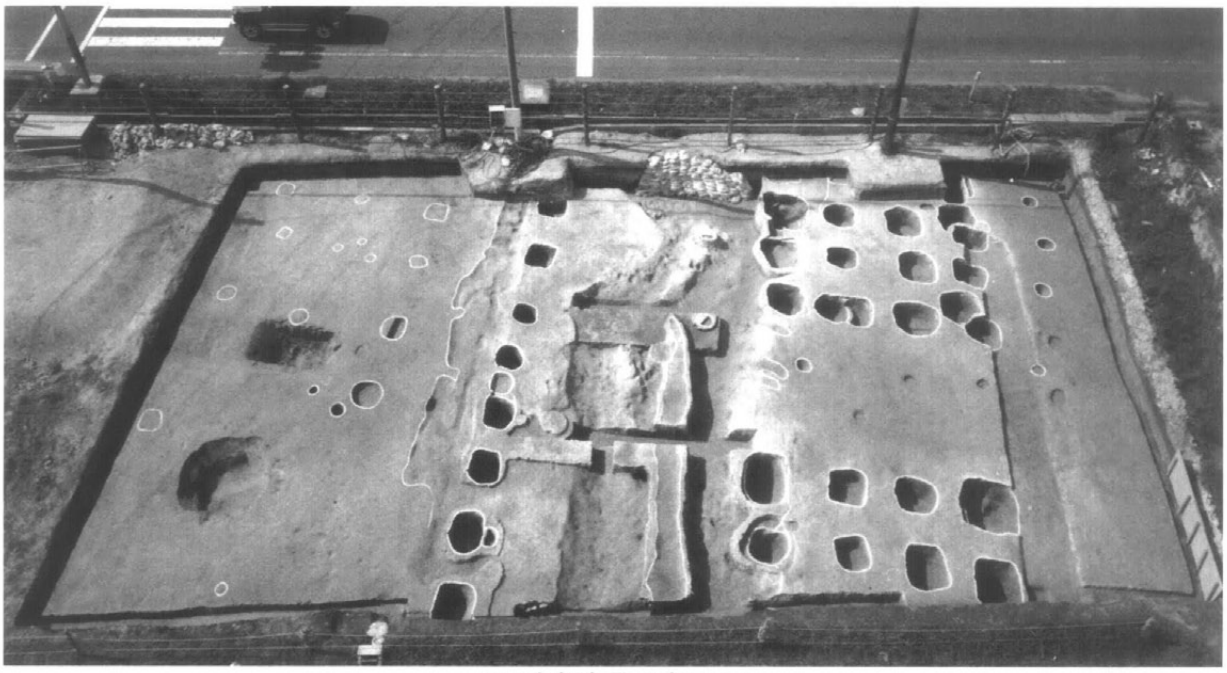


Ⅰ～Ⅳ区遠景（東から。奥に見えるのは鳥坂峠）

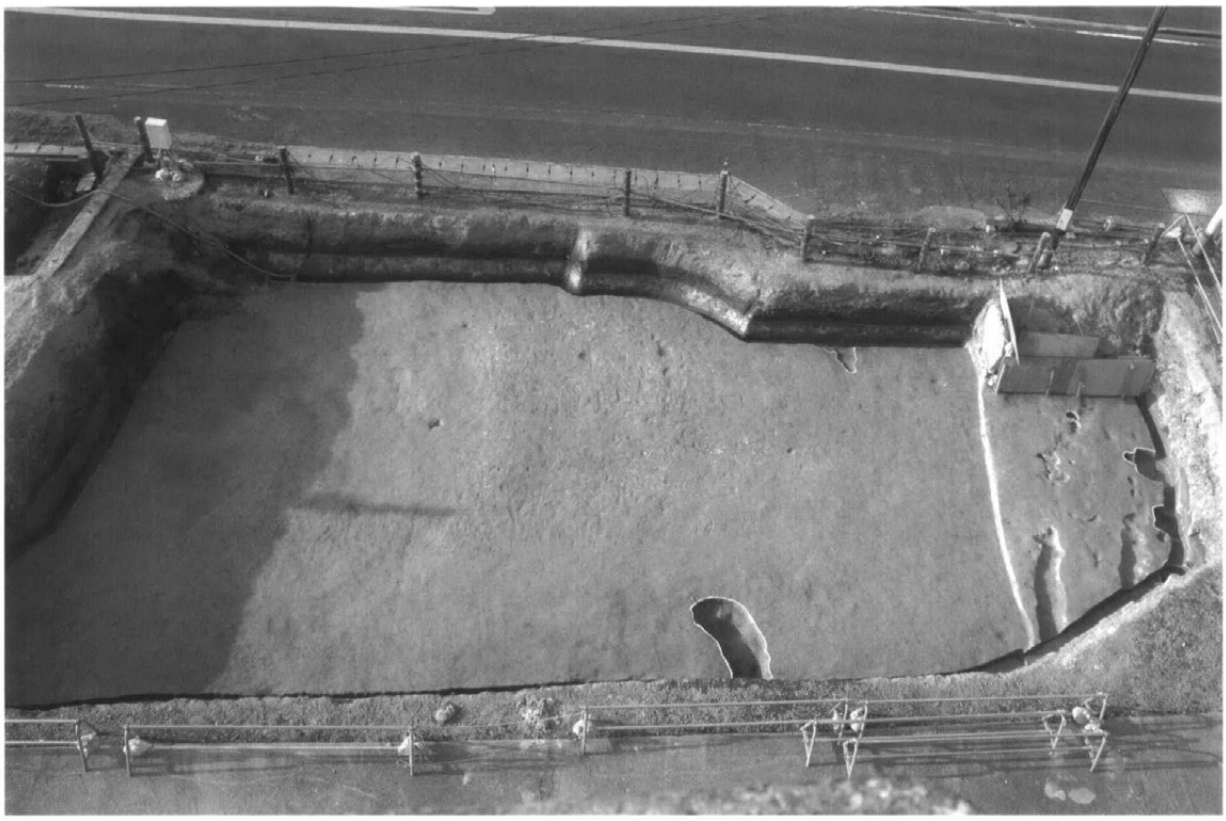
Ⅱ・Ⅳ区全景（南上空から）

図版 2　稲木北遺跡

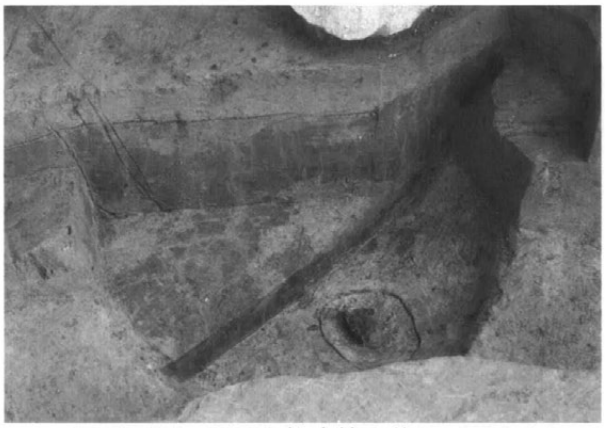
Ⅱ区 SA2001、SB2001・2002 全景（真上から）



Ⅱ区東部全景（南から）



Ⅰ区全景（南から）



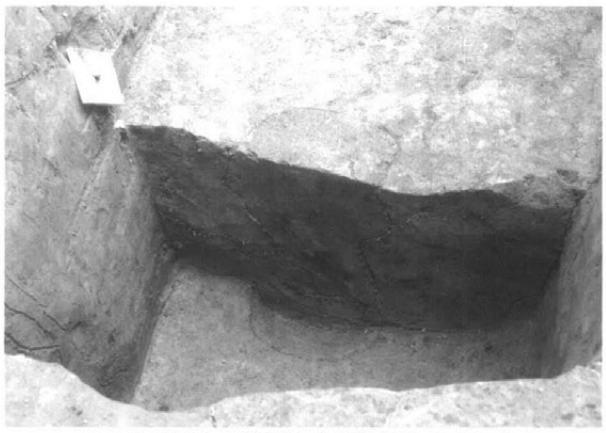
Ⅰ区 SB1001-SP1003 柱痕検出状況（西から）

Ⅰ区 SB1001-SP1003 土層断面（西から）

Ⅰ区 SB1001 柱痕検出状況（南から）

図版 4　稲木北遺跡

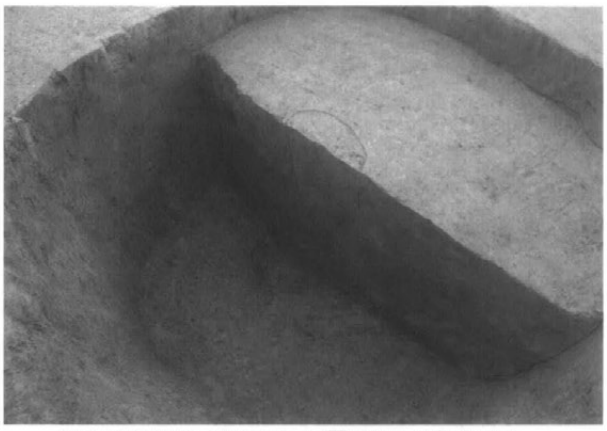
Ⅱ区 SB2001 全景（東から）



Ⅱ区 SA2001-SP2044 土層断面（西から）

Ⅱ区 SA2001 -SP2044 柱痕検出状況（西から）

Ⅱ区 SA2001-SP2044 柱痕検出状況（西から）



Ⅱ区 SB2001-SP2005 土層断面（北から）

Ⅱ区西部・Ⅲ区全景（東から）

Ⅱ区 SB2001・2002 柱痕検出状況（東から）

図版 6　稲木北遺跡

Ⅱ区 SB2003 柱痕検出状況（南から）

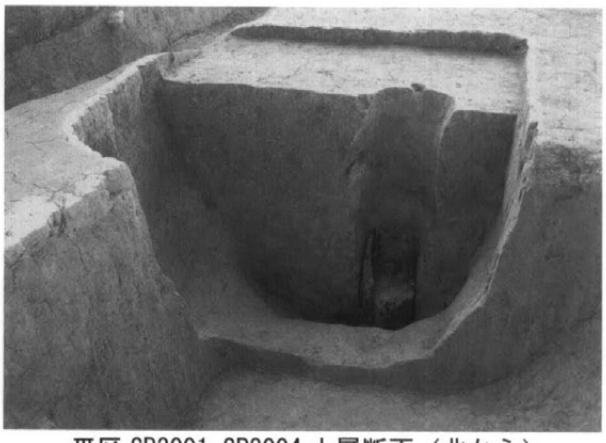
Ⅱ区 SB2003 完掘状況（南から）

Ⅱ区 SB2003-SP2066 土層断面（南から）

Ⅱ区 SB2003-SP2067 根石出土状況（西から）

Ⅲ区 SB3001 柱痕検出状況（西から）

Ⅲ区 SB3001 完掘状況（西から）



Ⅲ区 SB3001-SP3004 土層断面（北から）

Ⅲ区 SB3001-SP3004 土層断面（北から）

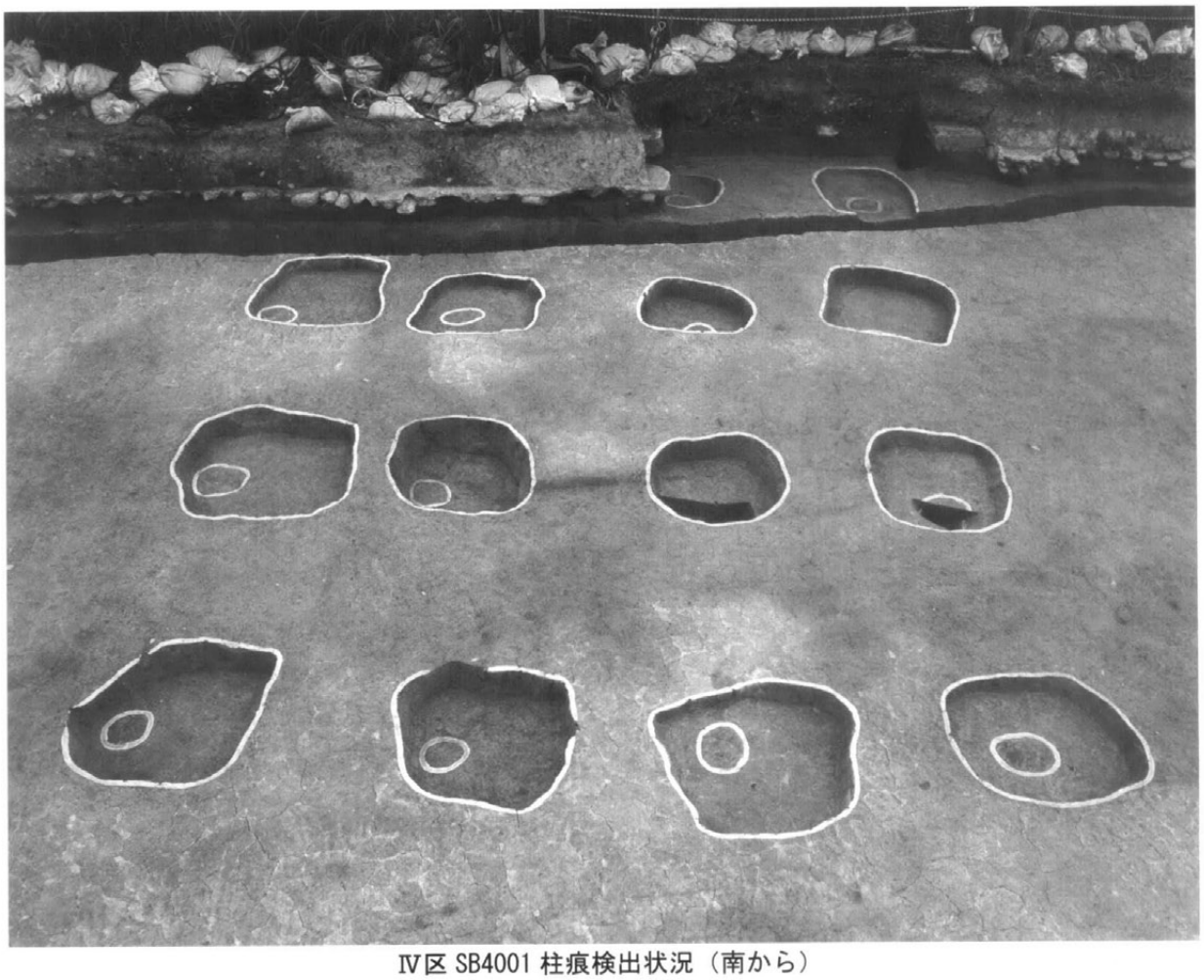
Ⅲ区 SB3001 調査風景（東から）

Ⅲ区 SB3001-SP3003 土層断面（南から）

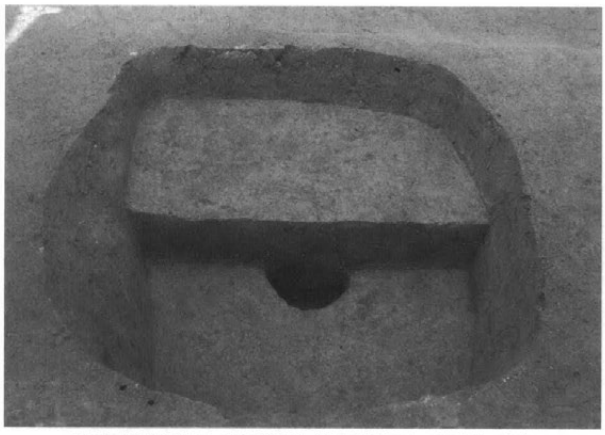
図版 8　稲木北遺跡

Ⅲ区 SD3004 土層断面（南から）

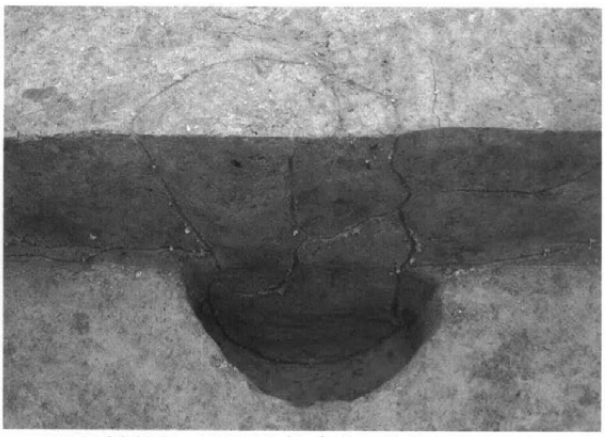
Ⅳ区遺構検出状況（東から）



Ⅳ区 SB4001 柱痕検出状況（南から）



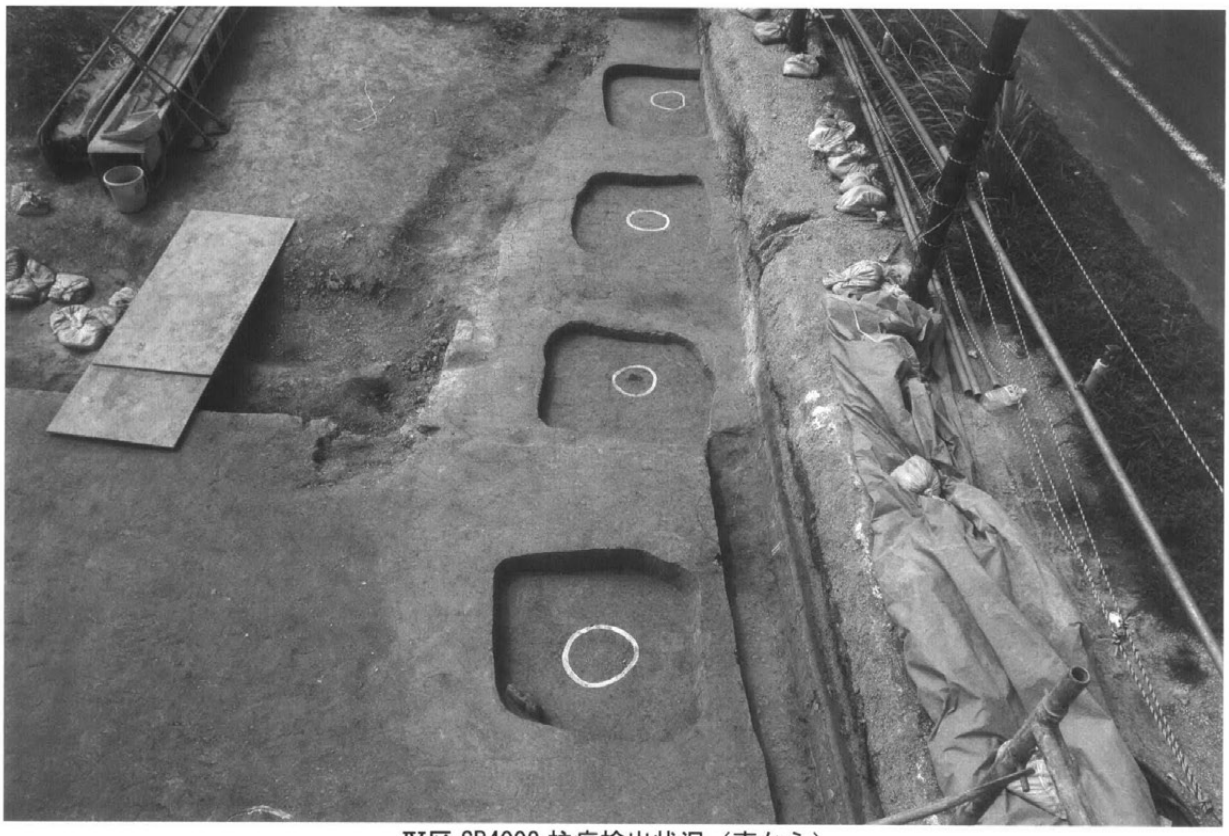
Ⅳ区 SA4001-SP4003 土層断面（西から）



Ⅳ区 SA4001-SP4003 柱痕土層断面（西から）

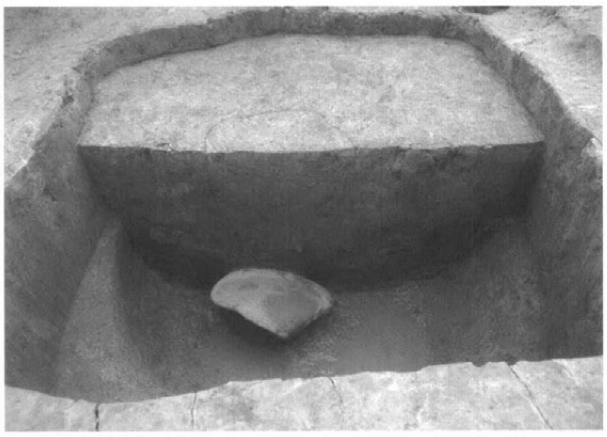
Ⅳ区 SA4001-SP4004 土層断面（西から）

Ⅳ区 SA4001-SP4004 柱痕土層断面（西から）

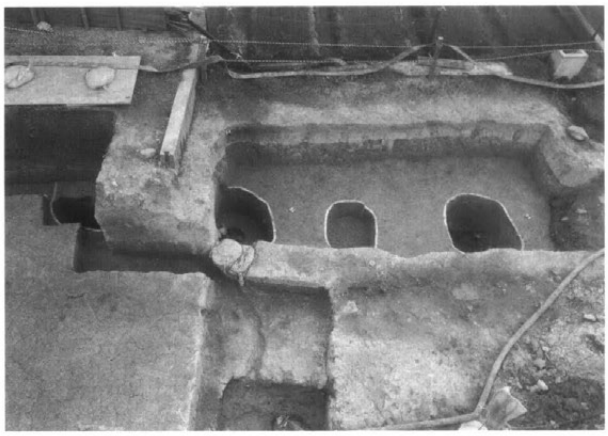


Ⅳ区 SB4002 柱痕検出状況（東から）

図版 10　稲木北遺跡



Ⅳ区 SB4002-SP4036 土層断面（南から）

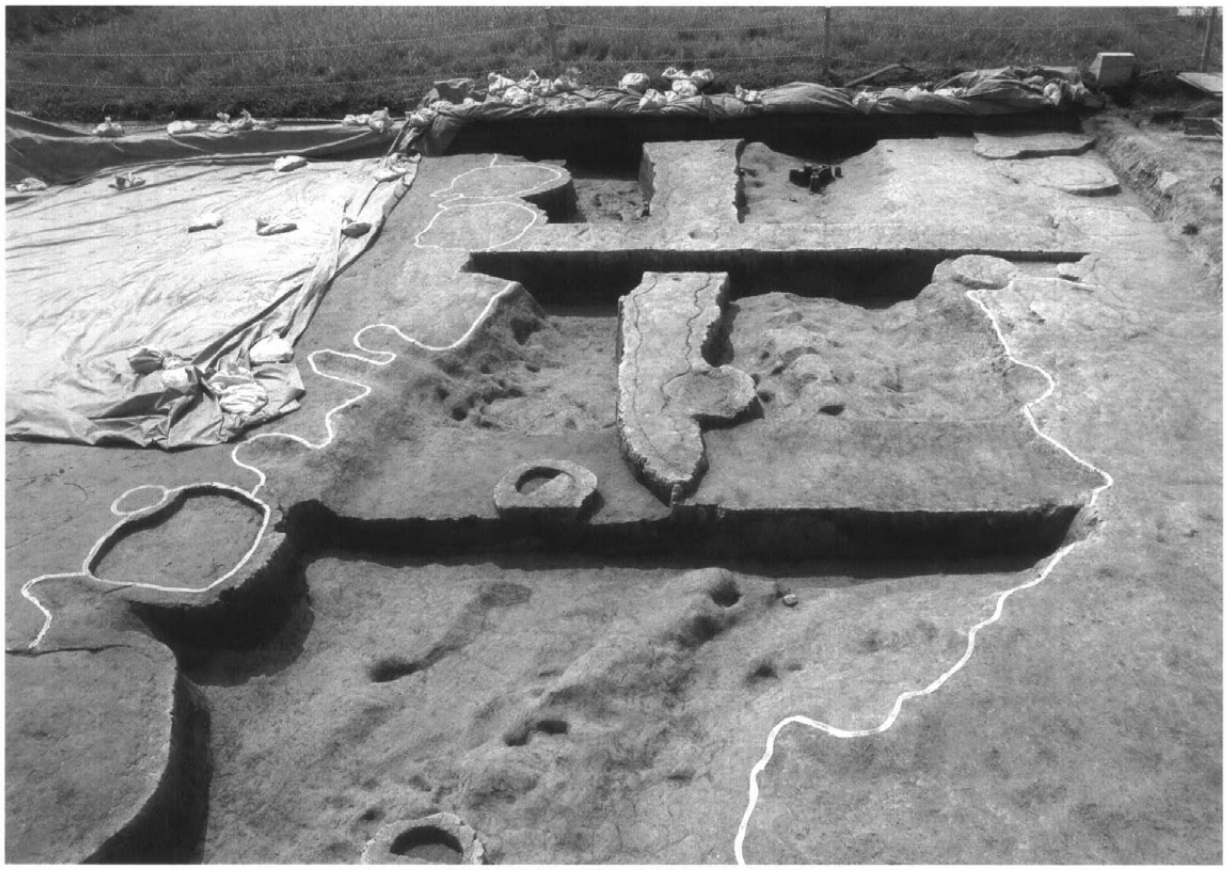


Ⅳ区 SB4003 完掘状況（北から）

Ⅳ区 SB4003 柱痕検出状況（北から）

Ⅳ区 SB4003-SP4037 柱痕検出状況（東から）

Ⅳ区 SB4003-SP4037 土層断面（北から）



Ⅱ区 SD2001　検出状況（北から）

Ⅱ区 SD2001 南部　遺物出土状況（西から）

Ⅱ区 SD2001 遺物出土状況（南から）

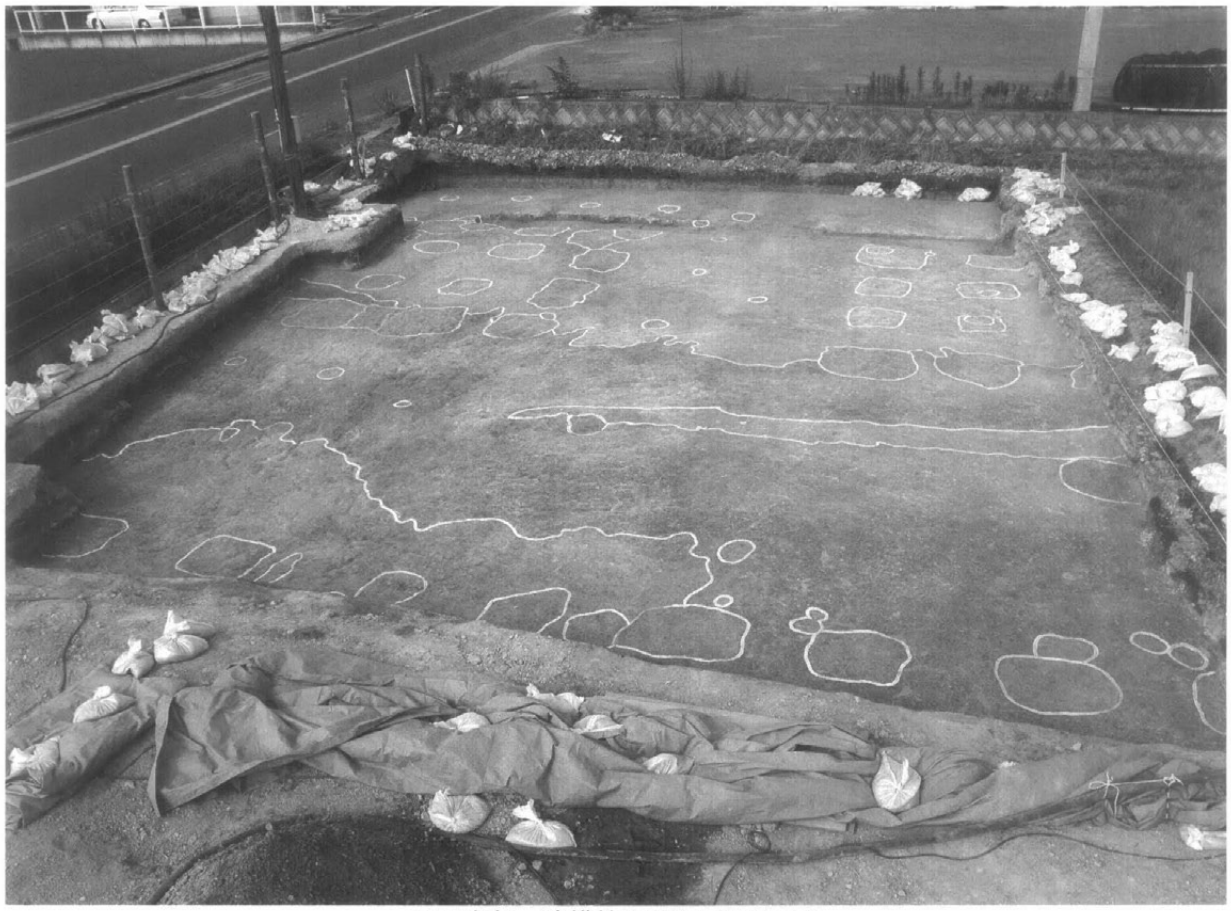
Ⅳ区調査区南壁土層断面（SR4001）（北から）

Ⅱ区調査区南壁土層断面（北から）

図版 12　稲木北遺跡

Ⅳ区 SX4001 完掘状況（東から）

Ⅳ区 SX4001 土層断面（東から）

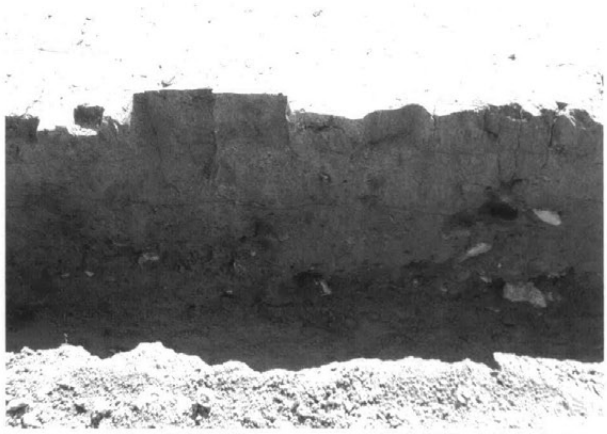


Ⅱ区東部　遺構検出状況（西から）

Ⅰ区下層確認トレンチ土層断面（東から）

Ⅱ区西部下層確認トレンチ土層断面（北東から）

Ⅲ、Ⅳ区下層確認トレンチ土層断面（北東から）

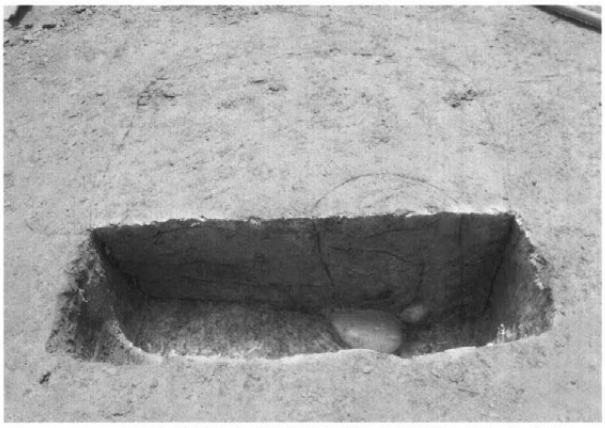


Ⅲ、Ⅳ区下層確認トレンチ土層断面（北から）

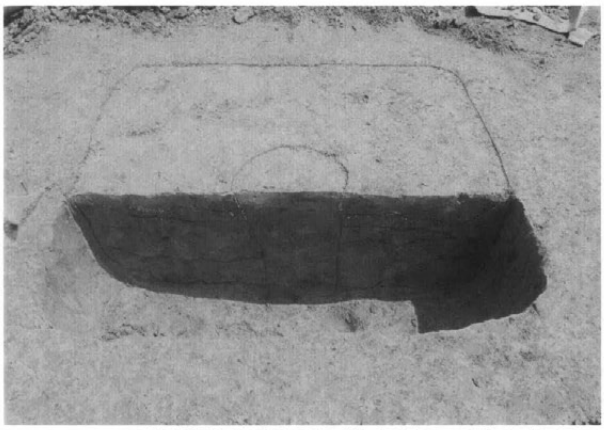
Ⅲ、Ⅳ区北側調査 SB4002 検出状況（西から）

Ⅲ、Ⅳ区北側調査 SB4002 検出状況（西から）

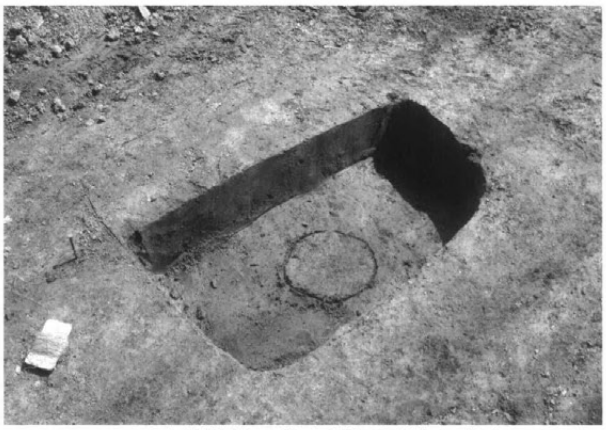
Ⅲ、Ⅳ区北側調査 SB4002 検出状況（東から）



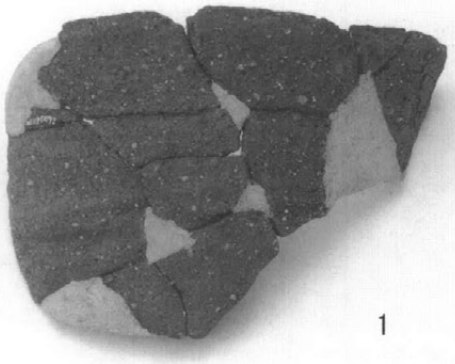
Ⅲ、Ⅳ区北側調査 SB4002 柱穴断面（北から）

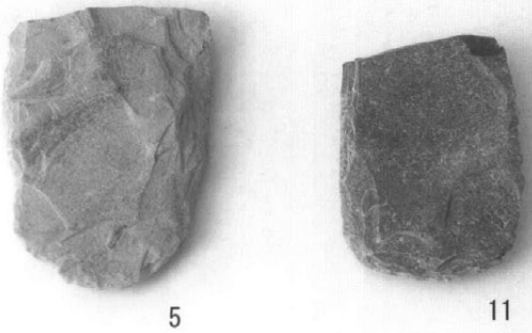


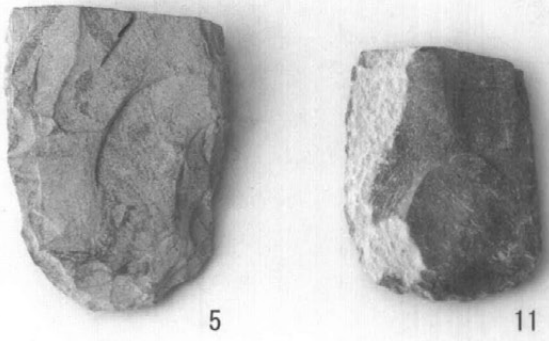
Ⅲ、Ⅳ区北側調査 SB4002 柱穴断面（北から）

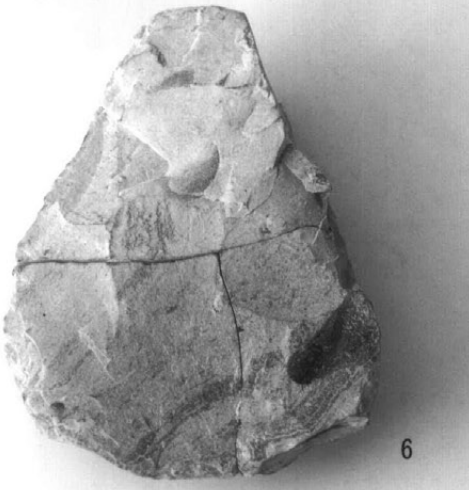


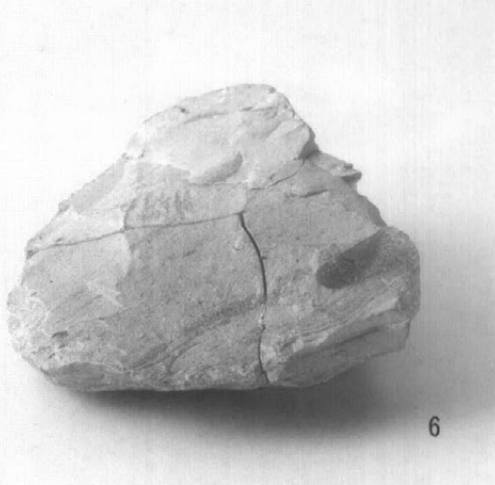
Ⅲ区北側調査 柱穴断面（北から）



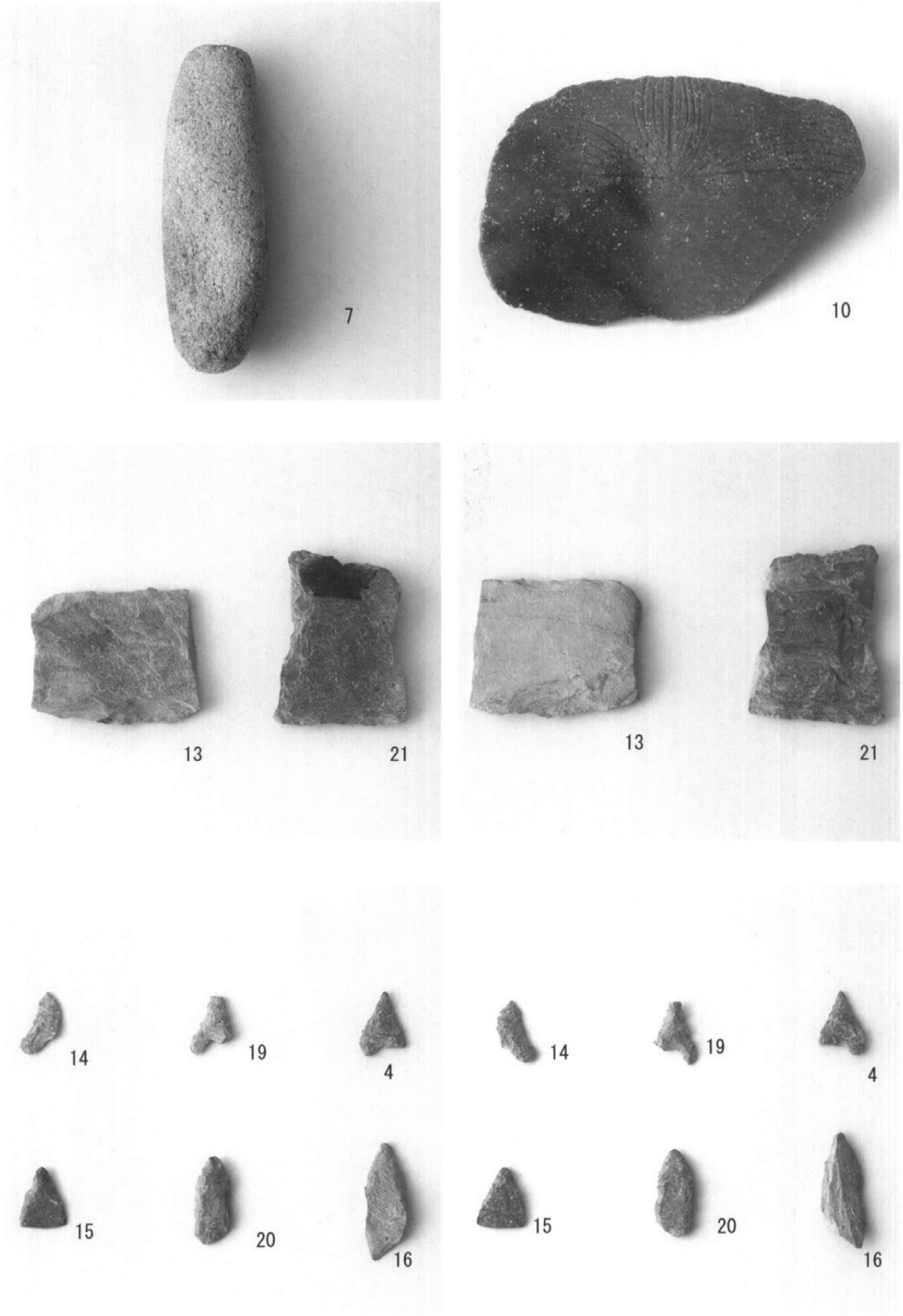






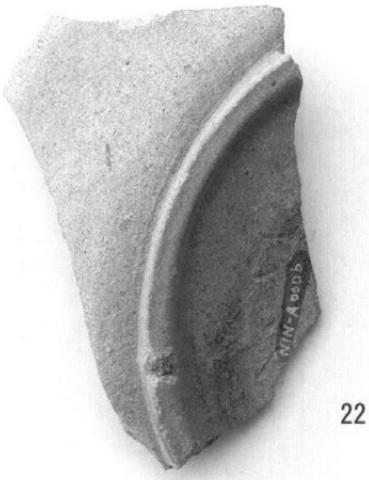


Ⅱ区 SD2001 出土遺物（1）

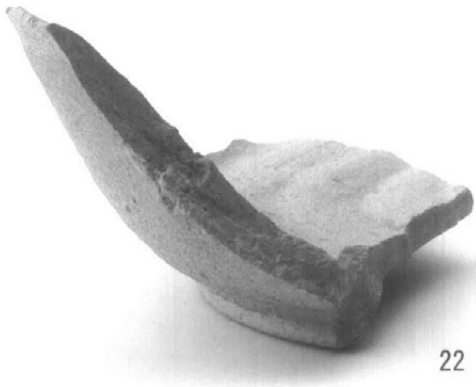


Ⅱ区 SD2001 出土遺物（2）

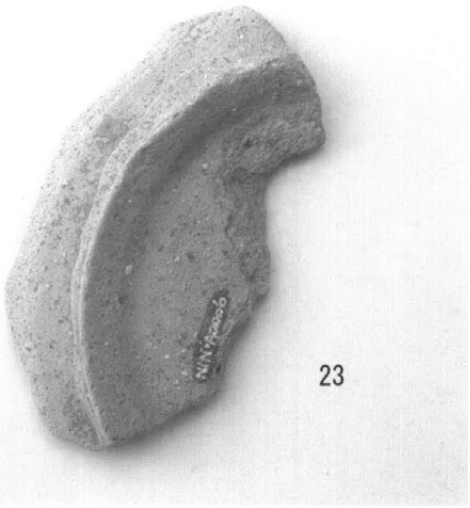
図版 16　稲木北遺跡



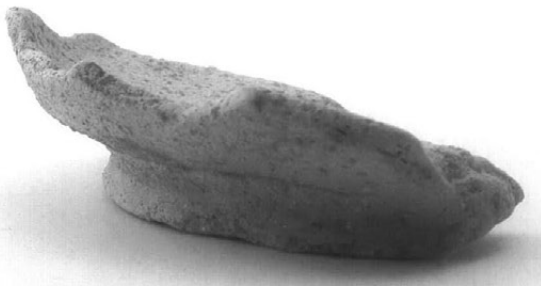
22



22



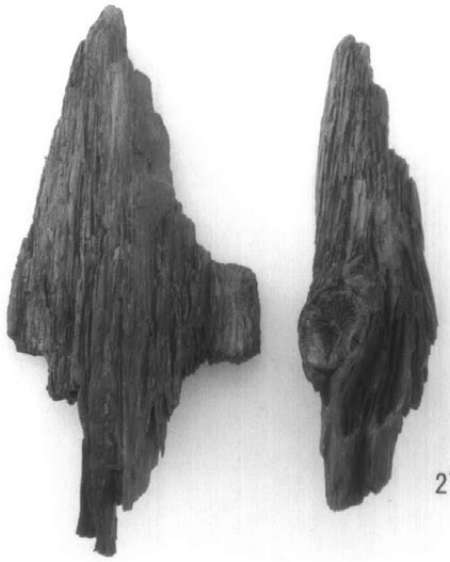
23



23

24

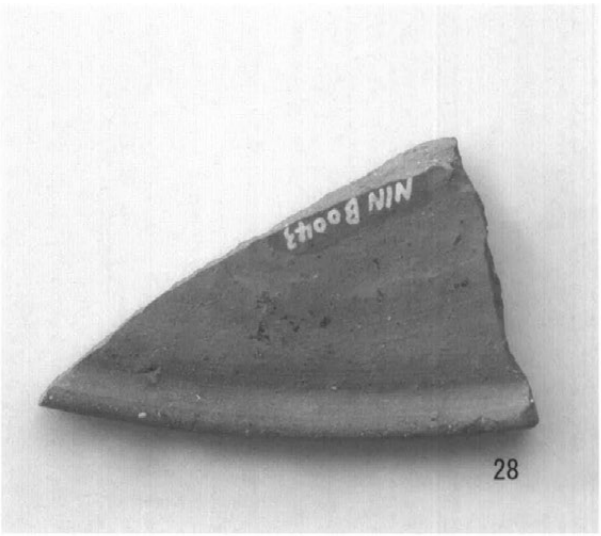
26

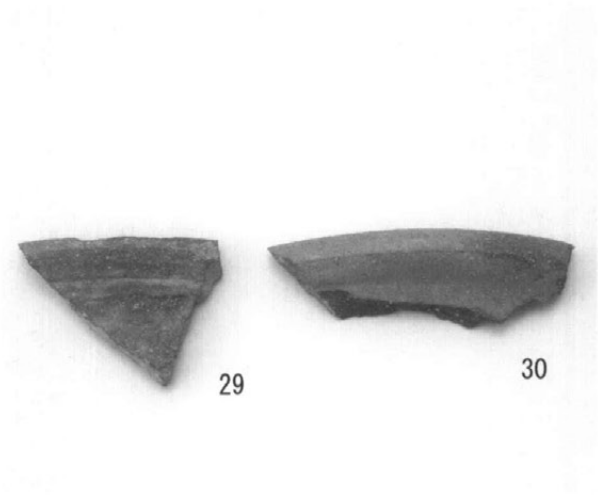


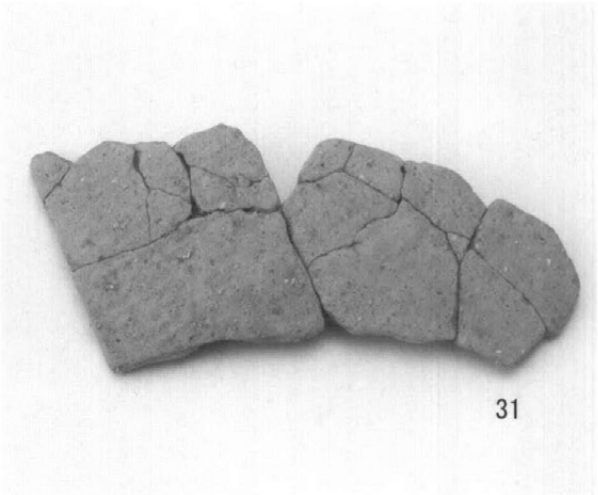
27

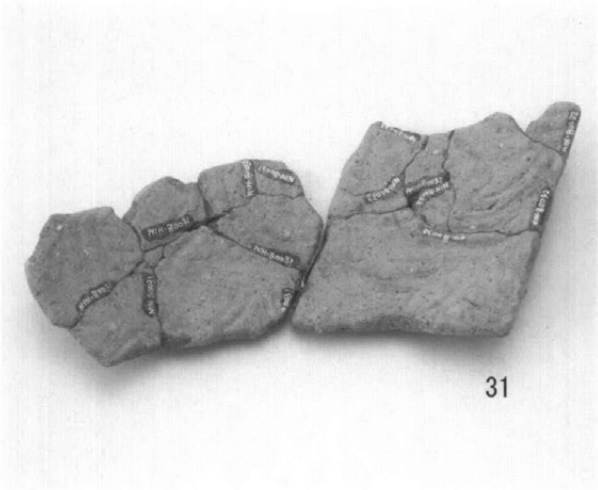
22、23・・・SA2001
24・・・SB2003
26・・・SP2049
27・・・SB3001

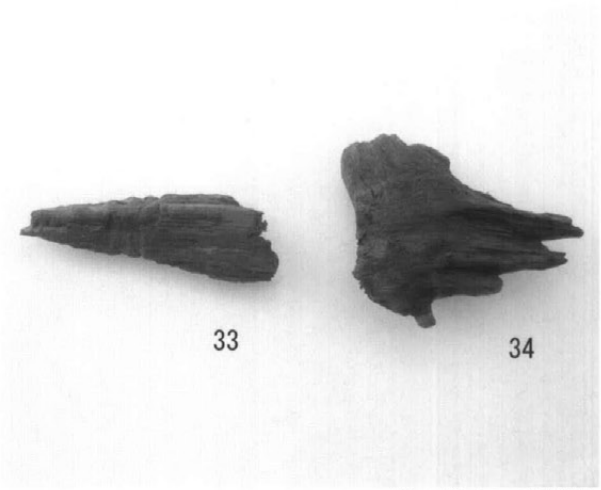
Ⅱ区　出土遺物





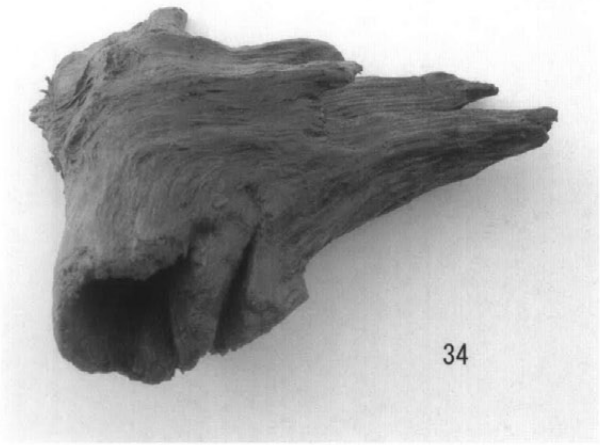


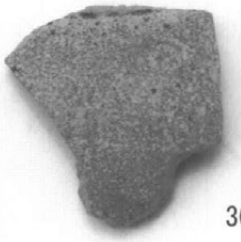




28 ～ 31・・・SB4002
33、34・・・SB4003

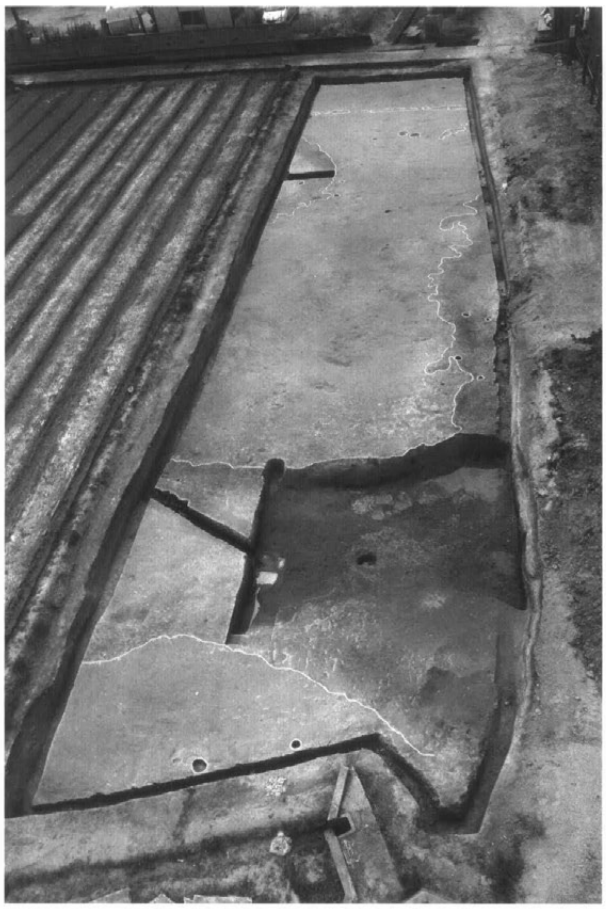
Ⅳ区　出土遺物（1）





34・・・SB4003
35、36、39・・・SR4001

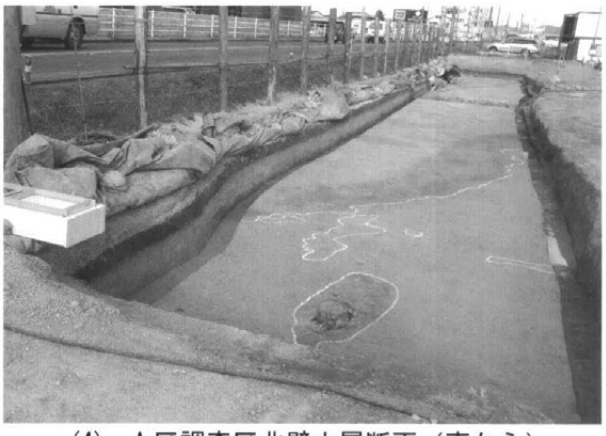
Ⅳ区　出土遺物（2）



(1)　A 区南部全景（東から）

(2)　A 区南部全景（西から）

(3)　A 区 SR1001　A-A' 土層断面（東から）



(4)　A 区調査区北壁土層断面（東から）

(5)　B 区南部全景（西から）

(6)　B3 区トレンチ（北）

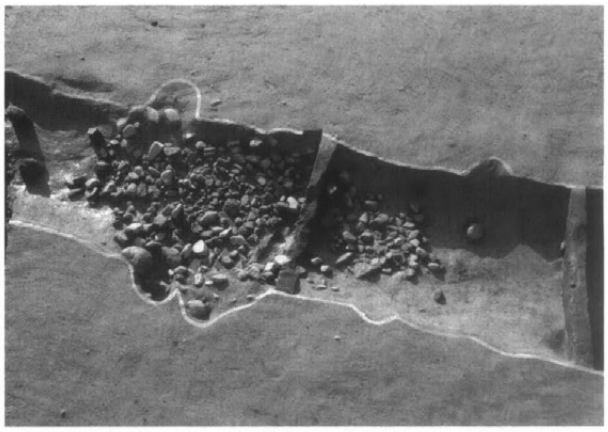
図版 2　永井北遺跡

(7)　B3 区トレンチ土層断面（南東）

(9)　C 区北壁土層断面（南）

(8)　C 区南部全景（東）

(10)　C 区 SD3001　完掘状況（北）



(11)　C 区 SD3001　完掘状況（東）

(12)　C 区 SD3001　C-C′ 土層断面（南）

(13)　D 区南部全景（東から）

(14)　D 区南部全景（西から）

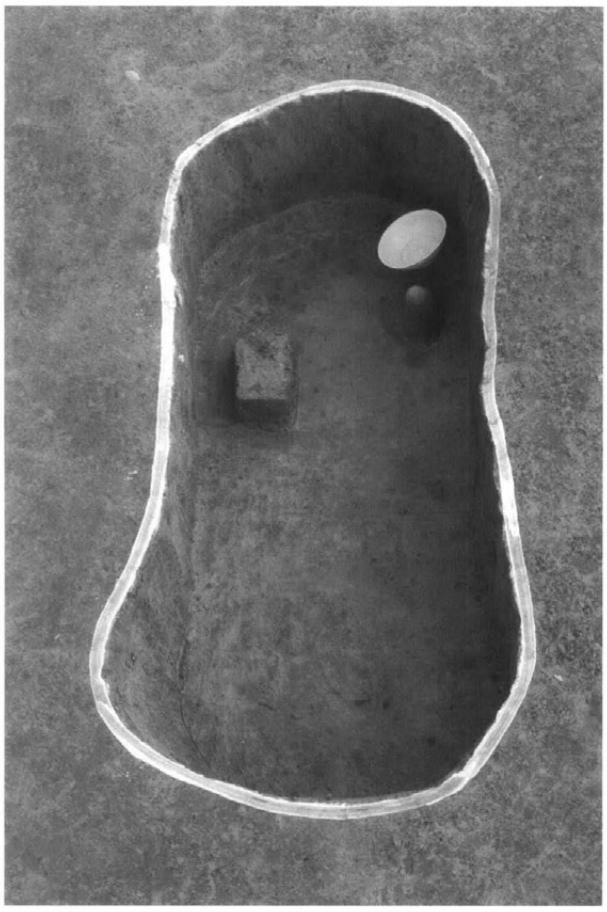
(15)　D 区調査区東壁土層断面　（北西から）

(17)　D 区 SD4005 礫出土状況（西から）

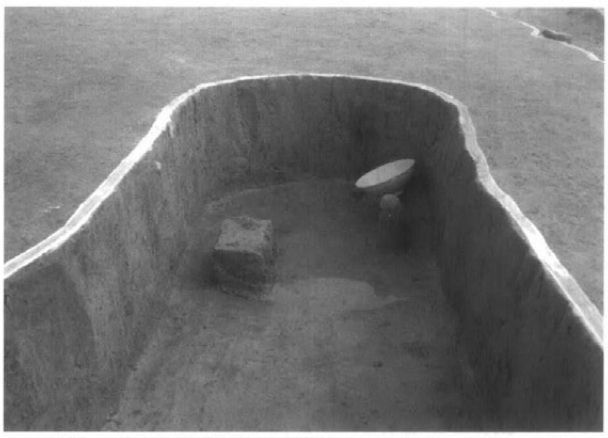
(16)　D 区 SD4002 調査区東壁土層断面（西から）

(18)　D 区 SD4005 銭出土状況（北から）

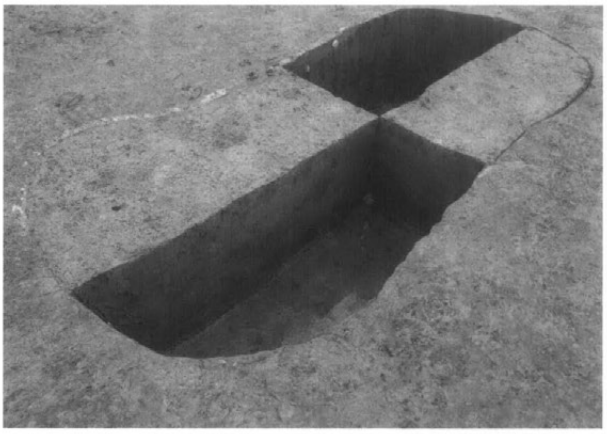
図版4　永井北遺跡



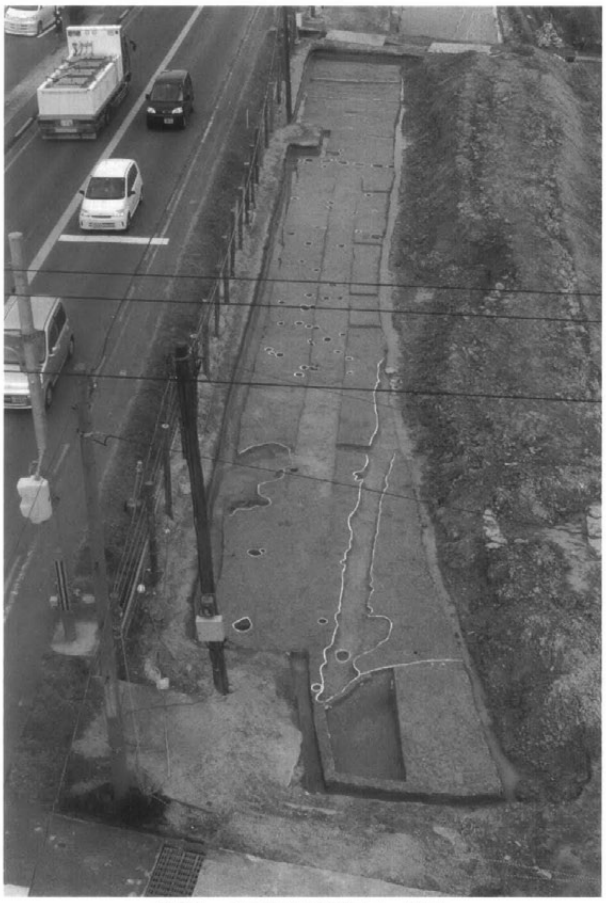
(19)　D区 ST4001 白磁碗出土状況（西から）



(20)　D区 ST4001 白磁碗出土状況（西から）



(21)　D区 SK4001 土層断面（南西から）



(22)　D区北部全景（西）

(23)　D区北部全景（東）